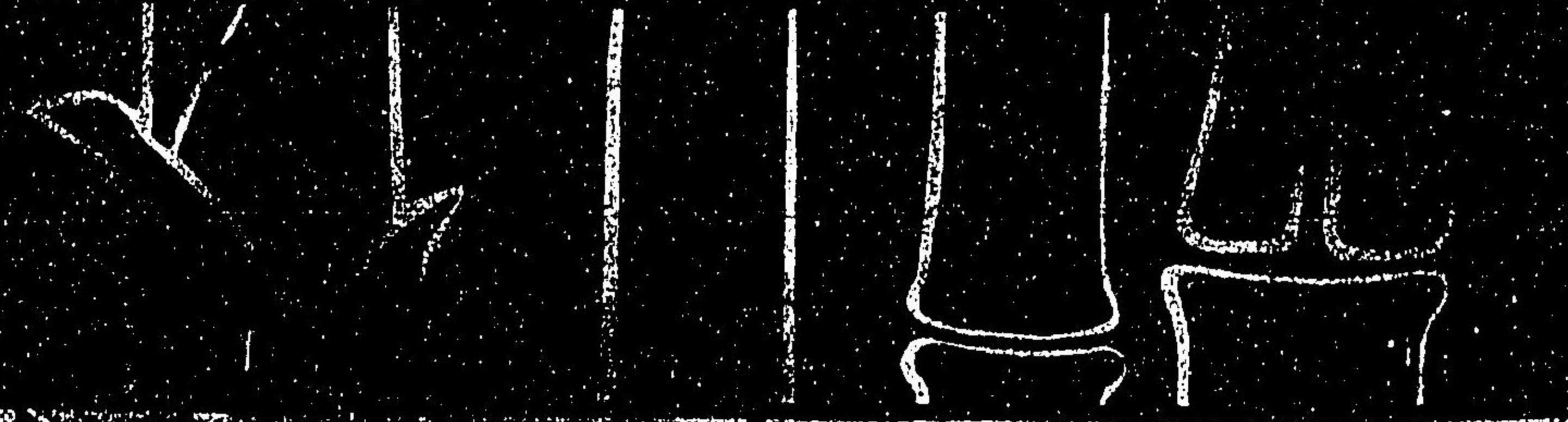


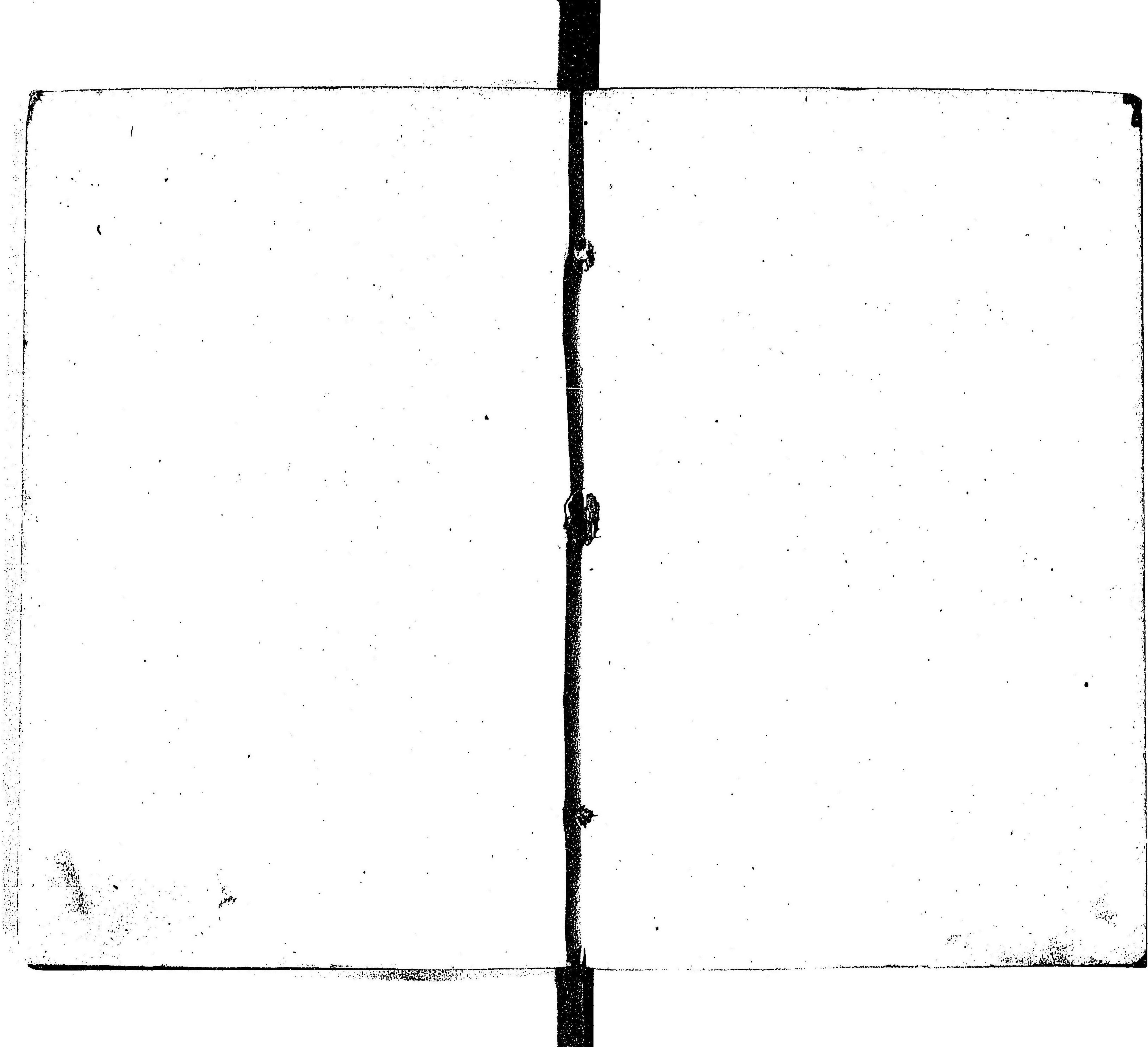
328
761



喜怒哀
樂

中... 宅... 轉... の... 臍... 讀... 一...



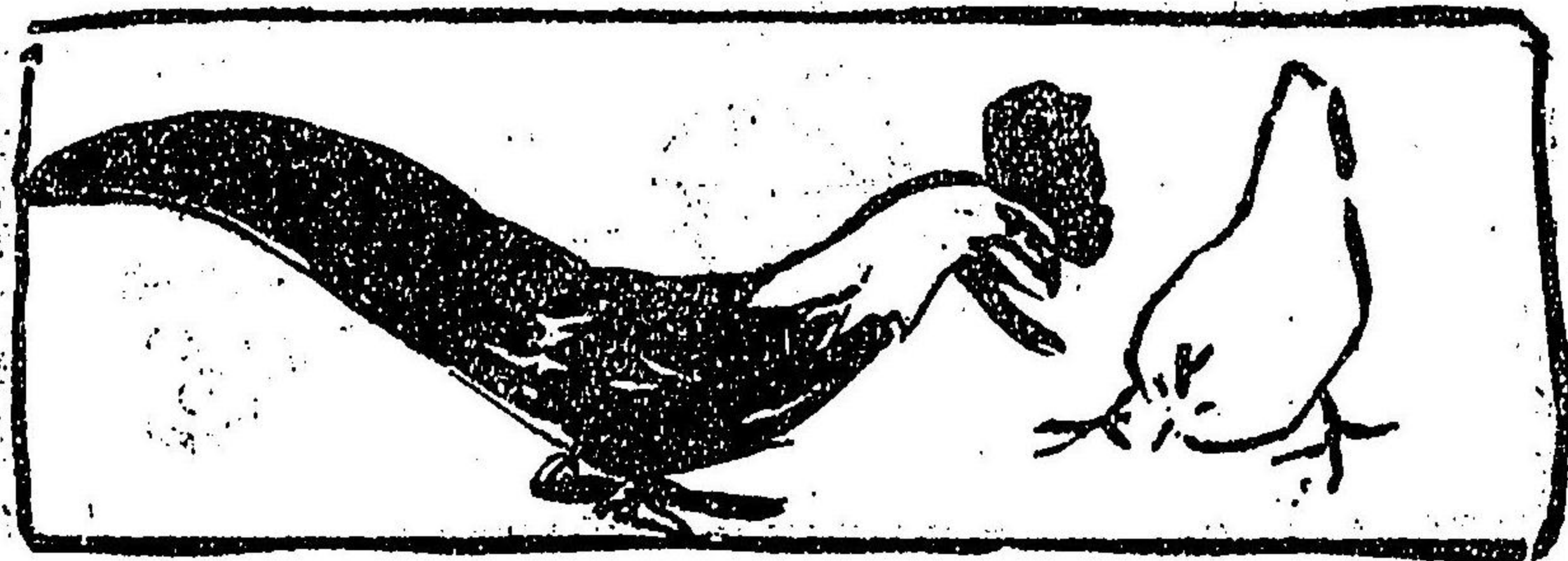




はしがき

昨今頗る非常、活動寫眞の流行を見る、予も頗る非常、活動寫眞を好み、友人江口香跋も又頗る非常の活動寫眞通なり、亂りに泣かせられて長時間の疲勞を買ふも芝居よりは、奇麗洒晴りたる活動寫眞の滑稽趣味を好み、正に時世の進歩は活動寫眞の流行に徴して明かなり、其の活動寫眞趣味の主に滑稽なり人情を穿つに於ては時世の向上を示すものと云危はん。是滑稽は人を毒せず罪せず笑つて通るべく、厭味にならず、さりとして人の耻にもならず、要するに暫時のところ人のお臍を逆轉し臍の難を誠しむ、尙獨笑禁する能はざるの體にありて目出度限りと云ふべく、今時世の人が盛に活動寫眞を愛するは滑稽趣味を稱するなり、其他に滑

明治
42 11 5
丙午



稽は、自然主義の異なり別に官廳の束縛なく、發賣禁止の憂へなく、嚴格なる大臣宰相の面貌も崩さんに最易きことなり、然して本誓は 江口君は今人を、予は古人の間に涉り諸有る諸各士の逸話てふ逸話を列記したるものなり、先づ一讀面白かるべきは論より證據にして西洋にデカメロンあり、モリエルありて滑稽物數ある中にも數を見ざる事實の滑稽談、當意即妙の妙趣あり、著者自らも動ともすれば噴き出さんとす、余りの可笑しさに假初にも入厩庵と號する所以、時世遅れにして然かも時世の先覺者たる所以、所謂滑稽趣味の福音を傳ふる。

明治四十二年

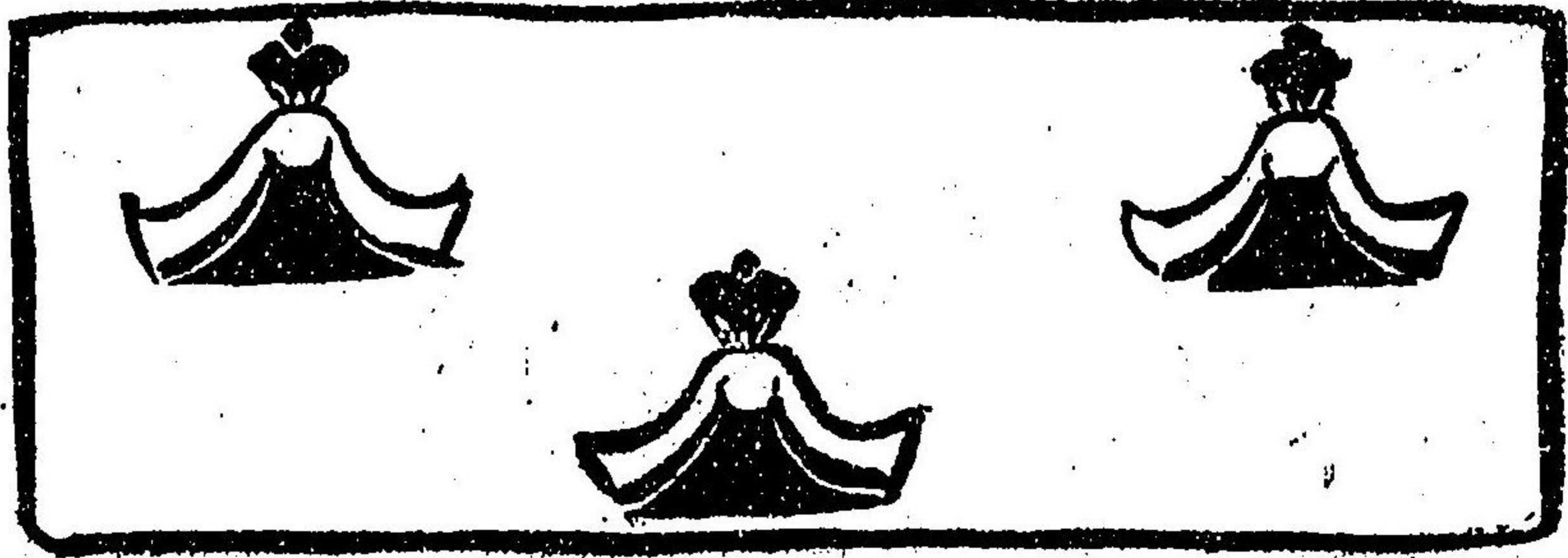
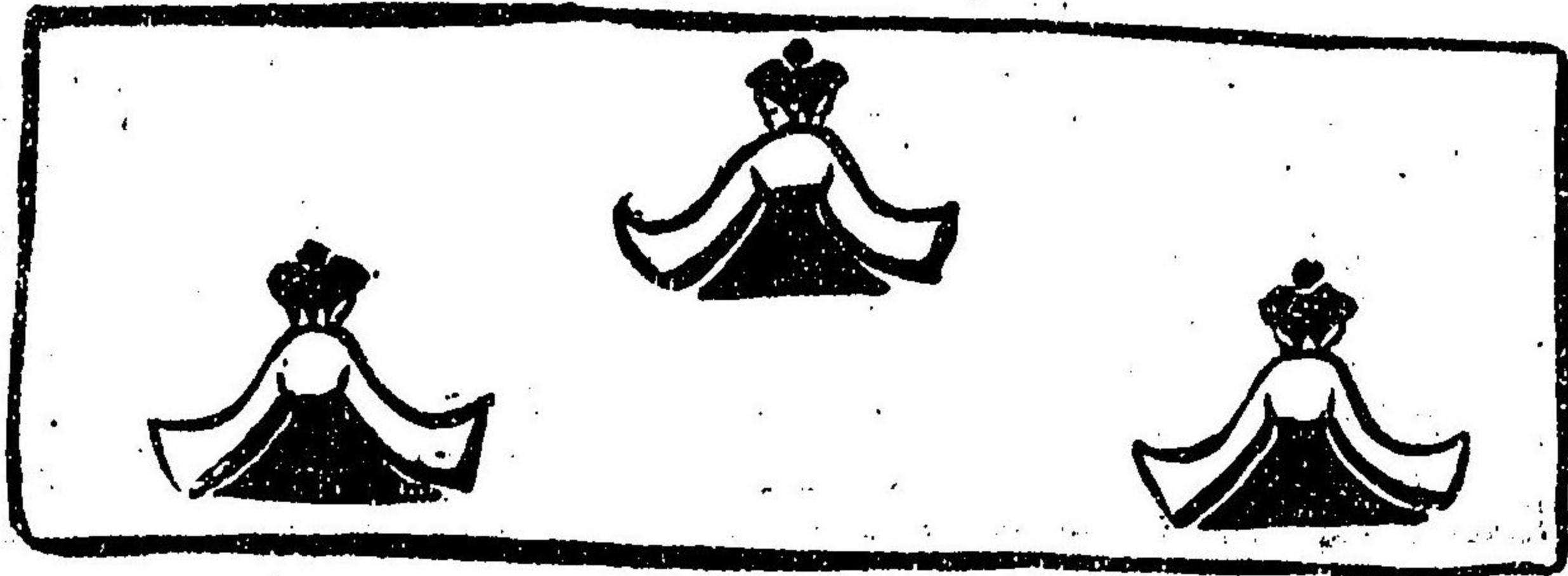
神田浪宅に
加藤生



目次

中江兆民陰囊を杯とす	一
瓜垣山釋雲照を弄ぶ	一
越後前目にからかふ	二
四郷徒道のいたづら	三
栗式部の「あさくそ丸」	三
羅白行燈を掲げて歸る	三
漢物の懸に石地蔵	四
燕石博奕を好む	四
松田宗則「マイ盛増かる」	五
桐原の狂歌	五
四山菜石を賣ること三疊夜	六
金儲の法を數はる	六
孫三郎裸體となりて賤を走らす	七
山陽作詩法を數ふ	七
若平糞を食はす	八
福澤桃介購論を茶にする	八
渡邊雄男拘預の親分と間違はる	九
	一〇

目次



目次

随問答………

片目の花嫁……………二一

根元通明嚔托腰脚を辭す……………二二

田中光顯便器で鶏肉を煮て食ふ……………二四

元田健が財布の要心……………二五

杉孫七郎茶席での失態……………二六

神谷大周の露宿……………二六

犬養木堂書生に教ゆ……………二七

前田正名の鼻クヤニツク……………二八

書生時代巳代捨男の頓智……………二八

青木周蔵の今ソクヲテスの練名……………二九

水月烈公の狂歌……………二九

千利休の頓才……………三〇

前田慶次郎刀を帯びて風呂に入る……………三〇

元就の大志……………三一

曾呂利の機智……………三一

加藤弘之辭表の理由……………三一

梅津次郎百法の紙幣で尻をふく……………三二

廣田幸州結にあてらる……………三三

辭世と勳賞と夜遊……………三三

目次

三

目次

巖谷二郎の夏羽織……………一〇

將軍の間抜け……………一一

竹を愛する人……………一一

おや／＼大隈伯に足がある……………一二

ヒーローを一口一七と讀む……………一二

サンドウキツチを怒心す……………一三

米國に於けるハスパント……………一三

清國へ往診……………一四

お高組頭巾の主……………一四

浜六と僕鬼……………一五

廣津柳浪探偵に強はる……………一五

鏡花風寒外史の好意を謝絶す……………一六

早川龍介金魚の失敗……………一六

犬養木堂小山久之助と語る……………一七

長谷川春の通牒……………一八

大隈重信見島捕鯨と年若を争ふ……………一八

紅翠女流ハイカラに取巻かる……………一九

徳富蘇峰紙屑を賣る……………二〇

尾崎紅葉學堂に看板を奪はる……………二〇

目次

二



目次

也右狂歌にて債鬼を追ふ……………三四

善家の頓智……………三五

古岩の離縁状……………三五

崎堂四郎を叱す……………三六

幸信貴客に接するを好まず……………三六

瑞軒漬物を賣る……………三七

寒紙狂歌にて空離を免る……………三八

時頼の狂歌……………三八

兒玉中將新聞記者を冷かす……………三九

尾崎紅葉大に器量を下ぐ……………三九

宅野軒陶器の鑑定を誤る……………四〇

金屋齋の無頓着……………四一

澤庵和尚と善夢粉……………四二

龍馬南洲を評す……………四二

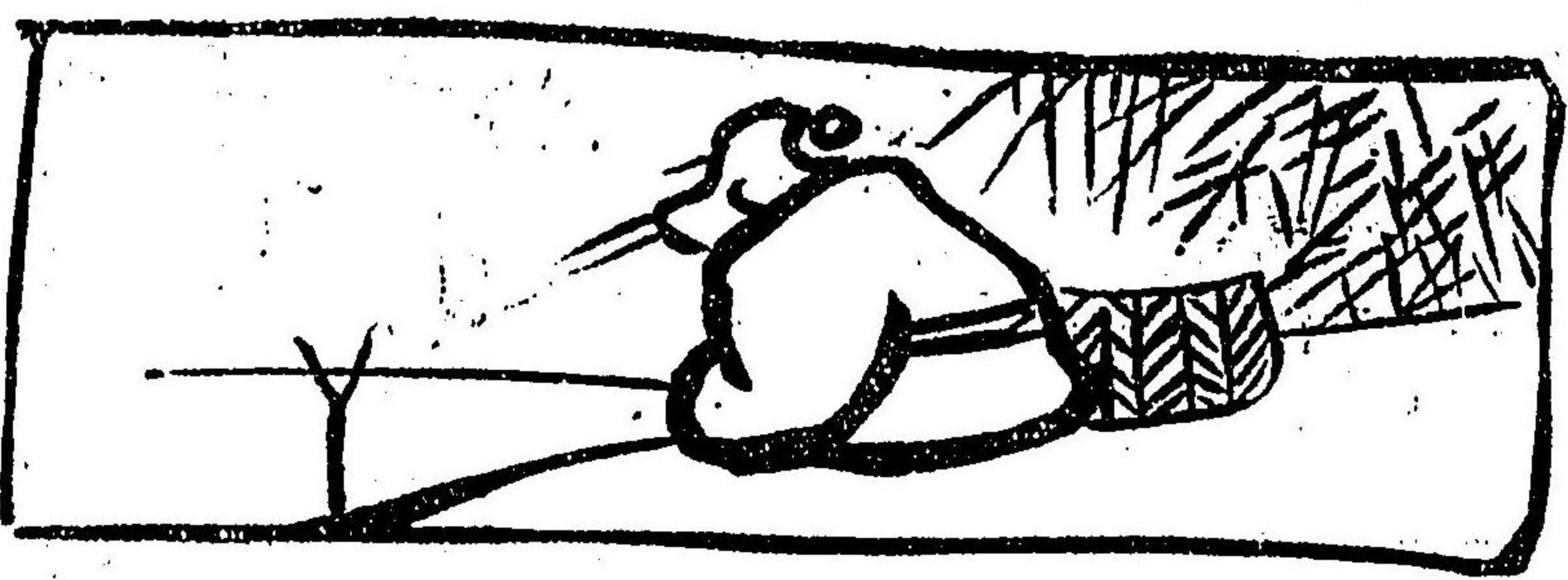
麻坂七兵衛の才……………四三

白河樂翁侯の狂歌……………四三

氏郷常に陣頭に立つ……………四四

三浦梧楼の戯言……………四四

兆民乞食に假裝す……………四六



目次

群芳左手のせ手際……………四六

垣山福屋を嘆かす……………四七

湖山兒童の書を損するを喜ぶ……………四七

丸作左の密函……………四七

徳柳柳北に勸る……………四八

國貞己れの家に盗に入る……………四八

悲露盜に逢ふ……………四九

道灌原風をたつ……………四九

若尾逸平の釜み餅け……………五〇

江崎禮二の寓風閑筆……………五一

岩谷松平に新造器なり……………五一

相馬水風騷者に囚はる……………五一

仁齋齋を投ぐ……………五二

矢野三郎號令を忘る……………五二

樂田是眞其の子を教訓す……………五三

藤村句を題して債鬼を走らす……………五三

青嵐の露落……………五四

大隈伯便器を床間に飾る……………五五

大島中將の奇蹟……………五七



目 次

藤太火事に逢ふ	五七
老人の存氣	五八
幽霊柿を盗む	五九
亮民と花嫁	五九
半香白菊を破る	六〇
一休新左衛門に戯る	六一
關山探雲堂の禁酒を笑ふ	六二
玉露唐紙を破つて瘰る	六三
真寛兒童と喜劇す	六三
龍川典中にて屠殺す	六四
十返舎死後の戯れ	六四
桃水瀧桶を荷ふ	六四
青崖探體にて鬪を作る	六五
半香鬪書にて改裝す	六六
白隠ぬれ衣を着せらる	六六
寫山の狂歌	六七
永海齋上に臨る	六七
あらかまの備促	六八
瀧水園園の潮を見舞ふ	六九



目 次

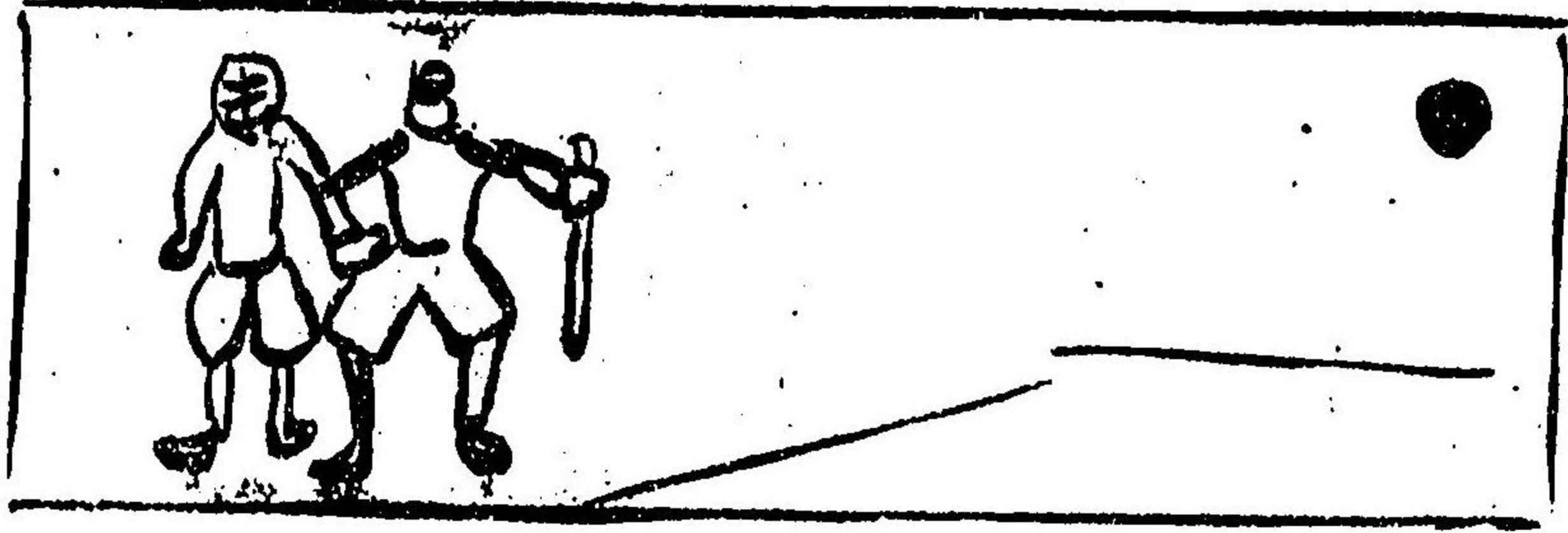
摩古三十五歌仙を誦く	六九
猿林三十七歌仙を誦く	七〇
象二郎尻を舐める	七〇
不死の若死	七一
坦山京環に脱服せらる	七二
象次郎村童の芋を持つ	七三
馳騁外人を門弟とす	七三
太郎兵衛の悪戯	七三
華山附罪状を撰にす	七四
池邊菰水の鬪笑人論	七五
大町桂月の立小便	七五
危き金杉英五郎の命	七六
道灌猿を伏す	七八
亮民火鉢に小便す	七八
塚山の鷓鴣	七九
野山粗相を謝す	七九
平八郎龜の生血をすする	八〇
靈臺の御禮	八〇
一茶の無頼者	八一



目次

八

昔阿彌の六首	八二
長沼熊掌を煮る	八三
酒井抱一の遊度	八四
風外遊庵を讀く	八四
鴨齋尻餅を捲て布袋となす	八四
野崎真一士権を脱す	八五
勝川春章の即智	八五
古筆了仲の跋隨	八六
中村博士の國粹保存	八七
福羽美勝の衣服	八八
山縣侯爵洒落の體	八八
田中正造のかけおち	八九
桂月の五つ紋の寐巻	八九
大山大將の書讀	九〇
野口勝一蛙を愛す	九〇
藤白の傲放と廢官	九一
曾呂利の狂歌	九一
春瀬徂徠に服す	九二
内匠河成を苦しむ	九三



目次

九

河成内匠を驚かす	九三
兆民乞食と相酌して夜をあかす	九四
京森の門札	九四
元春醜女をめとる	九四
一休袂より餅を出す	九五
鳥羽附正の奇才	九五
江渡街上を逃ぐ	九六
山陽の至孝	九六
開巻門弟に問ふ	九七
兆民翠原に報ゆ	九八
白猿の猿にしておけ	九八
長兵衛跡を解く	九九
敬沖公府を驚かす	九九
渡邊國武の吉原通ひ	一〇〇
鳥尾中將哲學者を抓る	一〇〇
放屁の一書生は松本介石	一〇一
今四行の狂歌	一〇一
凌岱の山の幸	一〇二
兆民天水桶に浴す	一〇三



目次

10

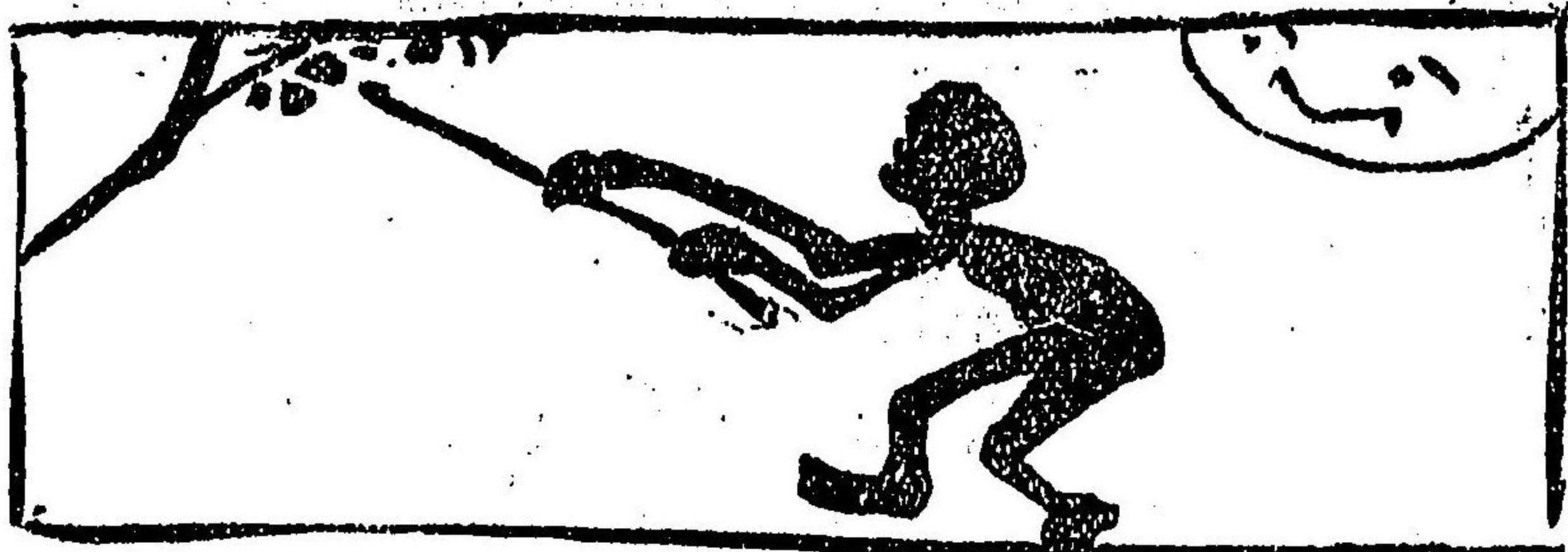
關丸瓜を拾ふ.....	103
尻虎夫婦喧嘩を仲裁す.....	104
山本權兵衛びやう鬨の請附.....	105
徳川慶喜公盜賊と問違へらる.....	106
元峯の器丸.....	107
宗茂の賭男.....	108
多利雄の氣長.....	109
笈殿の奇術.....	109
辨慶の味噌汁.....	109
兆民中井を欺く.....	110
彌九郎徴を賞む.....	111
一休魚を引導す.....	111
白隠の盤みくらへ.....	112
兆民の香茸.....	112
高山正之の豪放.....	112
瓦雄足をなむ.....	113
芭蕉孝子に感む.....	114
大名竹.....	114
おどけ辨光.....	115



目次

11

關拙伊達侯の頭を打つ.....	115
清正利休に服す.....	116
物外の寶篋.....	117
琴谷齒磨を飯にして殿中にする.....	117
雅信齋を暗記す.....	118
山崎闇齋の樂み.....	119
兆民の印絆纏.....	119
正則悪少年を懲す.....	120
田中正造殘念二つ.....	120
久米桂一郎西洋人に化く.....	121
諸戸信六の兩大腕.....	121
遊湯深川八幡の神懸になふ.....	122
關丸障子を閉づ.....	123
弊牙の奇癖.....	123
應學の習字.....	123
金忠輔をかけて碁盤に對す.....	124
新平見童に美菓を與ふ.....	124
白鷺山深島一撃.....	125
玄知の風流.....	125



目次

一一

早津育目を聞者とす……………一二六

鶴親火に投じて死す……………一二六

藝者乞食と衣服をかへて着る……………一二七

重清磯廻を蹴る……………一二八

藩家の自信……………一二八

露舟縛されながら鼠を驚く……………一二九

花顔父のために門を閉かず……………一二九

沈南頼門弟に敵……………一三〇

長谷川主馬の風流……………一三〇

中井腹軒の挨拶……………一三一

老人のために讀める也有……………一三一

和尚の狂歌……………一三一

大綱和尚の飄蕩賢……………一三二

歌津右衛門の失敗……………一三四

久保了齋舟を吞まず……………一三五

覺二の狂歌……………一三九

守田寅丹不老不死の妙藥試驗に大失敗す……………一三六

鐵舟赤子居士に答ふ……………一三七

坦山の奇蹟……………一三七



目次

一三

橘洲宵像の變……………一三八

海舟製作を大切にす……………一三八

峨山鏡々に叱せらる……………一四〇

志賀理齋の庵……………一四〇

稚山遊庵遊女對面の團に賛す……………一四一

玄知近松を見る……………一四一

薩帯裾より飛び出す……………一四一

探幽馬腹にて笛を作る……………一四一

兆民雨戸を釘付す……………一四二

宗徳の金のほしきよ……………一四二

狂歌師の涙……………一四四

真寛土に埋められんとす……………一四四

山本摺兵衛の悪戯……………一四五

荒太郎江戸の湯を恐る……………一四六

宗祇産婆の代理す……………一四六

黒田侯の家來竹を接ぐ……………一四七

狂歌師の辭世……………一四八

一休しの字を書く……………一四八

蜀山人の禁酒……………一四九



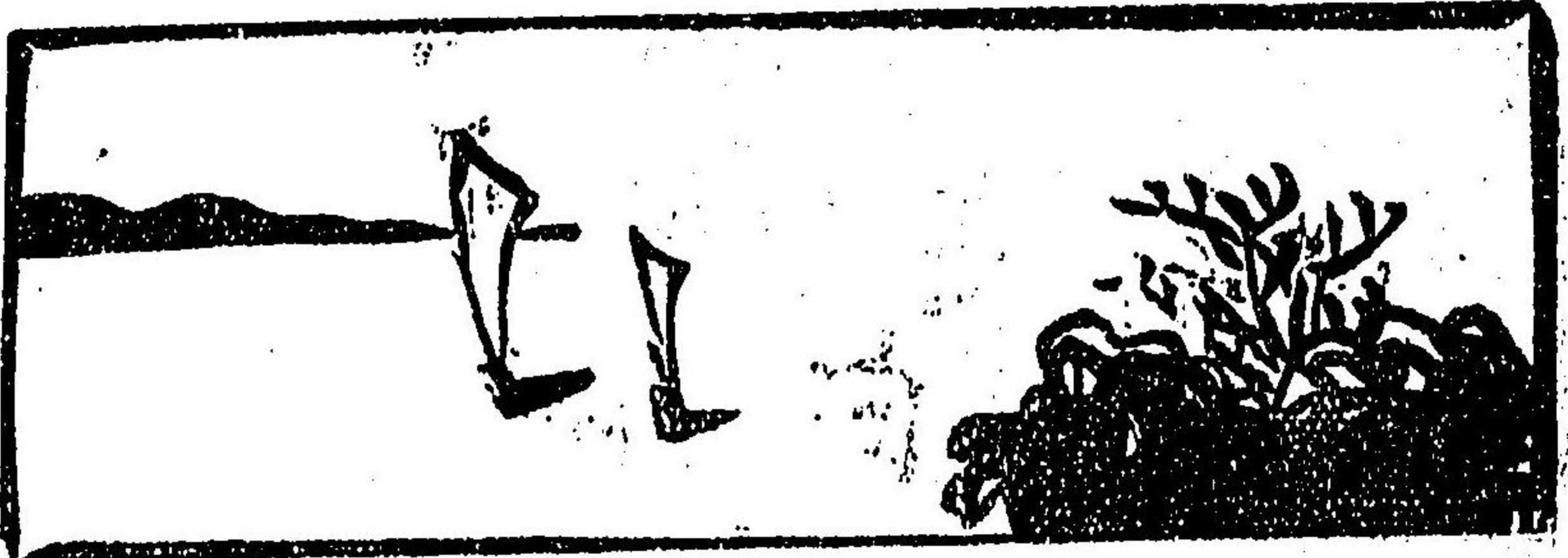
目次

麟蹄にて紙を押ゆ……………一四九
 大雅堂の粗忽……………一五〇
 東湖の四嫌ひ……………一五〇
 柳北雨櫛の對句を背く……………一五一
 獨角殿舟を打つ……………一五一
 曾田の失敗……………一五二
 澤庵よたかへ聲……………一五三
 瀧やせんなん……………一五三
 棕隠人に推誠を授く……………一五四
 永庵自ら留守を使ふ……………一五四
 白隠大摺鉢を所望す……………一五四
 萬年應賀歌川豐登百姓に縛らる……………一五五
 泥舟仕官を辭す……………一五七
 北山春安の無慾……………一五七
 渡邊華山手を戒む……………一五八
 高橋道人……………一五九
 一休翁を食うて泣く……………一五九
 天下藤次郎點燈のお叱言を戴く……………一六〇
 戸水博士の日落比較説……………一六一



目次

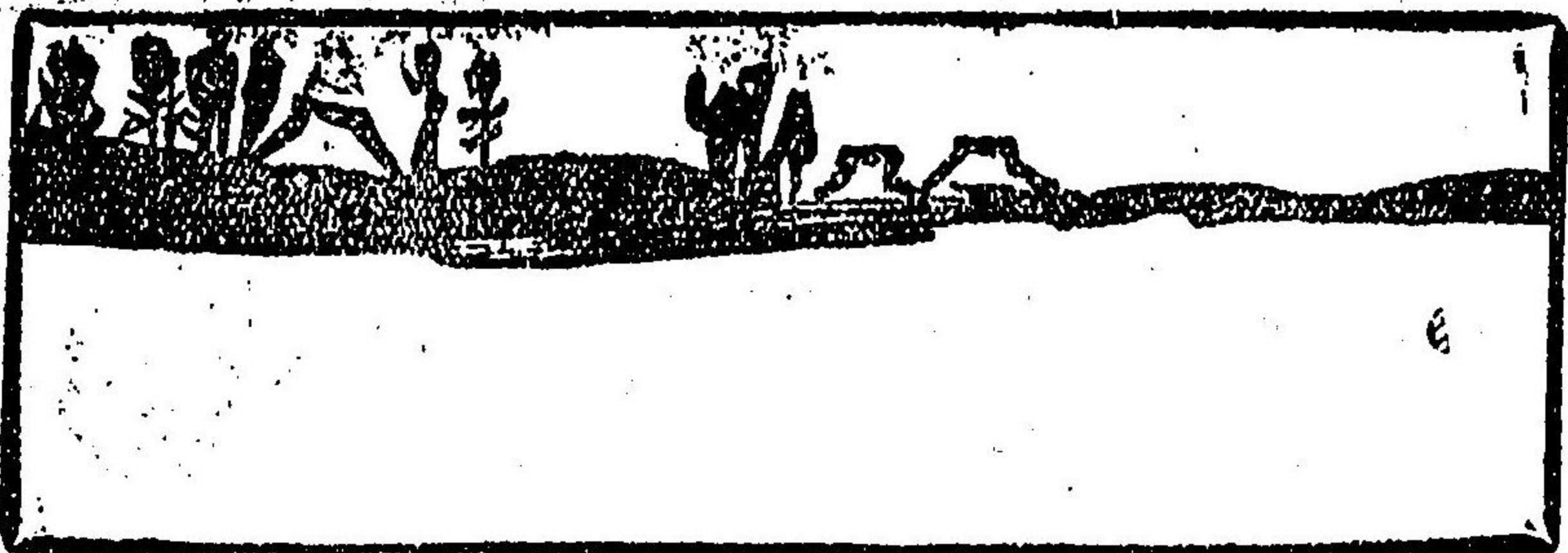
山陽岸駒を怒らす……………一六二
 慶次耶利家を冷水に入る……………一六二
 小樂沙上に馬を騎く……………一六三
 川北温山の剛直……………一六三
 兆民爲答にて尻をふく……………一六四
 環遊遊妓にヨシコノを教ふ……………一六四
 歌種草鞋を冠る……………一六五
 一休翁を取り戻す……………一六五
 幽齋と曾呂利との合作……………一六六
 旅僧の冒険……………一六七
 頭の風呂敷包み……………一六八
 幽齋、細巴の上の句……………一六八
 小松帶刀のどど廻……………一六九
 浦井の廻……………一七〇
 細川藤孝の建札……………一七一
 剛山の剛直……………一七一
 圓山龜母の珍落款……………一七二
 奕堂蛇の頭を食ふ……………一七三
 文山の獨發……………一七三
 ………………一七四



目次

一六

一九倍衣にて年曉す.....	一七五
團扇十三兩にて草双紙を買ふ.....	一七五
市川柳聲の病氣見舞.....	一七五
團扇壯士の腕を奪ふ.....	一七五
蜀山の狂歌.....	一七七
村重切先の饑腹を食はんとす.....	一七八
高家千虎の俳句.....	一七八
嵯山禪迦の鬻像に賛す.....	一七九
團扇の放縱.....	一七九
源照政美人を辨む.....	一八〇
ノウ、イエス博士井上甚太郎.....	一八〇
得庵の打電信三郎の返電.....	一八一
秀吉くんらんかんけんを解せず.....	一八二
一休の機智.....	一八二
彦左衛門の團扇の風.....	一八三
蜀山人の仲報.....	一八三
猿丸大夫の狂歌.....	一八四
河鍋曉齋の一筆稿.....	一八四
音之助の小僧假五十石.....	一八五



目次

一七

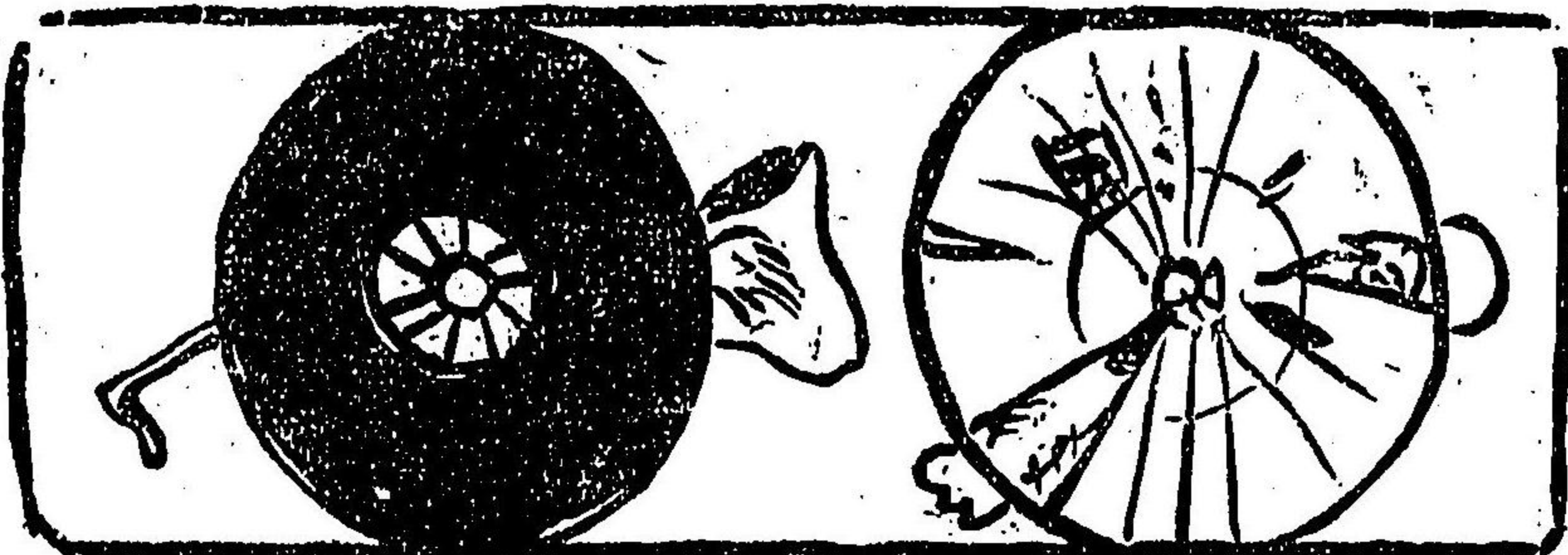
原坦山某女と通す.....	一八六
白石神たらんことを望む.....	一八六
龍鬪の大食.....	一八七
仙巖黒田侯の菊をかる.....	一八七
狂歌師の桂園一枝評.....	一八七
文見富士越しの虎を齧く.....	一八八
鏡舟龍鏡を陛下に投ず.....	一八八
一休木鉢裏りに戯る.....	一八九
北野鶴を走りして齧を作る.....	一九〇
仙巖踏臺となる.....	一九〇
坦山と得庵との途上問答.....	一九一
小梅謙次郎寛人を如にまく.....	一九一
碩儒温美三平の頑固.....	一九二
津山休甫の「虎に毛抜」.....	一九三
神官環溪を苦しむる能はず.....	一九四
蓬洲の頓智.....	一九五
白隠舟子を驚かす.....	一九五
市川海老蔵の酒落.....	一九六
明光少時不動像を齧く.....	一九七



目次

方深伏見人形を携へて隠堂に入る	一九七
一休の即答	一九八
物外近藤男を敗る	一九九
麻呂の神通力	二〇〇
明兆の麻潔	二〇〇
越後三條公を一呑にす	二〇一
座頭秀市の軽口	二〇一
突當女郎屋にて朝野を所忍す	二〇二
脇坂七兵衛裸體にて娘を嫁がす	二〇二
南洲無三の喝に怖る	二〇三
赤羽四郎生徒にもつ	二〇三
烏尼中將伊藤侯を凹す	二〇四

目次終



滑稽百話

滑稽百話

加藤教榮著

中江兆民陰囊を杯とす

中江兆民かつて或る宴會に於て、痛飲淋漓諧謔滑稽天外より來る、突如として立ちあがり兩手にて自己の陰囊を引延べて杯の様にし、酒を注いで藝者に飲ましむ、藝者も亦さるもの、難有しグット飲みほし、早速先生御返杯いたしますとて、婢を呼んでお煙の頗る熱さをとり寄せ、兆民が陰囊の杯へツと注ぎしかば、流石の兆民もアツト驚き、飛びあがりてゆるせむ。

原坦山釋雲照を弄ぶ

雲照かつて坦山を訪ふ、坦山鹽魚を焼き、酒を温めて雲照にすゝめ」とうてす一杯



滑 稽 百 話

引つかけちやア」と、雲照顔をしがめ手をふりて物をも言はず、坦山冷やかに笑つて「フーンいやか、酒を飲まんものは人間ぢやアない」と口走るや雲照憤然として、僧侶の酒を飲むべからざることを説き、且つ酒飲まぬ我れを人間にあらずと罵るを責む、坦山莞爾として答へて曰く「酒を飲まなければ佛様よ。」

越溪盲目にからかふ

有名なる越溪京にありし時、かつて盲目と衝突す、盲目怒りて杖をあげて越溪を打たんとす、越溪急に盲目の脚下に伏して謝して曰く、我れは兩眼明を失ひ咫尺もまた辨ずる能はざるもの請ふ之をゆるせと、盲目又急に地に伏し慇懃に謝して曰く、余も亦盲目なり、公を目あさと思ひたればこそ怒りもしたれ。盲目なりと聞いては余も謝せざるべからずと、よつて相慰めて去る、行くこと五六歩にして越溪忽ち大聲して曰く、道の堂盲目奴が、我れは兩眼明にして鏡の如しと、盲目憤然又杖をあげて追ふも既に及ばずしてジダンダ踏む。



滑 稽 英 話

西郷従道海軍大臣たりし時、諸大臣と相會せしが、後藤伯立つて挨拶せるに臨み従道侯其の椅子を奪ひのけて知らぬ顔に側にあり、伯之を知らずして腰をおろさんとするやどつとばかりに尻餅を物の見事に搦くを見て従道侯大に拍手、曰く大同團體倒るゝと。

西郷従道のいたづら

紫式部の「あさくそ丸」

紫式部の大便に立つは御側女中といへども、かつて之れを見たるものなかりければ女中ども不審に思ひ、如何に姫君なればとて、大便せずといふことなして、あさくそ丸注意怠りなかりしが、遂に何時も鶏鳴を過ぎて東雲近き頃に至りて、廁に行くを見出せしかば、誰やらん廁の戸に「あさくそ丸」と戯れぬ、式部之れを見て

紫は浅くも濃くも染まるのに



話 百 種 浴

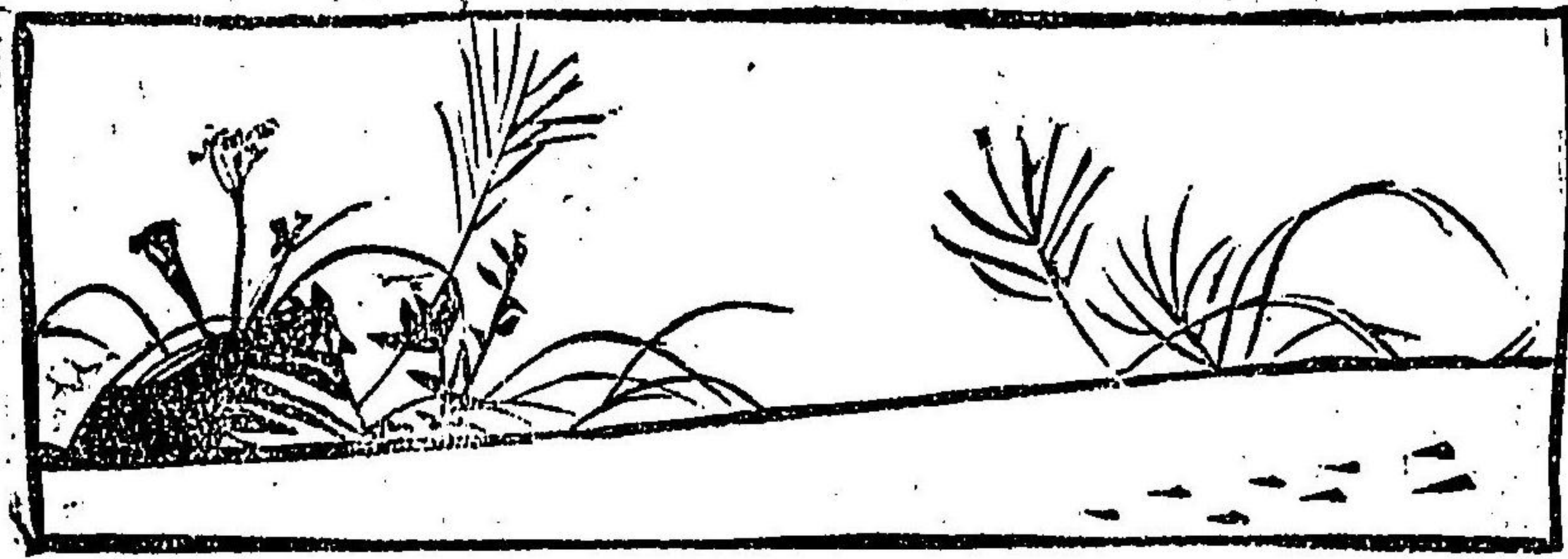
あさく染まると誰れがいふらん。

蕭白行燈を提げて歸る

曾我蕭白池大雅と交り深く、一夜大雅を訪ふて深更に及ぶ、歸らんとするに夜暗し大雅圓行燈に蠟燭を點し出して曰く、吾家提燈なし請ふ之れを携へよと、蕭白諾々として之を提げ、醉歩蹠跚として家に歸り來る。

漬物の壓に石地藏

正念坊、寺にありて飯を焚くや、櫃にうつして肩に載せ、それ輿け、それかけとて佛前を一廻りし、それより人にも食はせ自らも食へど、別に佛器にもりて佛前に供せしことなし、されど又佛前を一廻りせざれば、何物といへども食することなし、何事にも無頓着にして、漬物の壓にも、石なき時は境内に建てる石地藏を持ち來りて「案梅よく漬けて下され」とて歴代りにして置く。



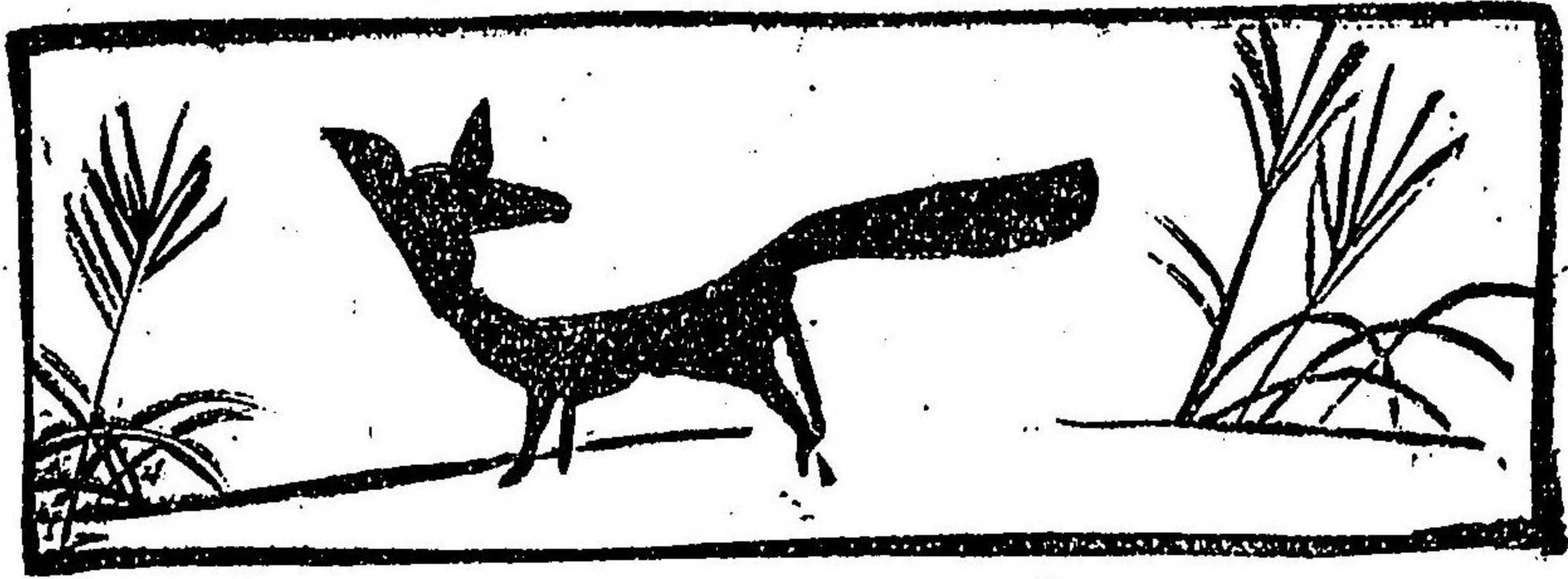
話 百 種 浴

燕石博變を好む

燕石は詩人として其の名を知らる、博奕を好むこと飯の如く、常に其の群に入りて博變す、門人諫めて、先生の名ある、かくの如くにして其の好むところ此の如きは疵も亦甚だしと、燕石笑つて答へて曰く、詩人博奕を好むといふが故に疵なり、博奕打詩を能くすと言はゞ豈美からずや」と

松田宗則一バイ擔かる

三井物産會社に於ける勤儉家の評ある松田宗則は、未だ會費自辨の會合へは殆んど列席する例なし、其部下の連中是を忌々しく思ひ一度松田を會費自辨の席へ呼びなば如何なる顔やせんと期するところへ、折りも折り調査課長の藤瀬政五郎上海の支店長に轉任するを幸ひ、早速部下は松田に向つて「會費の方も我々一同が等分にしましよから、是非我々を代表して藤瀬の送別に御出席を願ひたい」とものと明つた啗か松田い



滑 稽 百 話

よく相談に應じたり、後其月の終り、松田の手に渡つた月給の封筒の上に書して「内金何圓藤瀬君送別會々費差引」とあるを見て松田たるもの呆然自失するもの、如く、又憤然たるころもあり、七面鳥の如かりしと云ふ

桶屋の狂歌

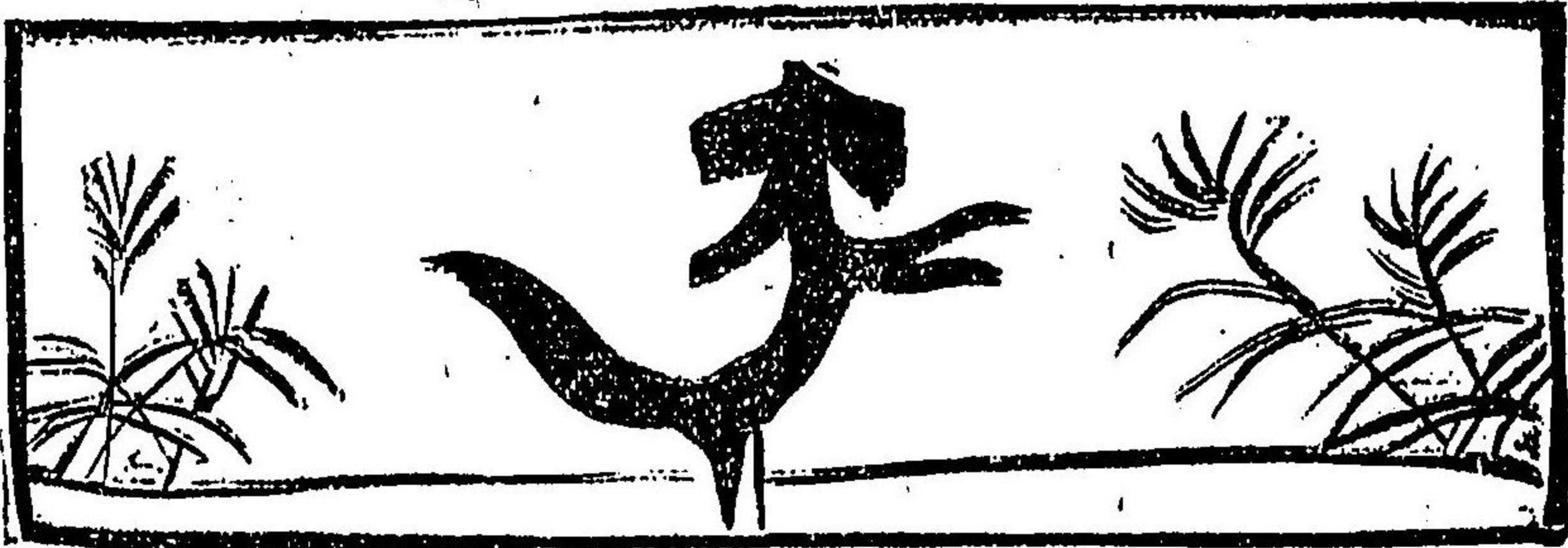
某といふ桶職人あり、家貧しけれども心にかけて、人仕官を勤むるあるも又富貴を願はずとて辭して従はず、或時我が子に教ふる歌なりとて

木に竹の無理はいふとも底が親

いはして桶屋たがわらふとも。

西山某石を煮ること三晝夜

備中の人に西山某といふものあり、葦蘇州の歸來者白石の句をよみて、一日白石を求め煮ること三日三夜なれど熱せず、役人に言つて曰く、古人我れを欺くと、何ぞ知



滑 稽 百 話

らん白石とは芋のことなるぞ。

金儲の法を教はる

或る人佐久間象山に向つて金儲の法はなきやと問ひければ、汝等常に四ツ道ひになり、且つ片足あげて小便すべしと。

孫三郎裸體となりて賊を走らす

楠孫三郎は大和の染物商なり、或る時抜刀の賊五人忍び入りしかば、賊徒等を驚かしくれんものと思ひ、女房を起して廁の裡に隠れさせ、自らは裸體となりて店にかくれぬ、賊徒等之れを知らずして逃げうせたるものと思ひ、落ちつきて取り出したる衣服を風呂敷に包み今や持去らんとする折柄、孫三郎は藍壺に入りて顔と云はず手足までも黒々と藍にて染め、不意に賊徒等の中に跳り出てしかば、賊等徒は其の奇怪の姿に肝をつぶし、それ妖物が現はれしと叫び、周章狼狽して逃げ去りしと云ふ。



滑 稽 百 話

山陽作詩法を教ふ

頼山陽が或る人に詩の作法を教ふとして

大坂本町糸屋の娘

姉は十六妹は十四

諸國諸大名は弓矢で殺す

糸屋の娘は目で殺す。

蒲生君平糞を食はず

非憤慨世の土かつて一堂に會せし時、楠氏を斥けて新田をあぐるものあり、時に君平厠にありしが此の論をききて我れを忘れ、暴論暴論と呼びつゝ、厠より飛び出し來り一座を睥睨して怒氣滿面、厠の團扇にて席を打ちつつ、口角沫を飛ばして激論するに異臭粉々として鼻を撲つに、人々鼻を蔽して席を避け、諸君の中誰ぞ臭き物を取り落



滑 稽 百 話

したるものはなきやと言ふに、流石の君平も驚きて四邊を見まはすところに、一人首をかして、不思議のこともあるものよ、蒲生氏が其の團扇を動かすごとに、人糞の臭ひ鼻をついて來るぞと訝かるに、君平團扇を裏返せば、こはいかに、何時とは知らずベツトリ着きし不潔のもの、君平團扇投げ出して借も恐縮くと、顔を叩いて打笑ふを、其の儀ならば其の邊にも飛で散りてあらんと、慌て、杯盤改むれば、鉢にも肴にも吸物にも、はた客の衣服にまで、黄金點々と附着せるに、さては知らずしてこの酒も飲み、肴も食ひしよと、衆客俄かに胸悪るしとして、吐くもあり口囁ぐもてるに、君平平然として、汝等既に我が説の妙を味ふ、更らに我が糞を味ふも一興ならずやと又客の網然として歸りゆく後姿見送りて笑つて曰く、汝等楠氏を罵るを以て、天罰觀面腫を廻らさずして糞を食ふの刑に處せらる、又當然のみと、其の儘横臥して鼾聲雷の如し。

福澤桃介議論を茶にする



話 百 種 活

大勢實業家のみ集まり固苦しい議論最中、言語の途切れを機会に一座の福澤桃介、大勢を見廻し、「君等は皆頑固な顔を並べて御座るけれど、畑君に向つて一度も虚言を致さん人は有るまいな」と云ふ、人々皆福澤の好諷に吹き出す。

渡邊雄男拘摸の親分と間違ひらる

甲武鐵道の渡邊雄男は、素服にして不慮にも金時計を下ぐるなり、或日ブタク然と出歩ふ途中ドント突當る怪しき一人、不思議と帯の邊を見るとア金時計を拘摸られたり、そして後へ戻つて見ると但ある小路に隠れて、件の拘摸は、正か金ぢやあるまい、メツキだらう位に頻りに鑑定中の所をとらへ、「もし悪戯しちやアいけねせ、と渡邊の云ふを「親方濟まな、間違えた、勘辨しても呉れなせえ」と拘摸は失度に金時計を渡して逃かる。

藪茂二郎の夏羽織

藪茂二郎は肥後の大儒なり、或る嚴冬大坂の冬儒中井積善を訪ふ、積善茂二郎が紗の薄羽織を着れるを見て其の故を問ひければ、茂二郎平然として

「國許を夏出てましたれば。」

將軍の間抜け

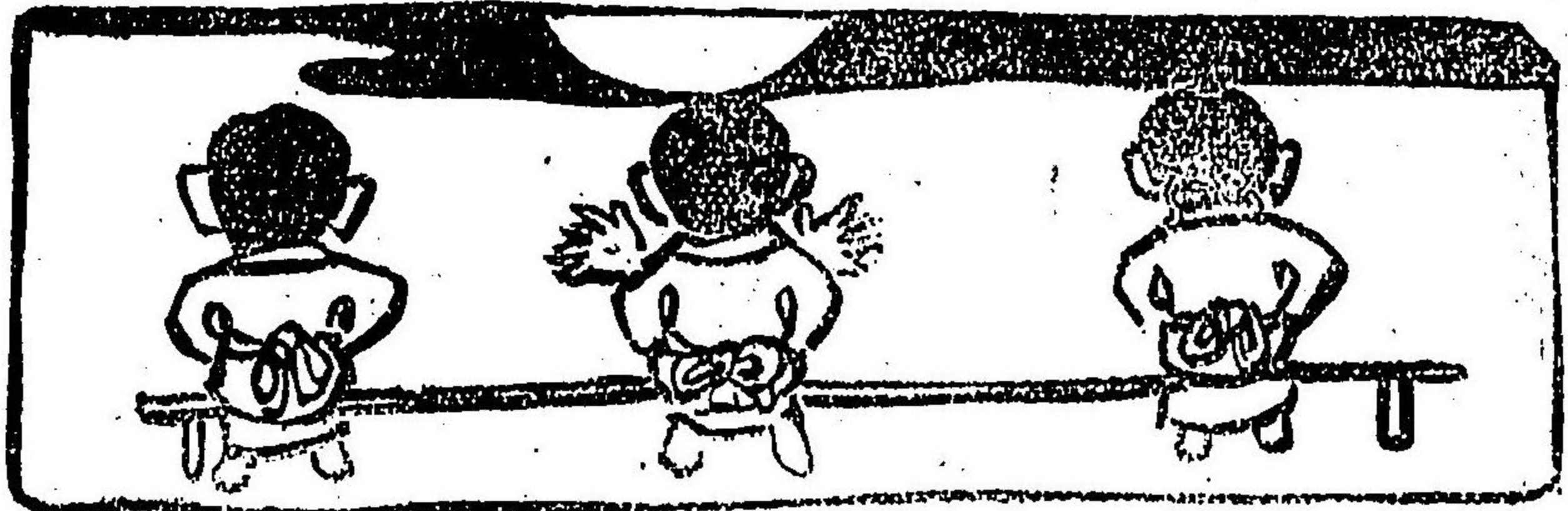
徳川の或る將軍、一日兩國に遊びて歸館の後、兩國邊は賑はしき所のよし兼ねて開き及びしに、今日は甚だ淋しかりきと仰せられければ、侍臣答へて今日は御成につき人通りなかりしとて候と申しあげけるに、將軍は此の次の御成のなき折參るべしと仰せられしとぞ。

竹を愛する人

良寛性竹を愛す、かつて床下に筍の伸ぶる能はざるを見、憐みて床を撤す、筍伸びて天井を突くに至るや、良寛又茲に屋根を撤したりと。



話 百 種 活



滑稽百話

おやく大隈伯に足がある

先年越後柏崎に於て大隈伯一行の重立たる連中を呼び酒宴を張るに及び、上座の方に肥満胡麻鬚人品卑しからざる一人如何にも伯爵位ひの價値と見てとつた土地の藝妓達はテツキリ此の人は大隈伯ならんと、窃かに列座の内藤久寛にアノ人が伯爵でせうかと聞く久寛も去るもの「さうだよ」と答へければ、藝妓達の御前へと敬意を拂つてもてなす、然るに件の紳士は夫とは知らず酒半ばにして便所へ立つ、スルと或藝妓驚きて「おやく大隈さんは足がある」と満座洪笑鳴りも止まざる滑稽。

ヒーロを一口一七と讀む

先年佛骨奉迎委員として日置黙仙一行が印度に向つて解覽せんとする際、長崎の港向、山上に巻煙草ヒーローの廣告を眺めての某高僧は一口一七と讀み妙と叫ぶ、一行誰ありて其のヒーローたるを知らず。



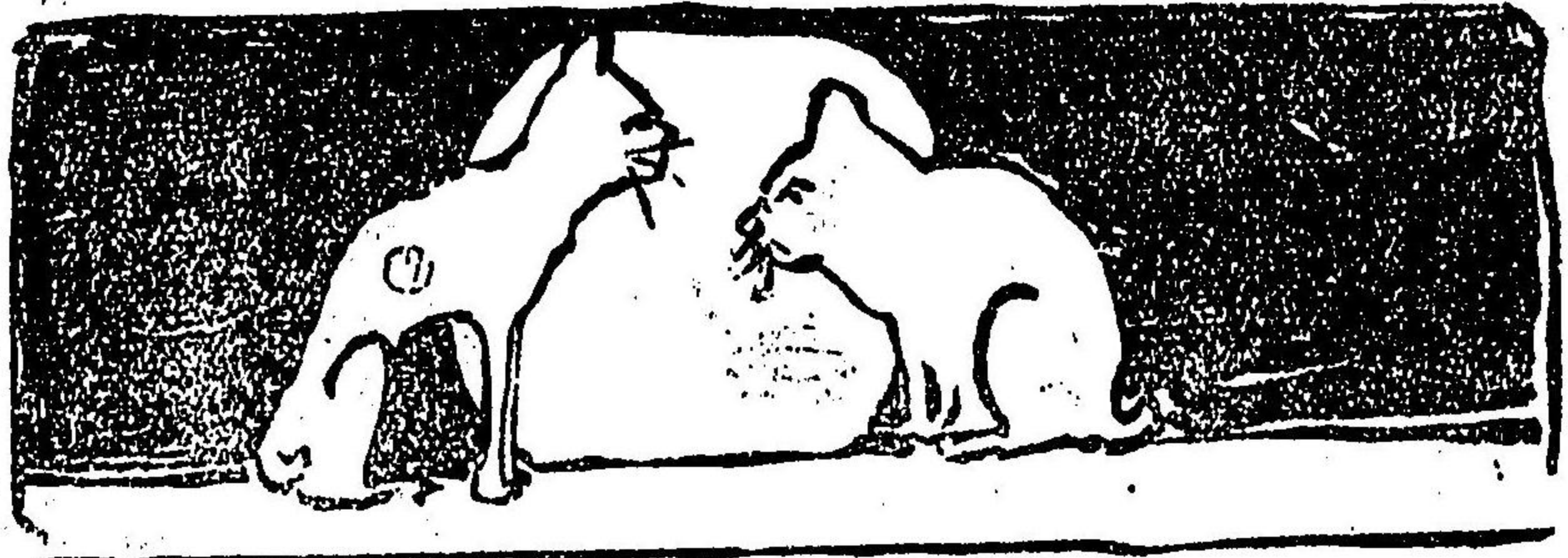
滑稽百話

サンドウキツチを感心す

北國地方よりくり出した本願寺参りの田舎者なり、途中米原驛でサンドウキツチと買ひ求める隣席の客を不思議相に眺めたるが矢張り辨當かの、ては三度に一度の辨當ぢやてサンドイチぢやと感心して田舎者同志耳語さむたり。

米國に於けるハスパンド

鳩山和夫は妻君春子と先年米國に行きけるが、妻君春子に對して和夫の親切は非常なるものあり、馬車へは先さへ乗らしめ、外套夫でも氣を付けて懸けてやるに、妻君春子もシミク和夫郎君の親切を感謝したり、然るに歸朝しての和夫はと云へばやはり舊の木阿彌となりすまして更に春子を顧みずとて春子大に不手を鳴らせるも、郷に入つては郷に従ふべし米國は日本と異なり妻君優遇國なればソコは和夫君も一寸描を被つて米國を胡麻化せり



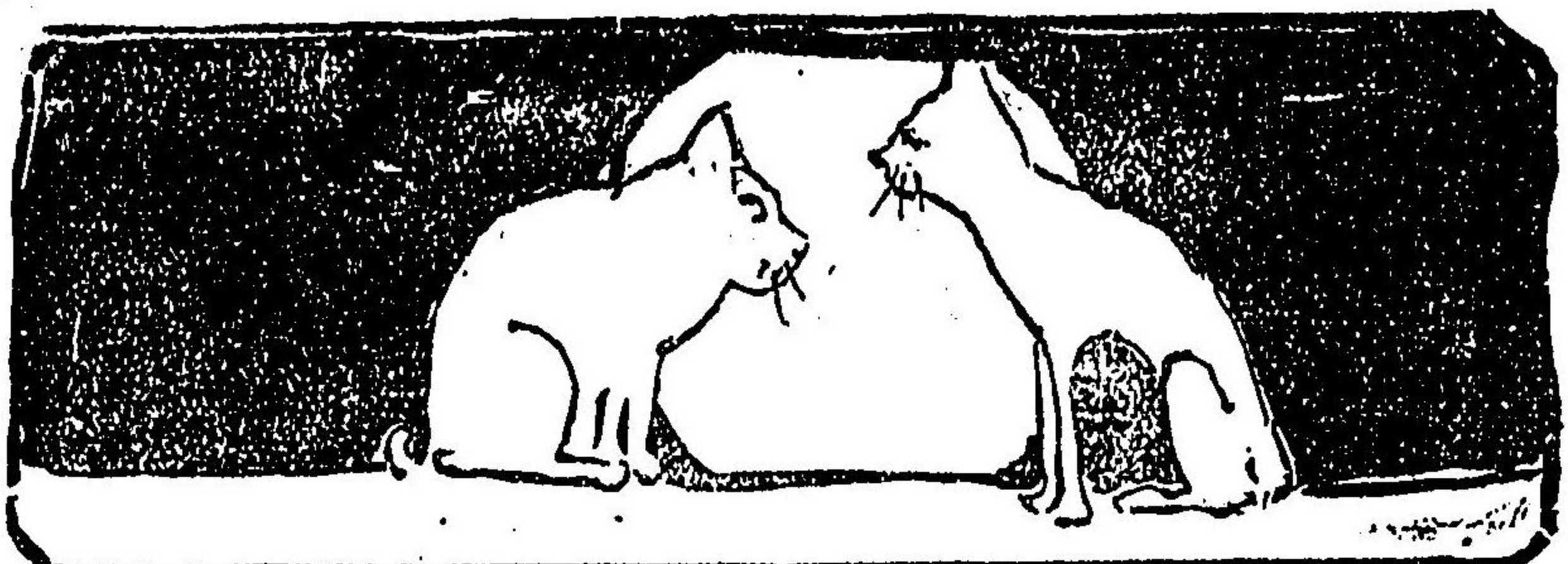
滑 稽 百 話

清國へ往診

疆之洞あり壹萬圓の往診料を以つて我外務省は醫學博士近藤次繁を派遣して以來、清國への往診料先づ壹萬圓と相場決まる支那總督周復の時の病氣にも醫學博士入澤達吉の往診壹萬圓、袁世凱の悴の病にも醫學博士平賀精次郎往診壹萬圓に引受け、幸ひ悴全快したりて袁世凱夫婦の喜一方ならず西太后の外爲すなまも辭義をなす、早く醫者になる可し。

お高祖頭巾の主

或冬の事なり、三井物産の會計主任安田は大森の自宅より氣車で通勤してけるが、或日にも氣車中失張大森より乗合のお高祖頭巾なり、察するところ新橋の藝者？夜前大森に泊つた歸りか位に見てゐた、然るに近寄つて見れば穴勝藝者にもあらず多少見覚えのある人らしひと直ちに會釋をすれば、豈圖らんお高祖頭巾は全く自分の妻君



滑 稽 百 話

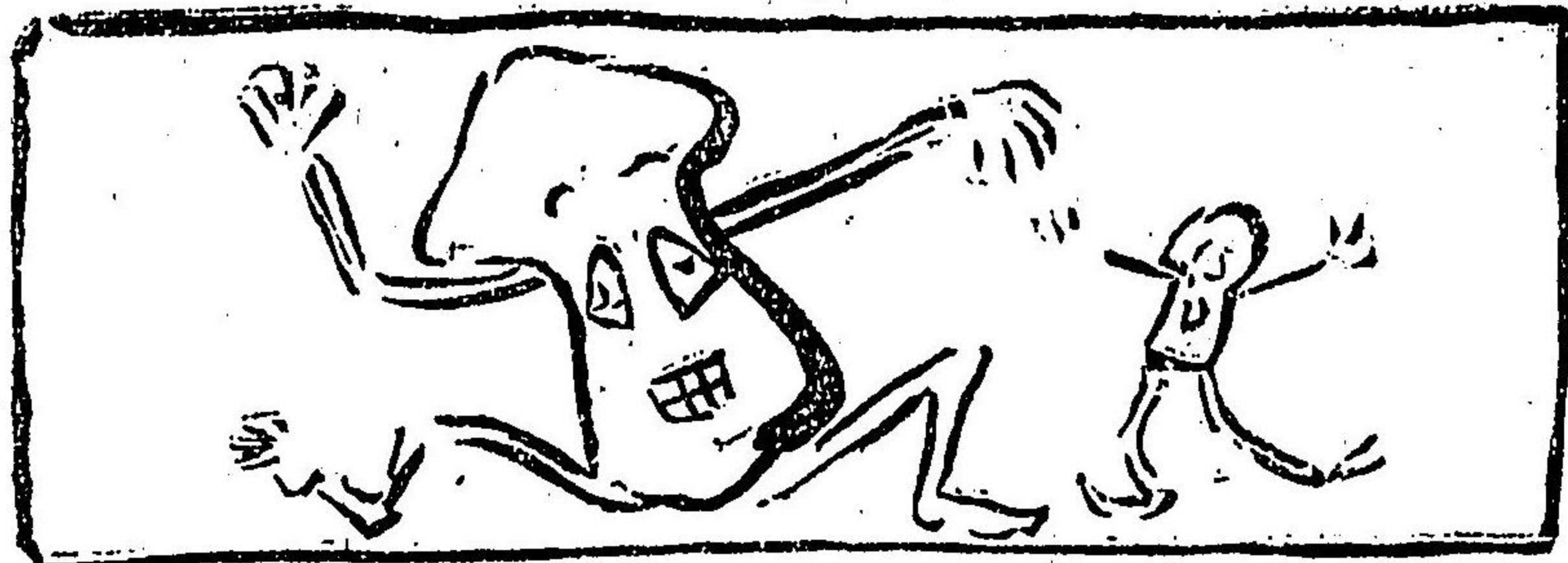
にて郎君馬鹿な真似をと聞えてビツクリ

浪六と債鬼

村上浪六會つて春陽堂に債あり、而も稿成れば他に交附して償はず、堂主怒つて之を訴ふ、浪六暫らく春陽堂の店前を過ぎる能はず、後堂主文士を追窮するを屑とせずして其訴を取り下ぐるや、翌日浪六傲然として車を驅り店前を横切る恰も耻なきもの如し、後太平新聞を起すや、恰も青木嵩山堂と關係あるもの如く吹聴し、紙屋の債を督責するに逢うて、即ち嵩山堂の奥座敷に之を誘ひて談判を聞き、傍ら人無きが如し。

廣津柳浪採質に窺はる

會つて或る者廣津柳浪の隣寓に移轉し來りしより幾干もなくして、探偵屋子の邸を窺ふあり、子好奇心にかられ相會して其の内情を聴かんと欲して之を俟つ、然るに



滑稽百話

探偵影を潜めて又來らず、蓋し隣家の新主人は時の牛込警察署長某の隠居、子が常に家に閉居して他と接せざるを訝り、之を子息の署長に密告せしによれるなり、而も子が名高き小説家なるを知るに及んで、忽ち其の失策を悟り得たるの滑稽劇を演ぜしなり。

鏡花思案外史の妙意を謝絶す

泉鏡花の奇を漸く文壇に鳴り渡るや、石橋思案外史大に其の前途に嚆望して、自ら英語教授の勞をとるべしとて、大に西歐文學の修養を勸む、鏡花其の言を徳とし其の事を辭して曰く、餘り學問をしようと理窟ぼくなつて、小説やなんか書けんやうになりますから、折角の御厚意ですが、マア止して置ませう、思案頭を擡いて去る。

早川龍助金魚の失敗

早川龍介米國にて金魚の珍重せらるゝを聞き、奇貨逸すべからず我れ一舉して大利



滑稽百話

を得んとて、諸種の金魚を買ひ込み、日を期して汽船に搭載し意氣頗る豪なり、何ぞ圖らん船の桑港に着する頃は、船の動搖のために金魚は悉く死して終に厘毛を得ず、龍介即ち悄然として歸朝す、金魚早川の綽名これより起る、

犬養木堂小山久之助と語る

犬養木堂或る時卓を圍みて小山久之助と語る、犬養曰く、僕は酒の味が分らぬのでドンナ酒でも飲むが、聞けば上等は六十錢もするそうだが、今まで飲んだ奴は、アルコールと水の混合せる悪酒で、大いに體を痛めた、小山曰く、そりや酒じやない年のセイだ、モウ死ぬぜ、ドウダ政治ナンカ止めて、又小角力でもヤツタラ善らう、犬養曰く、モウ角力もやれんな、小山曰く、てはイヨ／＼死ぬのだ、僕は此頃佛蘭西の歴史を翻譯して居るが、中々面白い、立憲政治の初はドコでも同じだ、日本ばかりでもない様だ、犬養曰く、ソイツは驚いた翻譯をやるつて、それは勉強だ君もソロソロ本心に立ち廻へりかけたと見へると、二人相見て呵々と大笑す。



話、百、種、滑

長谷川泰の磊落

長谷川泰は人の知る如く、我武者の隊長にして、お醫者仲間の豪のもの、數々奇矯の言を弄し、巧みに他を嘲笑して得意とす、其の性質の磊落かくの如くにして、而も而も錢を愛むことは又一通りならぬ豪のものなり、此の豪傑飯時に客の居るあれば、僕の家には君に喰はすとて別に飯は煮てない、一寸失敬するぜと客に關せず、自ら腹を肥して澄ましたもの、磊落にして何ぞそれ巧妙なるや。

大隈重信兒島維謙と年若を争ふ

頃者大隈重信と兒島維謙と同坐せし時、傍にありし壯年紳士、大隈さんと兒島さんとドチラが本年が上ですかと問ふ、兒島曰く大隈先生が上サ、大隈曰く、ナニニ兒島君が上サ、ナニニ先生が上サ、ナニニ君の方がヨソボド老人だと、兩を相争つて年若を誇り、終に其の孰れが年長者なるやは判明せず、紳士手を拍つて只大笑するのみ。



話、百、種、滑

紅葉女流ハイカラに取巻かる

尾崎紅葉會つて帝國ホテルの番頭長田秋濤を訪ふ、時に某婦人會あり、大倉、澁澤、益田、淺野等、當代屈指の紳商の噂娘等、多く櫻に集まりしが、紅葉のあるをさき小説家の紅葉さんなら一度逢ひたいねと、誰れやら發言せしに、皆々異口同音に之に賛し、急に秋濤を呼んで之が周旋の勞を托す、秋濤乃ち歸つて之を紅葉に謀れば、馬鹿あ言へ、藝人ぢやあるめえ、とて取合はざりしが、強ひらるること再三に及び、遂に止むなく導かれて樓上に至るに、不出來の觀世音菩薩の出現かと疑ふばかり、いかさまならぬ金銀、珊瑚、瑠璃、白銀、金剛石のあたり眩く、所謂貴婦人令嬢達、四方を圍んで、オヤ嬉しいね、よく入らして、あたしあ三人妻がすきななのよ、紅葉は惜いが、お才は可愛想なのねえ、オヤお才が可愛想だと可笑しいね、矢張あなたは昔し覺えがあるから、身に撮まされてんでせう、私は寧ろお艶に同情を表しますわ、あなた方は三人妻とは免れぬ縁があるから、兎角仰しやるんでしょが、私は金色



話 百 稽 滑

夜叉に浮身を獲して居るのさ、紅葉さん後生だからどうか休まずに書いて下さいな、一體お宮と貫一の仲はどうして下さるのです、など、解らぬことを喋々噂々と囁り立てられて、追の紅葉も呆氣に取られ、上氣して耳のあたり赤くなり、ハア／＼の立て續けのみ、遂に一語なくして却けり、而して其の初々しさが大倉夫人のお氣に召し、爾來大倉夫婦のために愛せられて、時々其の赤坂の邸に出入す。

徳富蘇峯紙屑を賣る

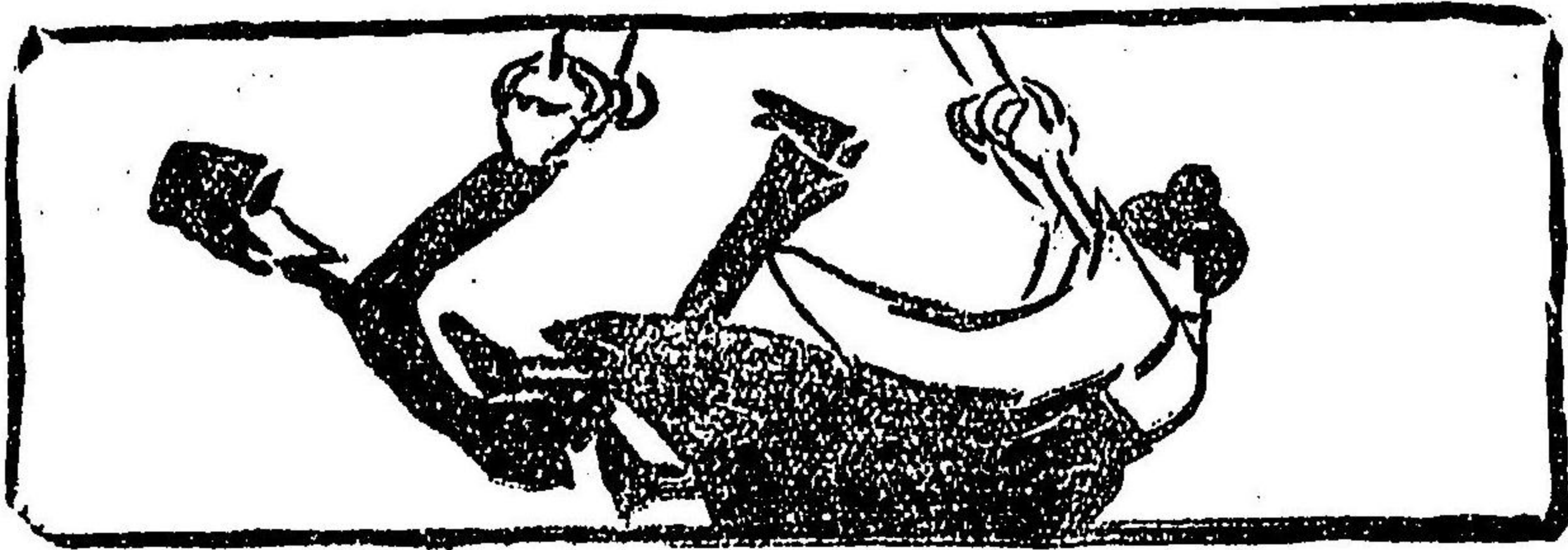
徳富蘇峯かつて人に語つて曰く、余が内務参事官となるや、四面より讒謗罵詈訕んと到らざるなし、試みにも技通信を執つて保存し置きしに、東京に到つて巨大の柳行李に充滿せり、之を紙屑屋に賣らんと言ひしに、貳拾八錢ならば買取らんと謂ふ、驚くべし余を罵罵せる價の甚だ廉なるをと。

尾崎紅葉學堂に看板を奪はる

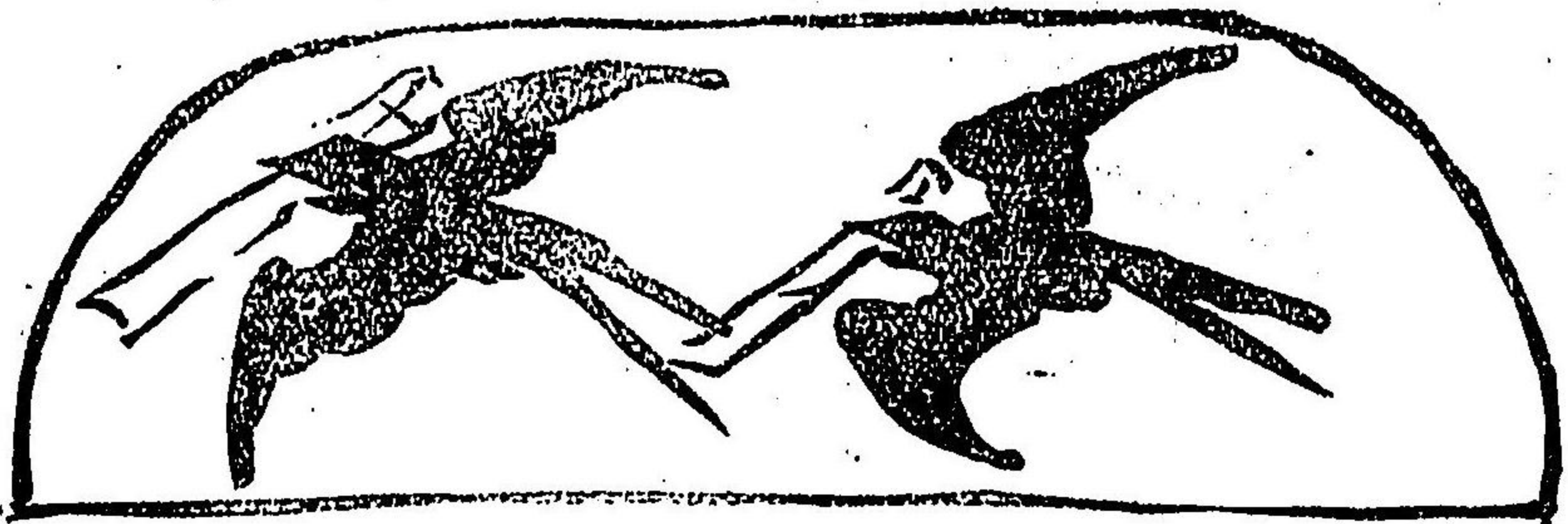
尾崎紅葉が當代寫實派小説の泰斗たるは、夫子自からも許し、人も許す所、久しき以前より牛込横寺町に僑居す、其の界限に到りて、尾崎さんと尋ねれば人必ず紅葉の家を指す、然るに其の後尾崎學堂の文部大臣を辭して官舎を去るや、又居を横寺町にトす、其の界限に到りて、尾崎さんと尋ねれば、人必ず學堂の家を指す、紅葉囁じて曰く、流星に大家なるかな、尾崎學堂横寺町の尾崎の看板を奪はれたりと。

啞阿答

英國の哲學博士あり米國大學を參觀す、此の米國大學に片目の小使至極面白き男なり、大學の職員博士に向つて曰く、我校に啞の學者あり博士是と問答あるべしと申込み、一方には小使の男に向つて今日英國の啞の學者來れば汝も手眞似て話すべし決して喋る勿れと言渡し、後博士と小使は一言に入り博士はつく／＼小使の顔を見入つて指一本を示し「萬物唯一神」と聞く、小使指二本を以つて「天地」と答ふ、博士大に感心し今度は指三本を出し「天地人と別つべきものならずや」と聞くに於て、小使直ち



話 百 稽 滑



滑 稽 百 話

に拳を擧ぐ是は「三體ありと雖ども合して一體なり」と答ふるに似たり、茲に博士恐縮して去る、後て小使曰く「今の座は人を馬鹿にしてゐる、己の顔を穴の明く程見やがつて指一本で片目だと言ふから、左様です足下の目は二つあると己が指二本を出すスルト又指三本出しやがつて合せて目が三つと云ふから藤だ、思はずゲンコを固めたり、奴さん振いて逃げだしたのよ、ザマ見やがれ」

片目の花嫁

美しき男片目しひたる女をめとりければ、三々九度の席上にて、花嫁より花嫁に杯さしつゝ。

今宵こそ夫婦かための杯を

「つのもめ、つのもめ、」

花嫁取りあへず返して曰く

みめよきは亭主のためにふためなり



滑 稽 百 話

女房は家のかためなりけり。

酒百首

狂歌師粹齋亭は非常の酒好きにて、酒百首を詠みしが、その中に

くじ酒はこれ風流の眼なり

月を見るにも花を見るにも

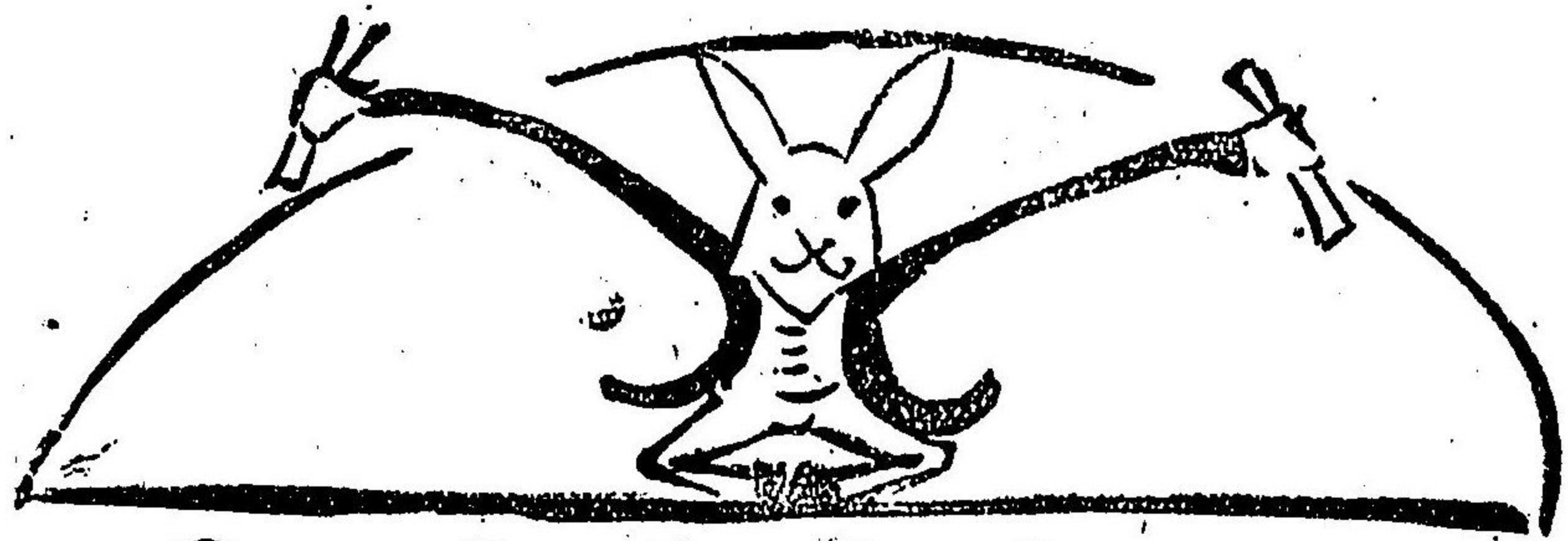
氣長もの

氣長もの、多利雄、大晦日懸取の來るをウルサク思ひて入口の隙子に張りけるは、

かけこひの鬼のすみかをたづねれば

遊びすごせし穴にぞなりける

根元通明囑托講師を辭す

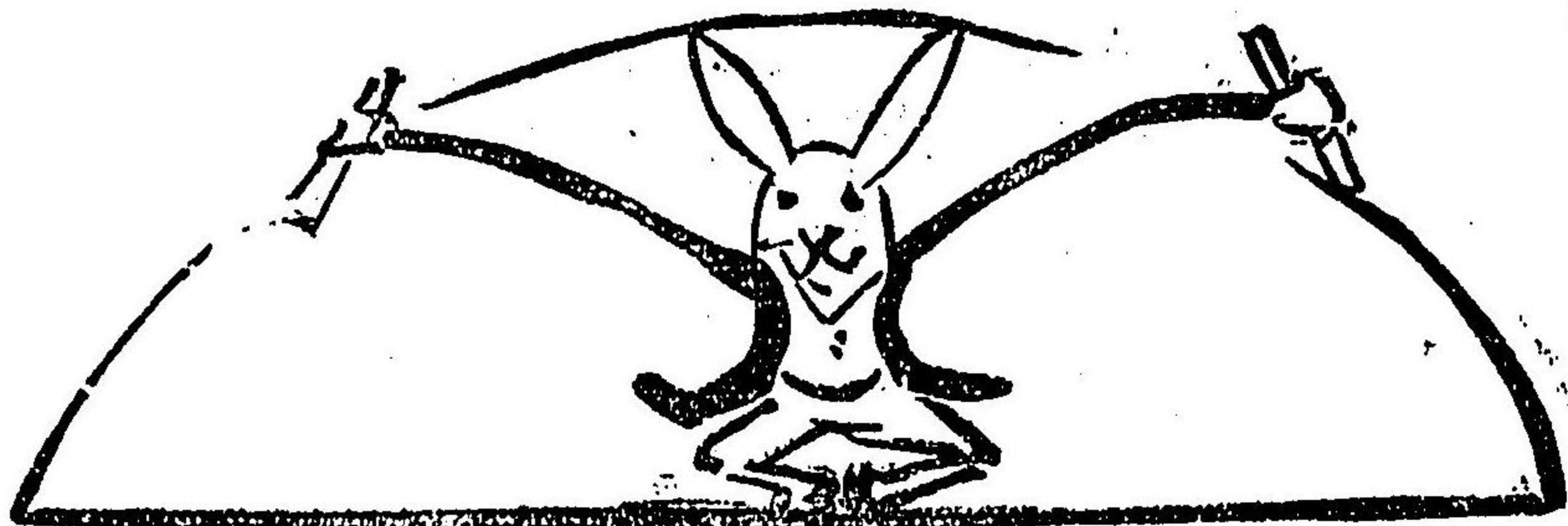


話 百 種 滑

二四
 鐵扇博士の紳名高き文學博士根元通明、東京專門學校の講師を囑托されし時、四面楚歌の嘆ある漢學も尙ほ手足を伸ぶるの天地ありと喜びて、昭々として抱負を述べつつある時、幹事何程かの給料を紙に包みて恭しく持ち來り、澤山月俸を差しあげたけれど、經濟上の都合あれば、當分だけ宛を收め下されたしと、差し出しければ、先生勃然として顔色を變へ、拙者售るための學問はして居らぬ、と床を蹴立て立ちかへり、嗚呼當世はどうも若手だ、と早々に囑托講師を辭す。

田村光顯便器で鶏肉を煮て食ふ

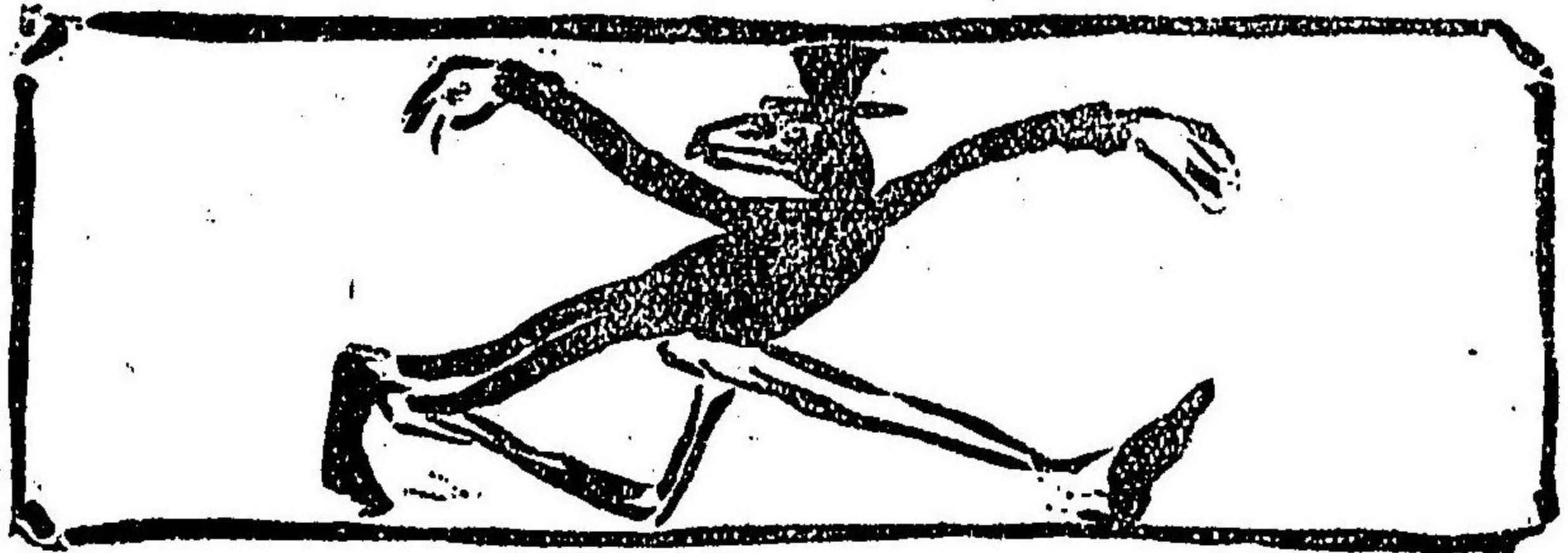
醫師田村光顯先年滿洲を旅行せし時、鶏を手に入れたれども煮るべき鍋のなきに、或る民家の空家を探して壺の如き物を見つけ、此奴調寶と早速分捕してよく洗ひ、其の内にて鶏肉を煮て喰ひしが、何んぞ知らん、これ婦人の用ふる便器なりしならんとは。



話 百 種 滑

元田肇が財布の要心

元田肇洋行せんとするに際し、或る友人冗談半分に「外國は中々油断がならぬ、白晝でも随分強盜が横行する」と注意せしを、元田は眷々服膺して財布の紐を緊く括つて胸巻の中に押し込み、注意をさく意りなかりしを以つて、幸に盜難には出會はざりしも、其の不便は誠に尋常ならざりき、兩換をなすにも、買物をなすにも、先づ上着を脱ぎて次に胸着をはづし、胸巻を出してその中より財布を取り出し、更らに財布の中よりヤウヤット金を取り出すをもつて、同行の友人等閉口したること一再ならざりき、會つて二三の友人と花の都の倫敦にて買物をなせし時も、元田例によつて例の如く、大通りの店頭にて、十八番を演じいだしたるを以つて、「此の倫敦の往來中て何故那樣見悪い眞似をするのだ、皆キヨロ〜此方を見て居るぢやないか」と窘むれば、「デモ詮様がない、小出しの金で足りないから胸巻から取り出すのだ」と云ふに、「イヤそれなら後生だから廢して呉れ、俺が立換へて拂つておくから」と、其の場をすま



話 百 種 滑

して外方へ連れだし「外国へ来て彼様な舉止をするな、實に不忍見」と言へば、元田は泰然として「イヤに貴様は外見坊な男ぢや」。

杉孫七郎茶席での失敗

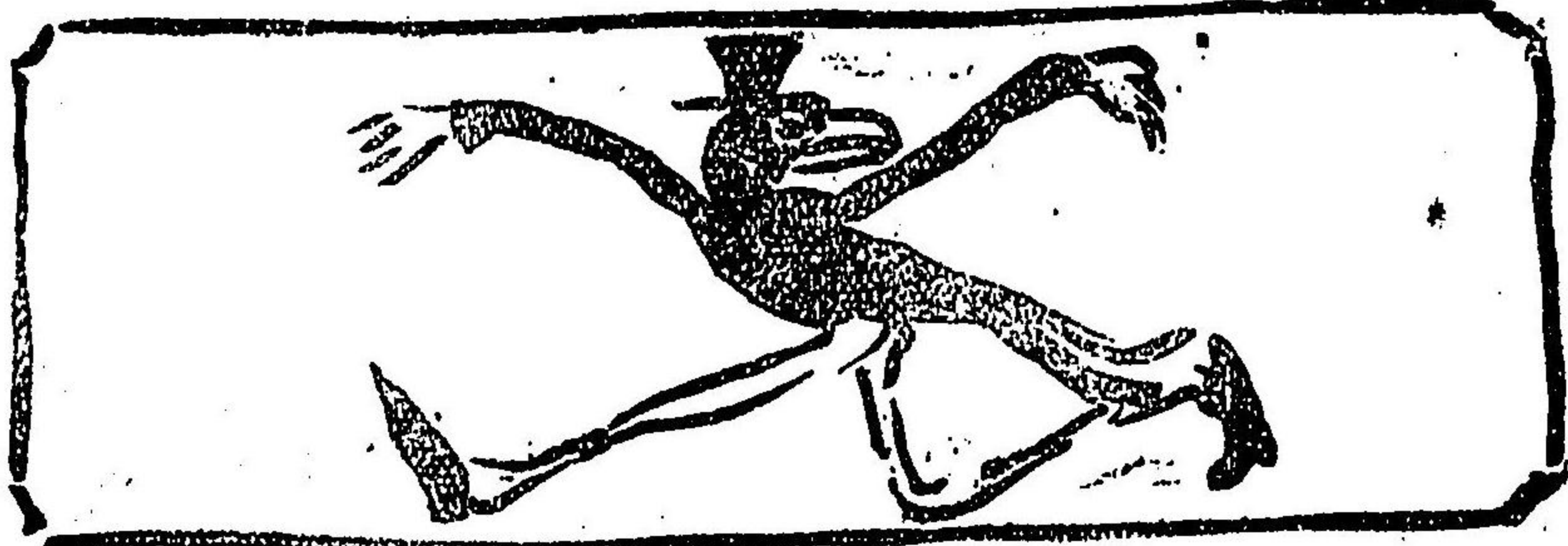
杉孫七郎、三井八郎次郎、益田孝外數名、或日松浦伯の茶席へ招待されし時、水羊羹が出てけるを健啖家の三井はムニャ〜と平げしも、益田は半分にして閉口し、杉は喰ひかけしも逆も覺束なしとあきらめて、コッソリ紙に包みて袂へ入れたり、續て御馳走も済みしかば、杉は何喰はぬ顔にて立ちあがりしが、先きにソットひそませし水羊羹袂の中にてドロリと溶けて、其の汁が袴へまでもドロ〜、同じく此の時水羊羹を洋服の後のポケットへひそませし某は、歸りにトンと忘れて其の儘車に乗りしかば、家へ歸つて見れば、之れはまも尻がドロ〜。

神谷大周の豪宕

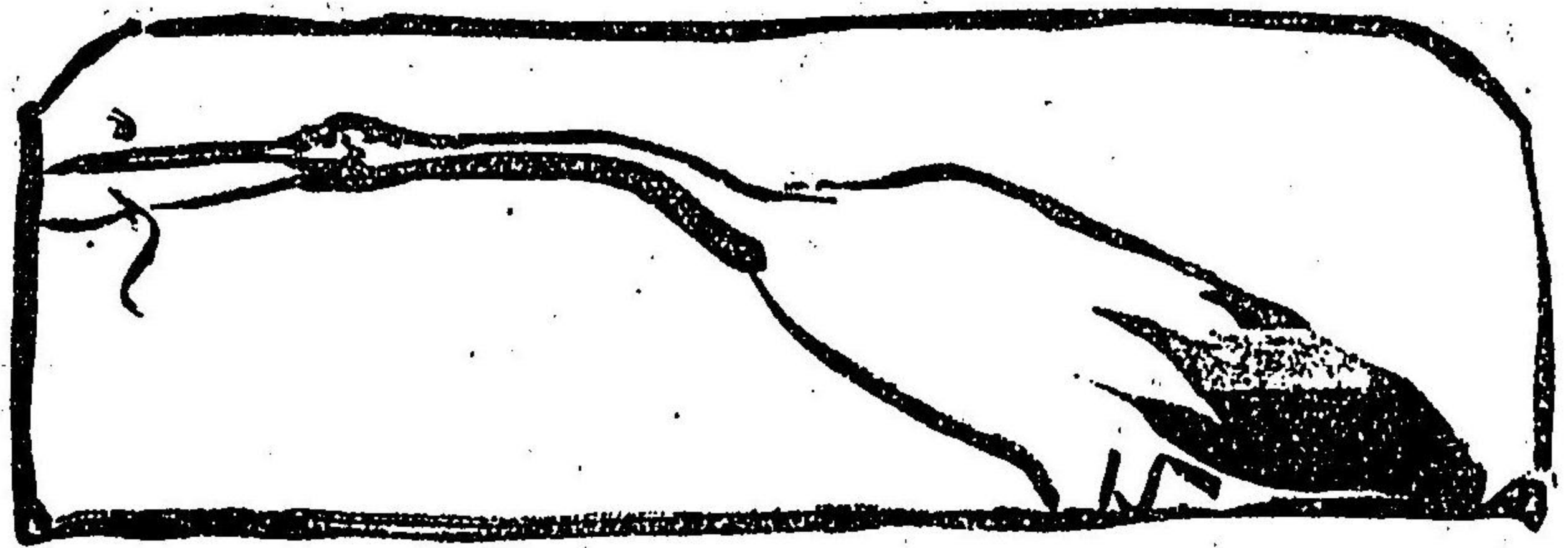
神谷大周は淨土宗の傑僧、或る故真言の釋雲照と説法の座に列つての歸途、空腹なりとて石切橋の鰻屋へ入らんとせしが、雲照は「此御交際ばかりは平に御免」と、連れの所化を代人に出して辛じて其の場を遁れしが、大周は所化を引張つて鰻屋へ上り、三衣の儘にて酒七本と大串五皿を平らげて寢て仕舞ひいざ合計となれば大周一文なしにて、大きな軀を投げ出し「貴様能く始末して呉れ」とて三圓餘の勘定を平三に拂はして、平氣の平三で立ち去りしといふ。

犬養木堂書生に教ゆ

犬養木堂は先年、或一書生に金儲けの法と云ふのを教ゆ、其の法は「先づ君の家の前に「放螺吹指南所」といふ看板を上げよ、其處で、申込の來客に答へて、エー貴殿は東京風の放螺ですか、但しは田舎向の放螺ですか、と普通に聞く、若し其人東京風とあれば、直己れの方へ廻はすべし、田舎向と云へは宜敷尾崎へ遣はすべし、して君は充分のコンミッションにあり付くべし」と云ふ件の書生「ナンダ結らん」



話 百 種 滑



得 稽 百 話

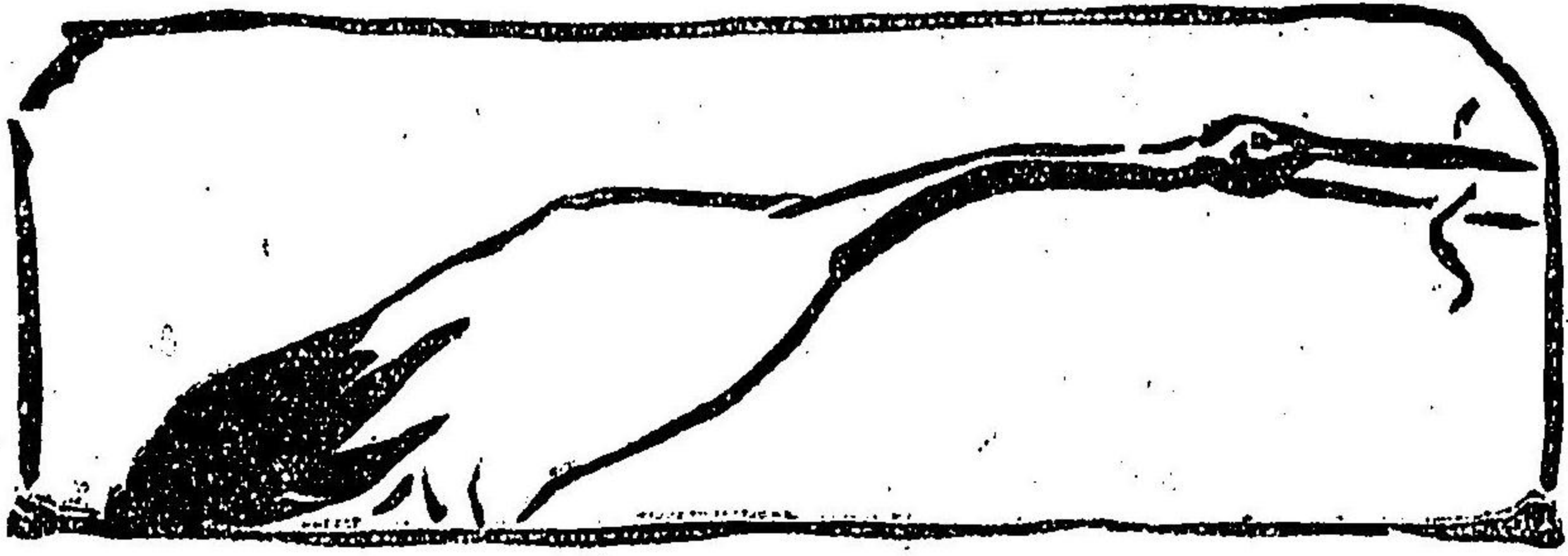
前田正名或時高島中將に會し例の五二會の會員四万人以上なりと放擧を並べて止ま
ず中將微笑しながら「ではアナタの死んだ時、會員からの香奠一兩宛でも大したもの
だ、家族は盡瘁してゐても食へますよ」と言ふ、流石の正名も此一言に、折角の鼻
もクニヤツク

前田正名の鼻クニヤツク

二八

書生時代已代治男の頓智

伊東已代治男の書生時代の話に、或友人が小遣錢に困り、わざ／＼伊東の許へ古本
賣却の相談に來り「いくら／＼の金錢が入るから、君の知つた本屋へ行つてはくれま
いかと」頼めば、已代治先生直ちに快諾して後早速本屋に駆けつけ入用の金錢より高
く賣却の上、歸つて入用以上の金錢は僕の餘徳とすべし、まア貸し玉へと遂ひに賣り
代をハネ、友人も亦全然として彼の言ふがまゝに従ふて去る



得 稽 百 話

青木周藏の今ソクラテスの綽名

世人青木周藏を今ソクラテスと綽名す、其原因を知らざる人は其の賢的を稱するな
らんと思ふならんされど、いづくんぞ知らん、之れ酷く妻君にイデメらるゝが似たる
の的の謎ならんとは妙。

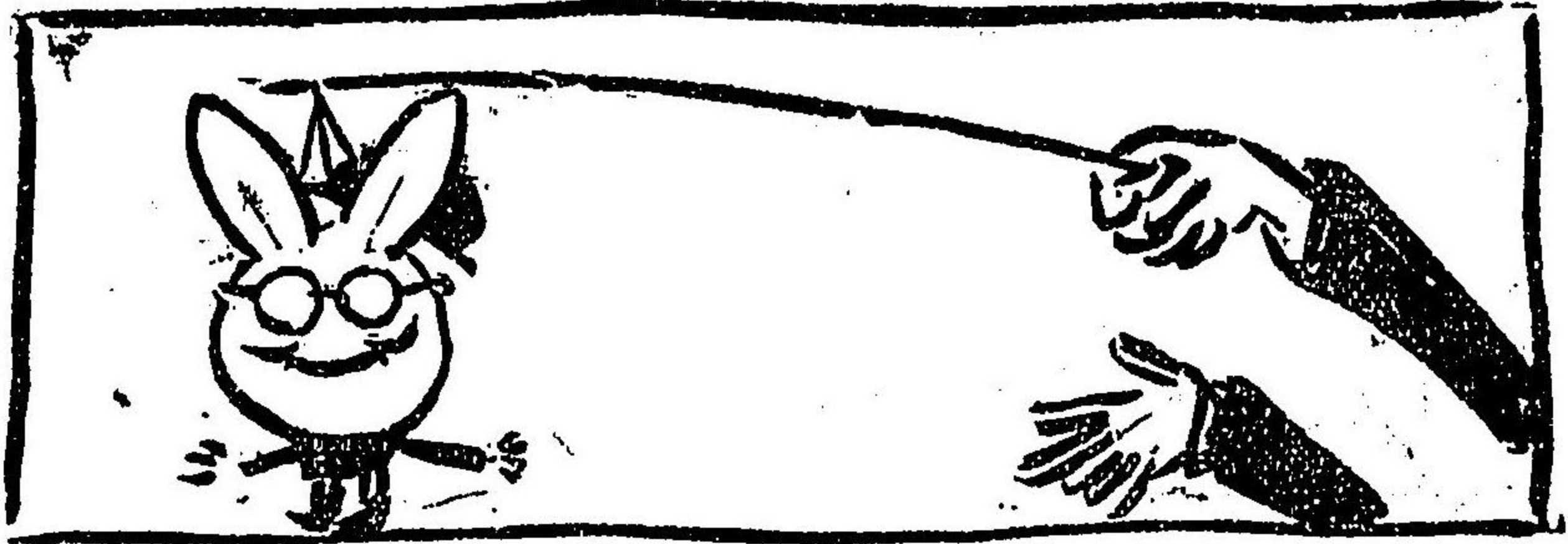
水戸烈公の狂歌

水戸烈公ある年の正月。小石川の邸にて具足開の式を行はれしに、立原甚太郎とい
ふもの、そのをりの年男なりしが、式にのぞみて香の物を座の中に落したるを、あは
て、拾ひ上げ袖の中に入れし様いとをかかしかりしを、烈公見給ひて

この春の具足開をいさよしき

まづ打ち落す大がらの物。

二九



滑稽百景

千利休の頓才

武野紹鷗は茶人なり、利休少にして就て學ぶ、紹鷗ある時その才を試みんと思ひ、中庭を掃除せんことを命ず、利休行いて箒痕地に印して清潔拭ふが如く、復箒を下すの地なきを見るや、走せて林中に入り一樹を揺かして歸り、蹠んで復命す、紹鷗起つて之れを觀れば、落葉青苔に點じて更らに一段の雅趣を添ふ。

前田慶次郎刀を帯びて風呂に入る

慶次郎或る時手巾を以つて面を包み、褌に小刀を帯びて風呂に入る、同格の者曲者ならんと疑ひたれども入らずんは法と言はれんと、今各刀を帯びて入る、既にして慶次郎板の間に出て小刀を抜くを見れば、足掌の垢をかくに用ふる竹筥なり、同格の者共慶次郎が欺くとも知らず、小刀を湯にひたして柄も下緒も皆損じ、刀はなまりて用をなさざるにいたれりと。



滑稽百景

元就の大志

毛利元就幼名を松壽丸と云ひ幼にして器量あり、かつて嚴島の神詞に讀て歸つて後、從者が郎君が安藝一國の主たらんことを祈ると云ふをきくや、撫然として嘆じて曰く何ぞ天下に主たるを祈らざりし、夫れ天下に主たるを願ふものは能く一方に主たるべし、一方に主たるを願ふものは能く一國の主たるを得べし、今汝等一國の主たらんことを願ふ、その成す所亦知るべきのみと。

會呂利新左衛門の機智

豊公かつて戯れに侍臣に言つて曰く、人々我が面の猿に似たるを言ふ果して信かと左右相顧みて敢へて答ふるものなし、此處に於て會呂利進み出て答へて曰く、否殿下猿に似給ふにあらずして猿殿下に似たるのみと。



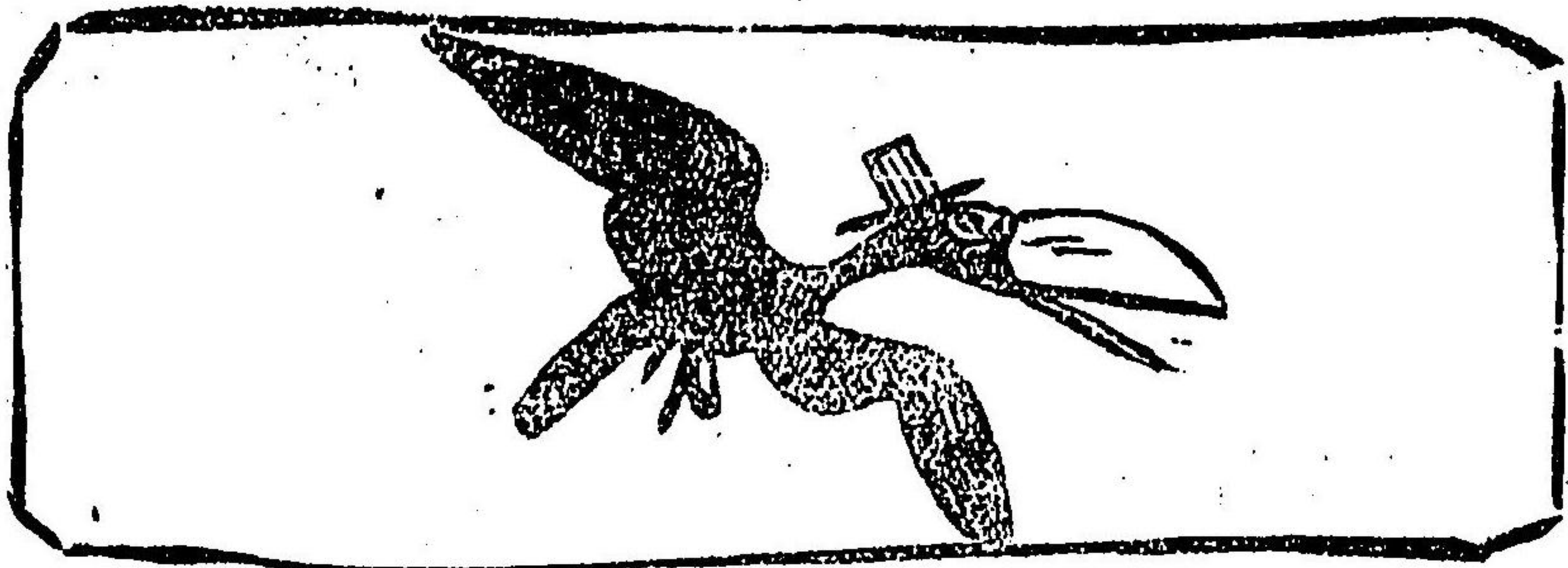
期 百 繪 滑

加藤弘之辭表の理由

文學博士加藤弘之高等教育會議長辭表差出の理由に曰く、「自分も漸次老年となつて、此頃では免角小便近くなり、便所へ頻繁に行かねばならぬ様になつて困難をする、然るに議長席に居つたのでは、共都度一々副議長を呼んで着席して貰ふも變であるし、と言つて議長席にすることは出来ず、小便を堪えて居るは尚ほく出来ぬので辭表を差し出すことにした」とあり之を以つて一時小便辭職と呼ばれて喧傳されたり。

梅謙次郎百法の紙幣で尻をふく

法學博士梅謙次郎、或る時美人多き巴里の或料理屋へ遊びに出かけしが、甚だ持てざるに不平を起し、畢竟日本の學生は金無き故、かく冷遇するに相違なし、然らば一つ日本男兒の氣前を見せて遣らんと、便所へ行きて百法の紙幣にて尻を拭きしが、後よりゆきしもの之を發見して大評判となりたりと。



期 百 繪 滑

廣田華州蛙にあてらる

畫家廣田華州蛙を嫌ふこと甚だしく、蛙のかの字も厭なりと言ふ、嘗つて根岸武香と郊外に散歩せしが、途中より氣分悪るしとて歸りたるまゝ十日ばかり顔を見せんに武香も心配して華州の家を訪へばこはそも如何に、華州はウン／＼呻りながら床にあるに、武香打ち驚き「之れは存外の大病、醫者は如何に」と問へば、妻君は面目なげに「イエナニ華州は先日御伴をした途中で蛙に出會したと申すこと病氣は夫が根元ですから、モウ三四日もたてば治りませう」。

辭世と勘當と夜遊

清水如水の辭世とて今に名有なるは
公事喧嘩地震神鳴火車師日飢饉
煩ひなき國へゆく。



帯 稽 百 話

又秋長堂の放蕩息子勘當につき讀めるは

ぬが味憎へ慈悲のさうりの當座演

きたないゆびも切るにさられず。

腹たつも笑ふもけふはなき上戸

酒のいけんもみなぬかに釘。

又鹿外樓秋年の頃挾斜の巷に遊びあるきて、家にあること稀れなるを、折に觸れて妻の誅めける時

さいといふ名のあればにや夜遊びを

四の五のと云ふ宿の女房。

也有狂歌にて債鬼を追ふ

横井也有或る所より聊かの金を借りしも返済出来ず、延期に延期を重ねて大晦日に至りしを、又候貸主来りたれば、也有は奥にかくれ女房をして百方延期を乞はしめし



帯 稽 百 話

も、頑として應ぜざりしかば、女房やひなく此の旨を也有に通ず、也有もハタと當惑せしが、不圖貸主の將某好きなる事を想起しければ、

不景氣に王手わた飛車火の車

角金銀に差詰る今日、

と認めて、之を貸主に渡さしめしかば、貸主之を見て一笑して去りしと。

畫家の頓智

畫家某かつて某公の名しに應じて、其の面前にて美人畫を書きしが、頭の方大に過ぎて腰部以下を寫すの餘白なきに至りしを以つて稍當惑せしも、忽ち下方より墨にて塗りたてしかば、公を初め人々驚きて其の故を問ひければ、畫家ぬからぬ顔にて、「これは松浦佐用姫が石になりかゝりの圖で御座います」

紫担搜古省の離縁狀



滑稽百話

文政の頃號を紫擔樓といふ、羅宇のすげ替へを業とする狂歌師ありき、妻と一人の小兒ありしが、妻夫の狂歌にのみ凝りて家業を顧みざるを憂き事に思ひ、或る日離縁を乞ひければ、古省早速諾ひて離縁状なりとて書さしを見れば、

いかのぼり長き絲まき切り去らば

さぞや小供の泣きあかすらん。

義堂西郷を叱す

南洲事によつて義堂を疑ひ、壯士十餘名に長槍を持しめて義堂の院をかこみしが、義堂少しも驚かずして叱して曰く、馬鹿者奴、瘦法師一人を殺すに、大な男が五人も六人も掛らねば出来ないか、そんなことで人が殺せるか馬鹿者奴が下をれと、悠々として敢へて視ざるの風ありしかば、南洲其の膽に服して其の室に参せしといふ。

章信貴客に接するを好まず

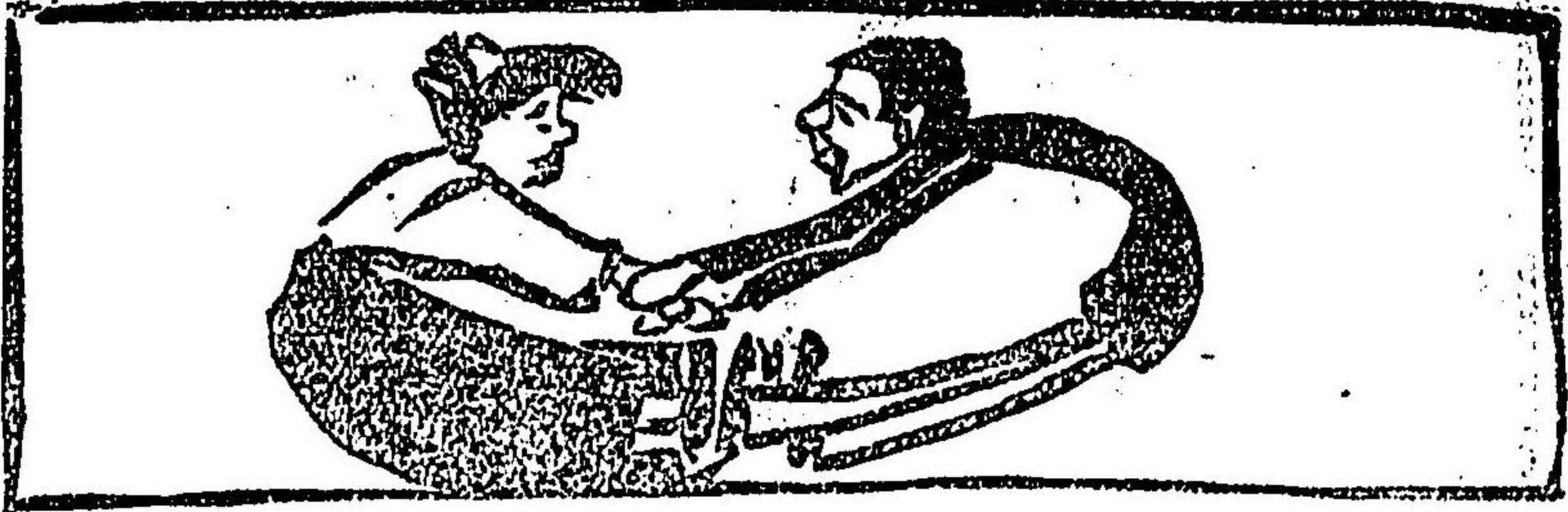
狩野章信は幕府の表書師にして素川と號す、常に好んで手巾を蒙り、人貴客に接するを好まず、かつて幕府の重臣たる田沼侯に招かれし時、章信辭して曰く、小子性甚だ寒を恐るるが故に、頭上市を脱するを得ず、之れを許さば則ち召しに應ぜん、然らずんば請ふ辭せんと、侯之をゆるす、之れより諸侯皆これにならふて章信を召す、章信また性遊蕩を好みて常に花街に出入せしかば、門下に吉原柳裡の娼妓甚だ多かりしと云ふ。

河村瑞軒漬物を賣る

河村瑞軒かつて江戸にかへらんとして品川を過ぐ、時正に七月盂蘭盆の後にして瓜茄子崖下に漂流す、瑞軒錢を與へて乞食をして之を拾はしめ、桶に蓄へて鹽漬となし、後自ら荷ひて之を售るに、衆備夫競ひ求めて忽ち之を盡す、他日行いて又之を賣り、遂に下吏と面職となり、請うて日傭長となりて以つて衆を指揮するにいたる。



滑稽百話



滑稽百話

宗祇狂歌を諷つて盗難を免る

宗祇法師の日賊に逢ひて衣服を剥ぎとられ、剩へ祇の髭の麗しきを見て之れをもろり落さんとせしかば、祇大に髭を惜みて

我がために髭はゆるせかし

塵の浮世をはき捨つるまで、

とよみければ、岩木ならぬ盗賊共も、これに感心して衣服をもかへしたる上、あつくもなしてかへしたりとぞ。

最明寺時頼の狂歌

最明寺時頼ある時婦人の愔氣を詠うて曰く

美しき女の愔氣深きこそ

八重の錦に蕪つゝむなれ。



滑稽百話

兒玉中將新聞記者を冷かす

日清戦争の當時、兒玉中將の許へ、訪問したる某新聞社の記者あり頻りに作戦法を質すに及び、中將は記者の熱心を愛するとして「予の作戦計劃は他でもない天下並ならぬ大巨砲を我富士山上に据え、海拔二万二千有餘尺の絶頂より敵の清國へ打下し、轟然たる北京城の崩壊を開き砲煙未だ晴れざるに尙乗じて數百萬の工兵を督して渤海灣を埋めなば、直ちに敵の要港要塞は水に浸り、我軍一舉して城下の誓ひをなさしむなり。」といふので記者も是は冷やかされたりと悟り情悦辭せんとすれば、中將其袂を捕へ重ねて「足下の意見を聞かふ」といふ、記者いふく閉口額に汗して逃れ歸る。

尾崎紅葉大に器量を下ぐ

會つて雲中語の同人、思軒、鷗外、露伴縁雨の諸氏相會して合評會を開き翰を飛ばして紅葉の來り合せんことを求む、紅葉得意満面、密かに以爲らく、鷗外等の我れを

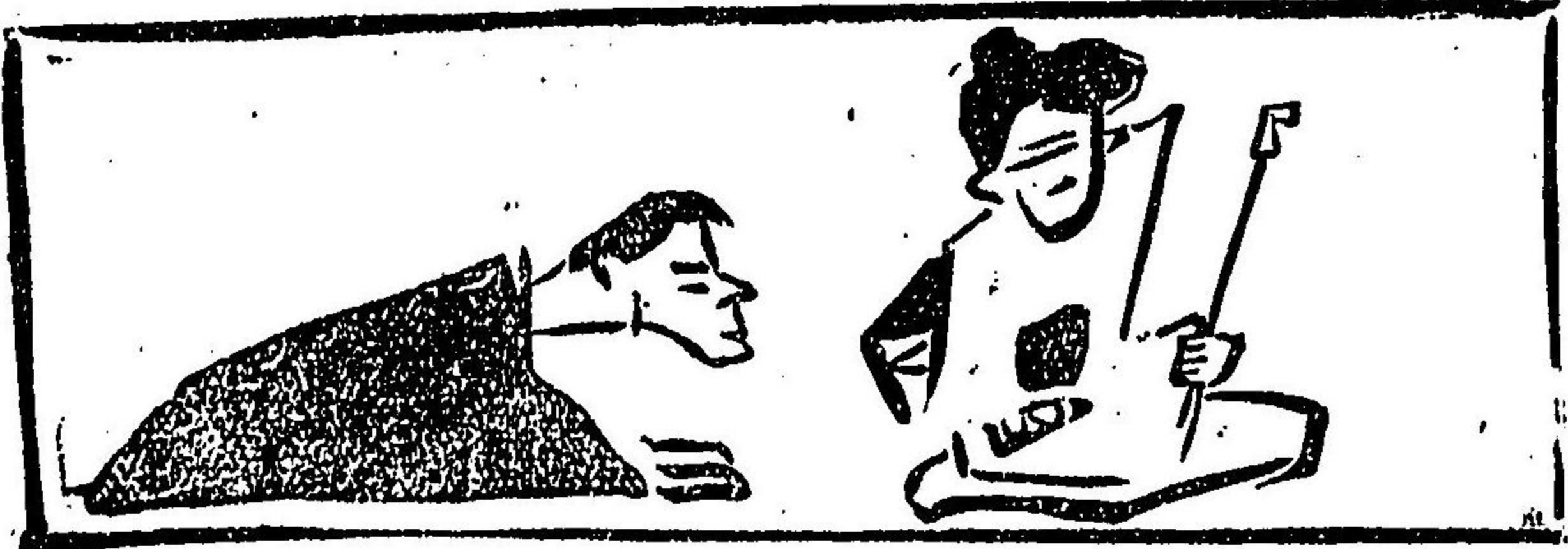


話 百 種 滑

招くこと斯くの如く切なるは吾を重視するを知るに足る、好實、吾行かんと、匆復車を飛ばして至れば、諸文豪早や座にあり、筆硯狼籍、髯を撫して點考するもの、臥して噓くもの、蹠座傲然たるもの、宛然これ仙人の會合、無禮講も此の邊が絶頂なるべし、紅葉呆然として座につくや、露伴例の飄逸なる風采にて「オイ紅葉君、一寸其處の硯を取つて呉れんか」と云ふ、紅葉愈呆然、日本第一の大文豪は乃公を描いて誰ぞと力味反りても何の怪なし、やがて合評の役目紅葉に廻り來りけるに、紅葉筆を執て點と、稍久しくして尙ほ僅かに數行を書し、又た首を傾けて沈吟す「紅葉は何をグヅグとしてゐるんだらふ」などとの攻撃四方に起る、流名の紅葉も目を白黒して歴然言ふところを知らず、後屢招くといへども、遂に再び來らず。

三宅青軒陶器の鑑定を誤る

三宅青軒或る時、某といへる度りあまり深からん人を訪ひぬ、對談數時、茗を啜りながらフット茶碗を見れば、鑄機といひ色合といひ、會つて見しことよなきものなる



話 百 種 滑

に、なか／＼の珍品ですれと感嘆の色を示せば、主人さもさうづと言はねばかりの顔付にて、さうですか、御鑑定では何焼と見えませんがと問ふ、青軒益々氣取り出し、ランプの心をかさたてて凝視多時の後、今戸焼で御座いませうといふや、見る／＼主人の顔に青筋動きて、何を失敬な、今戸焼とは陶器の最下等ぢやありませんか、これはか／＼の珍品にて我家の寶なりと言葉激しく言はれて、青軒大にまごつき、白髪頭をかきながら、あゝなるほどさうでしたね、私はとんだ鑑定違をやりました懺かこれと同じのが僕の家にも一つありますよと、知らず青軒大人今戸焼を御家の御重寶として秘蔵しつゝありや否や。

金蘭齋の無頓着

金蘭齋は出羽秋田の人、老莊の學を修め京師に徒居して講説を業とす、獨身無爲を以つて心とし、家に擔石の儲なきも晏如たり、書籍を有せざるを以つて、門人講話を乞ふ毎に書を買うて之れに飽る、期に及べば則ち曰ふ、我れ既に典じて米に換ゆと、



滑稽百話

衣服を興ふるも亦かくの如し、門人のち衣背に大圓形を作り、中に金蘭齋の三字を書して之れに興ふ、則ち欣然として之れを着て少しも愧づるところなし。

四二

澤庵和尚と蕎麥粉

澤庵和尚は一世の高僧なり、かつて或る人蕎麥粉に左の一首を添へて送りければ

子供すら持たぬ法師の身にしあれば

蕎麥粉を以つて申入候

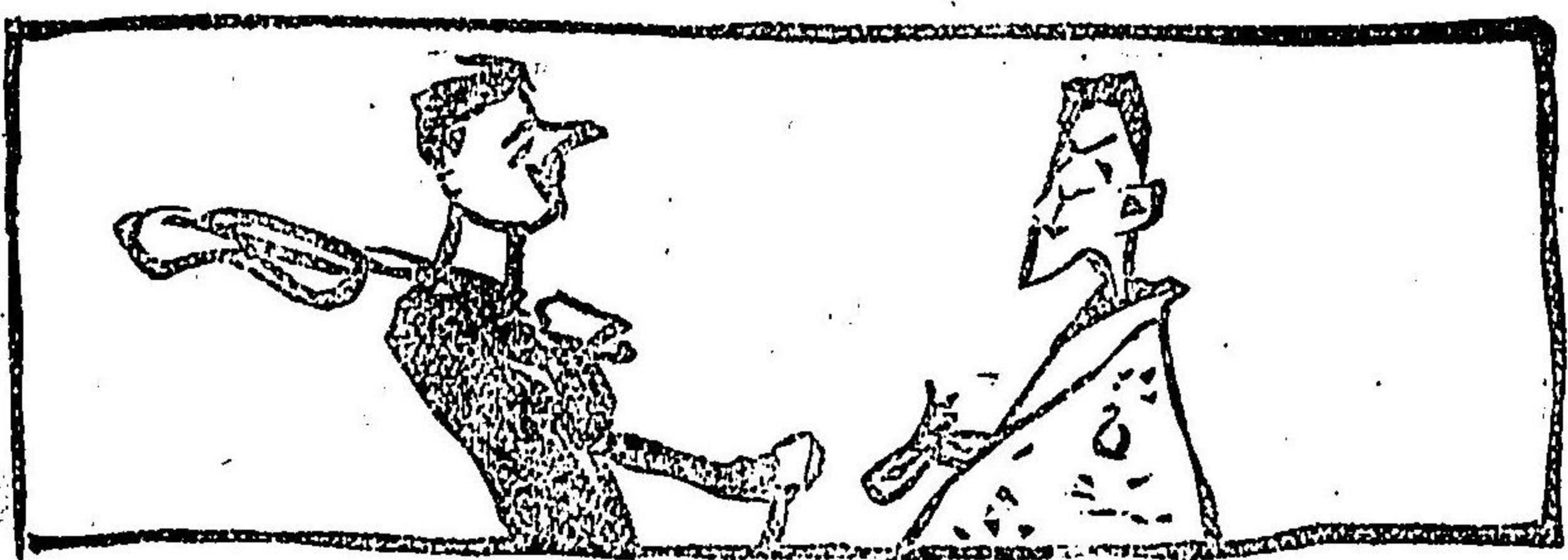
和尚返歌して曰く、

蕎麥粉とて給はるからは我子なり

まゝ子にすなと申つけ候

坂元龍馬南洲を評す

坂元龍馬かつて南洲と逢ひ、歸つて人に語りて曰く、成程西郷といふ奴はわからぬ奴



滑稽百話

しや少しく叩けば大きく響き、大きく叩けば大きく響く、馬鹿なるは大なる、馬鹿なるべく、利口ならば大なる利口なるべしと。

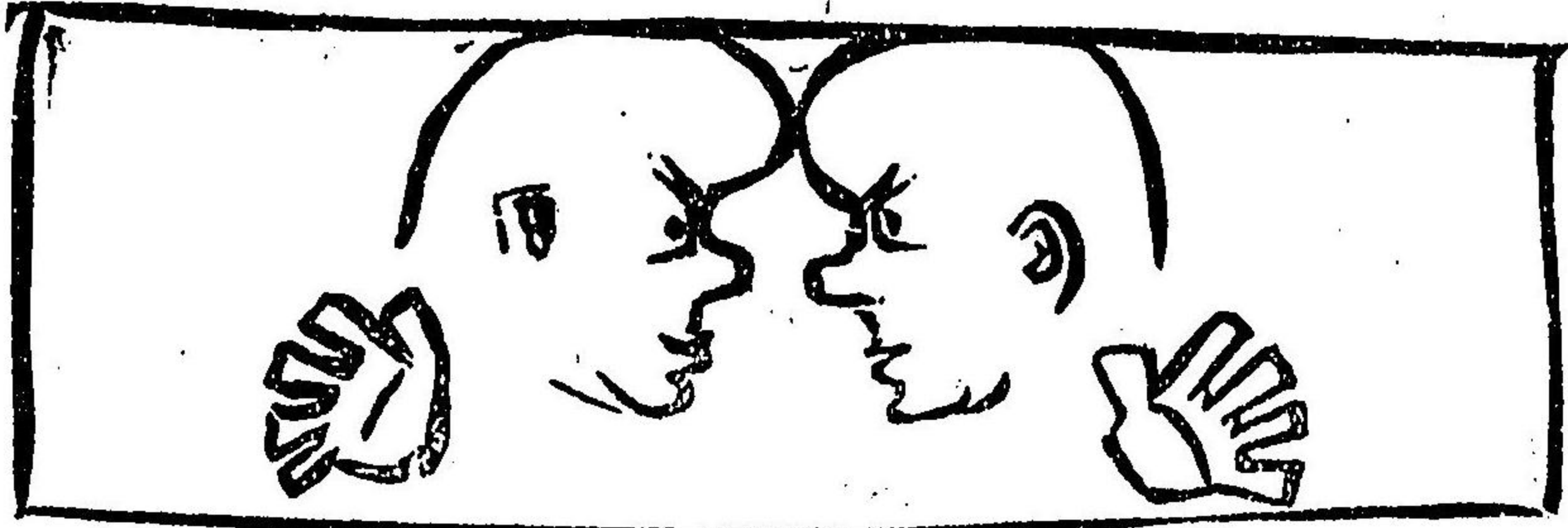
脇坂七兵衛の才

脇坂七兵衛は奇人なり、ある夏友人二三人、七兵衛を驚かさんと綿入を着重ね、篋笠にて身を固め、雪中見舞といひて訪ひ来ければ、七兵衛之を座敷に通し、主人此の頃寒氣のため休みをれど折角の御入來故、今に尊顔を拜すべければ先づそれまで雪路の勞を慰し給へと言はしめて、屏風をたて廻はし、二三の大火鉢に澤山火を起して出さしめければ、某等其の熱さに堪へ難く、汗零たらして逃げ去りしと。

白河樂翁侯の狂歌

樂翁侯幼少にして未だ田安家に住せしとき、麻布鳥居坂なる戸川内膳の屋敷より出火して、焼死者さへも數多ありしかば、其の時の落首に

四三



この火事は人の命を鳥居坂

これより上の戸川内膳

となりしを、某、侯に物語りしに、身がよめば全様にあらずと仰せられし故、言はぬ言はぬと仰せらるゝを達つてと伺へば

この火事は人の命を鳥居坂

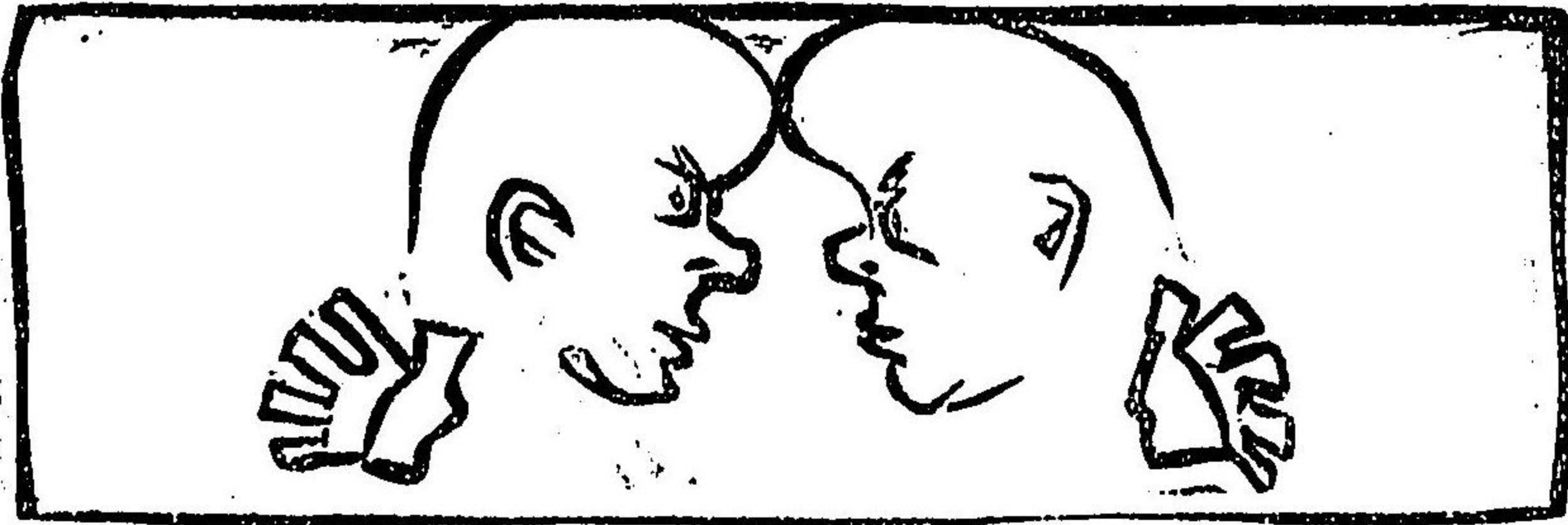
怪我のことなる戸川内膳

蒲生氏郷常に陣頭に立つ

蒲生氏郷新附の士あるごとに之れに告げて曰く、我が家臣の中毎戦鯨尾の兜を蒙り、陣頭にたちて奮闘するものあり、汝輩之れにあくるゝなかれと、新附の士其の誰れなるかを疑ふ、戦に臨めば則ち氏卿なり。

三浦梧樓の戲言

頃は明治の十二年とかや、三浦梧樓或る時、井上馨伯に伴れられて柳橋に遊びしが、伯が自分ばかり押妓の藝妓を一人呼んで、所謂低唱淺酌シン猫流なるを、忌々しく思ひけん梧樓先生、今日は一番親翁を驚かし呉れんと考へ居る間もなく、伯が酔して寐ねしまひたるを以つて、梧樓藝妓の耳に口打ち寄せて此人は賈金使だから札を貰ふと、お前も掛り合になるぜ」と、戯しやかに告げれば、其の頃藤田組の噂を海々聞き囁れる藝妓先生、忽ち真青になりて「へー人は見懸によらないものですね、まあ此の御前が賈金使ひつて」言ひも終らざるに、先程より狸寝入して、今に梧樓の奴何が始め出すならんと待ち受けし疍癩持の伯、ムックと起きあがり様、こいつ何を言ふか」と、藝妓の胸倉を捉へし見脈に梧樓驚いて逃げ歸りぬ、それより四五日経て、彼の藝妓綱曳の腕車にて勢よく、然も大々的の菓子折を持つて君が邸へ来りしかば梧樓さては必定先日的事で怒つて来たに相違なし、留守を使つて追ひ歸さんかとも思ひたれど、儘も大膽達つてやらんと逢つて見れば、こはそも藝妓満面笑を含んで「あれから井上の御前が貴様のやうな奴を其の儘藝妓にしてまくと、何んな虚を真に受けて、つまら





滑稽百話

四六
ん種々の事を方々へ觸れ廻すからつて、直に身受して落籍させて下さりました、誠に
お蔭様で……」と、恭しく禮を述べて彼の大菓子折を出したるには、梧棲呆れて物
も言へやうしと云ふ。

中江兆民乞食に假裝す

ある時井上伯の邸内に假裝會あることを聞き込みし兆民、こは面白し奴等如何なる
風をなして會するかを見んと思ひたち、自らも乞食に假裝して邸内に入る、會するも
の一人として其の兆民なることを知るものなし、兆民則ち貴顯紳士の間を廻り歩き
一文をと乞ふ、會するものは皆貴顯紳士なり、五厘や一錢を持てるものなければ、與
ふるところ五錢拾錢なり、兆民喜色滿面にして門を出て、近邊の酒屋に飛び込みあり
丈の金にて酒を買ひ、そをぶらぶらげて家にかへりしと。

群芳左手のお手際

群芳は下總の書家なり、妙手といふにあらざれども又凡手にもあらず、かつて江戸
に來りて齋會にいてし時、我れ今日は左手にて書くべしとて自在に揮毫せしかば、左
手にてかくの如し右手の妙思ふべしとて、人々嘖稱せしが、何ぞ知らん群芳は左手利
にて、右手は筆をとること能はざるものならんとは。

原坦山參徒に握屁を嗅がす

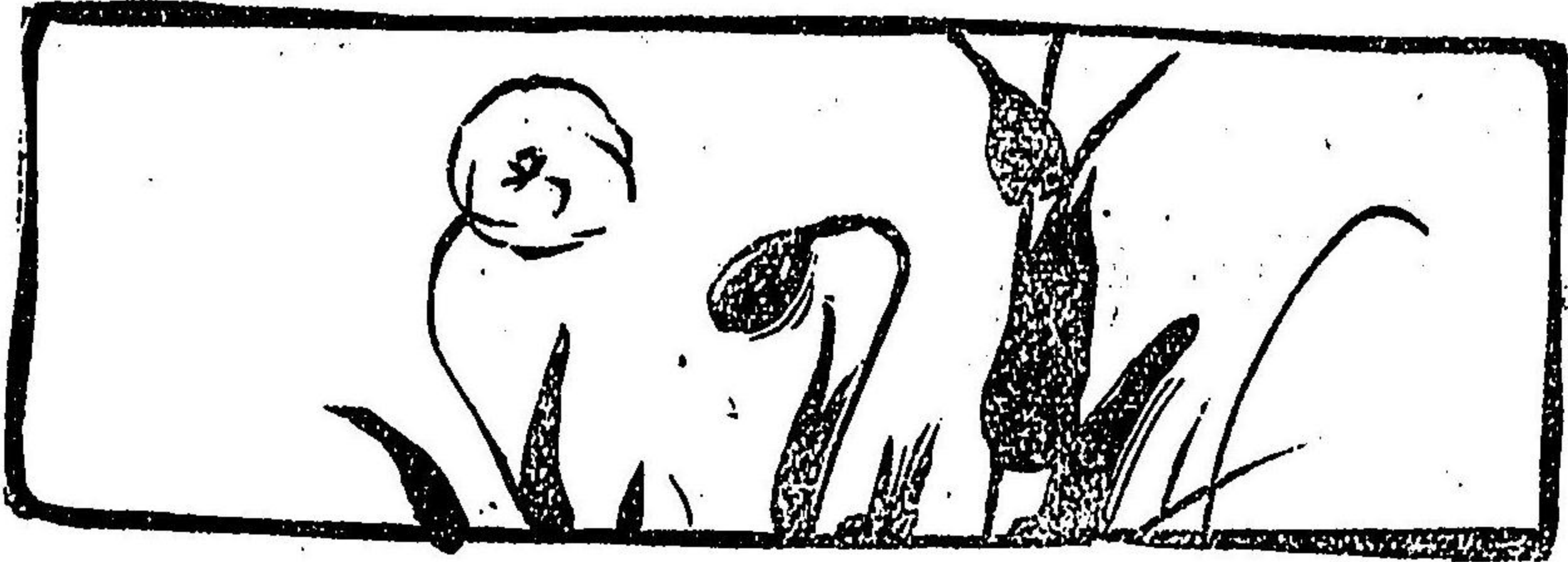
某なる者原坦山に參して必要を問ふ、然も得るところなし、一日之を告ぐ、坦山答
へずして手を跨間に入れ、放屁一發之を握りて某の鼻先きに放つ、某臭氣に堪へずし
て鼻を掩ふ、坦山笑つて曰く「どうぢや臭いかな、それが臭いこちは未だ豚がある、
精々工風さつしやう」。

小野湖山兒童の書冊を損するを喜ぶ

小野湖山は兒童の書冊を損するを喜ぶ、曰く凡そ書冊は披きもせず、讀みもせざれ



滑稽百話



百 種 清

ば自ら損することなし、書冊の損するは其の手にすること多きが故なり、故に我れは
兒童の書冊の損するを見て、その書を手にするの多きをよみてふと。

四八

鬼作左の書面

鬼作左本多作左衛門重久、大坂陣中より其の妻にふくりし書に曰く
一筆啓上火の用心ぢさん泣かすな馬肥せ
思慮の周密、愛情の濃艶、武士の面白躍動するを見るべし。

櫻痴柳北に戯る

成島柳北は有名なる長顔の人なりしが、ある時馬に騎つて墨堤を行くに逢ひし櫻痴
肝をつぶしたる様にて語りて曰く

これはしたり世はさかさまとなりけり

のつた人より馬は内顔。



百 種 清

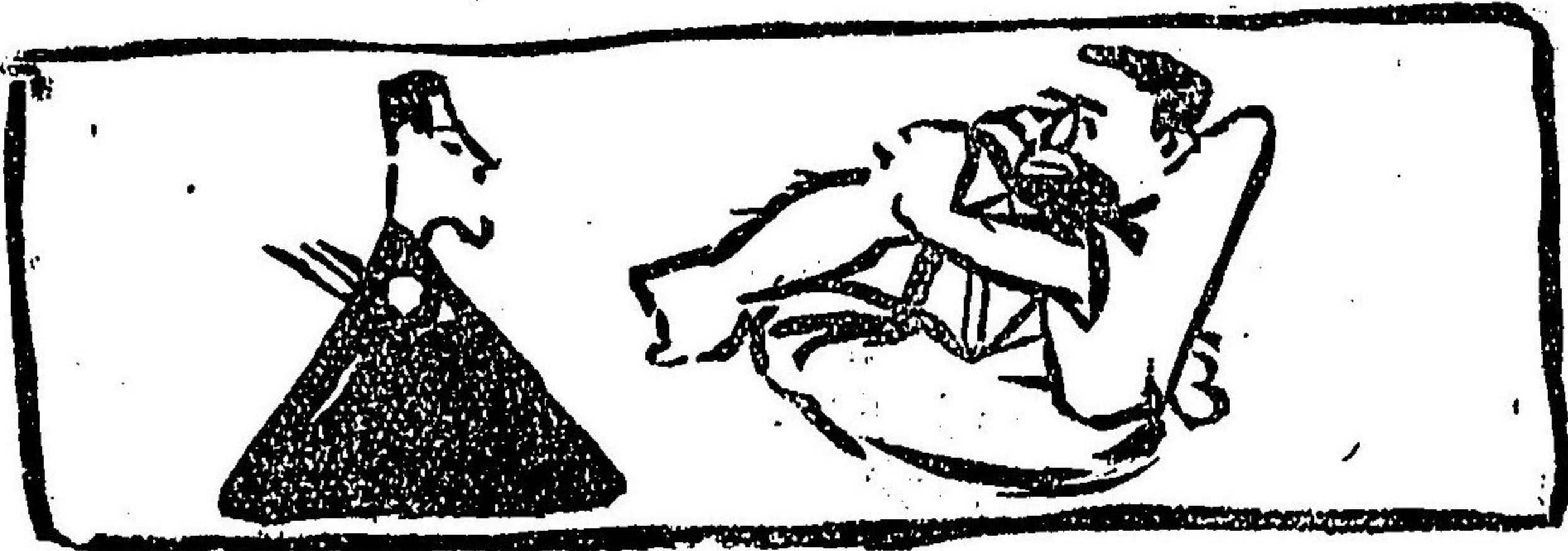
國貞己の家に盗に入る

歌川國貞婦人賊に遇ふの圖を倚頼され、苦心慘憺するも妙想浮ばず、一日外出し
て久しくかへらざりしかば、妻心配して寝ずして待つ、偶盗あり頬冠りをなし、表戸
を押し明けて侵入せしかば、妻狼狽して腰を抜かさんばかりに打驚き聲さへ立る事能
はず、聽て妻盜賊の頬冠をとるを見れば吾が夫なるに、二度吃驚して終に泣き出しぬ
翌日國貞其の圖を書きて佳作を得たり。

慈雲禪師盗に逢ふ

江戸八丁堀龜島町に慈雲といふ禪僧住みけるが、或る日外よりかへりみれば、小盗
人の忍び入りしと見えて、法衣器具など残らず盗み去りて、残れるものは只破れ襖一
枚のみなりければ、

寒き夜はこれをつきてふせよとや



滑稽百話

襖ひとつをおきつしらなみ

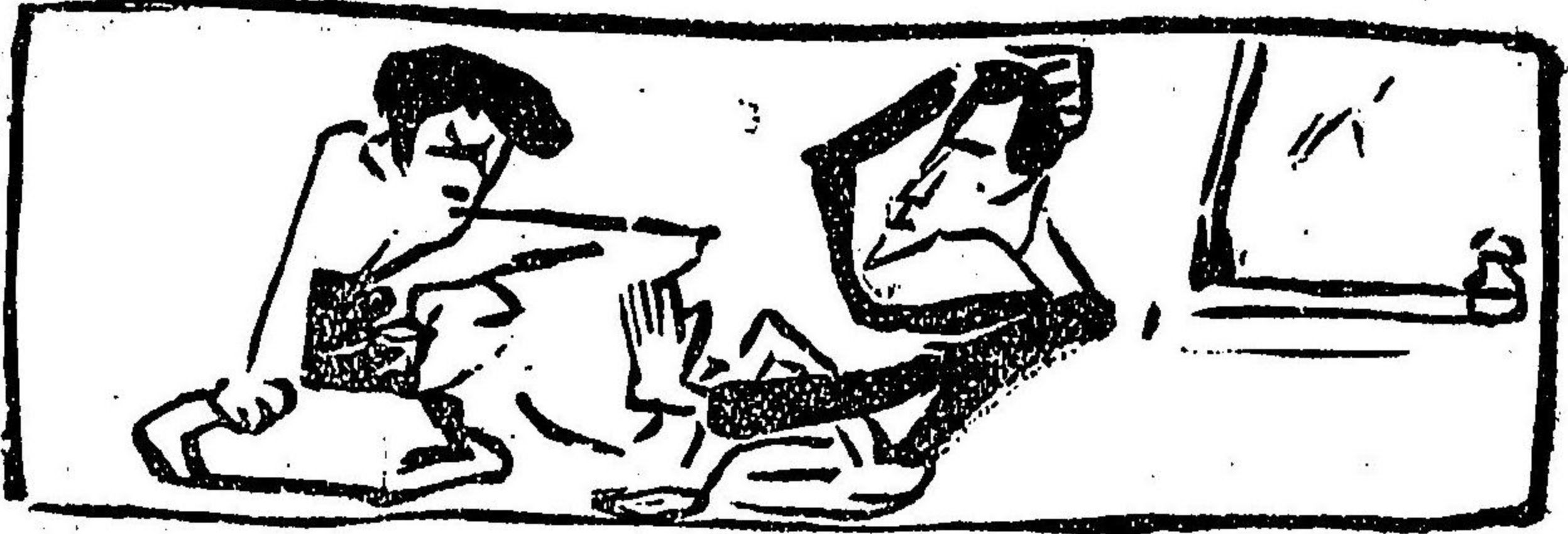
五〇

太田道灌六曲屏風をたつ

太田道灌少にして才氣あり、然も放縱、父資清之を患ひ、一日道灌を膝下に召して之を誡む、曰く古來智あるものは詐術多し、詐術は禍なり、故に人は其の心直なるを尊ぶ、障子の倒れざるは其の直なるが故なりと、道灌父の言葉未だ終らざるに、起つて六曲の屏風を持ち來りて立て曰く、之れ曲なるが故に立つ直なれば則ち倒ると。

若尾逸平の盗み儲け

野心を懷いて天下を漂浪しつる若尾逸平甲州原木の宿に泊つて「ア、金儲けがして見たいものだとな」と空想今だに丁度隣室に泊り合せた者の相談を聞くとはなしに聞けば、水晶の産出する山を一手に引受けんとする計畫なるより、其翌日彼の旅客の先へ廻り山の持主に懸合ひ逸平全部を引受けてより大利を博せり、後逸平人に告げて曰



滑稽百話

く「金儲けを盗んだんだから、實に怪しからんね」

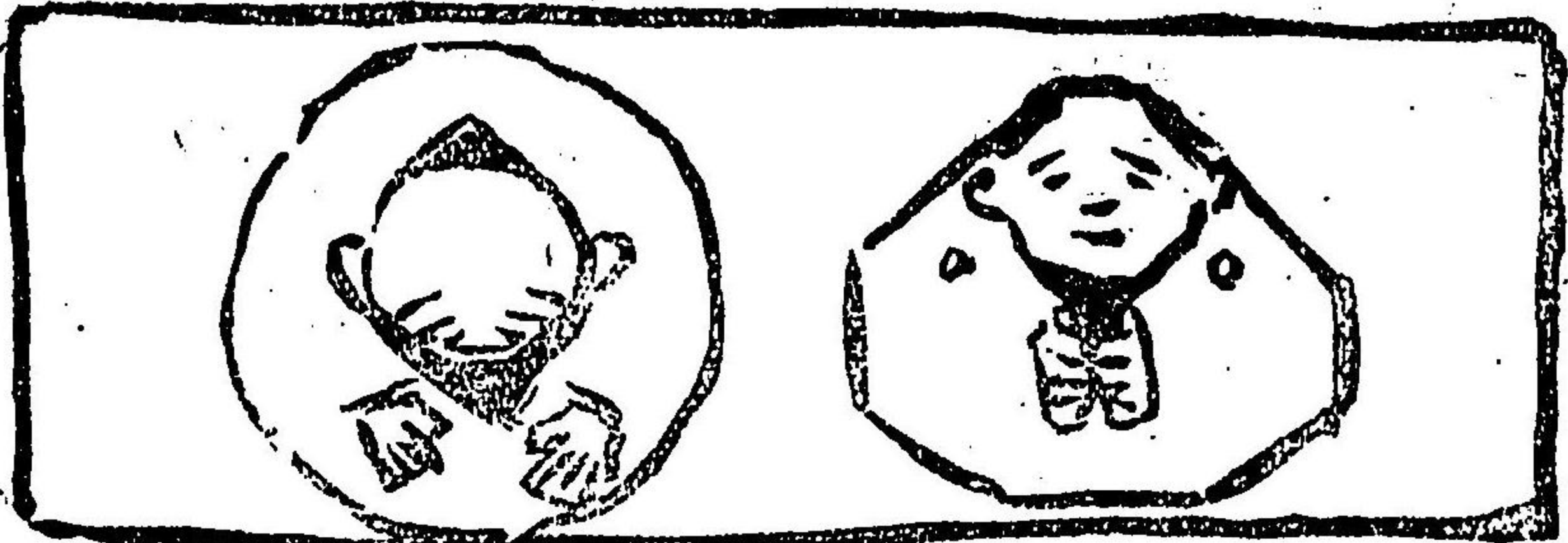
江崎

明治四年、江崎禮二横濱より歸來して其宇田川町荒物屋武藏屋の二階借りして寫眞師となりしが、また此頃ほひは、寫眞を稱してキリシタンと呼ぶ迷信なり、御客と云つて極めてあらず、赤貧縫ふが如き生活、或時飯を焚かんとすれど燃料に苦しみ、隣家て捨てた古下駄を拾つて、彌々飯を炊いてゐる處へ、武藏屋の妻君に見付かり、荒神様に罰が當ると叱りを受け、折角燃いてゐるを掻き消し、切火を打つやら、鹽をふりまく噴き御蔭で、出來損ひ飯を喰つて禮に大に困窮中の滑稽も大方ならざりしと。

岩谷松平に新造語あり

天狗煙草岩谷松平議會に於て焦眉の急と云ふことを知らずキュービくとやり済ます此時某代議士あり是を松平に質し見るに果して松平の過失なるにもかゝはらず凡てあ

五一



滑稽百話

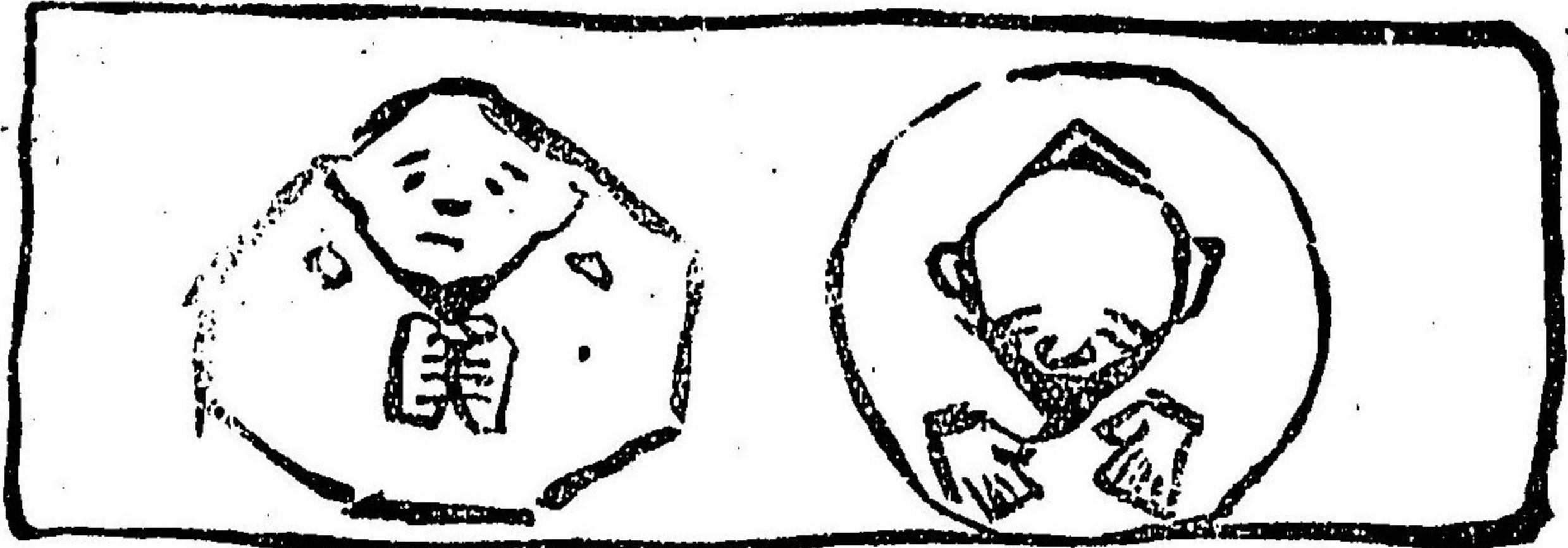
と云つた急を要する焦眉の急と云ふ略して急眉の急と言つていゝだらふぢやないか」と新造語を發明す

相馬永胤藝者に囚はる

ある藝者「あら怖いことね 睨んでさ、そんなに睨むアナタ比良目よ、よくツて」と怪舌を弄して相馬永胤に向つた、最前より藝者招降に不賛成の君は忽ち吹き出して「馬鹿ッ」と苦笑一番、自分が先に立つて其日は散財して歸る相馬永胤始めは脱兎の如く終は處女と満座洪笑するところなりきと

伊藤仁齋羽織を投ぐ

伊藤仁齋修學の時、家貧にして家賃を支拂事能はず、家主屢來り迫る、或る日家人其の言譯の辭に窮し、先生讀書の傍らに就き、今日は如何にして償はんと言ひけれども、先生黙讀して顧みず、折柄着し居たる茶縮緬の羽織を抜き、引きまゐめて背後に



滑稽百話

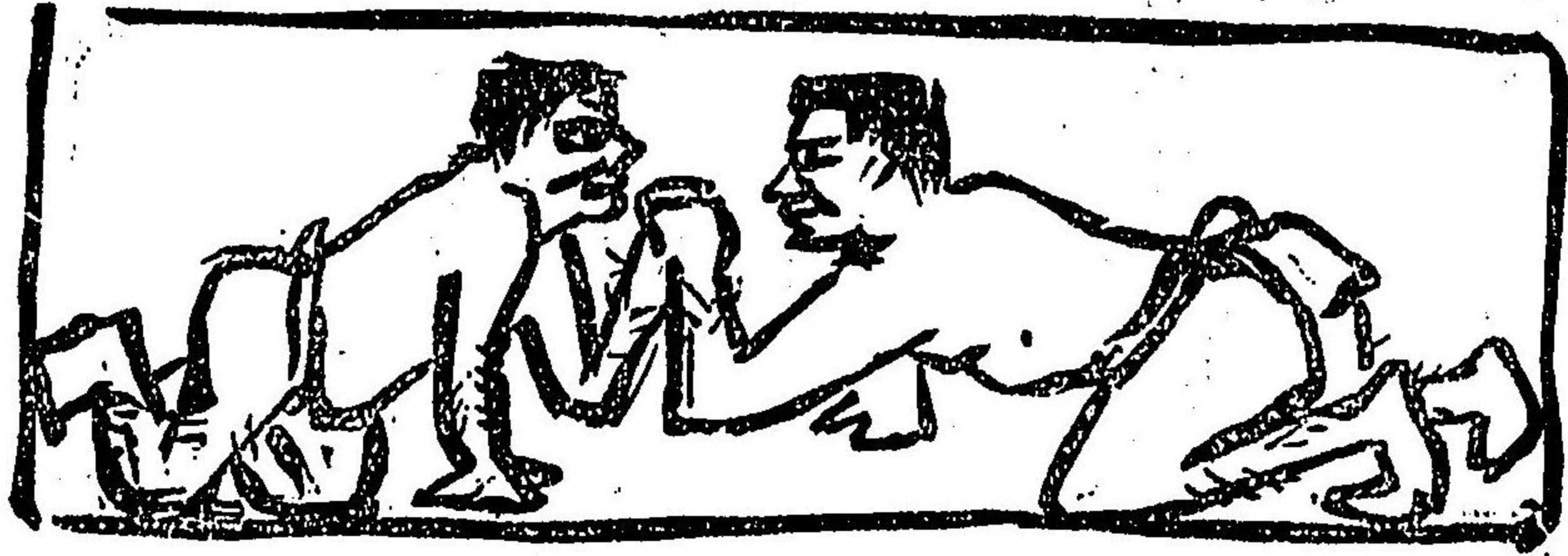
投げられたりといふ。

矢野二郎號令を忘る

矢野二郎は幕末の騎兵指揮として、維新前まで横濱の練兵場にて小隊教練をなしたりしが、或る時兵隊を率ゐて訓練の際「小隊——イ……」と號令をかけ始めしも、急にその後を忘れし苦しまぎれに「……之の所へ旨く入れッ」と怒鳴りしかば、兵隊等はクス／＼笑ひながら天幕に入りぬ、油汗を淋漓と流しつゝ後より入り來りし指揮官の二郎「どうだ今のは、今日は之で休むと云ふ暗號だが、旨ひだらふ」と負あしむに、其處に居合はせたる五六人、フツト吹き出しながら「夫てなくとも腹を抱へて歸つた者が大勢あります」。

柴田是真其の子を教訓す

櫻庭篁村が讀賣新聞の編輯に従事せし頃、柴田是真が日の出の勢あるを石切河岸に

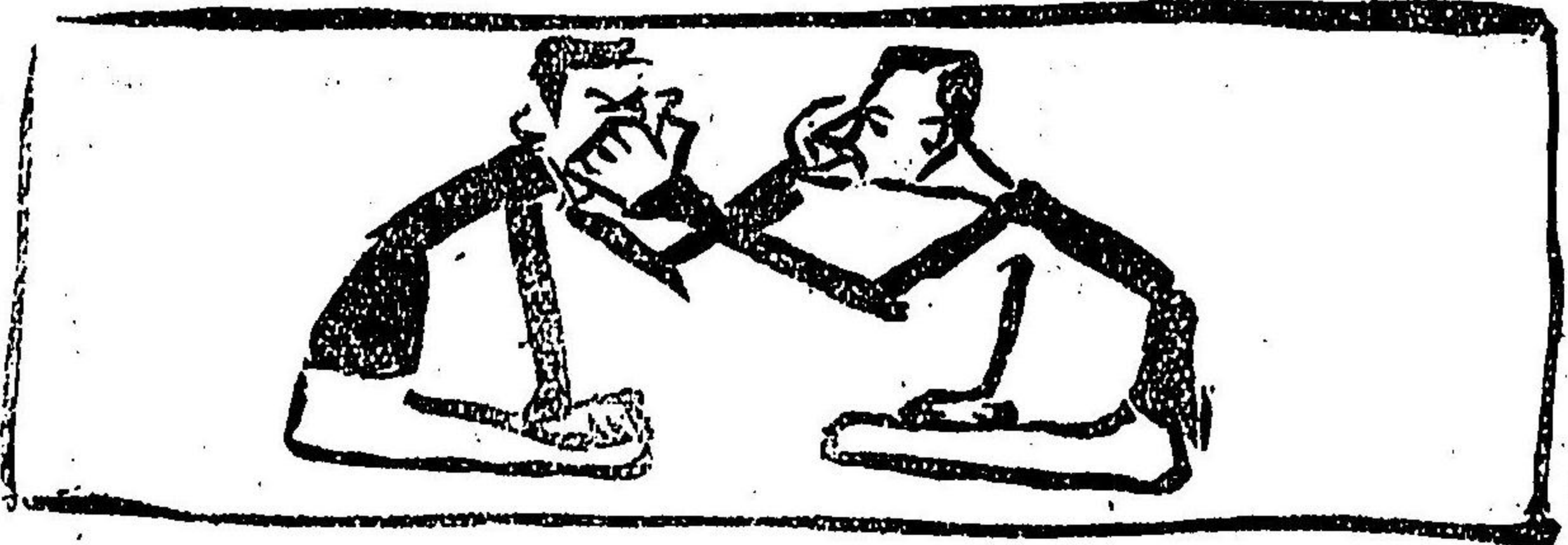


滑稽百話

訪ひしが、偶々不在なりしを以つて、せめては是真が平生の様子にても聞かんと、長男の令哉が應接に出てたるに、「御尊父のお噂はかねて承はつて居るが、不幸にして未だ御目にかかつた事がない、子供衆に對しては定めて有益なる御教訓もあるべし、一體どういふ様に導かれるか、お差支なくば後學のため、小生へも御傳へ下されたい」と、尋ねければ、令哉頭を掻きながら「エー、別に之と申して御話をする程のことも御ざらぬが、父は平生私に向つて、貴様は後世からは真の子に令哉ありと云はれるな令哉の父は是真と云ふ者ぢやと言はれる」と、口喧しく申し居れり、其の外のことは一寸考へ出せずと、答へたれば篁村座を退つて平伏し、「天晴名匠の御教訓、小生までも有益の學問を致しました、御尊父が言葉づかひの意匠の巧なことは又格別のことと感服仕る」とて厚く謝して歸りしといふ。

蕪村句を題して債鬼を走らす

蕪村清貧に甘んじて齋佛を樂しむ、曾つて歳末に當り債鬼の門に集るや、蕪村其の



滑稽百話

煩に堪へずして玄關の障子に
首くぐる細切もなし歳の暮
と紙札したれば、債鬼之を見て呆れてかへり去れりと。

青崖の磊落

櫻間青崖性磊落、赤貧洗ふが如きも平然として顧みず、其の家にあるや醬油樽を雨邊に置きて其上に雨戸を渡し、之れに毛氈を敷きて以つて机として齋を作れり、また座敷に疊とはなく、空俵を敷て其の上に座せり、然れども晝夜かつて酒をはなさず

大隈伯便器を床間に飾る

北島治房大阪控訴院長を辭して以來、大和法隆寺村に退隱して、古物など愛玩して餘生を送り居りしが、或る時朝鮮の一大珍品を手に入れしとて、早速大隈伯を訪ひ、天下珍品多しといへども、我が輩がさる道具屋にて掘出したる物ほど珍らしきはな



話 百 種 種

るべし、手放すは惜しけれども、閣下に進上せんとて持参したり、是れ見給へとて差し出すを見れば、壺の如く又花活の如き、古色蒼然として實に珍らしき銅製の壺、伯之れを見て、真に珍品なり多分七八百年前の朝鮮の花活なるべし、格好が甚だ面白しとて、床の間の飾りに誠に難有と厚く禮を述べ、それよりは痛く珍品として恭しく床の間に飾り、來客ある毎に鼻うごめかしぬ、燃るに或る時福田多助なる骨董屋大隈伯を訪ひしに、伯例の大得意にて福田に向ひ、僕が昨今手に入れたる一大珍品あり、床の間のあれを見よとあるに、福田は町重に手に取りて見ながら、御前之れは大變な物と云はせもあへず、伯は愈鼻息あらく、實に天下一品だ、恐らくまたとあるまじとあるに、福田驚き様して、御前そんな譯のものにあらずといへば、伯益圖にのつて、お前の眼も中々なり、何んと豪氣なものならずやと得々たり、福田此の度は恐れ入つて、御前は是れは途方もない代物にて、床の間にありては實に恐れ多し、是れは朝鮮の婦人の使ふ便器なりと、聲潜めての話しに、流石の大隈伯もアツトばかりに呆れ果て、開いた口暫しは塞らざりしと言ふ。



話 百 種 種

大島中將の奇譚

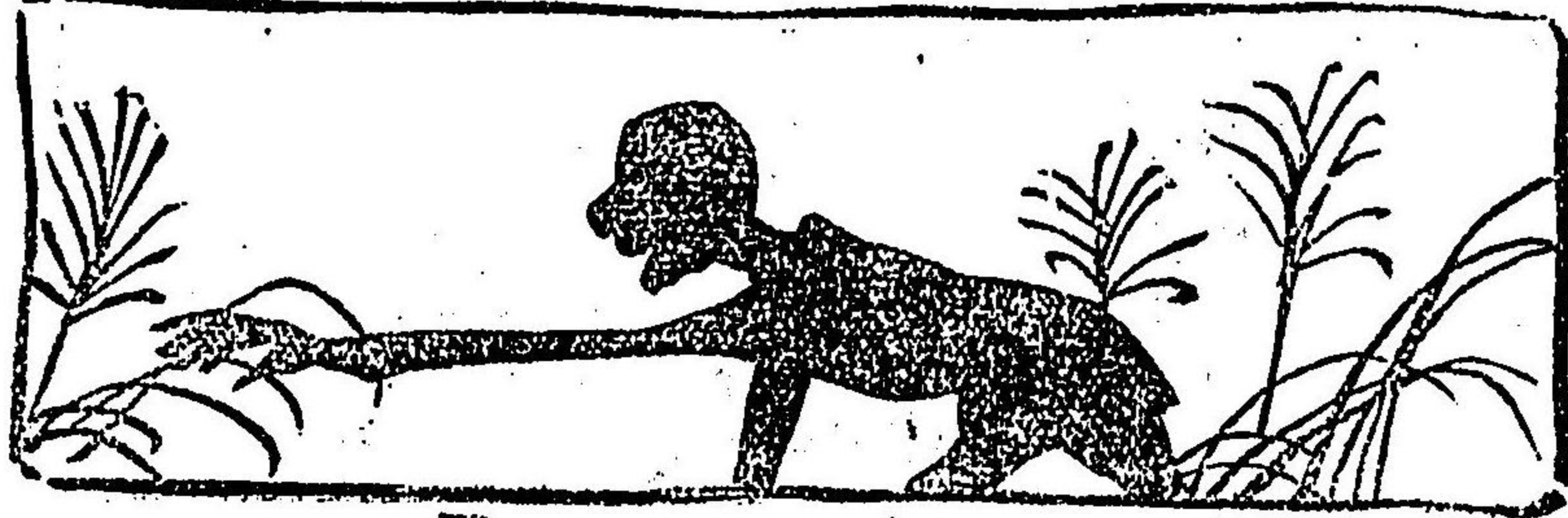
大島中將一度牙山の戦に大勝を得、更に進んで平讓に向はんせとし時、書を石黒野戰衛生長官に寄せて曰く

牙山の役に用ひたる腕(腕)を再び取り出し、平讓として打ち向ふ、如何に品(支那)よく威張れども、生地(敷字)も青磁(盛字)も皆剝げた。

蓼太火事に逢ふ

雪中庵蓼太は名高き俳人なり、江戸大火の時横山町の宅より、藥籠に白湯を入れて文台一つもち、深川の六間堀なる要心寺中の庵にのがれて、火事羽織着て見舞に來る人に句をよみて百韻をみて夜をあかしたりと、其の句に曰く

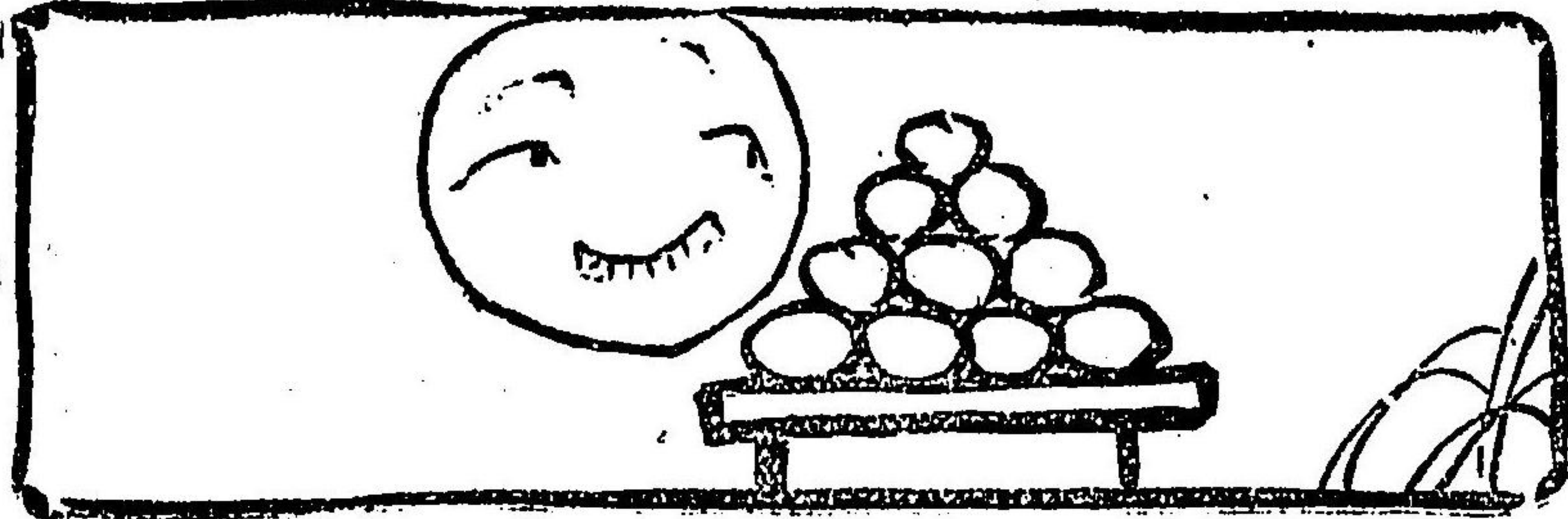
緋櫻をわすれて青き柳かな



滑稽百話

老人の香氣

文政の頃、徳川幕府の御徒士の組頭を務むるものに、七十餘の老人ありたるが、ある時若者等の水練船に同乗して、取締りにゆき居睡して水中に轉落したるに浮び出づる氣はひなし、ところは神田川の流れ落つる柳橋のあたりとて、若しや流されはせぬかと、若者共遙かに川下の方より潜り入りて求めしも得ざりし故、元落ち入りしところゆき引上ぐれば何の恙もなし、何故に浮び出でざりしやと問へば、其の人、兩刀は腰に爲したり、紙入袋、煙管は内懐に入れて手拭にて其の上を胸巻せり、煙草入は腰につけたり、今一品の扇子には蘭香の書に赤身の替あり、墨みあきたれば濡るとも用にたつべし、よしや用にはた、ずとも書と書とは助かるべしと思ひ、その行方を知れざれば心當をあらり求めつゝありしが、能く思へば羽織と袴腰との間に挟みあさしものをと答へたれば若者共其の香氣に肝をつぶしたりと。



滑稽百話

細川幽齋柿を盗む

細川幽齋或る日桃山殿の柿の實の黄熟せるを見て、木に登りて將にとらんとせしとき、秀吉椽先の障子を開きて

柿の木に人丸くとぞ見えにけり

ここかあかしのうらの白浪

と詠じければ、幽齋とりあへず

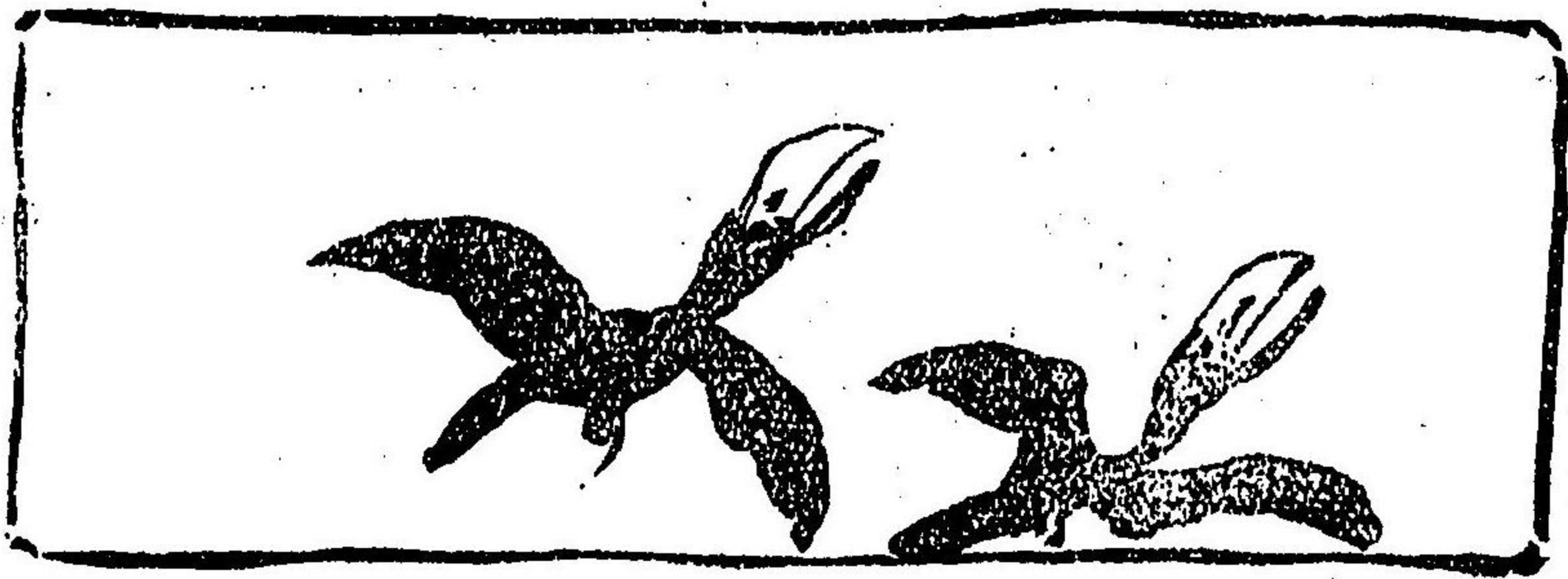
太閤のお庭で耻をかきかごと

人丸ならて顔をあかしに

と答へしかば、秀吉其の才を愛して其罪をとはず。

兆民と花嫁

兆民が文部省に出仕せしとき、その親友等某華族の令嬢の、紅顔花の如きを媒介す、

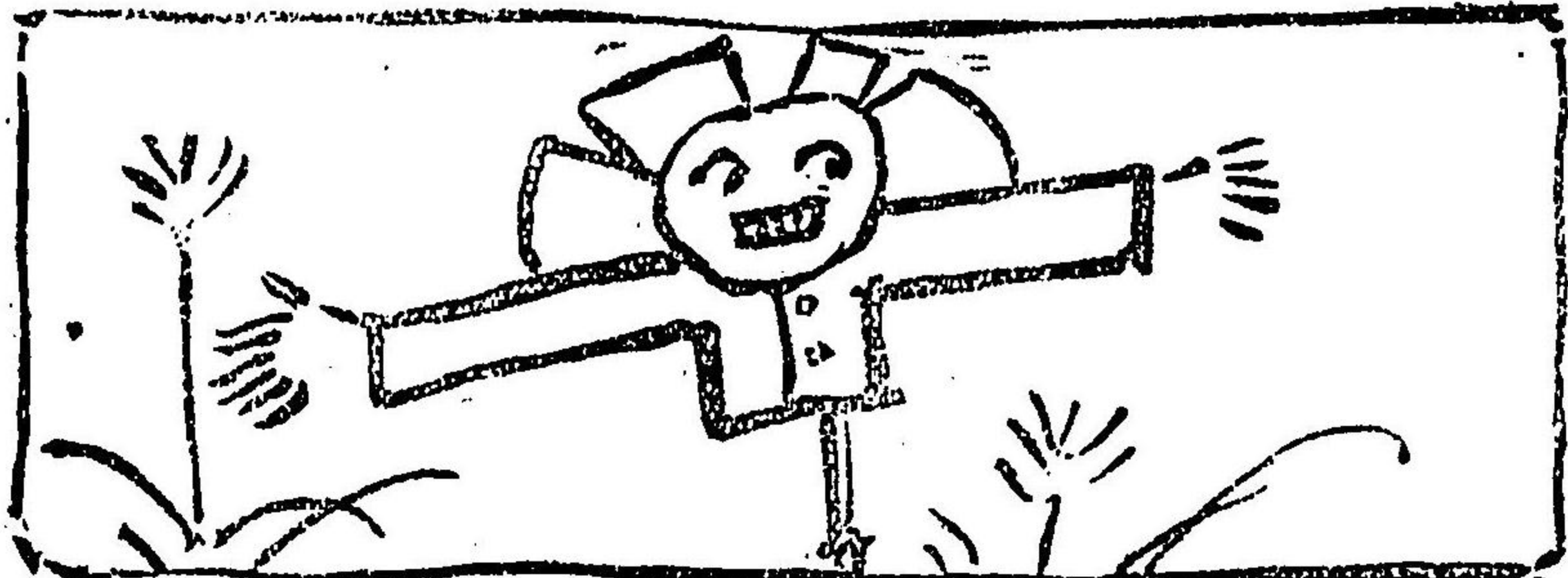


話 百 種 滑

然るに兆民は大抱員を抱きとることとて、少しも喜ぶ所なし、戀て華燭の典をあぐるの
 目となるや、兆民自ら玄關に迎へ、花嫁の手を引つ張つて座につかせ、杯を取換はし
 て平氣なり、暫らくにして躊躇して襪を引き外し、添黒なせる大陰囊を引き延ばしつ
 一、一座を睥睨して曰く、時や嚴冬なれども我れ赤貧にして花嫁におくるべき一物な
 し、幸に畢九火鉢のあるあり是れを送らんと、友人火の氣なき火鉢はいたし方なし、
 これを措いて大に花嫁を馳走すべしとて、傍らにありし火鉢より拏古大の火を挟みて
 彼れに戯れければ、兆民この上におけとて益陰囊を引つ張るに、友人即ち火塊を陰囊
 にのす、兆民飛び上がつて逃げ出し、遂に又席にかへらず、翌日にいたりて先方より破
 談を申込來りしかば、兆民手を拍つて大笑して曰く、我が謀あたれりと。

半香自畫を破る

福田半香嘗つて松和靖看梅の圖を作りしも、少しく意に充たざりしかば、門生を呼
 て曰く卿等遠慮なく批評すべし、如何なる批評をなすも余は決して怒らざるべしと、



話 百 種 滑

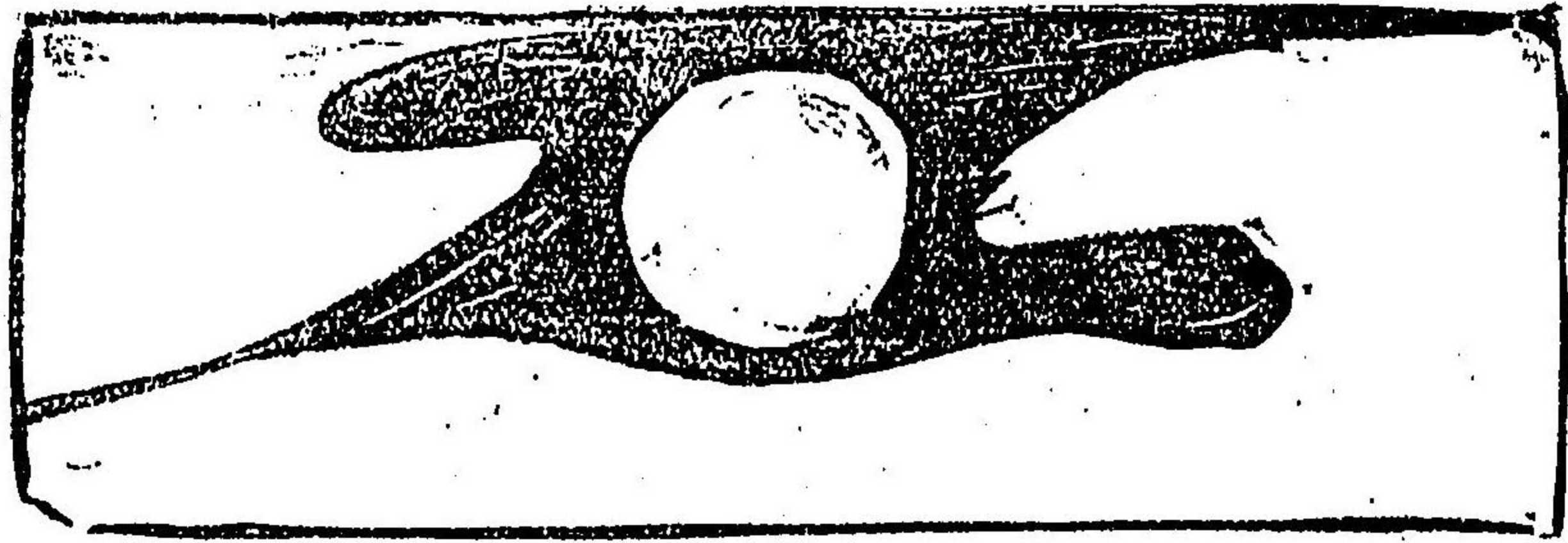
一人曰く山少しく高きに過ぐ、一人曰く梅枝稍や繁元を失す、一人曰く點苔甚だ多き
 に過ぐと、偶一友人來りしかば、半香また評を乞ふ、友人曰く人物稍や大に過ぐ、高さ
 五分を減せば則ち可ならんと、半香急に起つて其の畫をとり、寸々に引き裂きて之を
 棄つ。

一休新左衛門に戯る

一休ある時門外にありしが、壇家なる蜷川新左衛門が皮衣を着て來るをのぞみ、之
 れに戯れんと思ひ、門扉に貼紙して

此の寺の内へはかはの類かなく禁制なり、若し皮のもの入るときは、其の身に必ず
 ばぢあたるべし

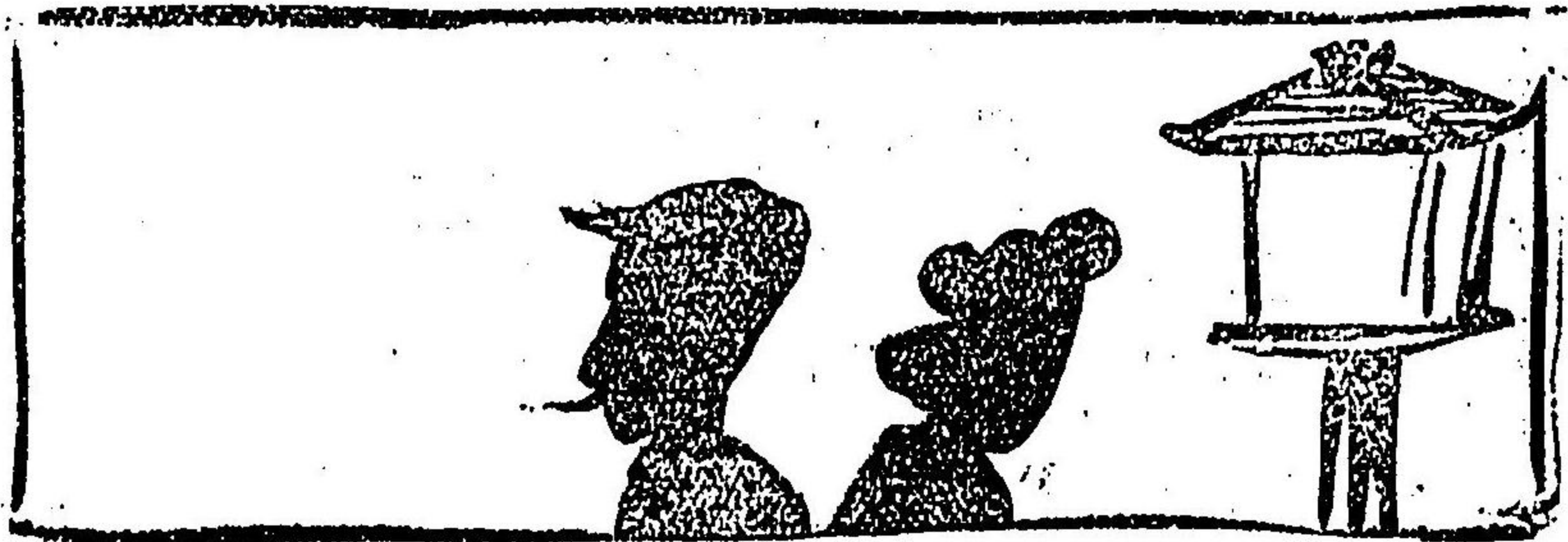
と大書す、新左衛門之れを見て大笑して問うて曰く、皮にしてばぢあたらば此の山門
 の懸け太鼓は如何と、一休聲に應じて答へて曰く、然り皮太鼓も亦皮なり、故に晨夕
 二回必ずばぢあたるなりと、越えて一句、新左衛門佛宴を設けて使をやり、一休及び



或る人一夜大雅堂の宅へ一泊したるに、立派なる蒲團を持ち出したたり、襟のあたり垢つきたるは、來客毎に用ひし故なるべしと思ひ、其を被りて寐ねたるが、夜中廁に行かんとて起き出でたれど勝手のわからざる故、大雅を咩びしに、大雅は寢衣のまゝ、毛氈の下より這ひ出でたれば、さてはと氣の毒に思ひ、妻君はと尋ねければ、玉蘭は聲に應じて、書きかけたる唐紙の下よりこそくと起き出で來りしとぞ。

良寛兒童と喜戯す

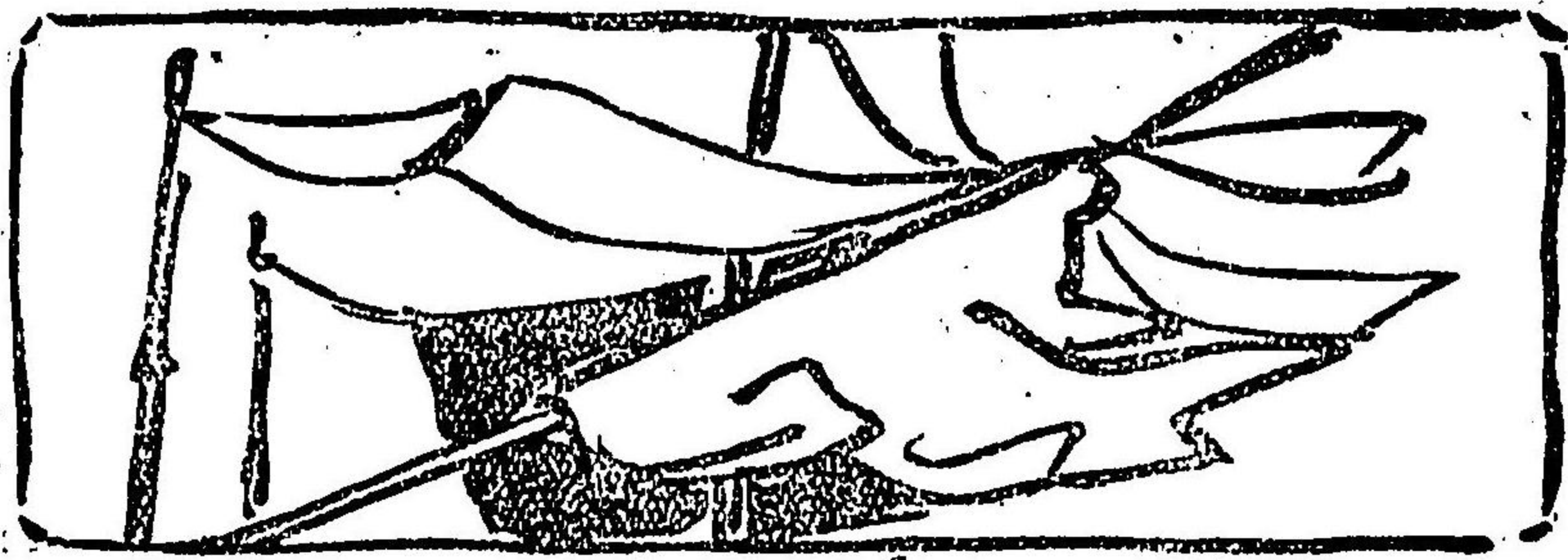
良寛兒童を愛し、到る處に兒童を集め、之れと共に打毬、圍草、又提迷藏などをなし、欣々然として樂む、かつて提迷藏をなし眼を閉ぢて佇立し遂に、深更に至る、たましく人あり怪みてその故を問ひしに、良寛曰く、提迷藏をなして兒童の來り提ふるを待つなりと、兒童等に欺かれて告げずして先きに去りしを知らざりしなり。



其の師を招く、けだし一休に報いんと欲するなり、即ち石橋に揭示して曰く
此のはし渡ることかたく禁制なり
と、師之れをみて躊躇す一休笑つて曰く、橋心よりせよ橋端よりするなかれと、新左衛門遂に報ゆること能はずして止む。

蜀山揮雲堂の禁酒を笑ふ

名古屋の筆墨商に揮雲堂なるものあり、大に酒を嗜みしが、或る人の勸めによりて禁酒せしかば、蜀山人戯れに
すきならば随分酒をのむがよし
野間て死んだる義朝もあり
と、書いて送りしかば、主人返歌して
すきならば随分女郎も買ふがよし
川て死んだる辨慶もあり



活 稽 百 話

融川輿中にて屠腹す

六四

狩野融川性豪爽なり、將軍家齊の時朝鮮人來朝せしかば、書院名家に命じて屏風を畫かしめ、之れを使者に授けて王に贈らんとす、融川之れに預りて近江八景を畫く、遠景金砂を施し漸々濃より淡に及んで隈なし、其の間樹屋隱顯遠近分つべし、自ら意を得たりとなす、一日諸有司列坐して其の落成の可否を試験す、老中阿部豊後守、金砂甚だ薄しとなし之を咎む、融川曰く、近景之れを濃くし遠景之れを薄くす之れ臣が特に意を加ふる處なりと、阿部之れを聴かず、漫りに陳するものとなし殿に補修を命ず、融川憤然聲を勵まして曰く、良工の手段俗目の知るところにあらずと阿部亦怒色面に顯はれしかば、傍人皆手に汗を握る、融川急病と稱して城を下り、途中輿中にて屠腹して死す。

十返舎死後の戯れ

十返舎一九死にのぞみて、沐浴せしめずして直に火葬せよと命ず、門人等よつて火を點せしに、櫃炎々として燃えあがりしと共に、數個の流星爆聲と共に屍中より迸りいてしかば、會葬者皆愕然として驚きぬ、一九在世中の戯らにあきたらず死してまでも戯らせんとて、豫め兒戯に供する煙火を懐にせしなり、其の辭世に曰く

此の世をばドリヤも暇に線香の

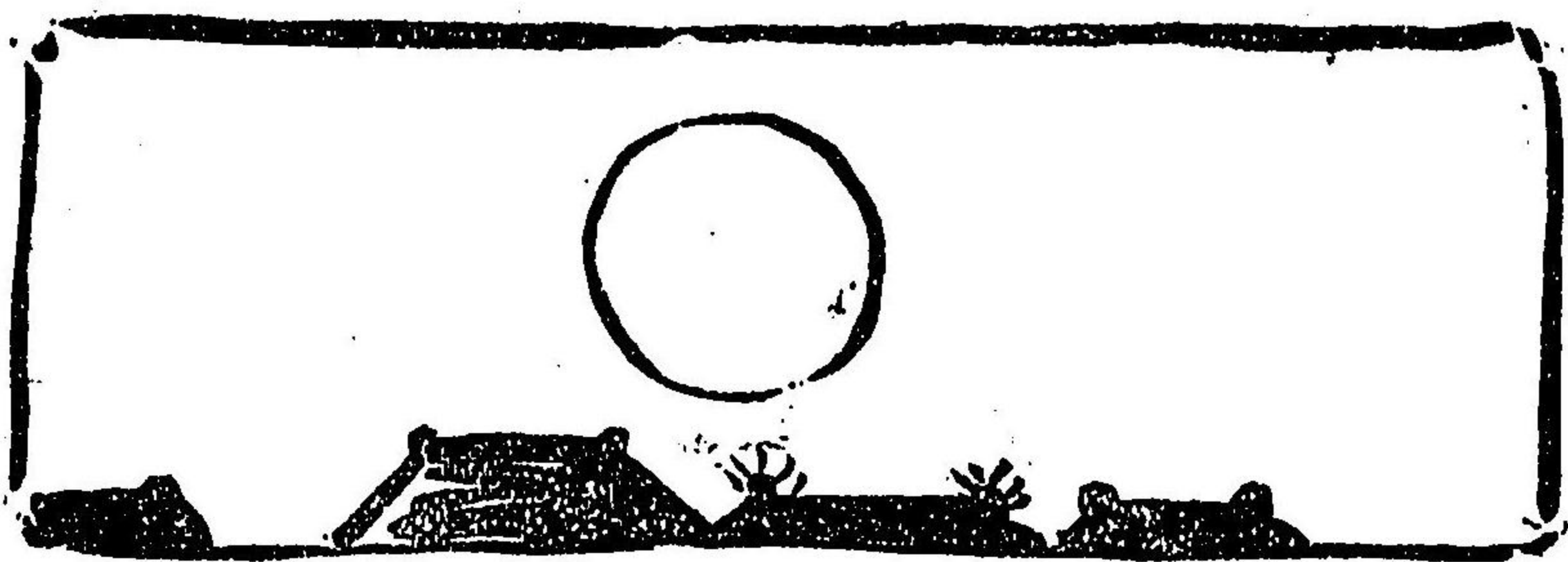
煙となりてハイ左様なら

桃水糞桶を荷ふ

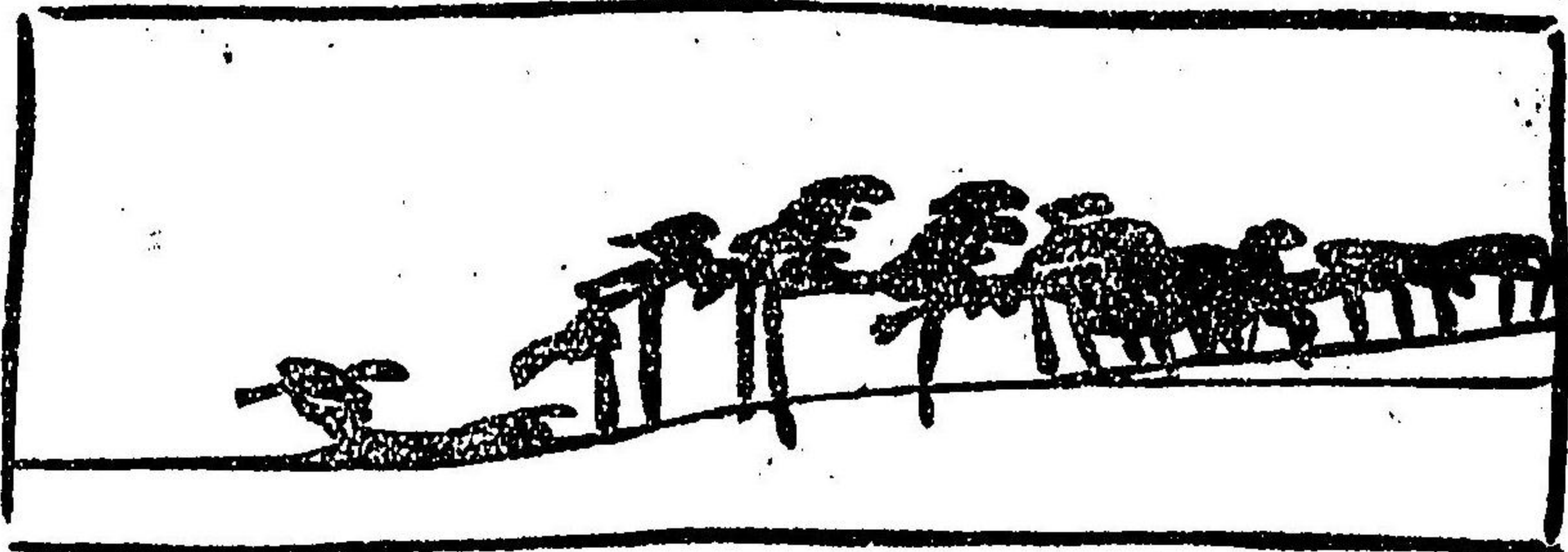
桃水熊本にありし時、自ら糞桶を荷うて菜園を培ふ、法兄某之れを見て、清淨沙門の身を以つてかかる事をなすはよろしからじと言ひければ桃水笑つて答へて曰く「雪隠に於て不淨を拭ふ手を以つて、佛菩薩に向つて合掌するも未だ嫌ひ給ふを知らず、糞桶を荷うて菜園を培ふ何の不可か之れあらん」。

青崖裸體にて畫を書く

六五



活 稽 百 話



滑 稽 百 話

櫻間青屋は本多藩士、山水齋をよくす、孤獨清貧に甘んじ、酒を嗜んで禮節にかへはらず、親友渡邊華山かつて其の門を叩く、

六六

青屋「主人は留守なり」

華山「否其の聲は主人なり、知人の來れるに非道いてはないか」

青屋「イヤ華山か、僕の衣服をそこに干してあるが乾いたか見てくれ」

華山「よく乾いた、とり込んでやらふ」

いや失敬〜と言ひつつ出て來れる青屋を見れば、右手に筆を持ち、左手にて股間を押へて赤條々。

半香艶書にて改號す

福田半香元と盤湖と號す、嘗つて懇懇を通ぜる一藝妓、艶書を送るに際し盤湖の字を知らずして半香さまと書す、これ彼れが改號の理由なり。

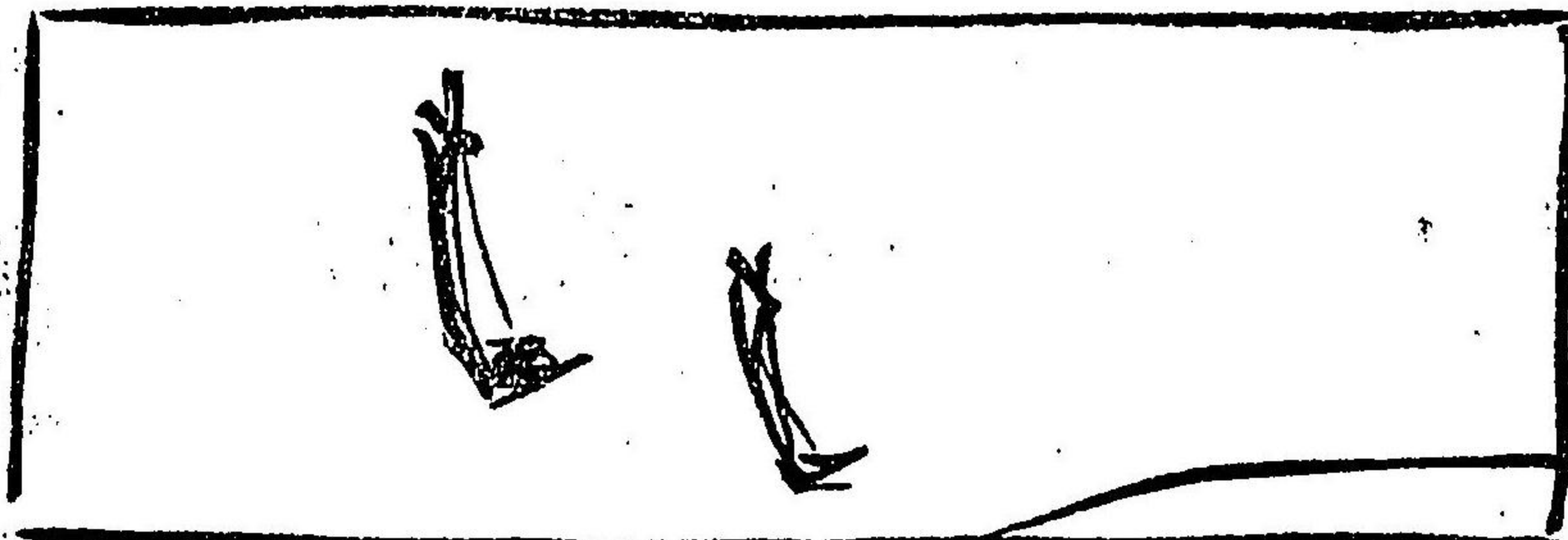
白隠ぬれ衣を着せらる

原驛の商賈某深く白隠に歸依し、しばし財物を供養せしが、その女家奴と通じて一子をあげし時、嚴責に堪へずして欺きて白隠和尚と通ずと告へしかば、某大に怒り直に其の子を抱きて松陰に至り、子を白隠の膝下に投じ、口を極めて白隠を罵りて去りしが、白隠争はずして胎を以つてその子を養ひ、常に之れを抱きて眠り、あたかも我が子の如くせしかば、人も皆白隠が某の女と通じてなしたるものとなしき、然るに或る雪の日、白隠例の如く子を懐ろにして分衛しける時某女之れを見て大に悔ひ、泣て某に實を訴へしかば、某恐懼措くところを知らず、白隠の膝下に伏して罪をゆるさんことを請ひければ、白隠笑つて曰く「この子また父あるか」と、毫も意に介せざるもの如し。

爲山の狂歌

俳諧師花の本爲山、其の妻の没したるによめる
世の中の逆事事は嫌へども

六七



滑 稽 百 話



滑稽百話

順にいつてはあれがたまらぬ

佐竹永海畫上に踊る

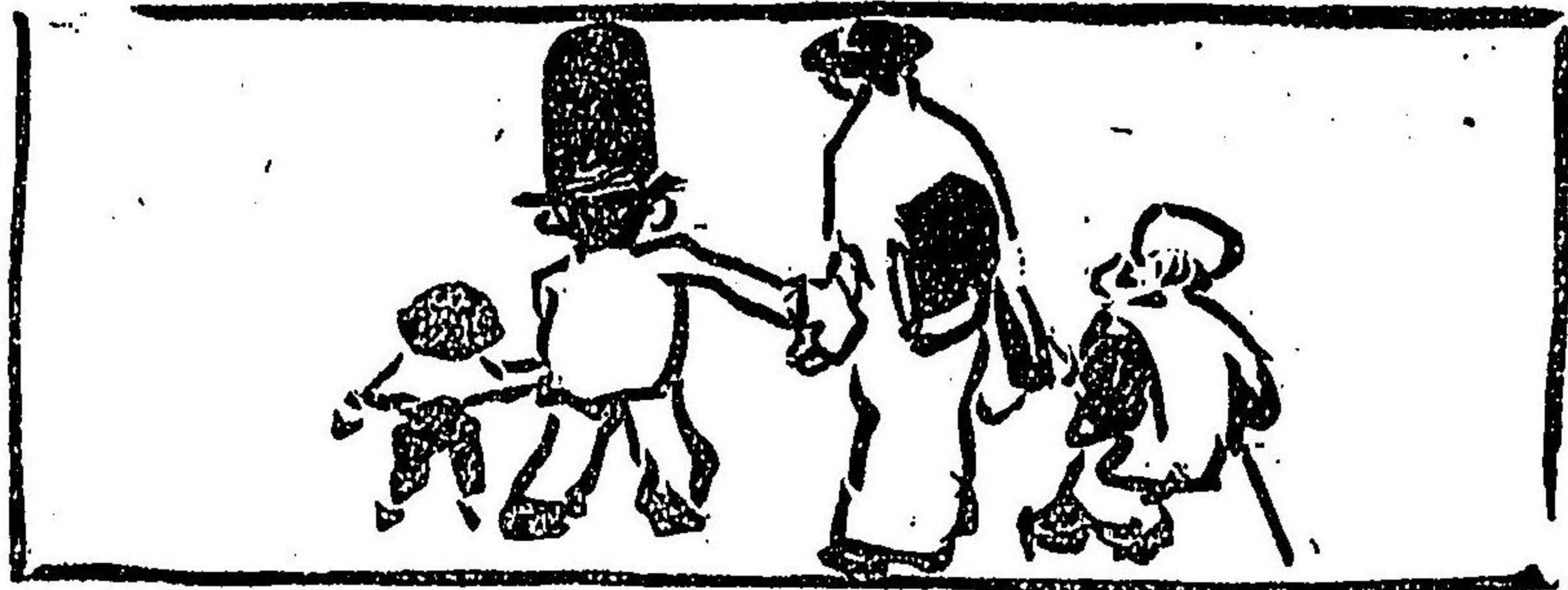
佐竹永海かつて上野山内覺如院の依頼を受けしとき、痛飲淋漓爛醉に乗じて之を奮き、墨痕未だ乾かざるに其の上に舞ひ、ために足跡を亂印す、院主怒りて之を責む、永海平然として桶に水を汲み來らしめ杉戸の上に覆へし、之れを補筆して遂に雲の中龍となす。

からかさの催促

狂歌師入藤縫力といへるもの、小雨をぼよる日、友人日中庵堂口といふものに傘を貸し與へたるに、日數ふれども返さざりしかば

ぬるる日にかしたるかさのこころざし

破らんさきに早やかへせかし



滑稽百話

とよみて催促しやりたれば、日中庵より

一言も申し開きのなき故に

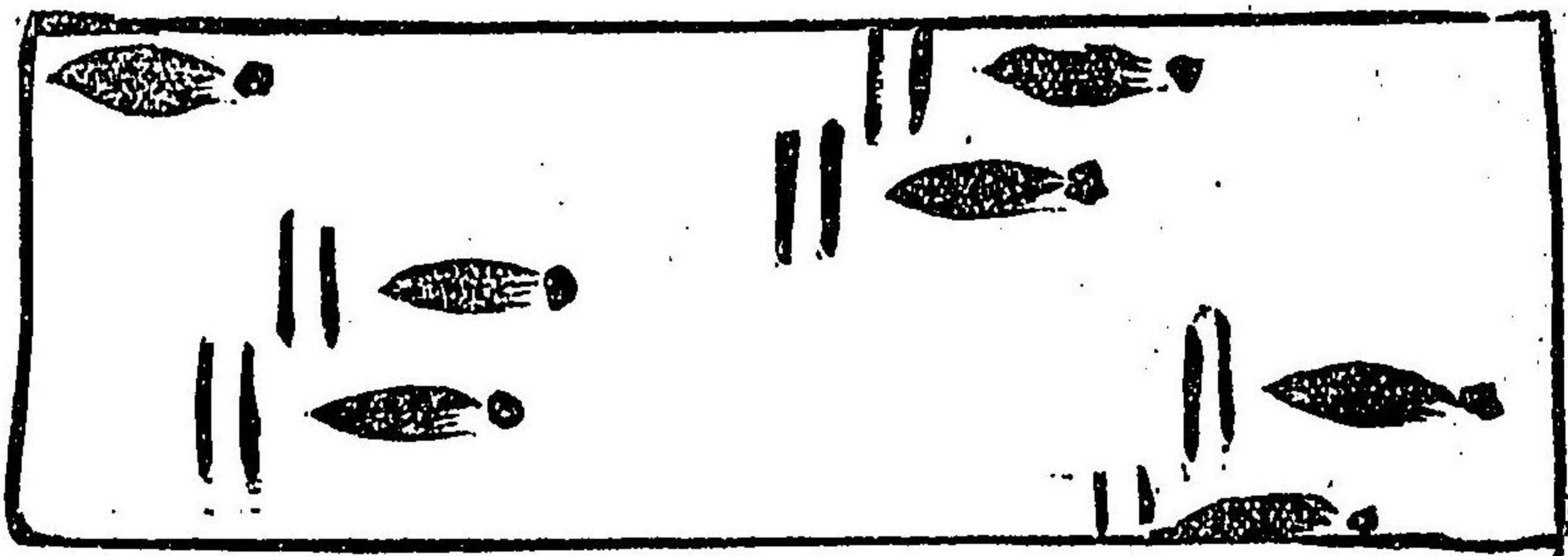
口をすぼめてかへすからかさ

滴水獨園の病を見舞ふ

滴水獨園と交り、相往來すること三十年一日の如し、獨園の病篤しときくや行いて之れを伺ふ、獨園白晝蚊帳を垂れて竹陰の一室に臥す、滴水直に蚊帳の中に入り獨園の體上に跨り面々相觸れんとして問うて曰く、病篤しときく如何、獨園曰く然り到底治すべからざるか、曰く然り、滴水則ち出て去る。

高久隆古三十五歌仙を畫く

かつて依烟をうけ、屏風に三十六歌仙を畫きて送る、依頼者之れを數ふるに三十五人なりければ、隆古に告げて書き添へんことを乞ふ、隆古其の畫の位置全く整ひ、一



話 百 種 滑

人を加ふれば畫面を損せんことを愛ふ、沈吟之を久ふし忽ち膝を打て曰く、一人脚に上れりと、遂に之れを添へず。

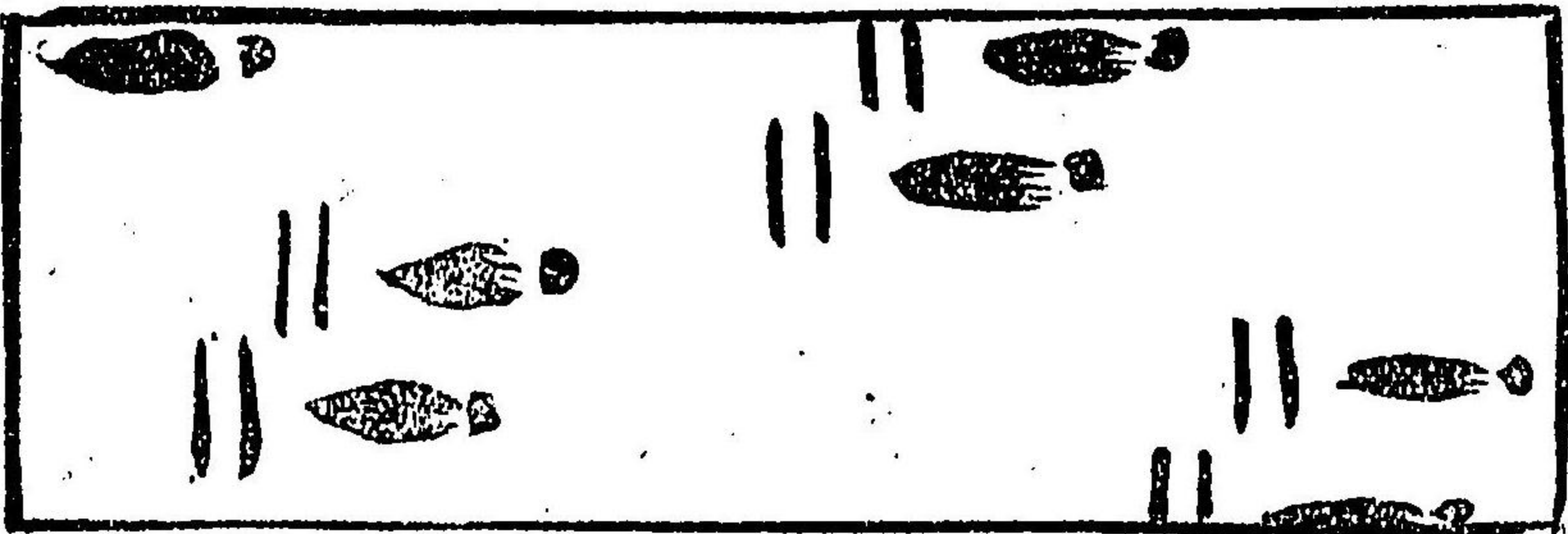
七〇

林棕林三十七歌仙を畫く

棕林性齋を好みてこれをよくす、かつて三十六歌仙を畫かんとして過つて一人を多くす、人其の故を問ひければ棕林其一人の袖中、落款して曰く、これは我れなりと。

象二郎尻を甜める

後藤象二郎歐米視察として、暫時足を佛國は花の都の巴里に止めし時、盛に花柳界の視察をも行ひしかば、忽ちにして吳娘趙姬の知人も多くなりぬ、一日象二郎例の如く、最も寵愛せる一佳人を訪ひしに、紅裙は左も嬉しげに嫣然一笑しつつ、織手の握手に得ならぬ實意を運はせながら驚舌さわやかに「象二郎尻を舐めろ」と言ひしかば流石の象二郎も只呆然として其の顔を見詰めぬしが、手を引て翠帳深き所に逃れ行く風



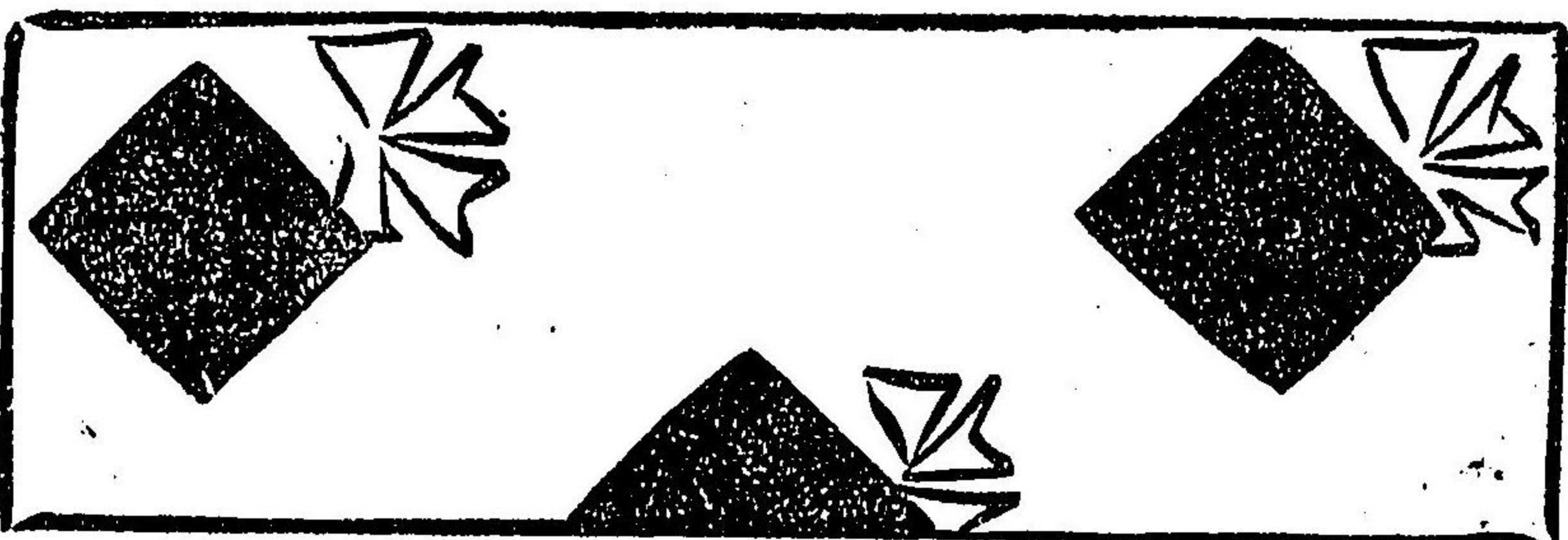
話 百 種 滑

情常に變らざるに象二郎愈五里霧中に迷ひしが、やがて佳人が當時巴里駐劄の我が公使、西園寺侯に象二郎のことを話して「今回來られたら日本語で挨拶したいから「今日は」といふ日本語を教へて呉れ」と依頼したるに、西園寺は前の象二郎尻を舐めろ」と教へしかば、早速それを試みしこと、わかり故、象二郎は忌々敷がつて公使館へ押かけ、西園寺に面會して「オイ、つまらないことを教へたぢやないか、乃公も突然驚ろいたよ……」と怨言めば、風流公使は嬉しげに「ナニ、彼女が來て餘り君の惚氣を言ふから、其の傍聴料に言つてやつたのだ」と、受流したれば象二郎も亦破顔一笑「什麼もやり切れぬエ……」。

不時の若死

英一柱信重北窓齋一蝶四世の孫なり、八十五歳にして没せしが、其の辭世の歌に
二三百生さやうとこそ思ひしに
八十五にて不時の若死

七一

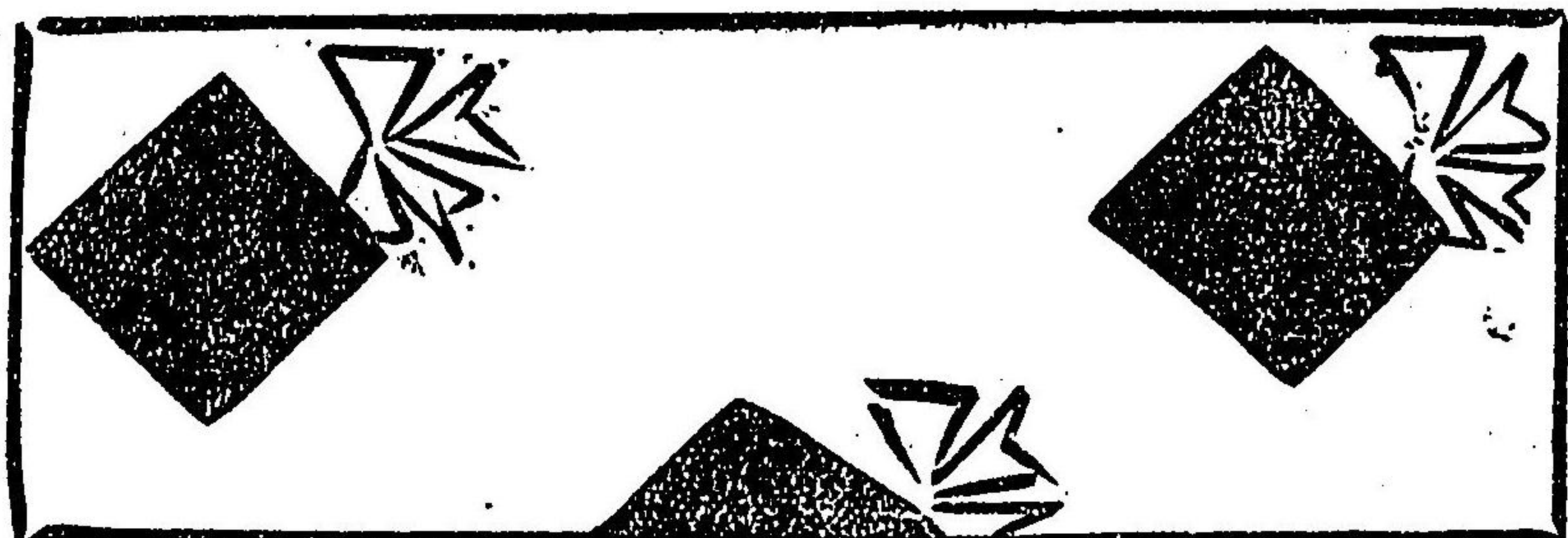


坦山京塚に説服せらる

原坦山曾つて佛法を排して異論となし、口を極めて之れを罵る、京塚之を聞き一日坦山を延きて討論をなす、京塚約して曰く、我れ若し子に論破せられれば還俗して子が弟子とならむ、子若し破れなばよろしく雞髪して我が門に入るべしと、辯難數日にして坦山遂に辭屈す乃ち曰く、大丈夫一度之れを誓ふ、死すとも背くべからずと、そが弟子たらんことを乞ふ、時に年二十。

後藤象二郎村童に芋を持せらる

後藤象二郎農商務大臣たりし時、かつて大磯の海濱を漫歩せしが、たま／＼村童の懐ろに芋を入れ且つ食ひながら來りて氏の傍らに立つに逢ふ、則ち戯れて曰く、我がために美しき貝一つ拾へと、兒童忽ち快諾して「おぢちゃんこの芋を持つてお呉れ、綺麗な貝を拾つてやるから」と。

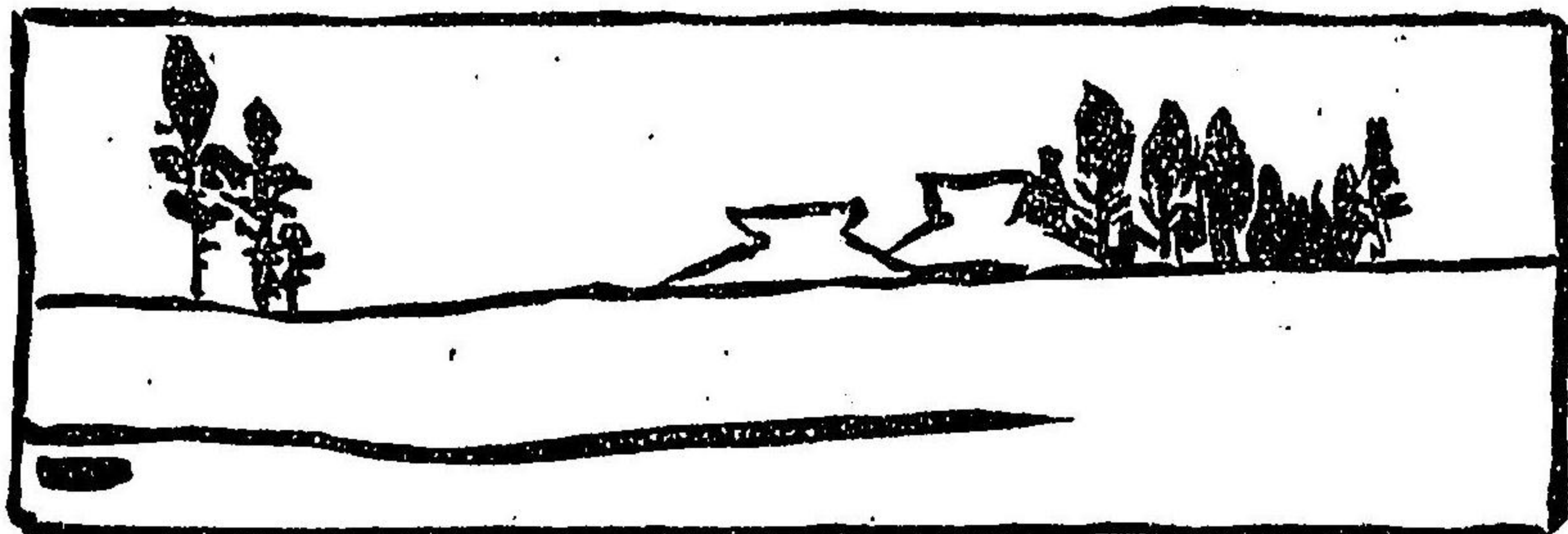


曉齋外人を門弟とす

河鍋曉齋酒を好み、晨より杯を呑み昏に至りてやめず、或は痛飲連日、畫債山積すれども少しも意に介せず、客至るあれば唯酒を談じて毫も畫に及ばず、ために往々畫を賣むる機を得ずしてかへる、然れども一旦酒醒むるときは、大小紙絹手に従つて描寫し、概ね稿をつげずして之れをなす、明治の初年酒席に於て戲畫を書き、忌諱に觸れ、獄に於て拷問せられたために左腕痠痺して終身衣帶を約すること能はず、然れども右腕奮にまさりて愈健、畫法愈進む、英人コンデール弟子の禮をとりて之れに學ぶ、外人の我畫工を師とするものこれ前なからん。

河内屋太郎兵衛の悪戯

河内屋太郎兵衛は浪華備後町の豪商、滑稽諧謔名江湖に知らる、嘗つて儕輩と飲す諸妓共に偕に住吉社に詣てんことを乞ふ、河太遊船數隻を命じ、皆妓を乗せて弦歌し



滑稽百話

行きて將に至らんとす、乞食數人あり舟に向つて食を求む、河太曰く汝等よく飲するか、皆喜んで曰く唯々と、乃ち之れを船に入る、亂髮垢面瘡痂體に滿つ、覺なるもの跛なるもの、鼻を缺ぐもの、耳を失するもの、異臭粉々として近づくべからず、諸妓相顧みて色を失す、河太意氣自若として盞を替はして劇飲し、器を同じうして縱食す妓等遂に得堪へずして岸に上りて之を偷窺す、乞食弦をとつて歌ひ扇をあけて舞ふ、河太喜んで曰く、善しと、乃ち一大をとつて之れに授けて曰く、聊か以つて纏頭に當つと、乞食拜謝し躍りて水に浴す、瘡痂盡く落ち、手足皆備はる、髪を結び服を更れば則ち皆美男なり、けだし割間輩と謀りて之をなすと。

七四

横山華山謝罪狀を懷にす

華山泥酔して屢失策を演ず、因て謝罪狀を印刷して常に之を懷中し、失策をなすごとに其の件を記入し、書を加へて以つて其の人に謝せりといふ。

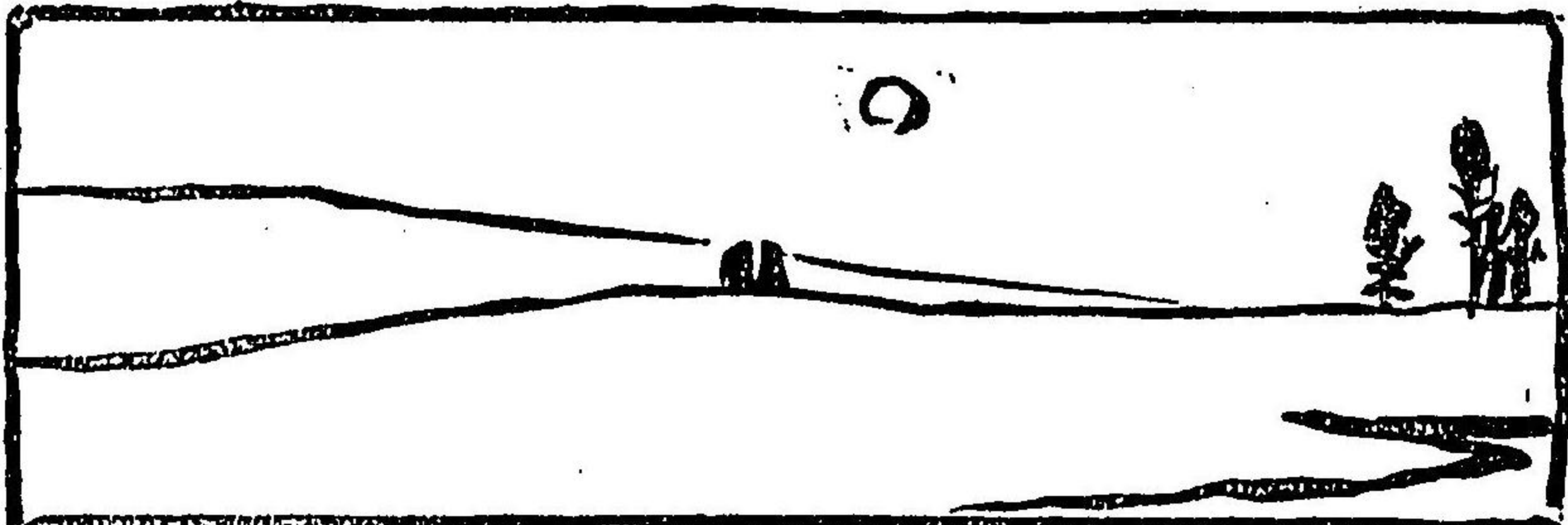
池邊義象の畫美人論

元の小中村義象氏、彗日池邊の本姓に復して、一時兎角の取沙汰ありしを聞くに堪へず、久しく歐米の天地に悠遊せしが、或る時伊太利より一片の繪端會を故國の友によせて曰く「ここに見らるゝ如き美しさもの、當地にも多々これあり、流石に風情ありと見申し候へども、實物はまことにこれにもまさりて見え候ても、なか／＼忌はしくそはこの國の美人達には、われ等の最も嫌ふべき腋臭のもの多きゆゑに有之候、繪にかける女を見て心を動す人を、嘲み候人もあれ、小生は繪にせる美人の方、むしろめでたくと唯今は思ひ候」云々と、氏が此の述懐、攀柳折花の餘なりや否やは知るによしなけれども、同人間の茶話にのぼりて、愛嬌の一つに數へられざるをいふ。

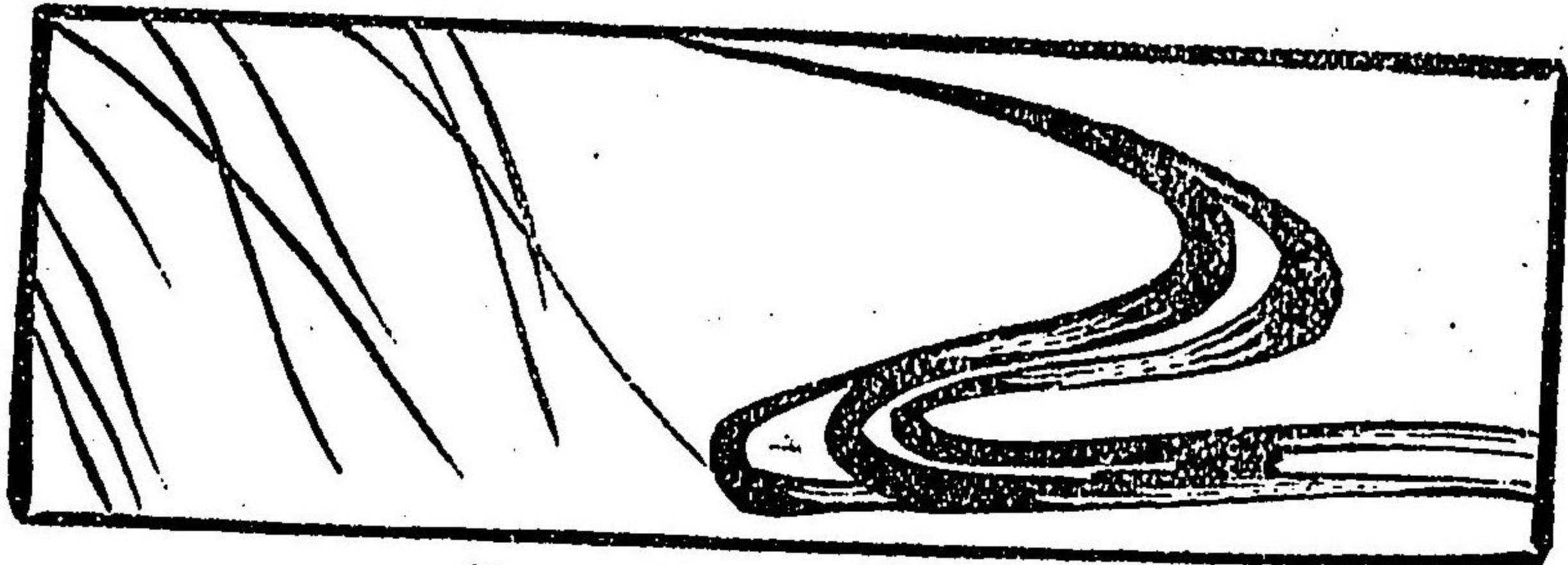
大町桂月の立小便

「都に墮落して香肆の小僧と成申候」とて、飄として都に入り來りし大町桂月、佐々

七五



滑稽百話



話 百 種 滑

木老伯の新邸賀儀の開かるゝや、桂月酒呑童子ここに在りと大白瀧引して大にあほり頻りに怪烟を吐く、偶々便を催し來りて堪ふる能はず、屋上より放尿す、尿水滴々屋下に來れる某伯爵の馬車に點ず、桂月之を知らず、傍見のもの之を老伯に告ぐ、老伯大に驚きて桂月を呼び、其の行爲を責めて密かに之を秘せよといふ、桂月肯かずして曰く、罪を犯せば其の實を告げて謝せんのみ、何ぞ之を秘するの要あらんやと、止むる再三、尙ほ肯かず遂に佐々木老伯の頭上に鐵拳を下す。

七六

危き金杉英五郎の命

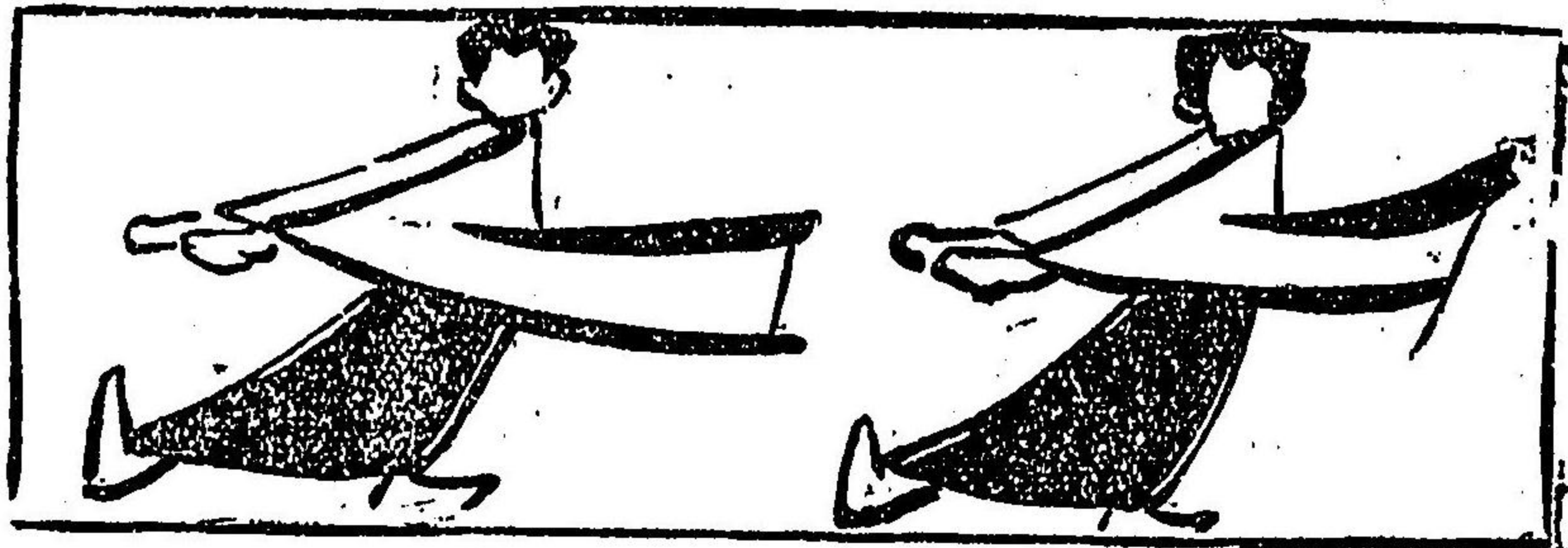
獨逸に在つた金杉英五郎、伯林或時大學の懇親會に參列したる時、酔も八分に熟し來りたるが、傍らの一大學助手より「此ビールは君がこぼしたんじやないか」と言はれて、時が時故に金杉英五郎も「馬鹿言ひ、誰だか知るもんか」と日本語で啖呵を切る、助手の先生は直ちに己を嘲弄してゐるなと眞赤になつて怒りだす、是に金杉英五郎もいよく立腹して「ウヌ馬鹿野郎」と有合せたビール壺を引下げて酒氣に任かせて



話 百 種 滑

強く打つた、何かは以つて堪るべき助手先生の頬へ一面鮮血を染める大喧ぎ、然し其麥酒は金杉がこぼしたのでなく、確かに助手であるとの目撃者あり、何れも金杉へ同情して其場は事なく和解に期す、後金杉英五郎思はぬ喧嘩に勝を占めたることゝて心嬉しく得意になつて街路を徘徊して今しも但ある伯林の辻に出でんする矢先、大勢の學生がバラ／＼と現はれ「君はドクトル金杉だらふ」と問ふにより「然り予は金杉です」と答へるや否や、學生一同「それ、ヤツつけろ!! 貴様は吾々の先生を侮辱したな、サア覺悟しろ」と取巻いてくる、流石の金杉も多勢無勢如何ともする能はずクズ／＼してあれば殺されそうでもあるところ、わざと憐れつぽく「好し殺し玉へ、イザ殺すべし、予は日本男子だ、敵に後は見せない、諸君の思ふ存分にならふ、然し一つ頼みたいことは茲に二百マーク（日本の百圓近く）の金を持合せてゐる、其所で諸君が徳義を主んじてくれるなら、予が諸君に殺されたと予の本國へ通知して呉れられよ」と、懸河の便を振つて、稍暫時大勢の氣合を引いて、又突然、諸君、今一つ緊急動議がなる、此二百マークの金で和解の宴會を開いては如何」と叫んだ、すると忽ち

七七



滑稽百話

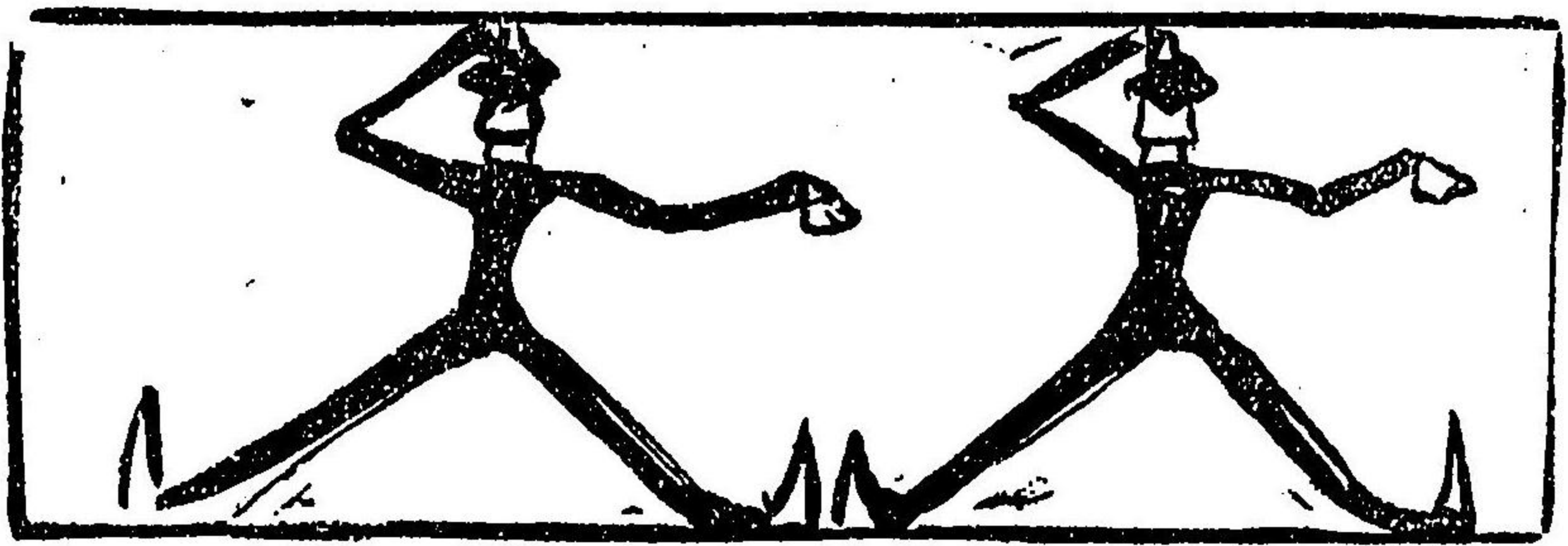
「賛成」の聲が起り、殺氣満々たる此場の光景も一變して拍子ガラリと抜けて、金杉の作謀圖星に中り、學生は直ちに助手先生を呼び出し來り共に和解の宴を張り、危き金杉英五郎の生命も、獨逸金子二百マークで助すからせりといふ。

太田道灌猿を伏す

將軍義政猿を養ひおき、見馴れざる人に飛びつかしめて以つて興す、或日道灌を招き、窃に侍臣をして猿を飛びつかしめんと用意せしめおきしに、猿道灌を見るに及びて恐れて平伏せり、人々これを見て道灌は只人ならずとなす、何んぞ知らん、道灌猿使に賂ひして猿を旅亭に借り來り、出仕の装束して其の傍に至り、飛びかゝらんとせしを、鞭もて痛く打ちよせおきしならんとは。

兆民火鉢に小便す

兆氏かつて某樓に登り、藝妓を呼んで痛飲す、偶火事ありしかば家中騒ぎいだし、



滑稽百話

藝妓等又欄干によりて望む、兆民泰然として座にあり、小便の氣を催せしも、二階を降りて下迄行くを面倒がり、何かうまい方法はなきかと傍を見れば火鉢あり、兆民すなはち其の上にならぬかと用をたす。

原坦山の臨終

拙者儀即刻臨終仕候此段御通知に及び候也
七月二十七日午後三時三十分
原坦山
これ高僧坦山が自ら端書に認めて知人におくりしものなり。

蜀山人粗相を謝す

蜀山人或る時品川の旅宿よりかへらんとして、門口に休ひ居たる幕府の御鷹に袖を觸れければ、鷹匠は怒りて何故に御鷹を驚かしたるぞ、堪忍ならずと罵る、蜀山詫ぶれどもささ入れざりしが、後その蜀山の狂歌師なることを知り、一首よまばゆるさん



滑 稽 百 話

と言ひしかば

一ふじに御鷹匠さんになす粗相

あはれこの事夢になれかし。

八〇

大鹽平八郎龜の生血をすすする

大鹽平八郎かつて近藤重藏を訪ふ、重藏酒して之れをもてなし、故らに鍋を平八郎の傍におきて賞味を乞ふ、平八郎何心なく蓋をとりしに一個の籠蓋々として鍋底にあり、平八郎笑つて「好下物遠慮なく頂戴仕らん」とて、小柄を抜きて其の首を掻き切り、生血をすすりつ、痛飲したりと。

加茂季鷹の御禮

加茂季鷹或る時山寺にいたり、住僧に毛氈を借りて終日遊び暮らし、夕暮毛氈を寺の椽先におきたるまゝ一言の禮をも言はずして歸りぬ、住僧毛氈は如何したると立ち



滑 稽 百 話

出てみれば、たゞみたるまゝ椽先にありて、其の上に何やらん書きつけたるものあるにとりあげみれば

毛氈をかりるときには地藏顔

かへすときには一寸閻魔で、

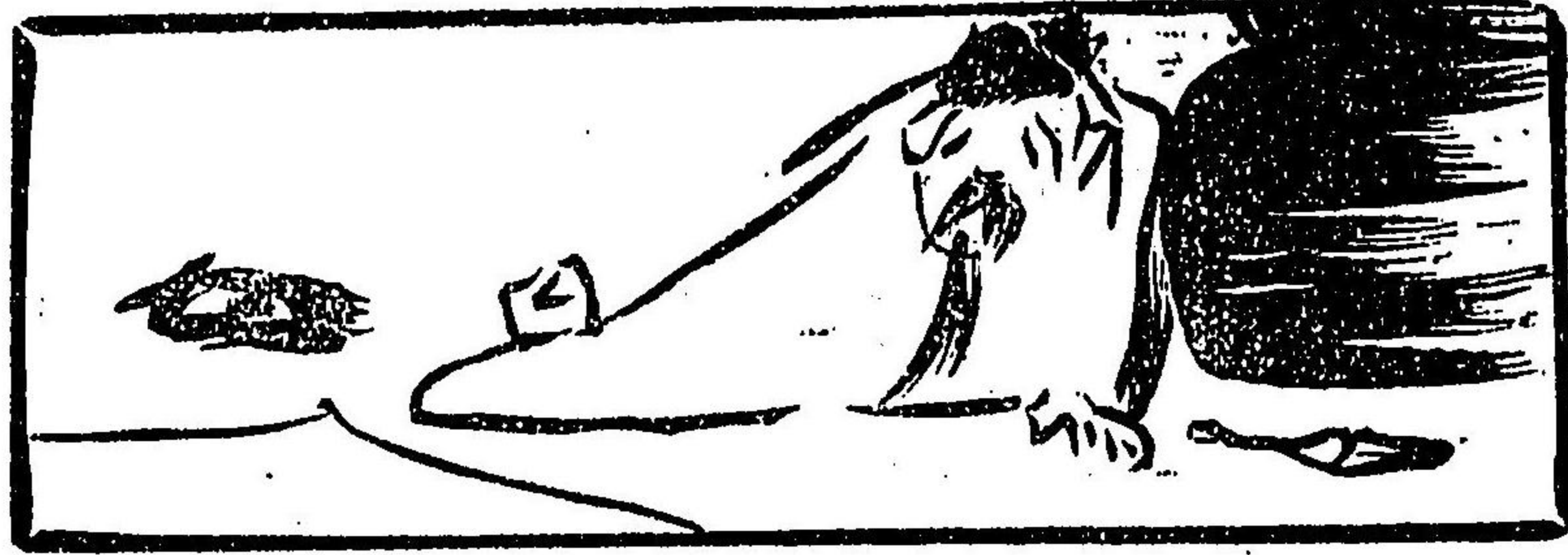
一茶の無頓着

一茶は信州の奇人なり、嘗つて加賀侯参觀交代の途次、柏原驛に宿し近臣をして一茶を召さしむ、一茶晝間燈下に眠りて答へず、暫くにして垢面幣衣出て之れに接す曰く問ふところあらば自ら來れと、侯其の氣象に服し、再び使者をして句を求めしめしかば

何のその百万石も物の數

侯意を得たりとせず、金七兩を送る、後七年再び同驛に宿し、復た使臣をして之を訪はしめしに、先年送るところの金、依然として室の一隅にありしと。

八一



話 百 稽 清

普阿彌の六首

普阿彌といへるもの、小さきもの、大ききもの、長きもの、高きものをとて

芥子粒の中ぐりあけて堂たて、

一と間かにして手習をせん

髪すじを千筋にわけて面をと

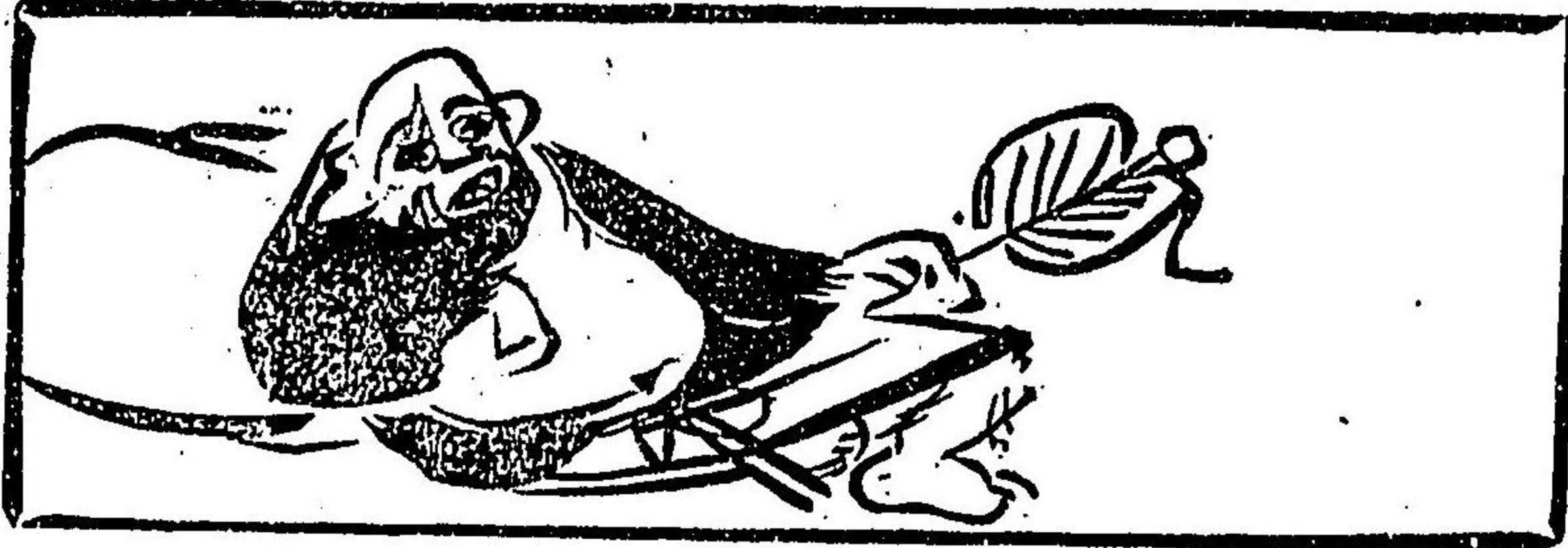
其の影にすむ君を戀ひしさ

天は面眼は月日風は息

海山ともにわが身なりけり、

押し丸め虚空をぐつと呑みけれど

須彌も天地もさはらざりけり、



話 百 稽 清

長沼熊掌を煮る

奥州の忍ぶの里にひるねして
足をえぞへと延ばしつるかな、

大海を袴くりあげ渡るとき

普阿彌があたま雲につかえん、

長沼四郎左工門は名高き剣術の達人なりしが、粗々歴史にも涉れり、嘗つて孟子を讀みて熊掌の美味なるを知る、又左傳を讀みて熊蹯の煮え難きをも知れり、熊蹯は熊掌なり、吾れ程よく煮て食はんとて百法手を盡して之を得、鍋を七輪の上にあき、火を絶たざること一晝夜、今やまさに煮えたらんとて蓋をとり見れば、こほそも如何に唯千萬顆の肪珠、鍋中に浮動す、先生手を打つて笑つて曰く、熊掌羽化して遺珠累々たりと。



滑稽百話

酒井抱一の襟度

酒井抱一かつて龜田鶴齋の氣宇快活なるを聞き、一日使を走せて之れを招き、置酒會談舊知の如し、時に抱一其の揮毫しをる紙端を鵬齋に押へんことを囑せしかば、鵬齋黙して膝頭を以て之れを押へしを、近時の輩其無禮を怒りて切齒憤恨す、然るに抱一悠然として書き終りり、一言御苦勞と言つて談笑また前の如かりき。

風外達磨を畫く

風外は曹洞宗の名僧、書をよくし特に達磨に長ず、人の書を請ふあれば米五升と代ふ、米盡ればまた畫く、貴人富豪の強ひて請ふあるも笑つて答へず、然れども小兒の求むるあれば欣然として之れに應ず。

曉齋尻餅を撞て布袋となす

河鍋曉齋かつて知人と會飲し、酔に乗じて紙をのべ、裳を褰げて尻に墨を塗り、紙上に尻餅をつき争を加へて布袋となす、一座ために腹を抱へて絶倒す。

野崎眞一士籍を脱す

野崎眞一士籍を脱せんとせしも、親戚之れをゆるさざりしかば、相識の髮結を携へ橋場に脱れて、薙髮し且つ人をして言はしめて曰く、眞一急病のために死すと、親戚知人うろたへて吊ひに来れば、眞一内にあらず、家内をはじめ皆々驚き騒ぐところに御注文出来たりとて近所の料理屋より、種々の料理を運び来るに、兎狐につまれたる思ひなす折りしも、眞一圓頭をふりたて、歸り來り、打ち騒ぐ人々を先づ先づと押しなだめて座につかせ、酒肴を進めながら言ふやう、眞一が士籍を脱した念かくの如くなれば、皆様今日こそ是非とも御ゆるしありたしと。

勝川春章の即智



滑稽百話

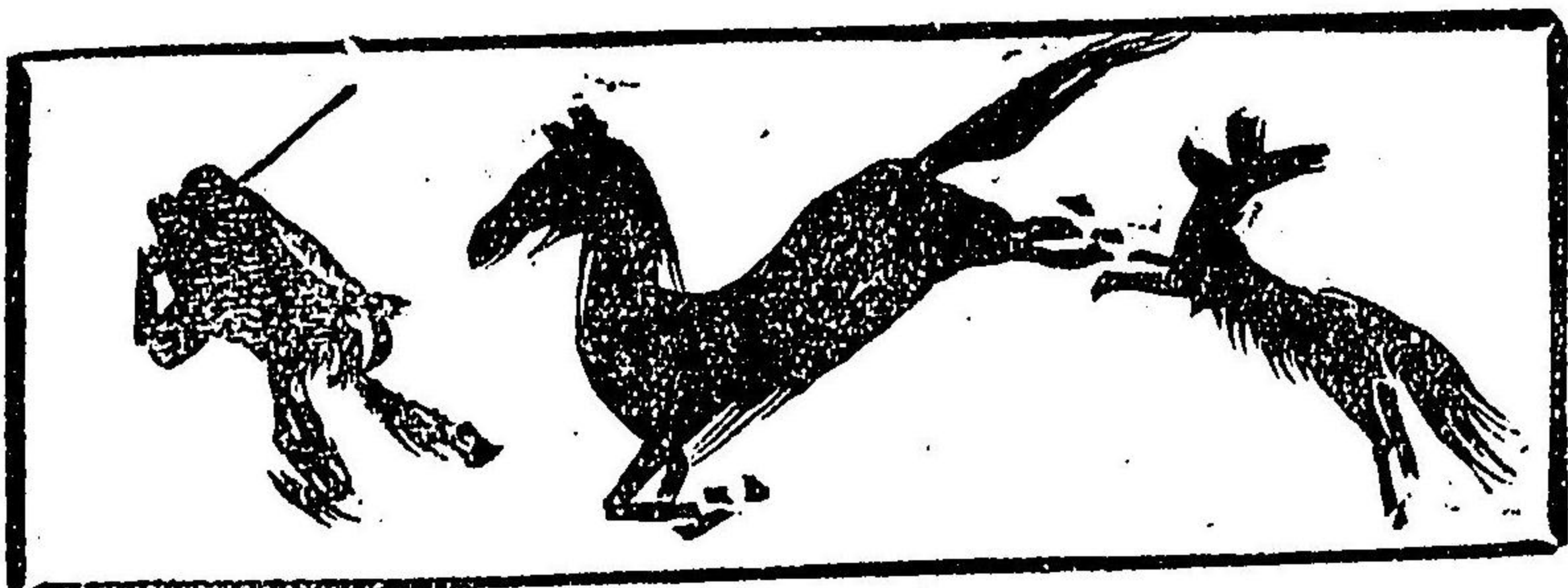


滑 稽 百 話

勝川春章某家へ年禮へ行きしに、酒肴をよきて某の言ふ様、先頃より御願ひ申せし金屏風今日こそ是非とも御寄さ給はれと、春章餅み難く筆をとりて今や揮はんとする時、三歳ばかりなる此の家の小兒、こそこそと歩來りて傍にありし墨鉢を屏風の上に蹴返へし、あまつさへその上を遠慮なく、あちこちと歩さまはりたれば、居合せたる人々は言ふも更なり、主人はいたく落膽せしを、春章平氣にて筆をとり、小兒の足跡をそのままに、万歳が新年の屠蘇酒に酔ひて、泥溝へ落ちし様を畫き、一座をしてその即智に呆れしめしと。

古筆了仲の諧謔

古筆了仲深く茶味を嗜み、又頗附の滑稽家なりき、或る冬條野探菊山人の宅にて茶會ありし時、了仲は當日の上客として式の如く、他客と座に着きぬ、亭主役の探菊も法に従つて勝手口より水注、茶入、茶碗など順に持ち出て、今や恭しく建水を持ち入らんとせし刹那、如何なる機會か放屁一發雷の如く破裂せしめぬ、探菊ハット思へど



滑 稽 百 話

も後の祭、體裁悪るけれど亭主の役目、風が何處と澄し切つて、建水を座に据ゑたれど、室内は探菊好みの一種の名香、粉々として鼻を襲ふを、次客一同笑ひを忍んで之れも澄させると、上客の了仲最と眞面目顔に「唯今の御焚物は別して結構に存じまする」と亭主に挨拶せしかば、耐えくし留笑ひを亭主も客も一齊に噴き出して、此の日の會は遂に台なしとなりぬ。

中村博士の國粹保存

法學博士中村進午、國際公法と外交史との研究として伯林大學に留學せし時、彼れが内地同様羽織袴にて伯林市街を押し廻せば、小兒等珍らしがりて、ぞろ／＼と後方より尾行して囁し立つると、彼れの友人見かねて「此の伯林へ来て和服を纏ふのは君が嚆矢だ、一人際立って見悪いから猶且洋服に爲給へ」と注意しなければ、「ナーニ之れで結構だ、いくら人が見やうと小兒が尾行しやうと僕は介意ない、内地でも外國人が散歩でもすれば、以前は小兒等がよく尾行したものだ、けれども外國人が夫れを愧ぢて



話 百 稽 滑

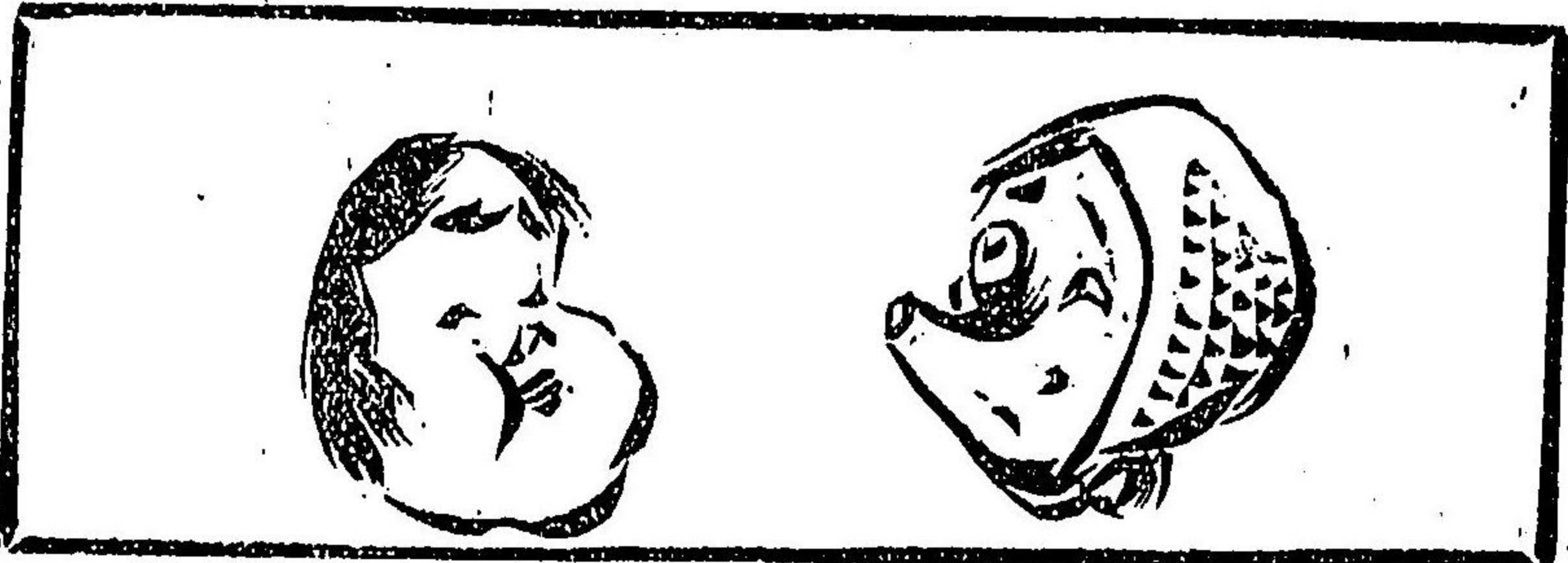
和服を着たといふ談を聞かぬてはないか、和服の日本人が珍らしいと後を尾けるやうては、猶更此地も未だ充分開けて居らぬと思ふ」とて頑として應ぜざるに友人等「國粹保存の頭腦だから、彼風姿では逆もハイカラになり得らるゝ資格がない。」

福羽美静の衣服

福羽美静と渡邊玄包と共に大國隆正の門に遊ぶ頃、美静の方は四尺に足らざる小男、玄包の方は六尺なんなんとする大男なり、美静常に渡邊に相談して服地一疋を求め、渡邊の足らぬ方は美静の余る方で足しつゝ、立派に御揃ひの衣服着て散歩す。

山縣侯爵酒落の鹽

曾つて華美尊大を好まず、寡言沈黙を守り召使の者までも其窮屈なるに閉口しゐる、山縣侯、或時來客と共に食卓に向はれたるに、料理の添ふべき食鹽の附かざるを見て、御勝手の手を呼び「鹽が無い……シホ無いじゃないか」と言ふ、一座の人々



話 百 稽 滑

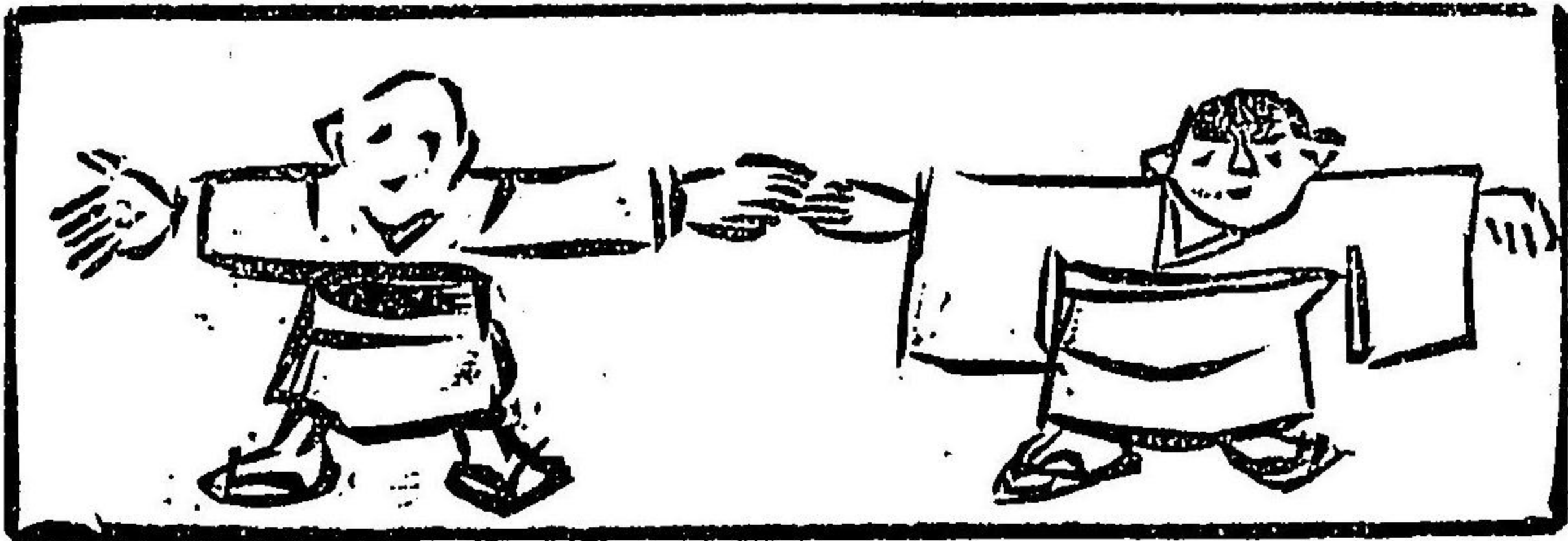
稀に侯の奇言を珍となし、空前絶後の洒落を聞く。

田中正造のかけおち

田中正造の家は代々庄家を勤む、正造尙ほ年少の時、村の豊家に一娘あり、芳紀二八、名を某と呼ぶ、才色群を抜て鄙に稀れる美人なり、正造私かに懸想して焦心苦慮、漸くにして庄屋の若旦那と云ふ所より私かに正造に許せり。然も故障のために佳偶は悪偶となり、覆雨翻然僧老の契りの定めがたく、互に思ひは骨に刻むも亦如何ともなし難く、終に手に手を執つて暗に紛れて欠落と洒落たり、後機縁熟して重て合巻の願を擧げたり、終に夫妻となる、今の内室は即ち當時欠落ちの相對者たりと云。

桂月の五ッ紋の寐卷

大町桂月性豪放磊落、近時文壇の驍將たり敢へて邊幅を修めず、浴せざることを二週日以上に及ぶことありと云ふ、其の臥するとき、シャツを脱せんには、眼鏡にひつか



滑稽百話

九〇
ると云ふて、五つ紋の羽織を着けたるまゝ、障子に入る、而して翌日平然其羽織を纏ひて外出す、亦毫も相聞せざるもの、如し。

大山大將の書畫

大山大將の書と稱するもの、往々にして之を見る、聞けば大將の自筆にあらざして皆代筆なりと、即ち大將の畫師に代筆を托するや、へたに書け、へたに書け、餘り上手ぢやとオイドンの筆とは見れぬワイ。

野口勝一蛙を愛す

野口勝一蛙を愛する甚だしく、得意の書法の外に蛙の畫をよくし、如何なる大家の前といへども怖す憶せず筆を揮ふ、故に彼れが好蛙の癖を知れるもの、木彫、陶製、自然木の蛙等を贈るもの多く、勝一の書齋爲めに蛙の模型の行列をなす、或る人かつて蛙を愛するの理由を問ひければ、答へて曰く「蛙の物を害せざるは仁也、居ながら



滑稽百話

蚊虻を捕り食ふは智なり、居常平を支いて座を崩さざるは禮なり、友の鬨を見て捉身して會するは信なり、膠を管めて腹を洗ふは義なり、此の五徳我が蛙を愛する所以なり」と。

會我蕭白の傲放と廣言

會我蕭白かつて人の、先生世の中に何か面白きことありと問ひしに答へて曰く、蕭白如き偉男子が、區々たる丹青の葉に従事し、日夜齷齪として墨をすり筆を甜ぶる時、何の面白きことあらんやと、又常に人に語て曰く、畫を望まば我れに乞ふべし、繪圖を求めんとならば圓山主人よかるべしと。

會呂利の狂歌

會呂利新左衛門は塚の鞆師なり、鞆を製すること上手にして、如何なる鞆にてもンロリとあんばいよく刃這ひ入りたりとて字して會呂利と呼ばれしものなりとは信か、



滑稽百話

秀吉が朝鮮征伐の時、今日御渡海あるか、明日御渡海あるかなど世上に流説せしかば

九二

太閤が一石米を買ひかねて

今日も御渡海明日もごとかい

又會呂利が病重もりて死期の近づき時、秀吉何よりと望みあらば申せ、かなへて遣はずべしとありたれば

御威勢で三千世界手に入らば

極楽浄土われに賜はれ。

太宰春臺徂徠に服す

春臺始めて徂徠に對面せし時、其の戈を窺はんため、扇面へ釋迦、老子并ひ立ち、孔子半伏の貌を畫きて贊を請えぬ、徂徠直に筆をとりて、釋迦釋空、老子讀虛、孔子伏笑と書さしかば、春臺その才の窺ふべからざるを喜び遂に弟子となる。



滑稽百話

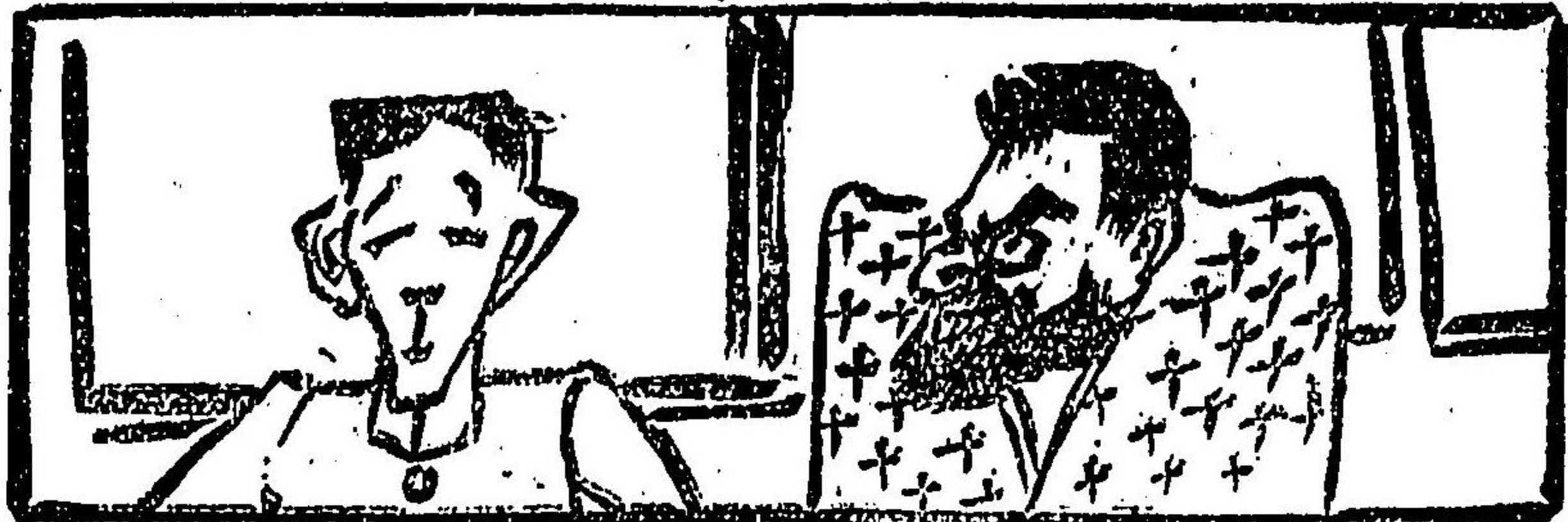
飛驒内匠河成を苦しむ

内匠かつて河成と技を闘はんと欲し、河成に告げて曰く、予小堂を作る希くは壁面に妙筆を揮はれよと、河成行いて之れを見れば、一小堂宇にして四面悉く開く、則ち進んで南面より入らんるに其戸戛然として自ら閉づ、西よりすれば西戸また閉ぢ南戸却つて自ら開く、北廻東旋遂に入ることを得ず。

百濟河成内匠を驚かす

河成内匠を招く、内匠前報あらんことを恐れて直に應せず、再三請はるゝに及び、やむことを得ずして其の家に至れば、忽ち一死屍前に横はり、色黯淡として膨脹し、腐汁流れて悪臭鼻を撲つを見る、内匠愕然踵を回へして走らんとす、河成面を出し笑つて恐るゝを要せざるを言ふに、内匠氣を鎮めて之れを熟視すれば、死屍と見たるは即ち壁畫のみ。

九三



滑稽百話

或る時兆民自宅に於て獨酌して酒を飲む、偶々乞食あり門内に這ひ來りて一文をと乞ふ、兆民自らたつて玄関に出て、「貴様はよい時に來た、マ一此方へ廻はれ」とて奥庭へ連れ込み、相酌して痛飲淋漓遂に夜をあかす。

兆民乞食と相酌して夜をあかす

京塚の門札

京塚隱退して名を求めず、その三河學寮を去りて武藏大宮の東光寺に住するや、俗士論客の訪問するあらんことを厭ひ、門札を建て大書して曰く

住職無學につき學者入るべからず、
寺貧乏につき盜人入るべからず。

吉川元春醜女をめとる

吉川元春かつて熊谷信直の女の、醜なるものを娶らんことを洩らすや、其の臣怪みて其の故を問ひしに、元春晒つて答へて曰く、吾れ固より其の醜なるを知る、然れども古來名將多く女色のために其の社稷を失ふ、故に吾れは醜女を娶らんと欲するなり、且つ人の欲せざる所吾れ之れをとらば、信直必ず我が家のために力を効さん、現今將帥誰れか信直に及ぶものぞと、遂に醜女を娶る。

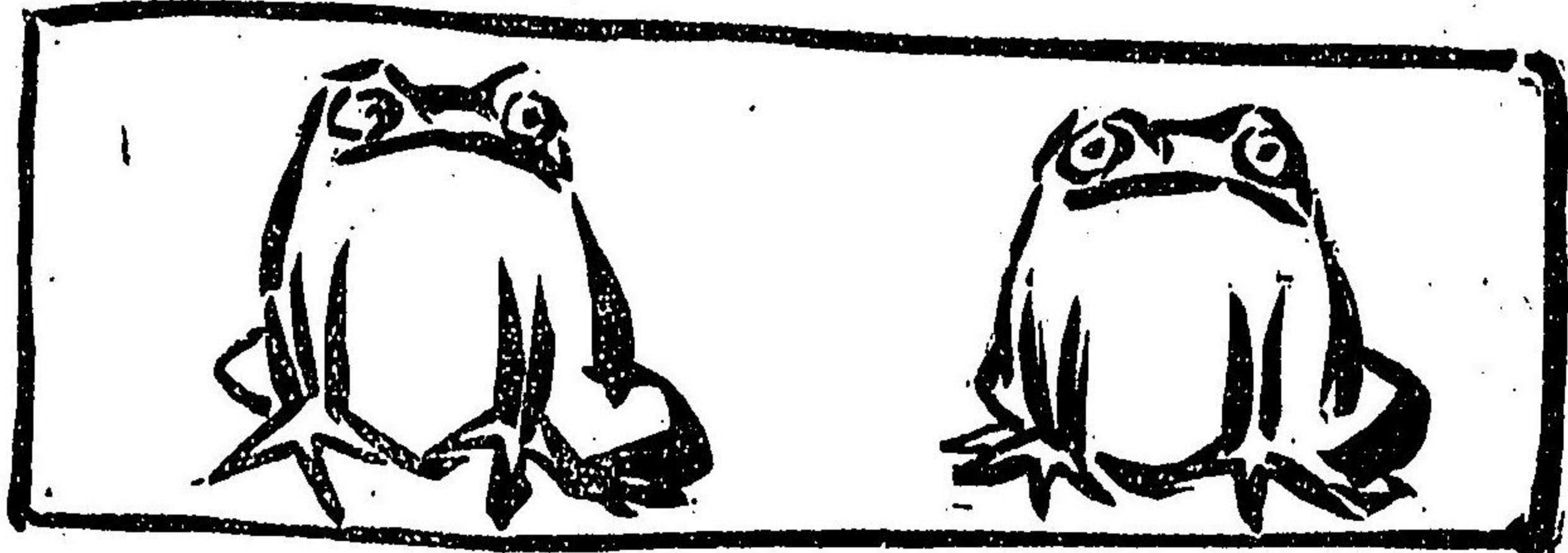
一休袂より餅を出す

一休かつて一人寺院を守る、偶々壇家の一大餅を贈るものあり、一休師のかへるをまち、その一片をあげて之れに示す、師大呼して曰く、満月は片なし、破關そも何の處にあると、一休聲に應じて答へて曰く「雲隠れして此處にありと、一半を袂よりい出す。」

鳥羽僧正の奇才



滑稽百話



滑稽百話

鳥羽僧正は藤原時代の人、甚だ書をよくし奇才飄逸落想人の意表に出づ、かつて時の倉廩の史其の供米を私すること多きを聞き、神前に山積せる米俵、疾風のために翻々として落葉の如く飛ぶを、小僧等慌てて取りとめんとするの有様を齎さしが、此の事何時となく寂閑に達し、爲めに奸吏の曲をやむるにいたりたりといふ。

司馬江漢街を逃ぐ

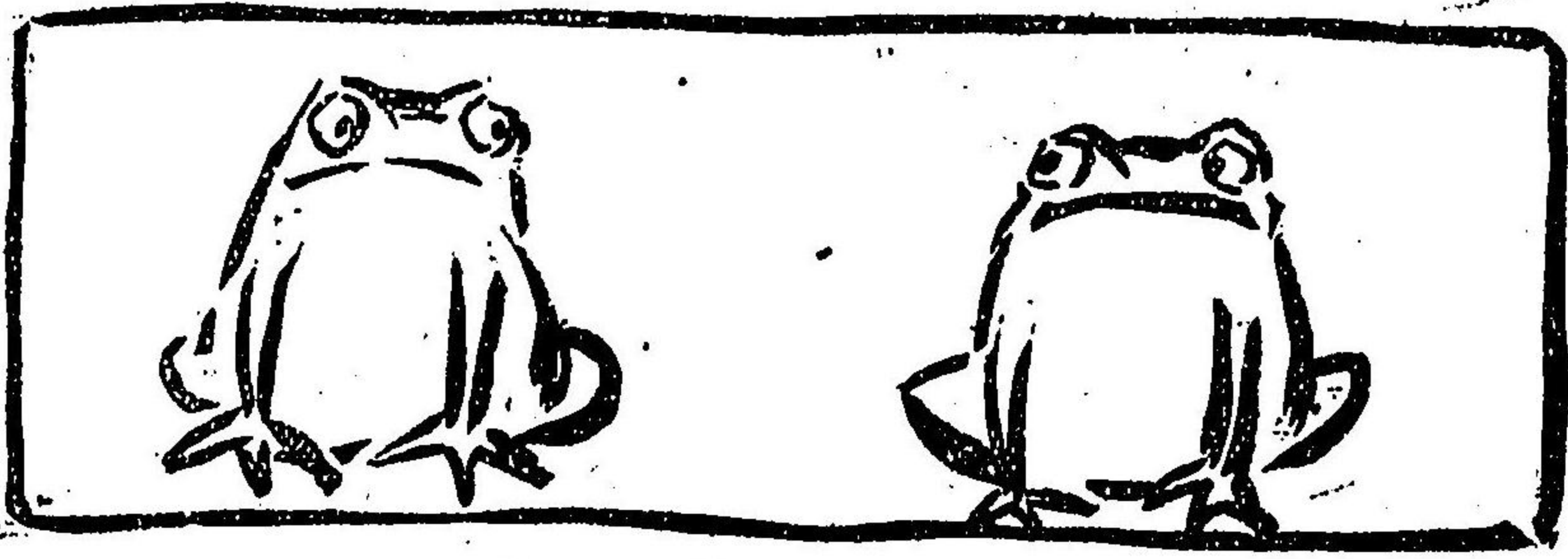
司馬江漢かつて不義理の事をなして某處に匿れ、其の人には既に死せりと言ひ遣しおきたり、然るに或日其の人往來にて江漢が後姿を認め、追ひかけて其の名を呼びたるに、江漢一目散に逃げ出せしかば、其の人後を追ひて呼ぶこと甚だ急なるに、江漢振返りて目を怒らし、呼んで曰く、我れは死人なるに何ぞ返答すべきと、また一散に逃げ失せたり。

山陽の孝

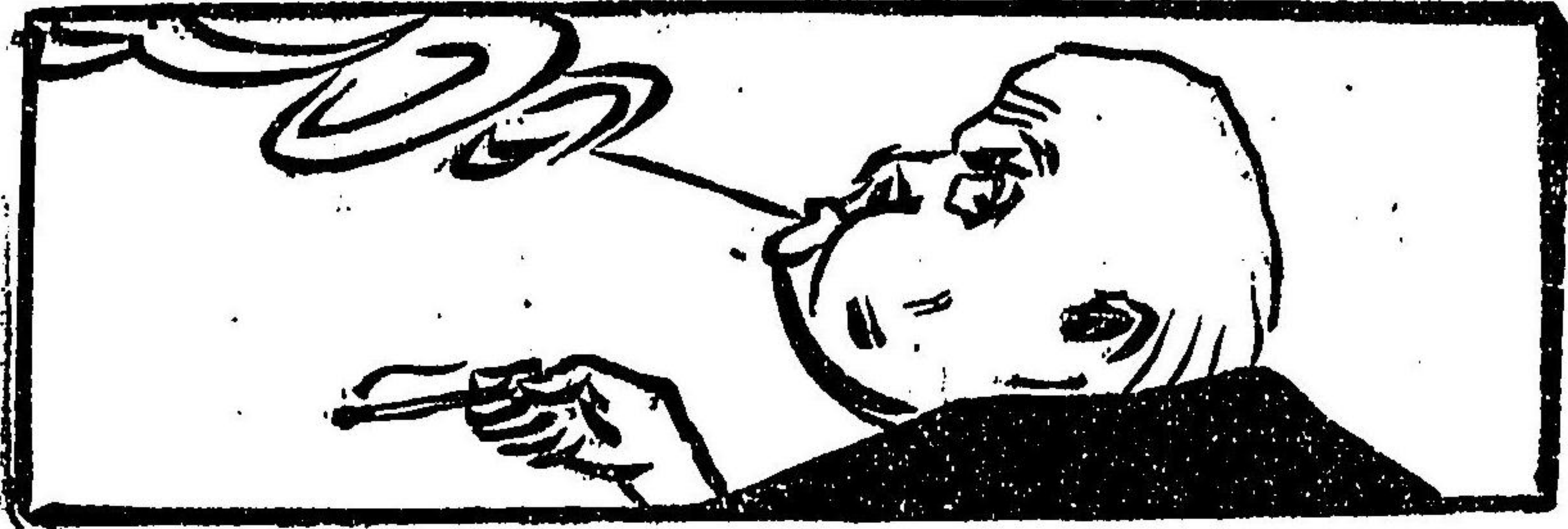
山陽母に使へて至孝至誠、かつて母を奉じて芳野に遊ぶ、一目千本の櫻咲きも残らず、散りも初めぬ萬葉の花、一望雪の如きを見て、其の母大に喜んで今にして我が願ひ足れりといふや、山陽喜色面に溢れて、阿母の此の一言をさく身幸相となるにまさりりと、又奪つて某地に待遊し某樓に登りて酒を侑む、朱觥銀盤皆善美をつくせるに、侍婢愕然として竊に山陽の袖を引きて、阿主囊中のもの以つて之を償ふを得るかを問ふ、けだし山陽家を修むるや甚だ儉素にして、一錢といへども妄に費さざるを以つてなり。

山崎闇齋弟子に問ふ

山崎闇齋かつて其の弟子に向ひて、若し支那より孔子を大将とし、孟子を副將として來りて我が國を攻めば、吾輩孔孟の道を奉ずるもの如何にすべきと問ふ、門弟躊躇して一人のよく之れに答ふるものなし、よつて闇齋自ら答へて曰く、吾輩亦將に堅を破り鋭を執り、一戰して孔孟を擒にし以つて國恩に報ずべし、これ即ち孔孟の道なり



滑稽百話



話 百 種 著

と。

兆民放屁を栗原に参らす

栗原亮一支那よりかへるや、直ちに兆民の寓を叩き、大聲にて支那の土産を進上せんと呼びつゝ、奥の間へ來り四つん這ひになつて豚の啼聲をまね、兆民我れも亦君が無事の歸朝を祝せんとて、忽ち尻をまくりて放屁一發す、その音雷の如く臭氣紛々として傳ためにまがらんとす。

白猿の猿にしておけ

五代目市川白猿、かつて浪速にありし時ある人の

白猿を見らるるかざる人たはる

とよみて増おければ、そのかへした



話 百 種 著

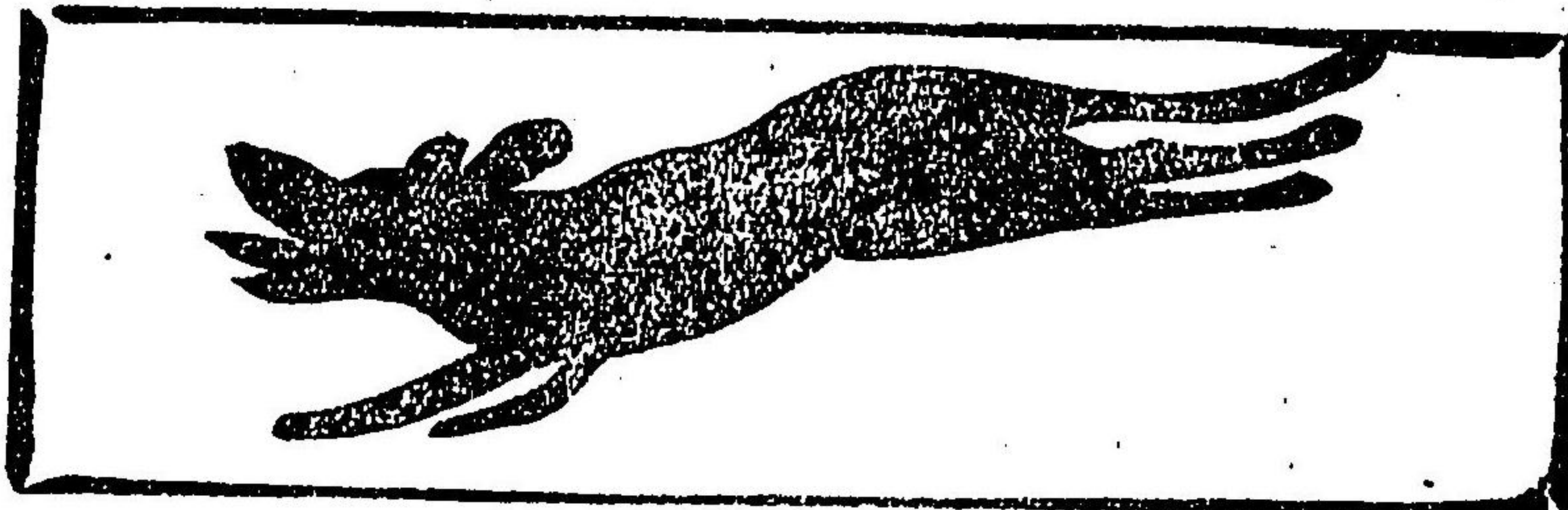
へかみなり親まなどと呼子罵
猿にしておけ猿にしておけ。

幡隨院長兵衛謎を解く

老中酒井謙政守が、政事隅々まで行届き、吟味殿として下馬評喧しかりし時、かつて其の門の扇に座頭の圖を貼りつけ、その足に五寸釘を打ち込みたるものあり、人々黒山の如く集りて珍らしがれども、一人としてその意を曉るものなし、幡隨院長兵衛時に年二十、又これを打ちながめて成程面白しと言ふに、人々其の故を問へば、「これは上が盲目で下が痛むといふことごとくある。」

敬沖公爵を驚かす

或る時北條公爵及び兩本願寺の門主等相謀りて敬沖を襲し、禮甚だ恭し、然るに敬沖「アアいぢた、本願寺なんかへ來るもんじやない、いやに四角張りががる、御



話 百 種 洋

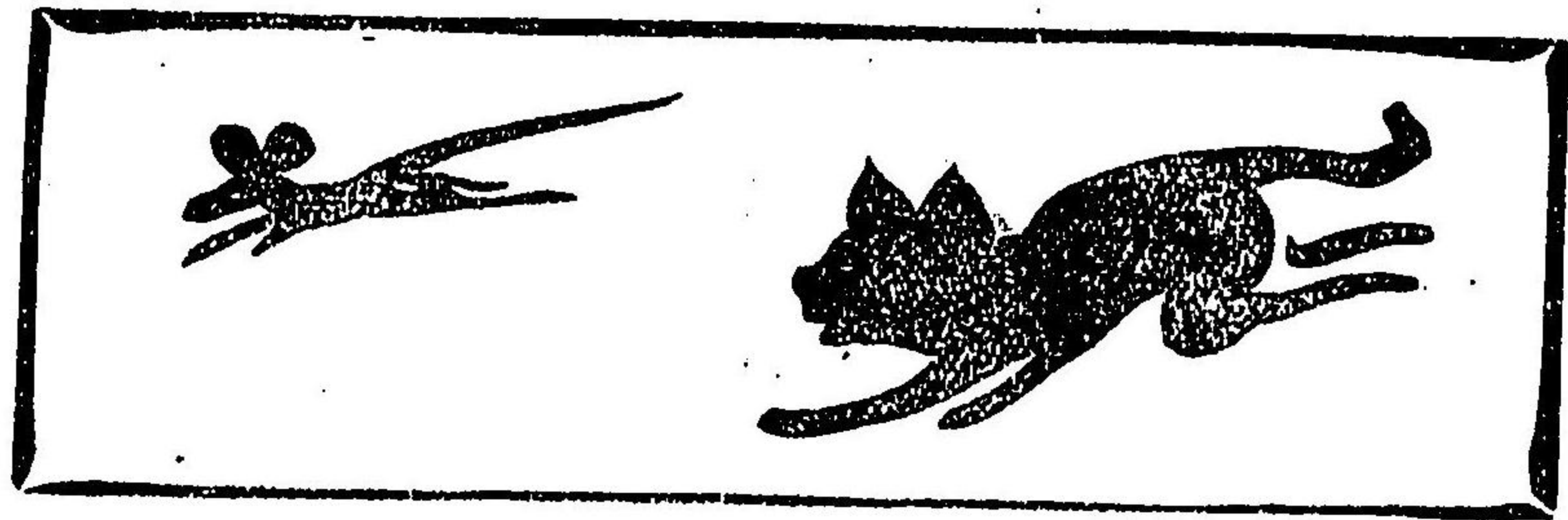
馳走く〜て何か御馳走じやい、もう京都はいやだ」と獨語す、無がて寺僧の注意により公爵より「老師どうかお樂にあいてください」と言はれしかば、敬沖喜んで「ア左様か、これなら京都の方が好い、御馳走なほよろしい」と直に胡座をかく。

渡邊國武の吉原通ひ

渡邊國武吉原通ひの頓智といへば、先づ自宅を出て、方角違ひの赤坂へ押し出し、それから麴町を抜けて神田へ現はれ、下谷方面から吉原へと入閣す、人目を逸して御微行の昔を思へば、無邊快禪と自稱するも、豈有情の人間なり、木石ならざる粹様の魂膽寸法恐れ入つたるものあるなり。

鳥尾中將哲學者を抓る

哲學者あり、鳥尾中將に會す、哲學者曰く、人の靈は腦裡にありと益々論じ來つて止まず、その時中將はつと席を離れて、いさなり哲學者先生の股の處を抓り上げる、



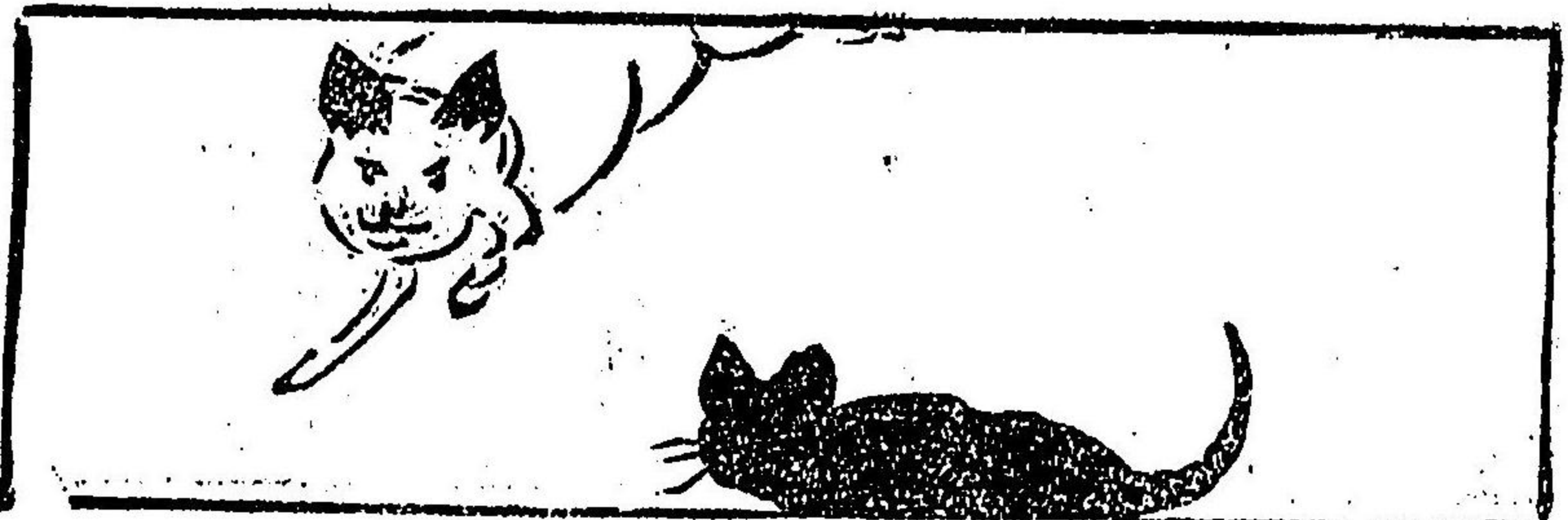
話 百 種 洋

驚いたるは哲學者、思はず「アナタ何をなさる痛い」と叫ぶ、中將「それなら靈魂は又股にもあるでしよ」と言つて更に其腰を抓つた、先生再び「痛い」と叫ぶと「それぢや腰にも靈があるですか」と言ふ、件の哲學者いよく閉口して去る。

放屁の一書生は松村介石

「あの米國のペルリが我浦賀に來り際、其砲聲を初めて聞た人の驚き方は如何なりしや、是より以上のものなりしや」と語り乍ら突然地軸もさげよと一發の音高き放屁ブツとやり、今しも漢學塾中に額を集めし衆をも思はずどつと噴き出す時、教師は烈火のやうに怒り、件の一書生を責める、其一書生とは誰あちふ、今基督敎の聖職にある松村介石君なりしが、「此時介石先生平然」として「ても昔から出もの腫物處さらはざるものなれば、致方もなからず」と答へ、教師も呆然苦笑の體なり。

今西行の狂歌



話 百 種 種

風月庵似雪は蘇州廣島の僧、常に天下の名蹟靈地を遊歴して住所を定めず、時人よつて今西行といふ、或る時歌をよんで曰く

西行に姿はかりは似たれども
心は雪と墨ぞめの種。

建部凌岱山の芋を畫く

建部凌岱家放不羈にして書をよくす、一貴人その畫才を愛し、三百兩を與へ熊斐についで學ばしむ、凌岱其の金を以つて吉原遊女を買ひ家にとめてゆく、學ぶこと六年業成てかへるや貴人命じて、書を作らしむ、凌岱即ち墨痕模糊としてその何物たるかを辨ぜざるものを畫きて呈す、貴人其の山の芋なるを知り、赫怒して之を逐ふ、凌岱手をうつて笑つて曰く、三百金の束縛、一幅の山芋によつて脱却することを得たりと。



話 百 種 種

兆民天水桶に浴す

兆民ある時四谷新宿あたりへ散歩せしが、時宛も大暑赫炎砂を蒸るか如きの候、兆民暑さに堪へ兼ねて浴衣のまゝ、某家の天水桶へ飛び込む、偶々通りかゝりし巡査之れを見て兆民に向ひ、其の方向をして居る、裸體にて公然かゝる事をなすに於ては違警罪を以つて處分すべしと、此處に於て兆民直に天水桶より這ひ出して査公に向ひ、我が輩は決して裸體にあらず、然るに違警罪にて處分するとは何事ぞと大喝せしかば、査公一言なくして去る。

蘭丸瓜を拾ふ

信長かつて問座して瓜を剪りて座に撒し、各童をして順次に之を拾はしむ、皆拾ふ、次で蘭丸に及ぶ、彼れ即ち數へて之を拾ひ、丸に至りて十を得ず、搔頭して問うて曰く、其の一何處にあると、信長笑つて曰く、意を用ふるの密なるよろしくかくの如く

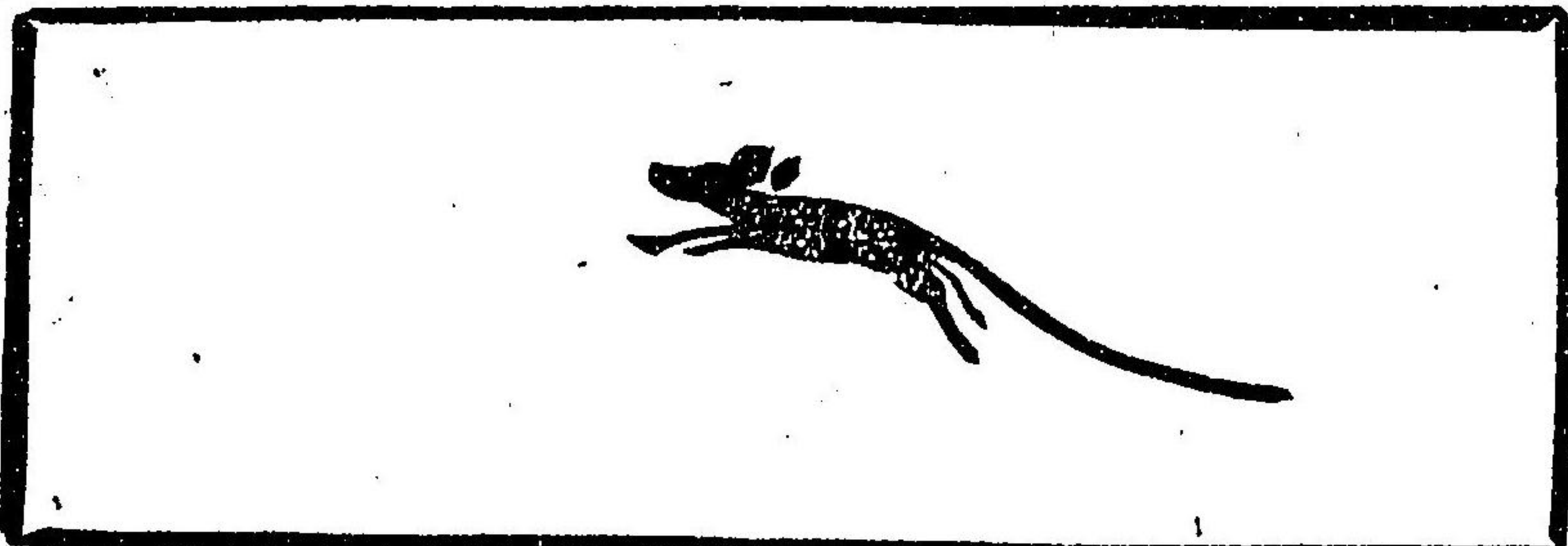


滑稽日話

なるべしと、鞆を開けば別ち一瓜落つ。

大石眞虎夫婦喧嘩を仲裁す

大石眞虎は名古屋の書家なり、其の隣りに毎日夫婦喧嘩をなすものありしかば、眞虎之れを根絶してやらんと思ひぬし矢先、又々喧嘩はじまりしと注進するものありしかば、眞虎急ぎて菓子屋の前に行き見しに、近所の小兒等群集して山の如し、眞虎仲裁すべしとて人を掻きわけて店へあがるより早く、並べあるつかみて群る小兒等に投げ與へければ、夫婦のもの之れを見て、掴み合も何處へやら、左右より眞虎にすがりて何をなされますと答ひるに、眞虎打ち笑ひながら、汝等は互に殺せ殺せとて喧嘩せしが、何方が死んでも一方は下手人として命をとらる、左れば當家も今日限り故、死後の追福を營まんよりは、生前に施行する方よからんと思ひ、汝等に代りて施行したるなり、此の後とても殺せくが始らば又來りて善提を吊はんとて立ちかへりしかば、夫婦は顔見合せて呆れしが、其の後喧嘩どころか、仲よき夫婦となりたりといふ。



滑稽日話

ふ。

山本權兵衛びやう衛の講釋

山本權兵衛が海軍大臣として、軍艦明石の進水式に臨場せし時、山本權兵衛と權兵衛の名前を大聲に讀み上げたれば、満場の拍手喝采一時百雷の如くなりしが、式が式とて目にも立たず、當日は首尾好く式もすみしも、其の後權兵衛やう衛の話し評判になりたれば、或る時或る人山本に向ひて、「何故彼の時權兵衛と云はずに權兵衛やう衛とやらかしたのです」山本之をきき眞面目になりて「イヤ世間の奴者は不必要なことを言ふたものだ、學者だ紳士だと言はれて居る連中の癖に、小學校の生徒も知つて居ることを喋々する馬鹿さ加減が解らない、古來から我が朝に設けられた右兵衛、左兵衛の官を知らぬのか、右へ衛だの左へ衛だのと云ふ馬鹿があるかね、それらは不問に措いて乃公のばかりを權兵衛と言へと言ふは理由が解らぬではないか、兵衛は武官である、乃公も今日の地位は武官であるから、尙更ら權兵衛やう衛と言ふのは正當である

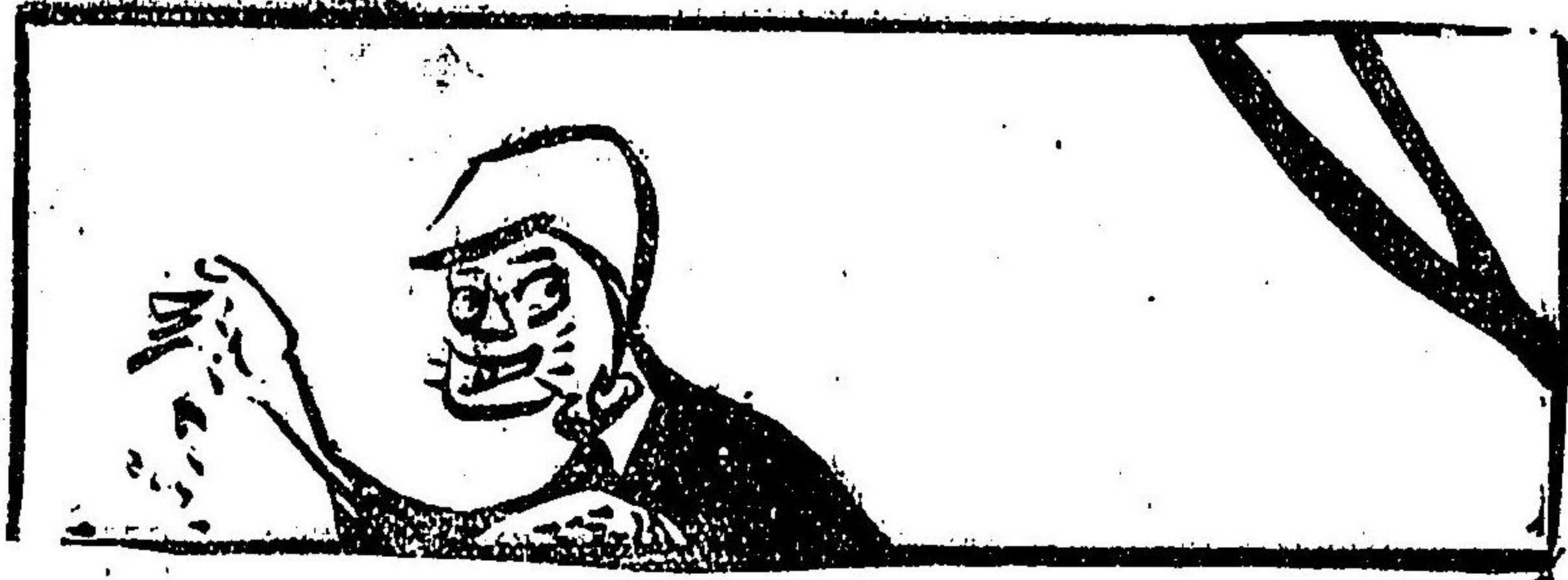


話 百 種 滑

は、何故喧ましく方公一人をそういふのか知らん」と、曲故を引いての雄辯快論に、質問者もアツと感に堪へざる風情にて「實に貴説の如くて御座います、権ひやう衛が種毒きや鳥が穿くるだの、膝栗毛の彌次郎びやう衛などいふこととてさへ、辨別せず居る奴等はかりて、世間に具服者は少ないです」。

徳川慶喜公盜賊と間違へらる

かつて三人の紳士梅田の一茶亭へ登つて、鯛と鮫で食事したが、其の時給仕に出た下婢、年嵩の紳士の持てる七分珊瑚の緒縷を奪めければ、欲しくは取らせるの言葉應に、直に珠を外して下されしは嬉しきよりは底氣味悪るく、御戯談をといふもさそく聲、如何せんとためらふ内、サア參らうと二圓ばかりの勘定に五圓紙幣一枚投出して、ツト立ち去りし後に御遺物の靴一つ、それと後追ひかける前に一寸開けて中を見れば、十圓紙幣が束にして千圓餘りはいり居るに吃驚したる件の下婢、眞蓋になつて帳場へ駆けつけ、譯を話せば亭主は眉をひそめての早合點、どうも初めから變だ

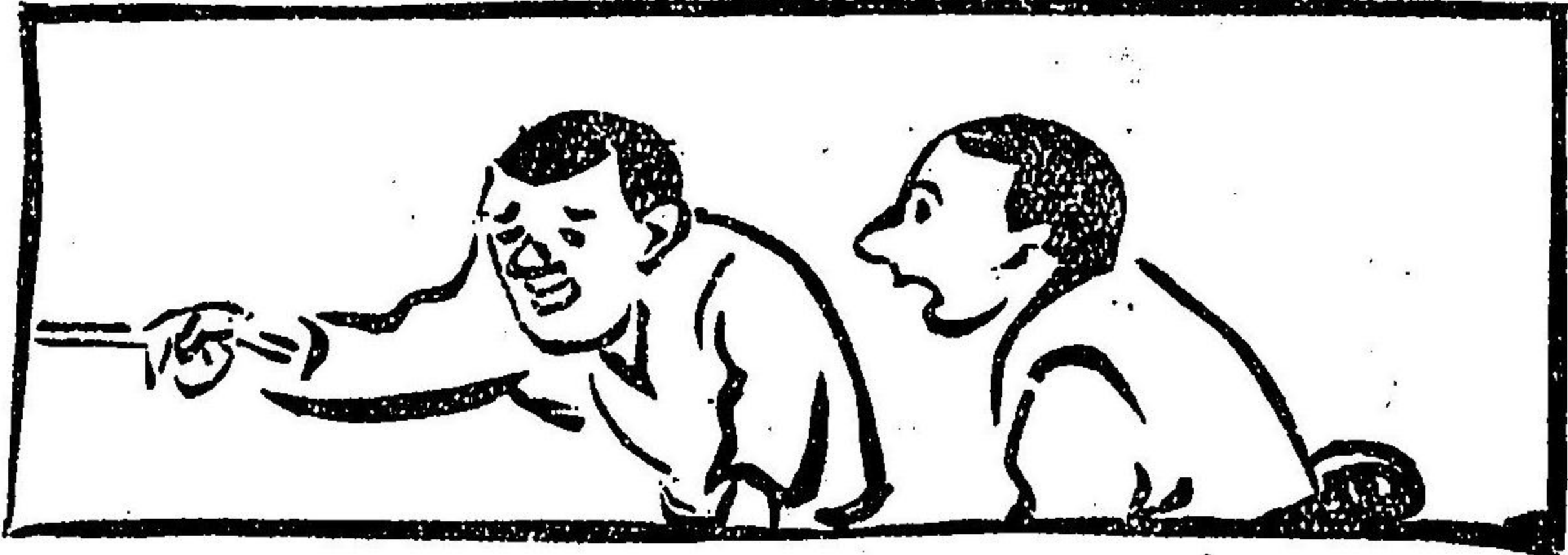


話 百 種 滑

と思ふたと、府廳へ駆けつけて知人を尋ね、うるんの曲者云々と大金入の靴を證據に一伍二什を訴へる處へ、下婢を案内にして追ひかけ來しは夫の三紳士、それを見たる亭主は必定靴の取戻しと語氣も荒々しく、アツ、アツレや今言ふた盗人は」と高聲揚げし二刺那、バタ／＼と奥より飛び出て來りしは、當時飛ぶ鳥をも落す渡邊知事、三紳士の前へ腰を屈めて恭しく敬禮せしかば、亭主も下婢も復吃驚、今の亭主で盜賊と見込みしは、徳川慶喜公、附き従ふ二紳士は、鍋島大村の兩藩主と知れてまたしも吃驚。

元峯畢丸二つあり

伯爵某かつて元峯を訪ひしに、元峯侍者をして之に禮せしめしに、某其の冷遇を憤り問うて曰く、當寺の住職は道の什麼をか有すと、侍者入つて之れを告ぐ、元峯呵々大笑して曰く、「たわけめ、おれが何の不思議なものを持つものか、畢丸がたつた二つあるばかりだ」と。



話 百 種 滑

宗茂の臆勇

立花宗茂十一歳の時、獨りいて、郊外に遊ぶ、偶狂犬あり來りてその足を噛む、宗茂自若として刀を抜いて之を背打す、之れを聞きし父其の何故なるかを問ひしに、宗茂笑つて答へて曰く、刀は人を切るものにあらずや、いまだ狂犬を斬るをさかずと。

多利雄の氣長

六時園多利雄は甲州府中の隠士にして、性温順、物にかづらはず、心長きこと人に超えたり、道をゆく日に七里に過ぎず、家にありてもなすことなく、常に今日は之れをせん、明日はあれをせんといふのみにして、かつてなせしことなし、その居る所も汚穢にして掃除せしことなし、或る人或る時その宅を訪ひしに、澤庵漬の大根一切食ひさして机の端にありしが、十數日を経て再び訪ひし時、先日の澤庵漬依然として



話 百 種 滑

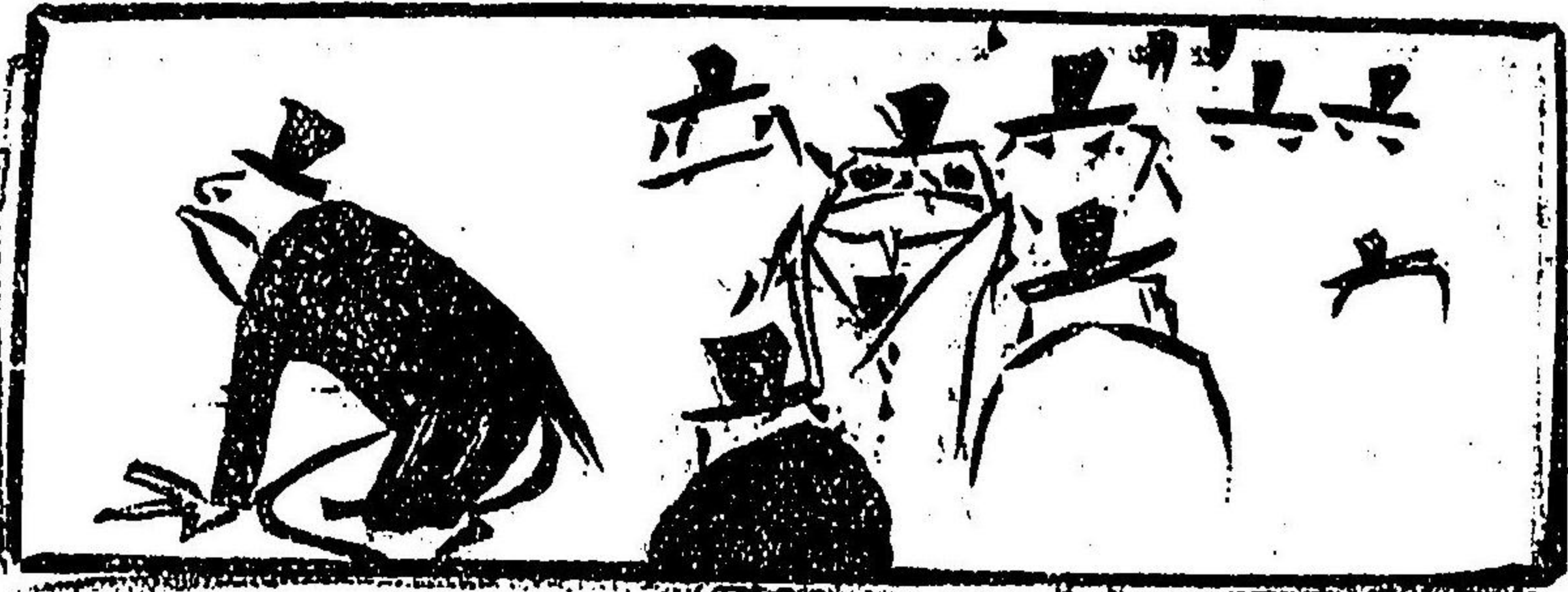
之のまゝなりしと。

覺嚴の奇畫

覺嚴かつて丹波の龜山に遊び、某富豪にゆき點心の接待をうく、應て番頭出てて例なればとて、書なり畫なりの一筆を煩はさんことを請ふ、覺嚴諾して大鉢に墨汁を充たして來らしめ、紙屑を墨汁に浸し、以つて紙の全面を塗りて與ふ、番頭怪んでその何の畫なるかを問ふ、答へて曰く「これは禪家の、闇の夜に鳴かぬ鳥の圖」なりと。

辨慶の味噌汁

義經或る時辨慶に、夕餉には味噌汁を調理せんことを命ぜしかば、辨慶近傍の畑より菜をとり來り、路傍の石地像を刳とし薙刀を持つて、之れを切り居るを義經見て辨慶の拵ふ汁はむさし坊と言ひければ、辨慶直に之れに答へて



池 邊 御 前

左れども君は九郎判官

兆民中井を欺きて某樓にのむ

明治の四奇人の一人なる中井弘、その京都府知事たりし時、兆民飄然と彼れを訪ひ
今晚は僕が君に懇願しようと思つてやつて来た、是から何處へか行かうじやないかと、
二人車を列ねて某樓に登り牛飲馬食す、翌日某樓の番頭中井の邸に至り、中江様の御
命令なりとて昨夜の御勘定をと請ふ、中井はては一杯食はせられしかとて途に之を支
拂ふ。

齋藤彌九郎微を責む

幕府の劍客に齋藤彌九郎といふものあり、其の子弟に對する嚴正剛直、小過といへ
ども敢へて假借せず、曾つて門生の池中の小魚一尾を請ふものありしかば、彌九郎見
々として諾せしも、其の去るにのぞみて魚を検せしに、數尾の鯉魚皆尺餘に及ぶもの



池 邊 御 前

なりしかば、彌九郎大に叱して曰く、若し初めより請はば大魚數百といへども吾れ何
ぞ許さざらん、然るに汝請ふところは小にして獲るところは此の如く大なるは、是れ
我れを欺くなりと嚴重して措かず、某頓首謝罪して去る。

一休魚を引導す

一日一休長老の魚を食するを見て其の故を問ひ、且つ其の引導の法を學ぶ、其の引
導に由く

汝元來枯木の如し、助けんとすれども生て再び游泳すること能はず、愚僧に服さ
れて佛果を得よ喝。

一休翌日漁家にゆきて一尾の鯉魚を得て歸り之を祖上にゆく、魚躍りて潑刺たり、
一休右手に刀を握り引導して由く

汝元來生木の如し、助けんとすれば逃げんとす、生きて水中に游がんよりは如か
じ愚僧が養となれ喝。



滑稽百話

白隠禪師の糞をくらへ

白隠和尚がつて東海道を過ぐる時、旅僧一人横道より出て來り、突然禪師に向つて釋迦の親はと問ひしかば、禪師聲に應じて答へて曰く「糞をくらへ」。

兆民の香奠

兆民會つて其友人の病死せしとき、直に黒水引と白紙一枚とを懷にして、其の宅を訪ひ、未亡人に對して丁寧に吊辭を陳べし後、別室に案内を乞うて金二圓を借り、相済みませぬと言ひつつ別室に赴きしが、廳で懷中より黒水引と白紙とをとりいだして、只今借りし二圓を包み、靈前に戻りて再び未亡人に向ひ、これは香奠のしるしなれば御受けとり下され」。

高山正之の豪放

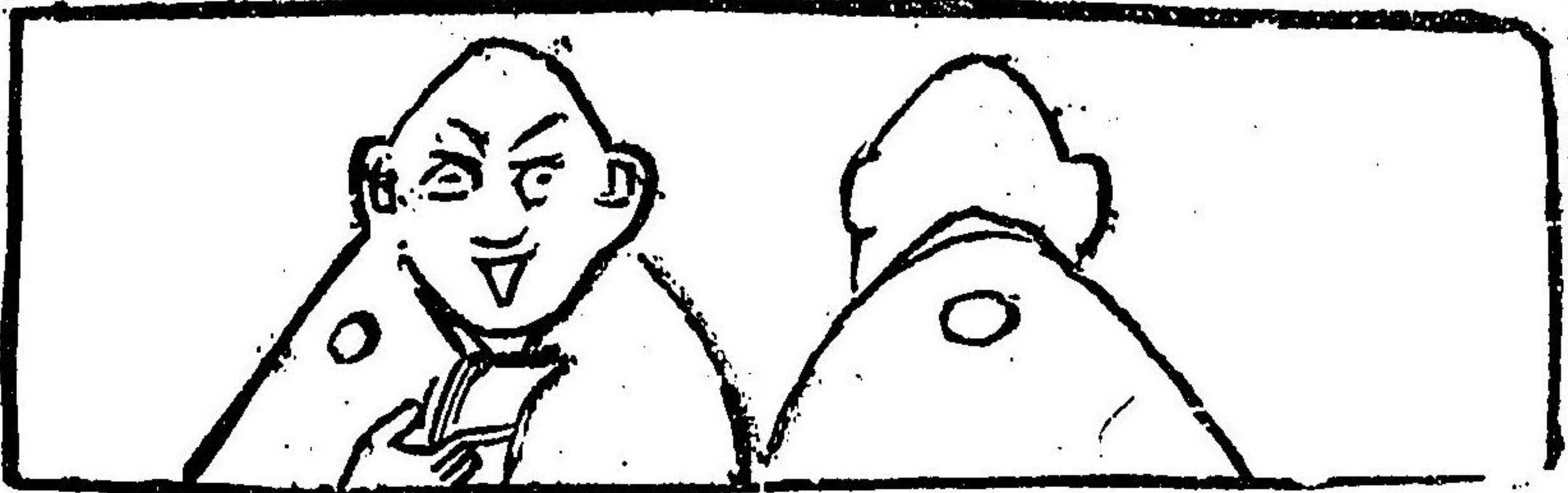
高山正之年十六にして始めて江戸に出でし時、金二百文を殘して晝餉の料とし、他はすべて書籍購求に費しての歸路、板橋の古物屋に古本あるを見て去るに忍びず、晝餉に殘せし二百文を以つて之を買ひ、共に之を負うて晝餉を食はず、行くこと二十里家にかへるや大に飢えたりとて草鞋をもぬがずして廊下に腰打ちかけて膝に向ひたりとぞ。

大石良雄足の指をなむ

薩摩の人喜劍なるものあり、かつて京都の某妓樓に登り、良雄が妓を擁してたわいもなきを見て快からず、ひそかに良雄を一室に招きて復仇のことを願したれども、良雄何等感じたる機なきに、更らに直言勸告したれども、良雄放高笑して、承服するの色なきを見て大に怒り、汝は犬武士なり我れ汝を遇するに犬を以つてせんと、魚内を足の指にて挟み、良雄の面前に出して之を食せしむ、良雄匍匐首をたれて之を食ひ、且舌を出して喜劍が足の指を嘗む。



滑稽百話



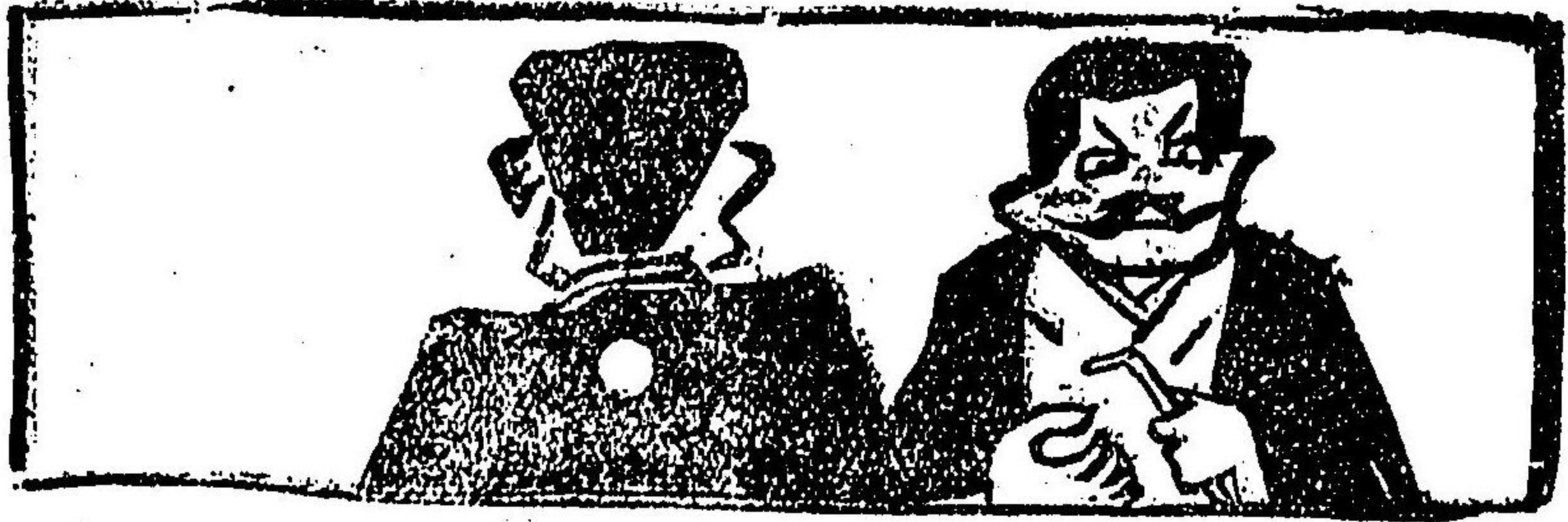
善光 善光

芭蕉孝子に恵む

芭蕉かつて吉野の花を見んとて大和に入り、竹内村を過ぎし時、孝女今家貧にして
離く父母を養ふときき、訪ひて其の貧なるを憐み、囊を探つて金一兩を與ふ、爲めに
旅費盡きて歸途につさけるを、或は多年吉野の花を見んと欲せられしを、と問ひけれ
ば、芭蕉は笑つて「我れ吉野に遊ばんとするは花の美を賞せんがためなり、今人の美
を見ることを得たり、何の遺憾かあらん、吉野の花は來年も亦開くべし」と答へしと
ぞ。

大名竹

宇和島侯伊達春山、かつて園中の大名竹を指して其の名の起りを問はれければ、晦
庵師答へて曰く
「徳らに大にして用ふる所なきによれり」。



善光 善光

おどけ善光

善光は曹洞宗の尊宿なり、平生奇行多く、人稱して、おどけ善光といふ、かつて紀
州に行脚し一日密柑林の下を過ぎし時、密柑を仰いで其の何物たるかを知らざるもの
の如し、一農夫これを見て一顆をとつて與ふ、善光何物なるかを問ひ、且つ皮ながら
食はんとするに、農夫その密柑なることを告げ、皮を去りて食すべきことを教ふ、善
光舌鼓鳴らして食せしが、まさに去らんとするや、皮を拾ひ集めて行李の中に收む、
農夫その皮を捨てんことを告げしかば、善光首を振つて、これの皮が陳皮ぢや。

誠拙伊達侯の頭を打つ

宇和島城主伊達侯靈印と閑談の時、誠拙をして背をうたしめ、且約して曰く、明年
江戸より歸る時は良き法衣を携へて汝に與へんと、のち江戸より歸り、まだ寺に來り
て誠拙をして背をうたしむ、誠拙即ち侯が前約如何と問ひしに、侯全く忘れたりと答

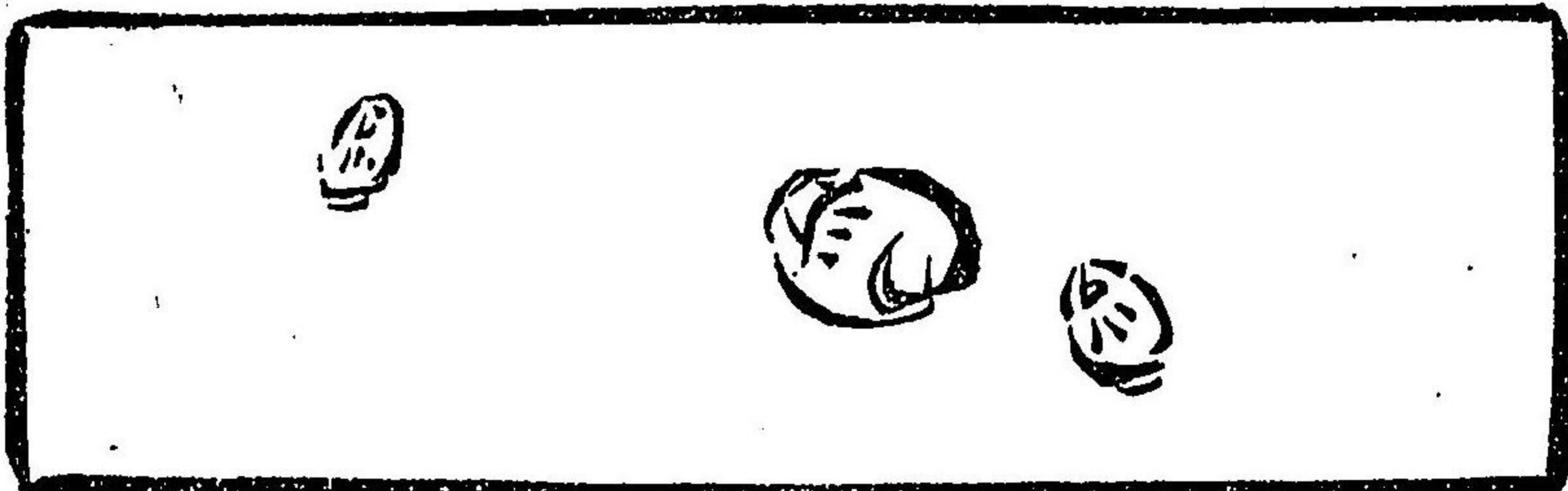


清 稽 百 話

へられしかば、誠拙聲を勵まして、武士に似合ぬ二言の奴と、痛くその頭をうつて去る。

清正利休に服す

加藤清正秀吉が茶道にふけるを、武事に害ありとて再参謀めしもさかざりしかば、此の上は利休を殺して禍根を断んと、欺りて利休の門に入り茶枝を學ばんことを乞ふ利休大によろこび、茶室に請し入るゝにあたり、脇差を茶室外にてとくべきことを諭しけるに、清正儼然として、刀劍は武士の魂なれば、清正に於ては茶室と否とを論ぜず、瞬間も放し難しと言ひ放ちければ、利休笑ひてゆるしぬ、清正隙あらば刺し殺さんと、利休が式を目も放さず熟視するに、利休從容として釜をあぐれば釜盾となり、火箸をとれば火箸盾となりて、寸分の隙間もなきに、こは如何にと異しむ折柄、利休釜をとりて忽ち爐中に覆へせしかば、灰飛びて室内にみち、目鼻に入りて堪へられず清正前庭に飛び出てたり、此處に於て利休清正が殘し、脇差とりて清正を呼び、言葉



清 稽 百 話

静かに、加藤殿武士の魂は如何せられし、かくても我れを殺さんとせらるゝかと言ひければ、清正大に愧ぢ、且つ茶道の心膽を鍊るものなることを知り、利休に師事してそれより茶道を學びしといふ。

物外の畫賛

三原侯かつて畫工を召して席畫を作らしめし時、畫工雁一羽を畫さしかば、侯怫然として曰く、雁は群をなすものなり、今一雁の離れ飛ぶは亂兆なりと言はれしかば、左右急使もて物外を召す、物外たまく來會せし様を装ひ言つて曰く、君愛ひ給ふことなかれとて、筆をとりて「初雁やまたあとからもあとからも」と賛せしかば侯大に喜び給ひしと。

琴谷齒磨を懷にして殿中に入る

山本琴谷龜井侯の奥通を許されしとき、老女より奥御殿に出仕するには、匂袋を



新 百 種 譜

携ふべきことをさき諾して出づ、後出仕せしとき、奥方室内に異臭あるを怪しみ、左右をして之を検せしむ、左右異臭は琴谷の體より出づることを見出せしかば、琴谷低頭して、殿中に伺候するには匂袋を携ふべきよし承れり。由て家に匂ひよき齒磨ありしを以て、之を携へなばよかるべしと思ひ、懐中して伺候せりと、一同抱腹して笑ひ且つ其の滯泊なるを賞し、上等の匂袋を賜はりたり、琴谷家人に語りて曰く、奥方の鼻の敏さには我れ實に驚けりと。

雅信畫を諸記す

狩野雅信は幕府の繪師なり、其の家奥道が書くところの粉本を藏し、殊に禁秘して門人といへども容易に見せしめざりしが、火災にかかりて之を失ふ、偶某侯家に其の家本あるを知り、請うて拳さんことを求めしめゆるされざりしかば、侯家を訪ふこと數回遂に家にありて其の像を畫き了り、之を携へて侯に示す、侯其の筆法秀美彩色鮮麗毫も原畫と異なるなきを怪み、如何によつて書くやを問ふ、答へて曰く、熟視



新 百 種 譜

數回にして之を踏記すと、侯其の志の厚さを賞し、雅信の書くところをとりて原畫を雅信に賜ふ。

山崎闇齋の樂み

會津侯かつて闇齋に問うて曰く、汝が樂みとするところ如何と、答へて曰く

- 一、男子に生れたること、
- 一、大名に生れざりしこと、
- 一、文學隆盛の時代に生れたること、

中江兆民の印絆纏

明治二十二年自由民權の主唱者、大坂に會して慰勞の宴をはかり時、兆民もとより其の會の一員なり、演說順を追うて兆民に至る、即ち意氣揚々として演壇に登るを見れば、其のいてたちや印絆纏に腹掛紺股引。



諸 百 種 活

福島正則悪少年を懲す

福島正則幼名市松、生れて骨相非凡、氣旺に力強し、漸く蠢動するに及ぶや、早く既に器皿を毀つ、母之を憂ひ細を以て腰帯を結び以つて石臼に繋ぐ、然もややもすれば石臼を動かす、七歳の時他に傭役せらる、かつて主命を奉じて事をとる、一個の悪少年あり、年長を頼みて彼れを驅使せんとす、市松曰く我れは汝が僕にあらずと、少年怒りて市松を打つ、市松猛然として手に利刀をとり、一擲して少年の肩上に中つ、流血淋漓として衣を染む、少年號泣して哀を乞ふ、市松更らに鐵拳を其面に加ふ、家を出てて其の暴を詰る、市松自若として答へて曰く、彼れ十六にして微傷に哭し哀を人に乞ふは憐愍むべし、故に鐵拳を加へて之を懲すのみと。

田中正造の残念二つ

田中正造かつて撫然として嘆じて曰く、余が最も残念なるは鐵毒問題の決せぬのと



諸 百 種 活

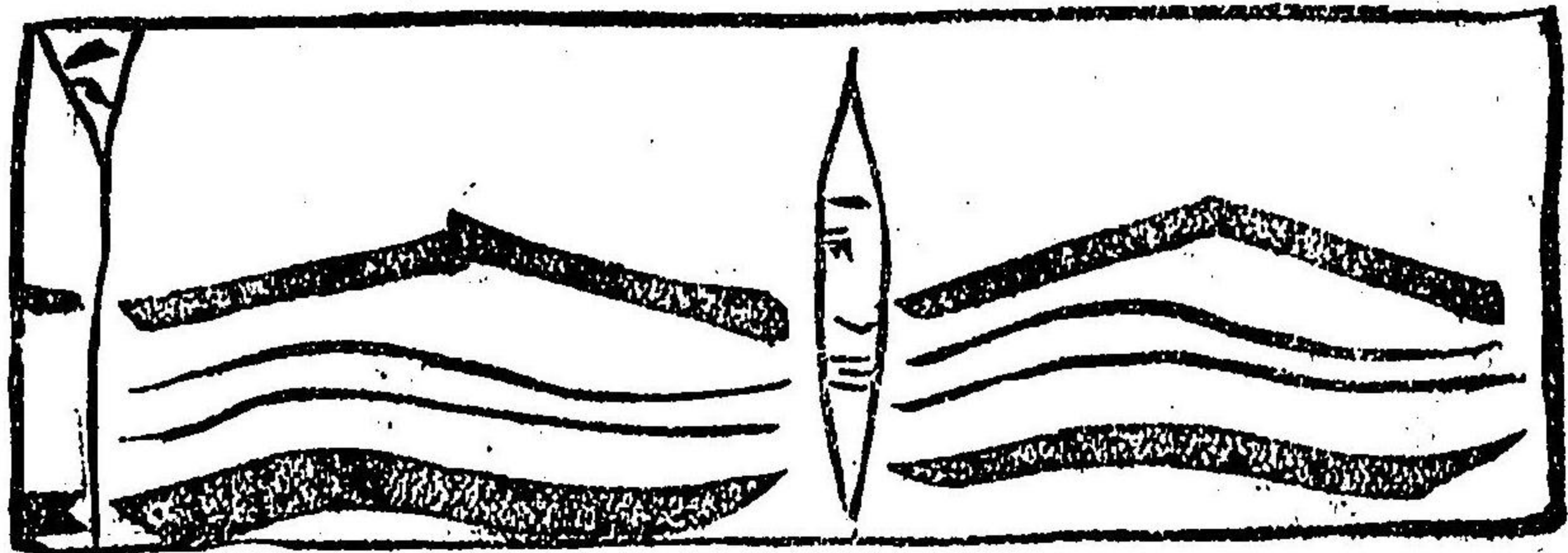
嫁が早く死んで呉れぬのと二つなりと、嫁に早く死んでくれと謂ふは残酷な様なれども、實はソレでない、乃公が生きて居る間に死ねば、葬式も出来るが、乃公が死んだ後では嫁などは構つて呉れるものがないからナト、流石の柄鎮田中正造も此に到つて情迫つて涙潸然。

久米桂一郎西洋人に化く

洋畫家久米桂一郎、容貌風采宛然西洋人の如し、かつて岩村透と相携へて一旗亭に飲むや、桂一郎一洋人に化け澄し、透ために通辯人となる、旗亭のもの一人として其の邦人たるに氣づくものなし、桂一郎得々として去る

諸戸清六の兩大椀

伊勢の資産家、故諸戸清六は常に膳の上には大きな飯椀二個を並べ兩方とも山盛りとなす清六一杯を食し終り其残り一杯の食時中に又一杯も代を盛つて置く、清六元よ



信長 障子

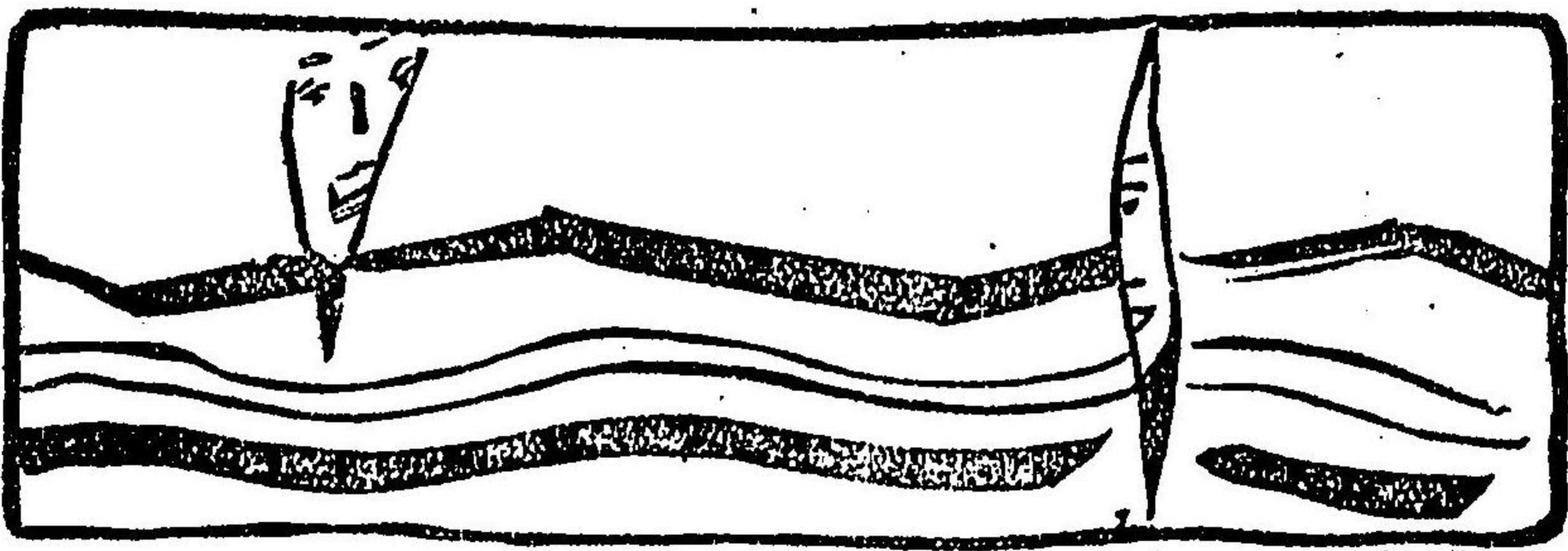
り健啖家なるが、性頗る急なれば、飯盛る隙と雖ども惜んで斯く兩腕を要す、飯どころかい金だつて掻き込まねばウンだよ皆人が食つてしまふからよ」と訓へたり。

澁澤深川八幡の神暴れにあふ

深川の氏神八幡の祭禮に向け澁澤第一より僅か金五圓の奉書紙が舞ひ込み、這は町内の交際までも無にしたる守鏡奴なり、澁澤ともあらふものゝ不都合至極と皆打寄つて頼に觸れ、いよく祭禮の日に神輿を澁澤の玄關に擔ぎ込み神暴れに暴れぬき、澁澤も茲に氣が付き入費百圓を寄附することなして以來、現今でも深川八幡へ百圓づゝ奉納を例とせり、

蘭丸障子を閉づ

信長かつて蘭丸の才を試みんと思ひ、命じて前堂の障子をしめしむ、至れば障子閉づ、蘭丸即ち徐かに障子を開きて急に之を閉づ、晏然として音あり、歸りて復命す、



信長 障子

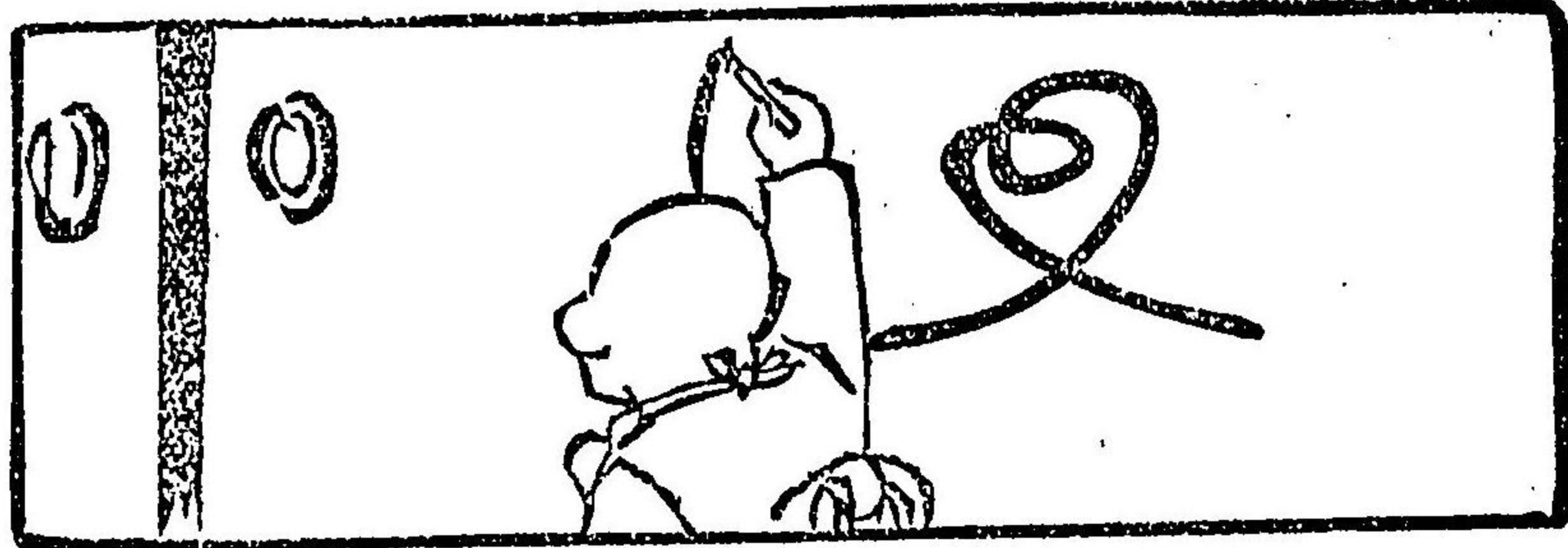
信長障子の開きたりや否やを問ふ、蘭丸跪座して對へて曰く、君命に従ひて前堂に至れば障子既に閉ぢたり、然れども空しくかへらば君命に違はんを恐る、故にことごとくに緩くあげて急に閉ぢたるなりと。

齧牙の奇癖

齧牙一書齋にあり、起居の際唾啖出づれば、直に後を覗て吐く、其の障子壁の何物たるを問はず、唾啖の洗着するところ、あだかも蝸牛の粘封せしが如し。

應舉の習字

圓山應舉は一世の書家なれども、其の書甚だ拙なり、應舉自らも亦其の拙なるを知り、嘗つて己が雅號應舉の二字を、皆川淇園に書せんことを乞ふ、淇園法帖中より二字を抄出し三枚を與ふ、應舉之を得て練習すること殆んど六年、故に應舉の落款常に一樣にして宛然捺印せしが如し、試みに彼此相重ねてすかし見るに、寸毫も異なること



滑 稽 百 話

ころなしと。

金忠輔生首をかけて碁盤に向ふ

金忠輔は仙台の士、かつて旅館に宿せし時、合客等の互に碁を圍むをながめるしが一方の妙手なるに忠輔心憎く思ひて、傍より拙き打ち方よと戯るるに、其のもの怒りてさらば一局試みんと言ふ、忠輔實は生死を辨するに過ぎざれども、今は如何ともせん方なく承諾して、我れ元より好むところなれば、千兩の金を賭けんと言ふに其もの驚きて千兩は愚か今此の場には百兩もなしと言ふ、然らば御身の生首を賭けよとて白石を掴んで碁盤に向ひしかば、忠輔の勢に吞まれて逃げ去りしとぞ。

江藤新平兒童に美菓を與ふ

江藤新平初め赤貧にして、夫妻の衣服にさへ殆んど窮す、然れども子供をして他を羨み自ら賤みて鄙吝の志を生じ、人に長たるの氣を挫かしむべからず」とて其の子



滑 稽 百 話

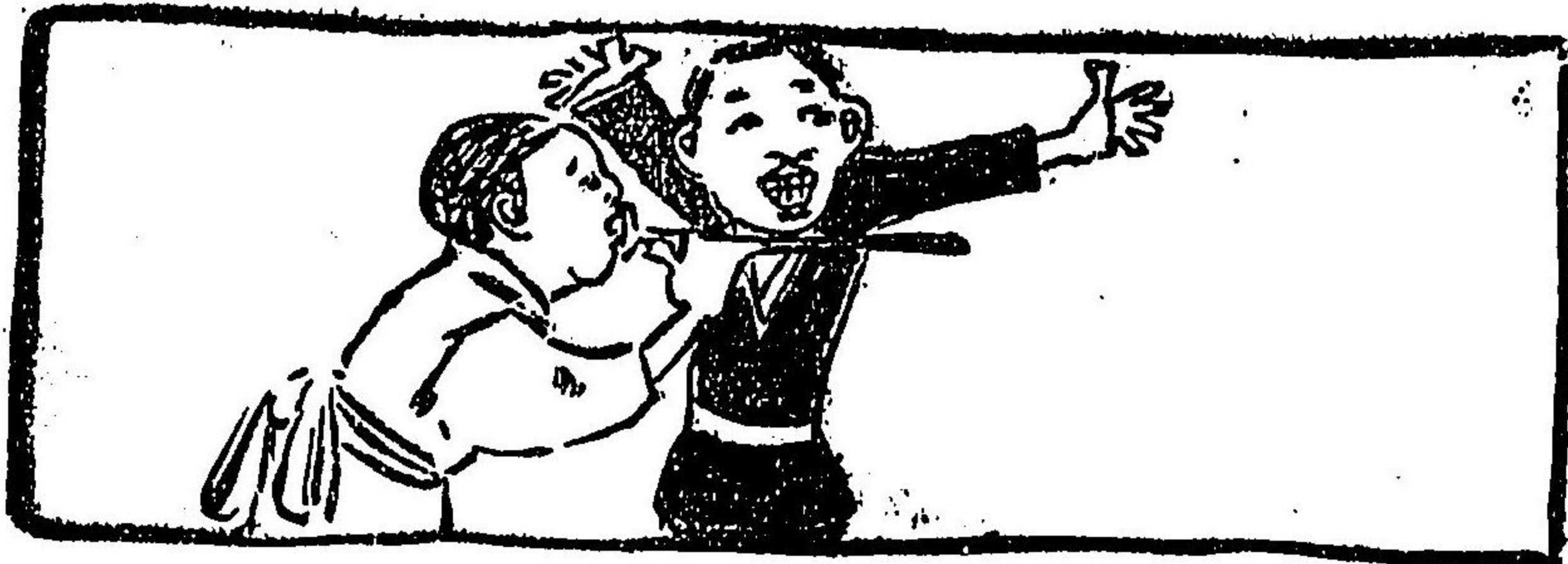
に與ふるに常に最上の菓子を以てす。

白霧山深鳥一聲

郡司則長の女に笹子といふものあり、年十六にして父と共に下野へ下る、父郡司箱根の幽邃なるを見て「蒼波路遠雲千里」を得、苦心慘憺すれども對句を得ず笹子即ち路遠く雲居はるけき山中に
またともさかぬとりの聲かな
よりして構想なされては言ひしかば、それよりして「白霧山深鳥一聲」を得たりと。

岸玄知の風流

岸玄知は雲州の人、或る日近郊に遊び、農家に梅花の今を盛りと咲き揃へるを見て譲りてよと乞ひけれども許さざりければ、強ひて莫大の金を與へて之を買へり、因て酒を携へて其下に遊飲す、されど花落ちて後までも移さざれば、農夫之を促がす、玄

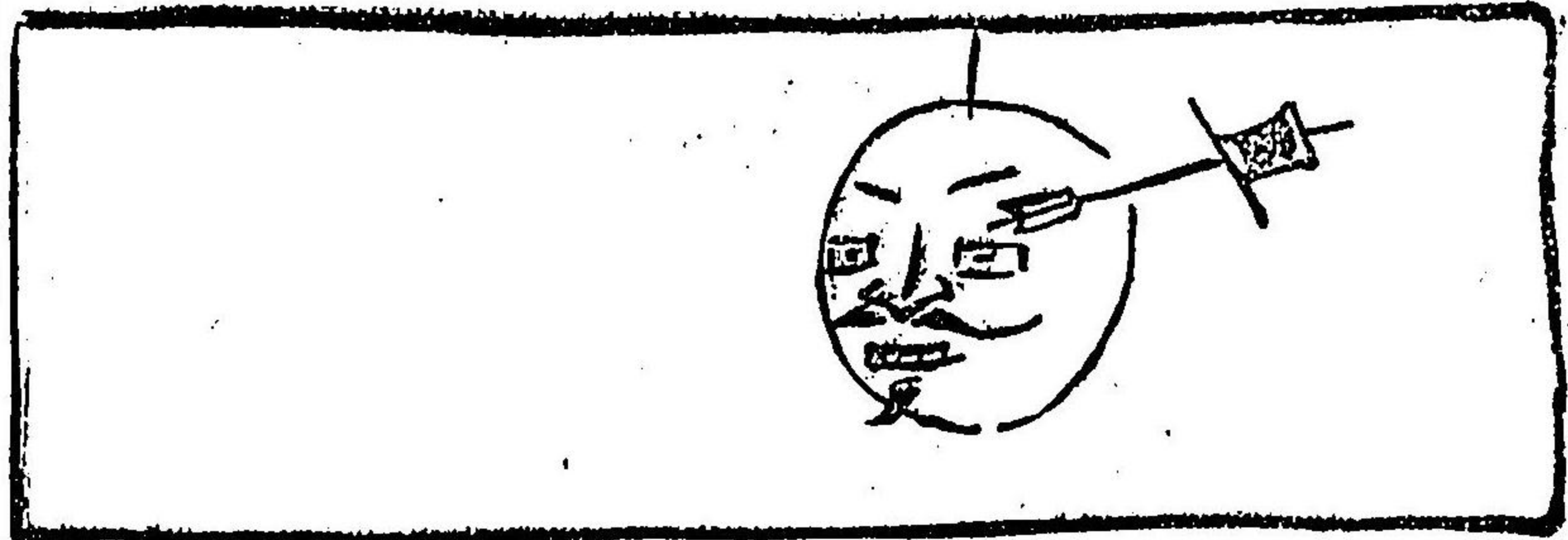


澤 積 百 話

るを以て任とす、享保二年夜半浴室に起り衆相集まりて防ぐ、義観以て敢へて動かず衆之を挽きいださんとす、肯せずして曰く、我れ苟も浴室を守りて火災起る是れ我が過失なり、因て火と共に死せんのみと、衆數回引き出せしま尙さかず、袂をはらつて遂に火に投じて死す。

義齋乞食と衣服をかへて着る

義齋は加賀の人、醫を業とし其の名高し、麻田侯聘して侍醫となす、一日侯病み義齋を召して珍せしめられしが、其の衣の垢弊せるを見て、一領の章服を賜ふ義齋拜謝して出づ、途に乞食ありて病む、義齋餌するに藥を以てし、又其の單衣を着れるを見て章服を脱し之れに與へて去る、明日其の過きて、暴卒數人が乞食を拷問するを見、其の故を問して君家の章服を着るを以て、盜ならんと疑へるに由ることを知り謝して曰く、我が過なりと、即ち己れの衣服を脱して之に與へ、道路に裸立して復乞食の着しところをとり之を服す、観るもの堵をなす、義齋平然として睹ざるが如し。



澤 積 百 話

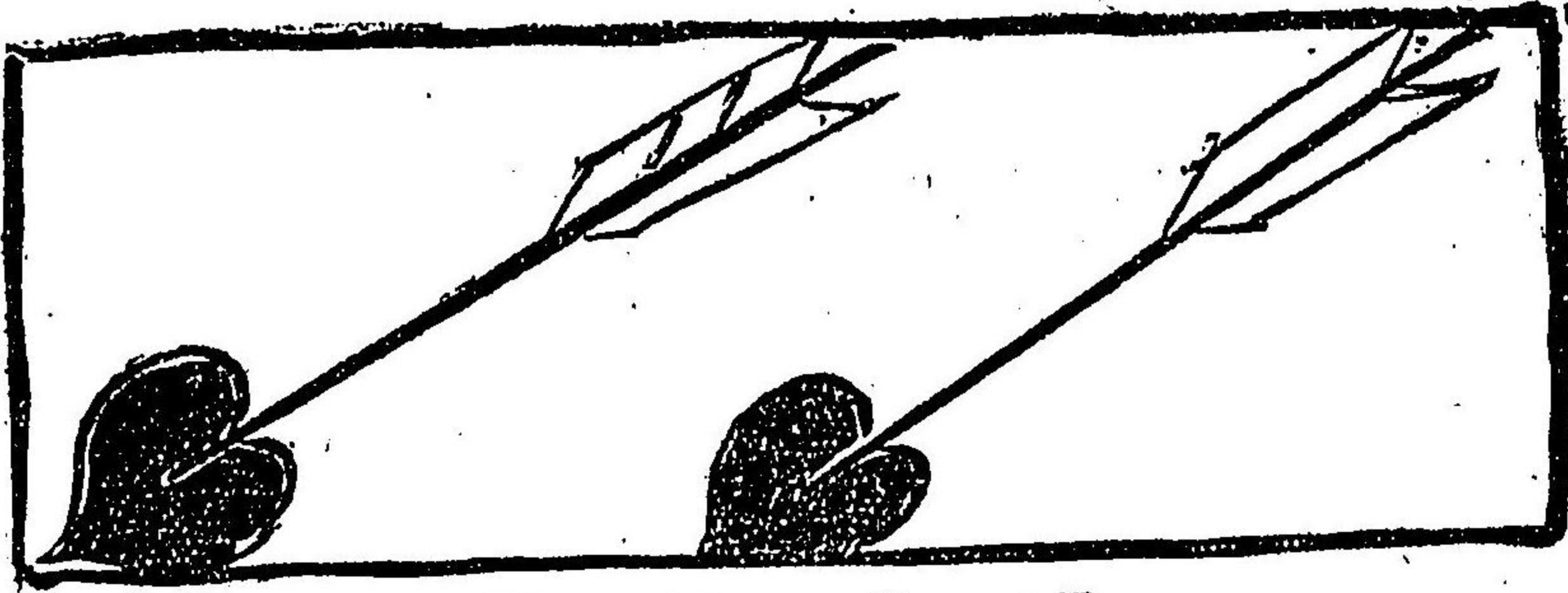
知我が家は狹隘にしてかかる大木を植うる場所なし、其の儘にてと言ひければ然らば實熟しなば送るべしと言ふに、玄知、わが賞するは花にして實にあらざれば實は送るに及ばずと言ふ、然らば代金を返上すべしといへば、玄知、否我がものにあらずれば心に樂みなし、先づ其儘にてかかるべしとて、毎年花の頃は、瓢酒御籠して屢其の下に遊べりとす。

早雲盲目を問者とす

北條早雲小田原をとりし後、盲目は無用なり、小田原領分の盲目法師を擲めて海に沈むべしと言ひしかば、盲目法師等驚いて逃げ散りしが潜かに其の中の或るものを用ひて問者とせり。

義観火に投じて死す

義観は一奇僧なり、寶年永中長崎の臨濟寺にありしが、才學なきを以つて浴室を守



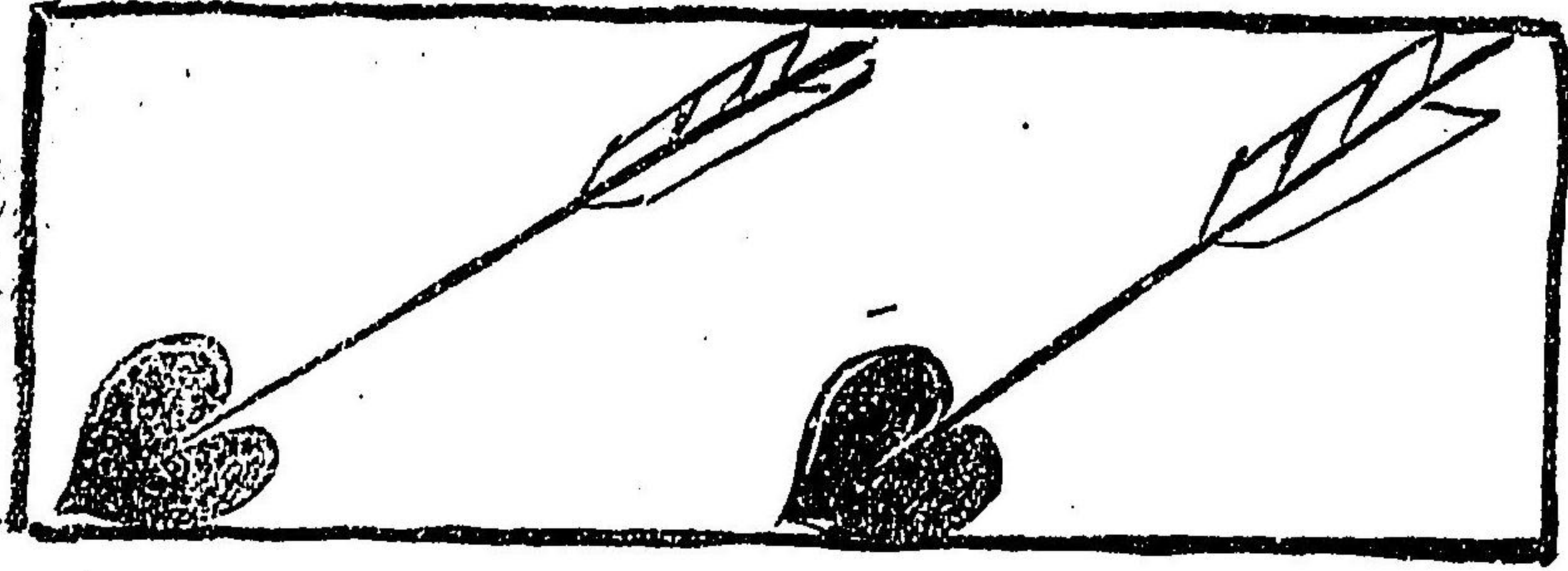
清 種 百 話

龜井重清義經を蹴る

龜井重清義經に従て勇名あり、義經修験者に扮して奥州に下るや、途中花園の観音堂に宿す、偶上月某家一百餘人を率ゐて來り検査す、修験者の一人色白く、年齢亦嘗つて聞く處の義經のそれに類するを怪み、以て義經となす、龜井之を聞き大に聲を勵まして修験者を叱して曰く、咄汝體骨脆弱相伴ふに足らず、只汝人によりて百方請願するが故に、やむなく其の請をゆるす、然ると至るところ汝義經と過たる、今汝を括撃して我等前途の累をとかんとすとて、金剛杖を以て之を打ち蹴つて之を地に倒す上月某の義經ならばかくの如きことをなさざるべしと、疑ひとけて通過をゆるす。

畫家の自信

金井鳥洲普井梅關と友としよし、或る人かつて鳥洲に問うて曰く、先生と梅關と何れが勝れる、答へて曰く、言ふまでもなく我なりと其の人またこれを梅關に問ふ、梅



清 種 百 話

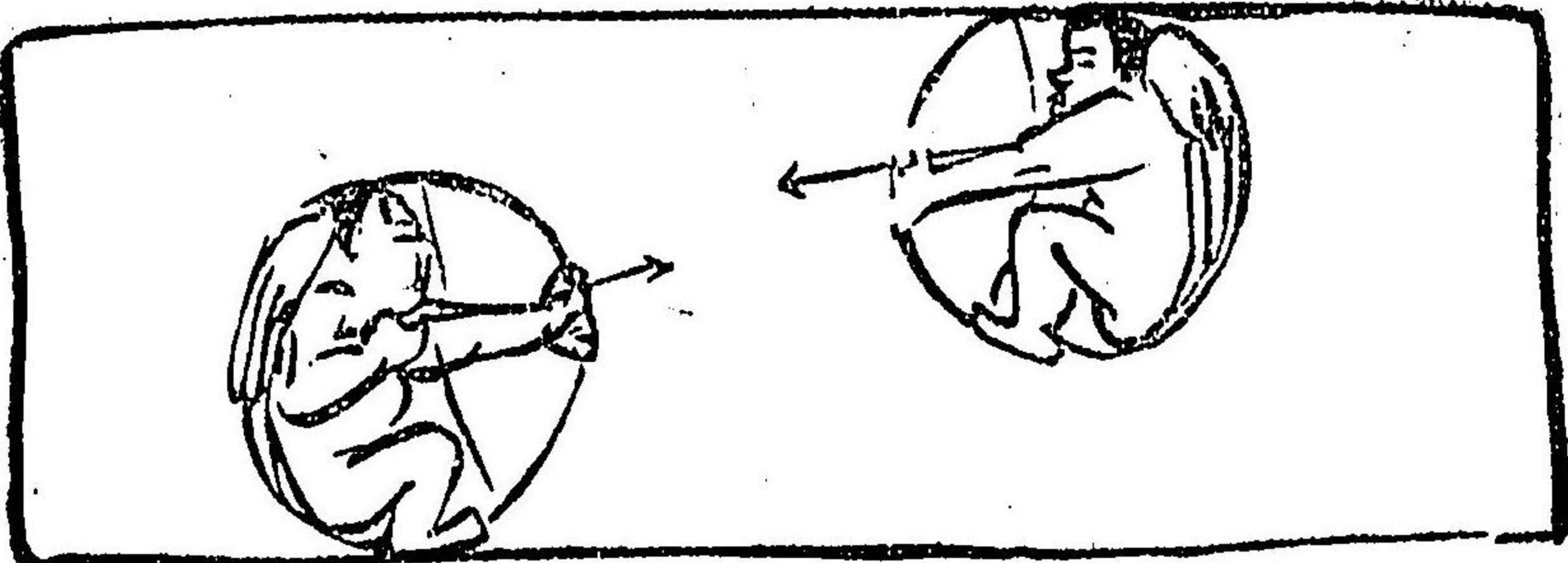
關また勿論我なりと答ふ、其人後二人相會せし時その旨をかたりしに、二人腹をかかへて笑ひなりと。

雪舟縛されながら鼠を畫く

雪舟寶福寺にありし時、佛法を修めずして書を習ふ、師僧之を懲さんとし堂柱に縛せしが、之を解かんとして至りし時、雪舟の膝下に數多の鼠動くを見、之を追はんとせしも鼠動かず、熟視すれば雪舟が縛されながら、脚趾を以て涙を點じ、堂板に描きしものなり、師其の妙なるに驚き、それよりまた戒めず。

花頼父のために門をあけず

川上花頼は舊幕府天守藩金子半三郎の第子、三人となり清能剛直、弱冠にして出て堀田侯の藩士青木某の子となる、某に養女あり、花頼に配す、情好甚だ厚し、花頼一夕邸門に宿衛す、藩法夜子刻を過ぐれば、非常事あるにあらざれば門を開かず、是夜彼



話 百 稽 潘

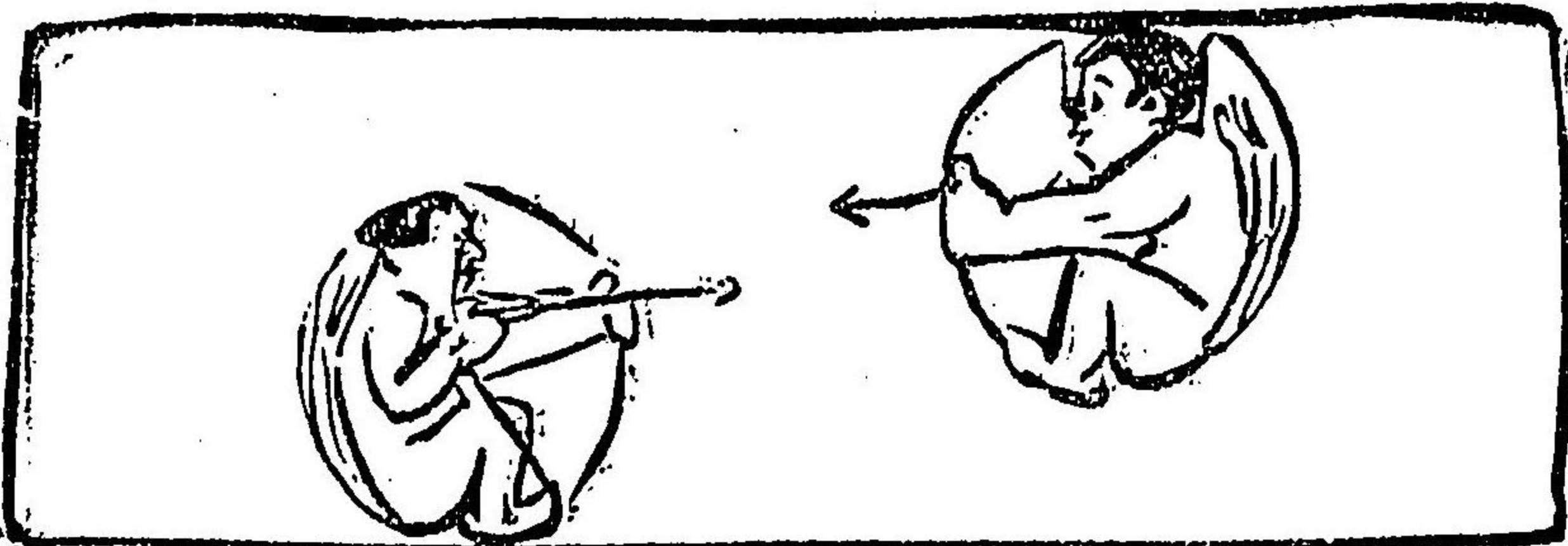
父子刻過ぎに及んで開門を乞ふ、花顔曰く父君歸ること何ぞあるそや、夜已に子刻を直ぐ、甚だ無情に似たれども私情を以て公法を破るべからず、請ふ今夕は親戚又は知己の宅に一宿せられよと、道に門を開かず。

沈南蘋門弟に嚴

沈南蘋は名高き清朝の畫工なり、來りて長崎に在るや門に入るもの多し、先生門下等に言ふやう、足下達畫を學ばんと思はば、またたきもせず余が運筆に注意せよと、畫を作る時一蠅來りて色碟を舐りければ、一門人手を揮つて之を追ひぬ、先生乃ち筆を置いて戒めて曰く、蠅を追へとは誰が言ひしぞ、筆の運びに注意せよといひき、心専らならずと。

長谷川主馬の風流

長谷川主馬は徳川幕府の奉行なり、風流人にして和歌を好む、或る時近郊の農家に



話 百 稽 潘

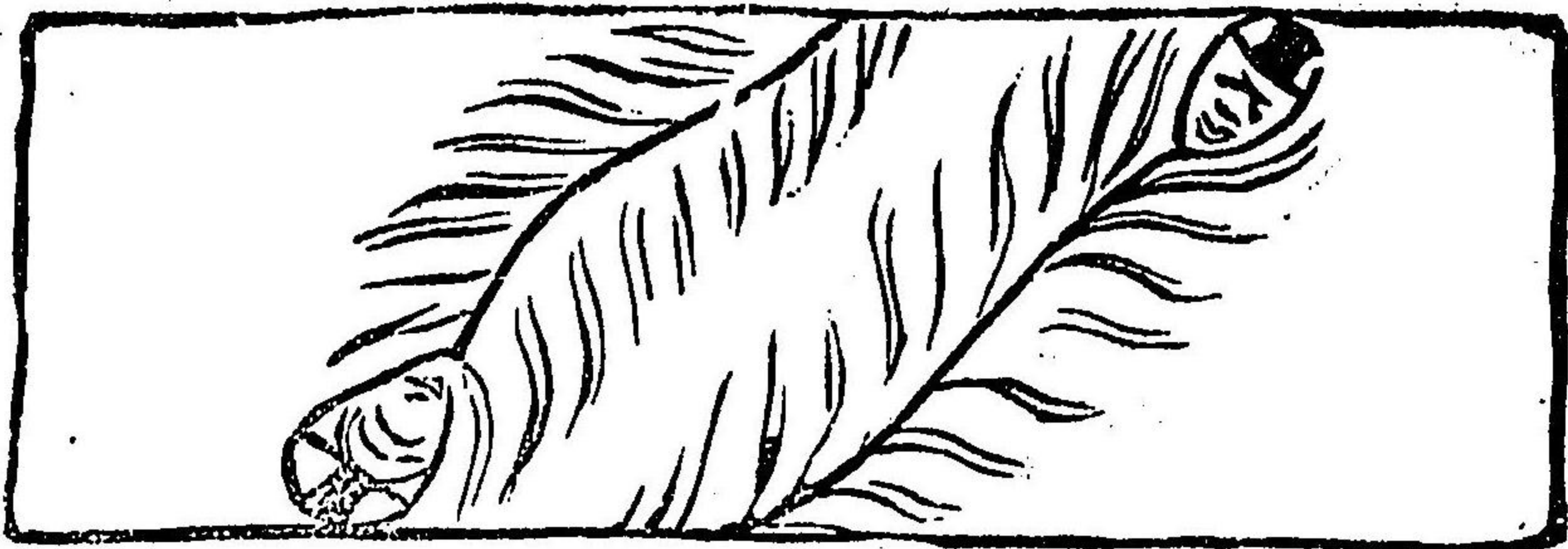
老松を見、大金を出して之を買ひたれども、其の後の消息もなし、一日主馬僕從に酒食をもたせ來りて老松の下に坐し、終日觀賞諷吟してかへりしが、それより春秋晴和の時には、折り折り來りて何時も同じ様なりといふ。

中井履軒の挨拶

中井履軒あるとき兼儒と懷徳書院に會せしとき、ある人その前に進み、人事多忙にして未だ其の門に參せずと謝せしかば、履軒直ちに「あいて下さらぬは幸甚です」。

老人のために讀める也有

横井也存或時老人のため讀めるは、
皺がよるほくろが出来る脊がかいむ
あたまがはげる毛が白くなる。
手はふるふ足はよろつく齒はぬける。



話 百 種 滑

耳はさこそ目はず目はうとくなる。

またしてもまじはなしに孫自慢

達者自慢にふるぎ洒落しよ。

くどくなる氣短かになる愚痴になる

思ひつくことみなふるくなる。

身に添ふは頭巾えりまさつを目鏡

湯婆温石にしよびんまごの手。

聞きたかる死にともながるさびしがる

出しやがりたがる世話焼たがる。

宵寐朝寐晝寐ものぐさ物わすれ

それこそよけれ世に立ぬ身は。

和尙の狂歌



話 百 種 滑

奥平大膳太夫殿尙ほ幼少の時、本所あたりへ遊山して萩寺に休息せられければ、住僧厚くもてなしぬ、然るを家臣の遣はせし目録僅か百疋なりしかば、これは餘りにかたじけなしとて直に筆をとり、一首の狂歌を短冊に認め、若君に御禮なりとて御目通のをり、直に御手許に出したり、されど幼少の事とて一覽もなされず、其の儘懐中して歸館の後、萩寺の和尙が斯様のものを呉れたりとて、御側向の家臣に渡されたるを見れば

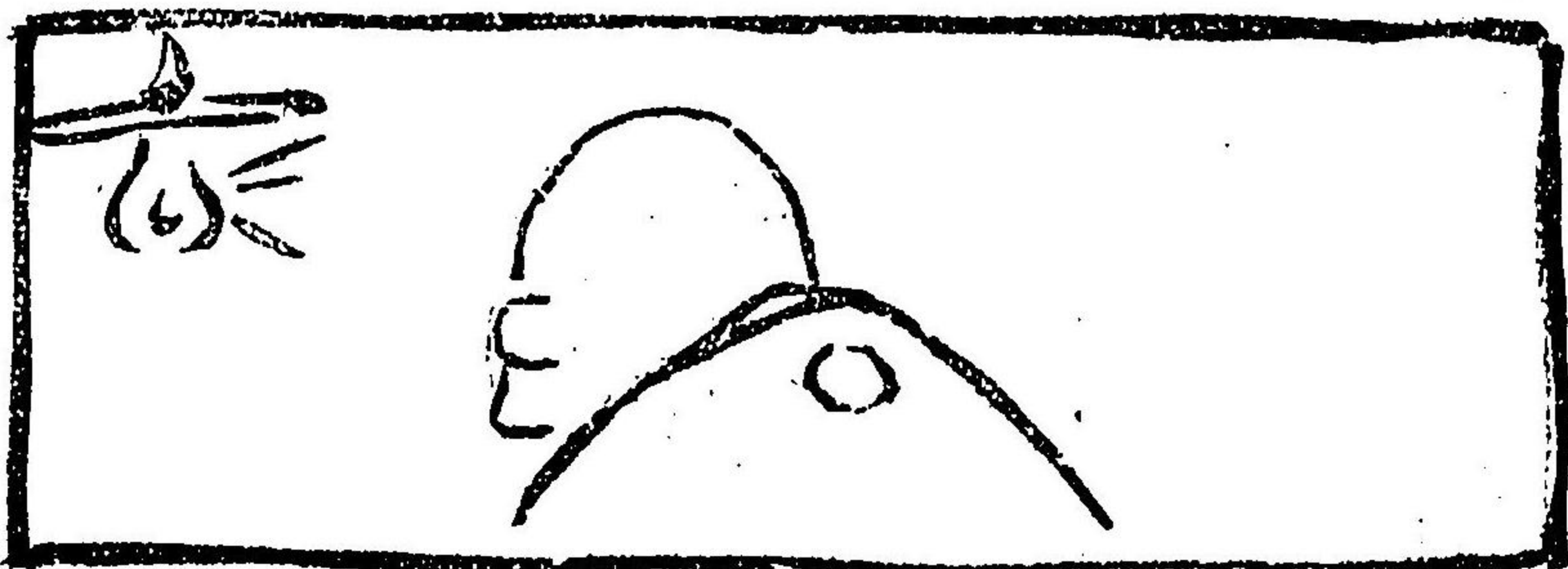
大膳が太夫くれると思ひしに

たつた百疋あくだいらさま

とありければ、若君大に笑ひ給ひ、使者もて金五枚を贈られたりと。

大綱和尙の瓢畫に賛す

瓢々汝眞瓜の位もなく、西瓜の暑をはらう徳もなし、然れども氣の輕く、中ひなしくして無欲なれば、仙人も汝を友として酒を入れて腰に携へ、あるは駒を出してたの



話 有 稽 滑

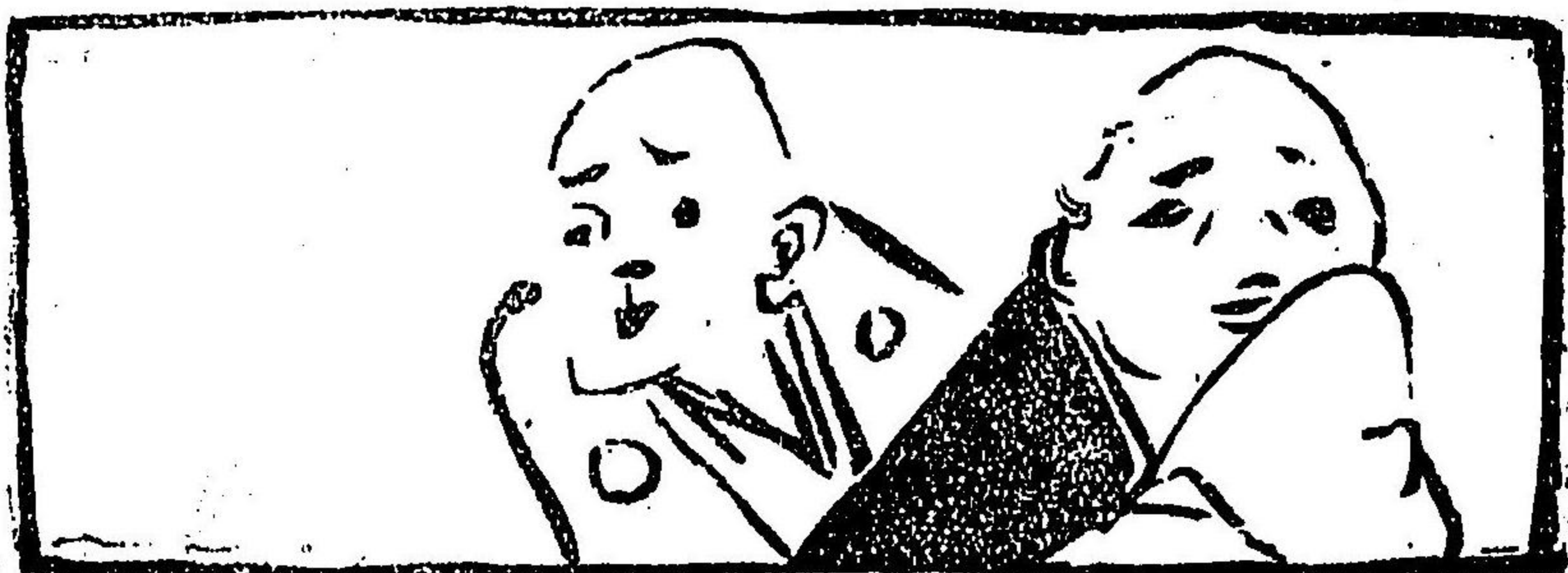
一三四
めり、汝瓜の類にありて痘すの難にあはざるは智也、怒を押へてのがさしむるは仁也
羽柴公の馬印となりて強敵をくだくは勇なり、汝性は善なりといふべし。

うかうかとかくらすやうても瓢箪の

胸のあたりにしめくくりあり。

歌津右工門の失敗

中村歌津右工門が中芝居の座頭たりし時、讃州金毘羅に買はれてゆき、狂言の海雪に、歌津右工門伊豆守と團九郎をつとめ、後の片市、その頃は蝶十郎と呼びて、大膳と正宗をつとめしが、歌津右工門鍛冶屋の場にて、無き等の右手を出せしかば、観客承知せず、手が生へた手が生へたと言ふ、歌津右工門吃驚して左手をかきす、観客又騒ぎ出して、それでは手が違ふといふ、歌津右工門愈々戸迷ひ、右やら左やら知れなくなり、右を出したり左を出したり、無茶苦茶に演じて一幕を無茶苦茶にする。



話 有 稽 滑

久保了寛舟を吞まず

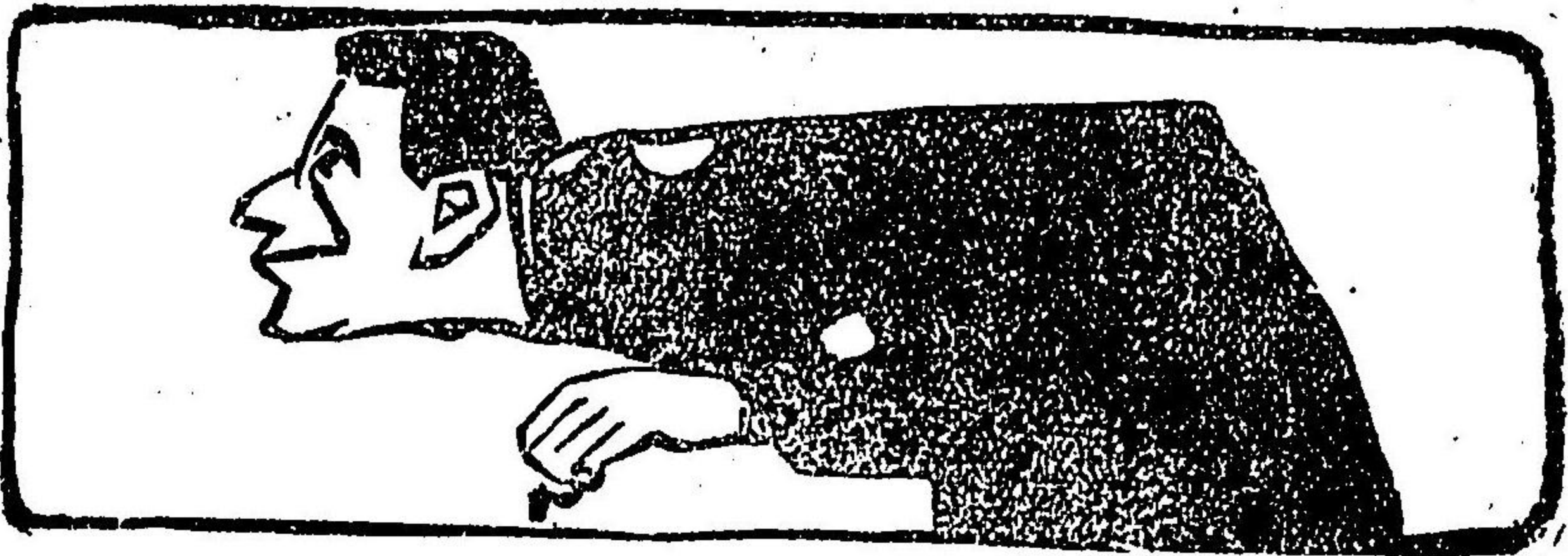
久保了寛諸州巡教の途次、某海を航するとき一旅僧と乗合す、了寛好旅伴を得たりと喜びしも、旅僧甚だ愛色あり、默然晏臥していまだ一語を發せず、舟子其の舟に酔へらるなんと思ひ、了寛に向ひ、私尙様達でも船に酔ひますかいと、いふ言葉の下より、了寛「私達はまだ船を呑んだことがありませんから、酔つたこともありません」。

覺二の狂歌

覺二は黄檗宗の高僧なるが、病んで太田見良の家に入りしとき、其妻をめぐしく看病しければ

女ほど芽出度きものは又もなし

釋迦も達磨もひよい／＼と生む。

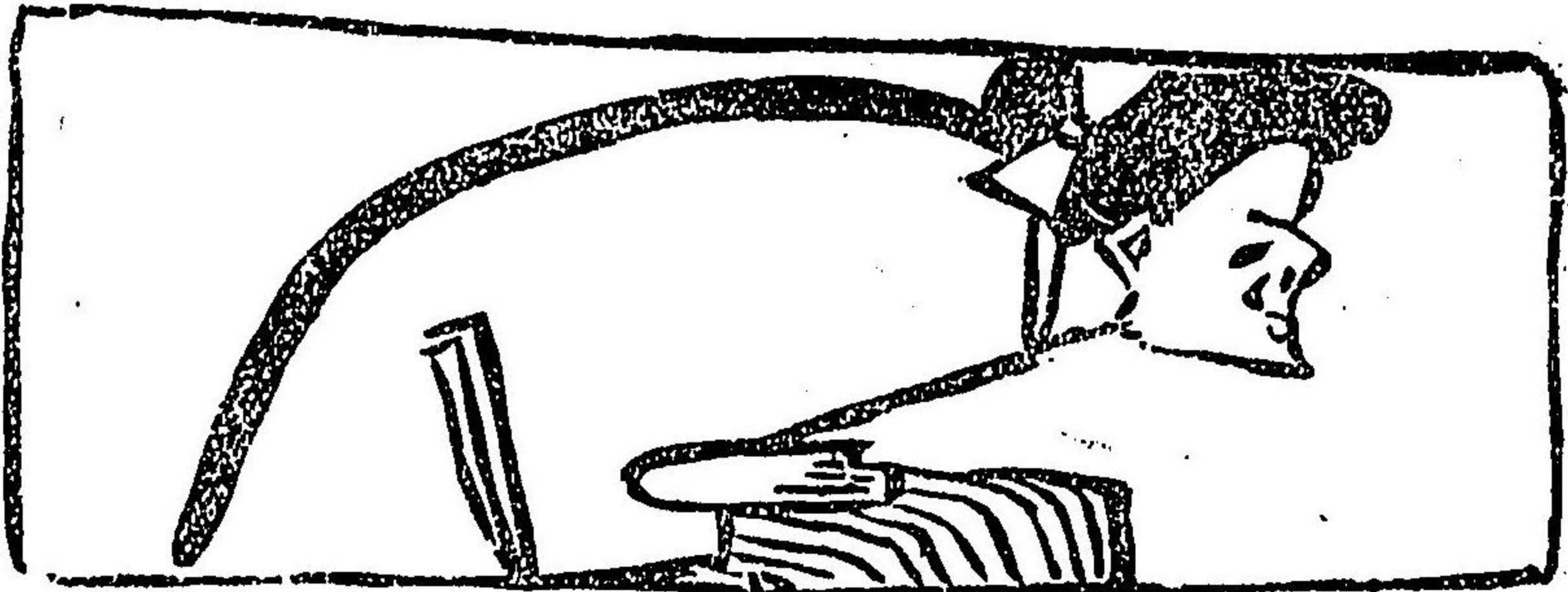


滑稽百話

守田寶丹不老不死の妙薬試験は大失敗す

一三六

守田寶丹若年の頃、天保の飢饉より思ひつきて、腹の空らぬ妙薬を拵へしが、試験の上ならては安心して賣り出す譯には行かず、誰れか正直な者を試験機に頼まんと苦心の末、雇入れしばかりの田舎者にて秩父の榮助といふ男を召んで委細を話し「御禮には寢しなにも酒を二合づつ飲ませるから、二三日御飯を廢して此の薬ばかり服て下さい、そして腹の空るか空かぬかは、お世辭なしに言つて呉れなければ可けません」と頼みしに、榮助は快く「何も御奉公ですからやつてみませう」と引き受けたり、依つて寶丹は約束通り二合の寢酒と薬の一片とを榮助に宛行ひ、翌日正午過に至りて「どうですお腹鹽梅は」と尋ねれば「どうも不思議です、少しも空腹くございませんと、答ふるに寶丹大に悦び、其の晩も又其の翌晩も、酒と薬とを宛行ふに、不思議に腹が空らぬと言ひ、又別段疲も見えざるに、之では今二日も試験せば賣出してもよからんと、夫々大仕掛の製薬したり、然るに其の翌朝、水仕女のお竹寶丹の前に至りて



滑稽百話

「若旦那様いけませんよ榮助んは、お酒を飲みたいもんだから、彼のお薬を戴くとお腹が空かない」と言つてますけれども、夜半になると御臺所へ御飯を盗みに参りますよ、モウモウ之からお酒も飲ませては可ませんよ」と注進したれば、折角の妙薬の試験、遂に大失敗に終りぬ。

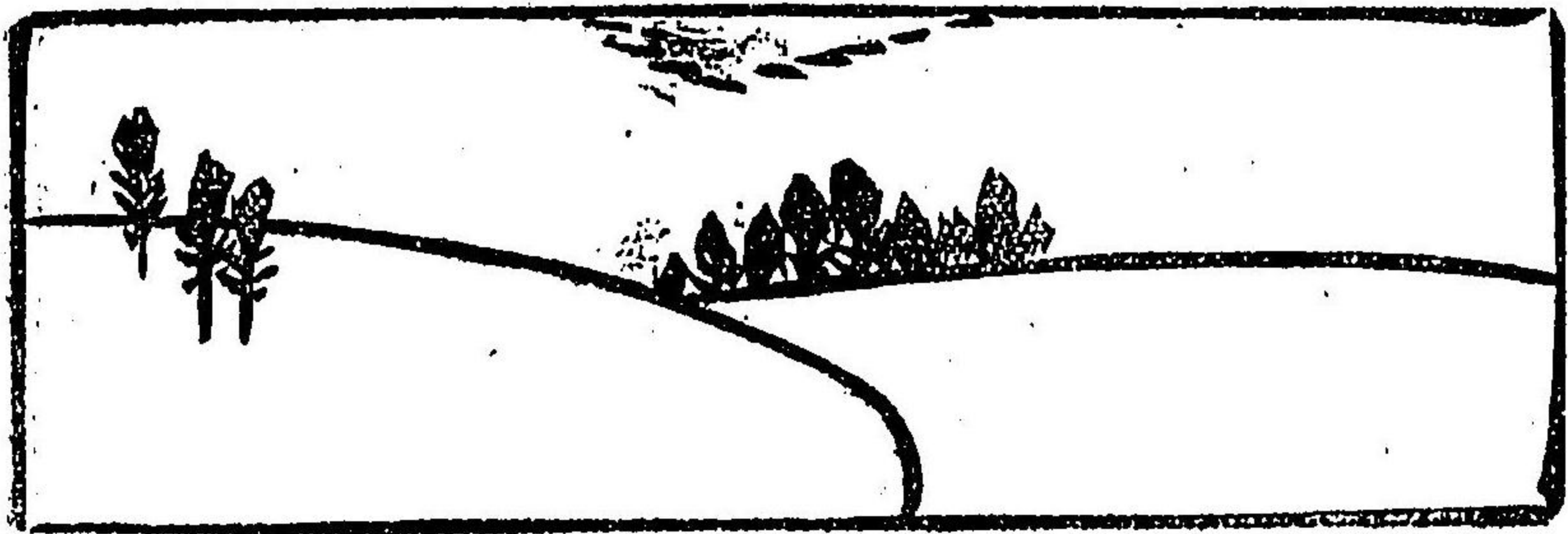
山岡鐵舟赤子居士に答ふ

赤子居士といふもの、山岡鐵舟に書を送つて日本の宗教と支那の宗教と何れがよろしきやと問ふ、鐵舟直に筆をとりて、慈母が乳房二つを出して子供を招く所を畫き、右の乳房には日本、左の乳房には支那と書し、又其の下に「赤子これを嘗めて知れ」

原坦山の奇譚

原坦山或る時麻布の大學林の演説會に於て、學術の進歩を論ぜし時、「昔は雷を鳴る神様というて恐れしが尊んだが、今は迷信省の御備だ」。

一三七



唐衣橋洲

橘洲肖像の賛

唐衣橋洲かつて己れの肖像に賛して曰く
青雲の志は花鳥にうばはれ、白雲の情は風月にいざなはれて、あけては酌み、くれば飲み、たゞ醉靡に身をあふらし壺中の天地を睥睨して、つひ白髮の年とはなりぬ。

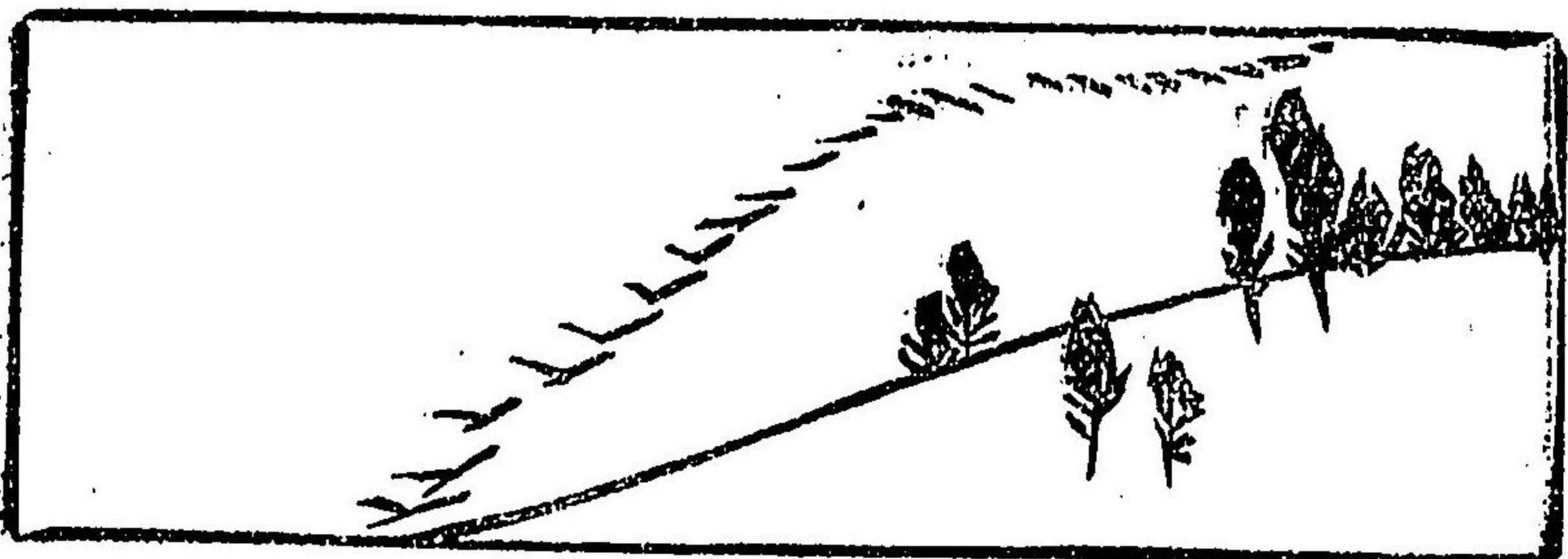
いたずらにたゞの親父となり瓢

身の能とは酒の入れもの。

勝海舟贋作を大切にす

勝海舟自筆の贋作を某書齋に求め、常に壁間に貼して之れに對す、人其の故を問ふあれば即ち曰く

贋作の方が自分のより餘程うまいから大切にすのだ。



橋元峯山

橋元峯山義堂に叱せらる

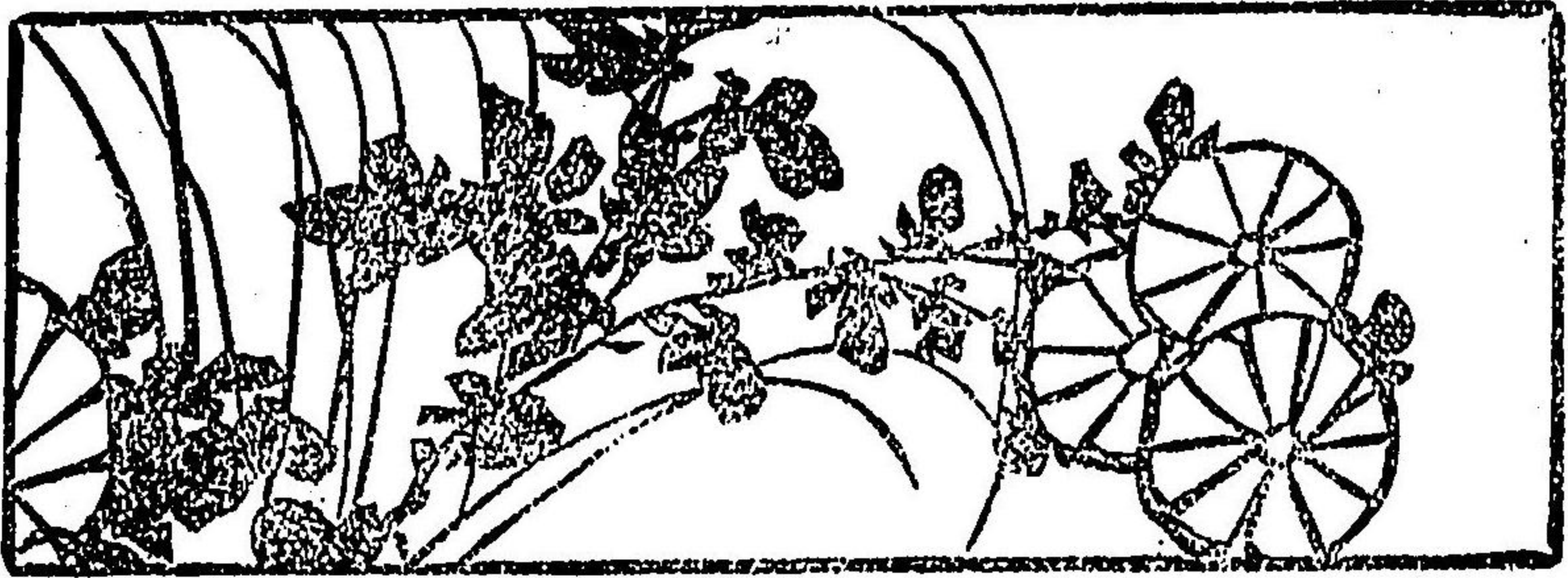
橋元峯山年甫めて十二の時、義堂の床上にかかれる出釋迎の軸を見て笑つて曰く「これは狩野永樂の筆だが、あんまり筆数が多くてはいけません」と、其の聲いまだ終らざるに、義堂の大喝して曰く「それは貴評の口数が多いためであらふ」。

志賀理齋の庵

志賀理齋は舊幕府の御金藏奉行を勤めし人にて、老後下谷中町のほとりに住す、閑靜の地にして晝といへども狐狸庭に出て戯れ、夜は水溪、木菟など來り訪ふあり、理齋これも君の御恵によれりとして

腹鼓うちのひろさも野狐の

さんたまほどの庵なりけり。



話 百 種 昔

西有穆山達磨遊女對面の圖に賛す

或る人達磨遊女對面の圖を携へて穆山を訪ひ賛を求めければ
九年面壁何のその、わたしも十年浮き勤め、煩惱菩薩の二筋に、わたしや誠の一筋
を、加へて三筋で日を暮らし、糸が切れたら成佛と、客の相手にたのみなみだ、濟度
なさるとなさらぬは、それはあなたの御了見、外に餘念はないわいな。

岸玄知近松を見る

岸玄知會つて出雲候に従ひ江戸に至る、開眼ありといへども一度も出て遊ばず、一
日少暇を乞ひ、一分金を封じて近松門左衛門の家を訪ひ、刺を通じて見んことを求む
近松出て迎ふ、玄知則ち封金を飽り注視之を久しくしてかへる、近松驚いて其の來る
所以を問ふ。玄知曰く、足下淨瑠璃の曲を作るに妙なる、聲號の高き、子供といへど
もよく之を知る、是を以つて予久しく鳳眉を拜せんとす、今幸に見るを得、宿望終れ

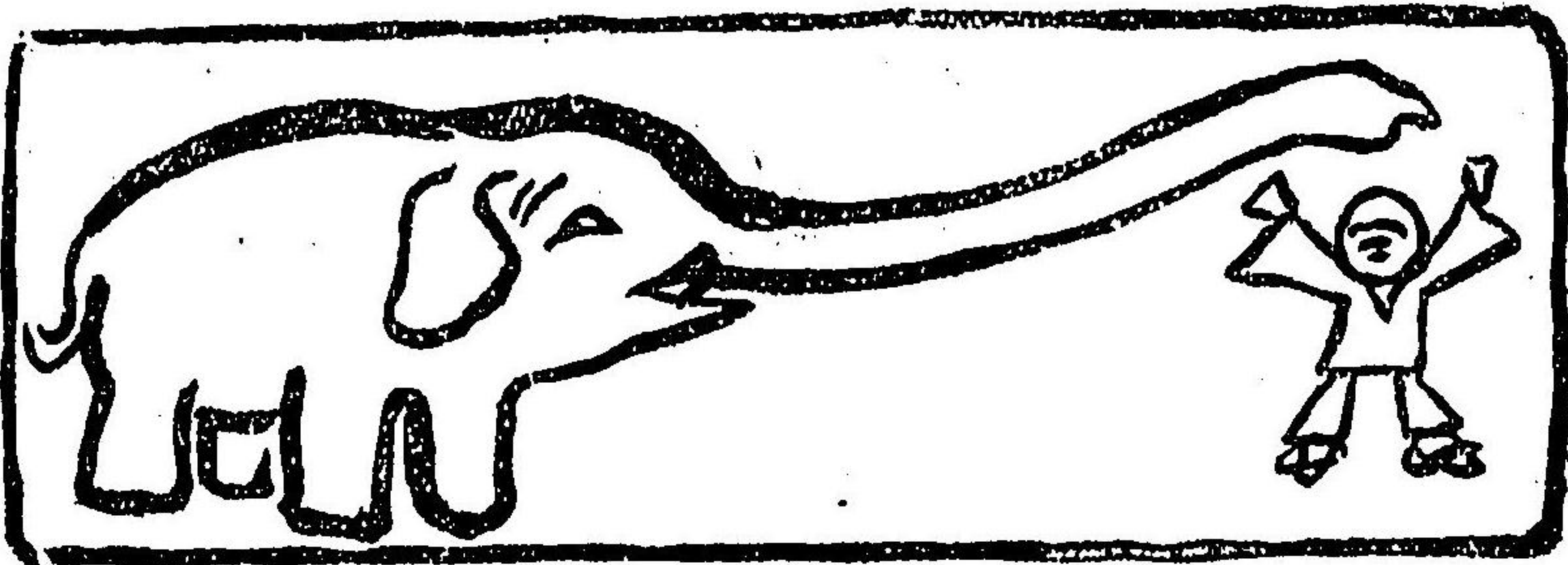
りとして出て去る。

義齋棺より飛び出す

義齋致任せんことを乞ふ、麻田侯ゆるさず、即ち病と稱すること三四日、人をして
報せしめて曰く、義齋死すと、侯吏をして行いて檢せしむ、義齋大に困しみしも、棺
内に臥し屏息して死を装ふ、吏以て信となす、隣里葬を送るもの數十人、義齋出づる
こと能はずして遂に葬所に至る、僧讀經を終へて將に之れに火せんとす、義齋即ち棺
を蹴破りて躍り出て、大に叫んで曰く、義齋命數未だ盡さず、閻魔王我れを放棄すと
遂に走りて岡村にかくる。

狩野探幽馬履にて畫を作る

狩野探幽は狩野家中興の祖、生れて三才、父孝信試みに筆を興ふれば啼き止む、皆
之を奇とす、四才にして筆をとりて紙に點ずるに殆んど皆熟するもの如し、其の法



話 百 種 滑

院に敘せられ、食色を加賜せらるるの後、一日仙台侯伊達正宗探幽をして七尺の金屏風
に書かしむ、探幽大に墨を硯池に堪へ、馬履を其の中に浸し、金屏風を凝ばして数個
所に馬履形を押し、筆をとつて之を補ふ、侯喜ばずして内に入る、圍坐ために憂色あ
り、探幽悠々として補出すれば即ち馬履は数個の蟹となる、数竿の蘆を添ふるに及ん
で風致横溢す、又他の一齋は唯墨點を數所に散亂せしのみ、然れども書を補ふに及ん
で、遂に數十の飛燕となる。

兆民雨戸を釘付け

兆民かつて裏店住ひせしとき、毎日来客の繁さに堪へず、雨戸をしめて釘付けにし、
來客あるも入るを得ざらしむ、家人といへども亦出入すべからず、乃ち雨戸の下方に
丸き穴をあけ、用ある毎に人をして其の穴より匍ひて出入せしむ、

山崎宗鑑の「金のほしきよ」

山崎宗鑑ある時、逍遙院實際を訪ひし時、實際話しの道手に、といひし昔のしのは
るゝかな」といふ句は何の古歌の下句となしても、意味連続して、感慨其の古歌より
も深し、例へば「田の浦へうちらいて見れば白妙のといひしむかしのしのはるゝかな」
といへば、赤人が田子の浦より富士をながめし昔を思ひ、「世の中は常にもかみな渚と
いひし昔のしのはるゝかな」といへば、鎌倉が北條の専横を憤りし當時を忍び、「風吹
けば沖津白浪立田よといひし昔のしのはるゝかな」といへば、夫を思ひし貞婦の感慨
を思ひ起すなど話されければ、宗鑑打ち笑ひて、衣食住に追はるゝ卑賤のものは、「そ
れはさてまき金のほしきよ」こそ有り難けれ、則ち「田子の浦へうちらいて見れば白
妙のそれはさてまき金のほしきよ」といへば、富士の高嶺の雪はさてまき、只金がほ
しいといふこととなり、「世の中は常にもかみな渚こく…」風吹けば沖津白浪立田山
「秋の田のかりほのこまの風をあらみ」にもせよ、先づそれは、どうてもよし、只金が
ほしいと言ふこととなりて、卑賤のものの真情をあらはすこと、これより切なるは
なしと答へたりといふ。



話 百 種 滑

狂歌師の涙

和蘭亭末永と云へる狂歌師、酒飲まんと思へども囊中一錢の貯蓄なく、典ずべき一物もなし、即ち近邊の質屋に行き、唯今急用あり品物は後刻必ず持参すべければ、金少々借し給へるとて金を借り、酒肴を求めて獨り樂む折柄、質屋の小借入來りて質物は如何にと賣むるに、未永紙の端に

質草は皆枯れ果てておくものは

袖のなみだのつゆばかりなり

と書きて持せやりたれば、主人哀はれに思ひて、更金三片を與へたりと。

良寛地に埋められんとす

良寛かつて民家に至りて食を乞ふ、たま〜その家偷兒の災に逢ふ、良寛の頭髪蓬の如く、宛も脱獄者の如きに疑うて盜人となし、縛して鞭を加へ、土を掘りて之を埋



話 百 種 滑

めんとすれども良寛一言をも發せずしてなすにまかす、たま〜良寛と知る者あり、愕いて良寛禪師なることを告げければ、其の人又大に驚きて直に縛をときて罪を謝し、かつ何故に冤を辨ぜざりしかを問ひたれば、良寛ねむごろに慰めて後、

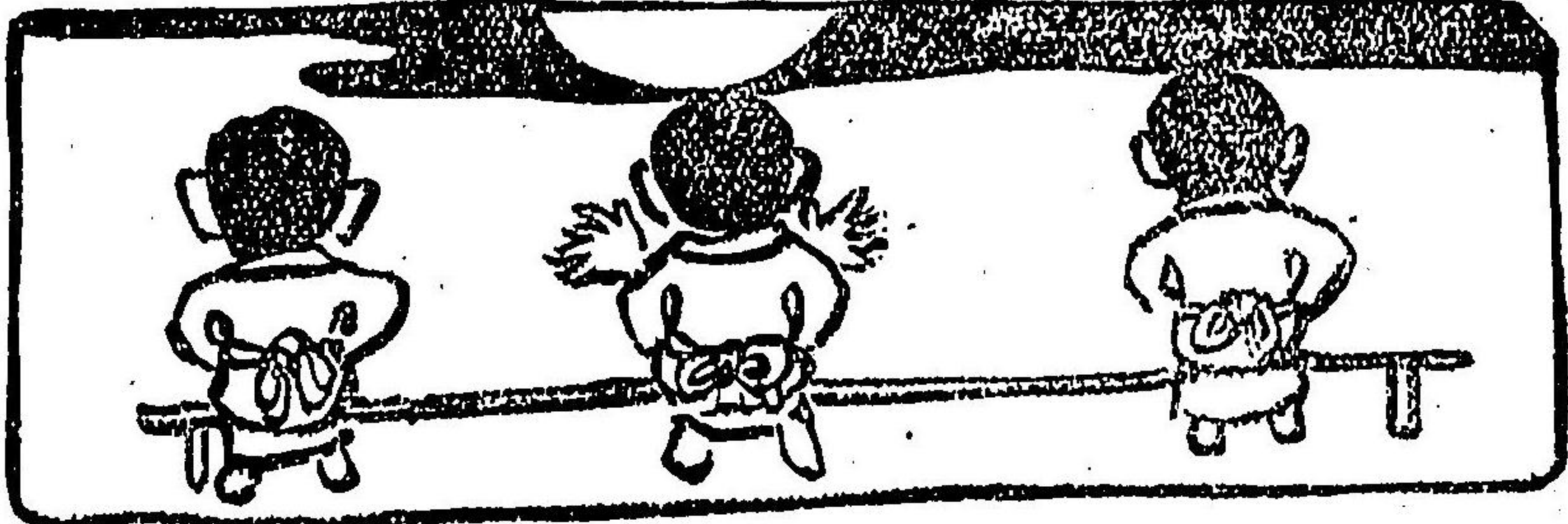
うつ人もうたる人も諸共に

如露また如電應作如是觀

し謠ひてたちざりしと。

山本權兵衛の悪戯

山本權兵衛のまだ兵學校時代に於て、校中の汚物の代金が積つてきたに、其頃とて會計整理に到らず、従つて汚物代金の所分法も何もならざれば、差當つて其金の使ひ途に困り是を以つて校員の慰勞會と云ふことに内決して或る晩某樓に同酒宴を開けり然るに生徒の權兵衛先生此事を早くも聞きかちり、若し汚物の賣金ならば生等も正に原料供給者の一人ならずやと悪戯社中を語らひ、酒樓の席に突進に及び、驚く校員を



話 百 稽 帯

附け入り牛飲馬食して凱歌を上げる。

荒太郎江戸の湯を恐る

大坂役者坂東荒太郎は其の名の如く意地悪にして、一座のものに忌み嫌はれしが、かつて江戸に來りし時、江戸の洗湯も大坂のと同じく中段のあることと思ひ、いきなり飛び込み其の儘沈みて大騒ぎとなり、人のためにすくはれしも、逆上して嘔吐をなせしが、さてさて江戸の湯は恐ろしとてそれより一度も洗湯にゆかさりしとぞ。

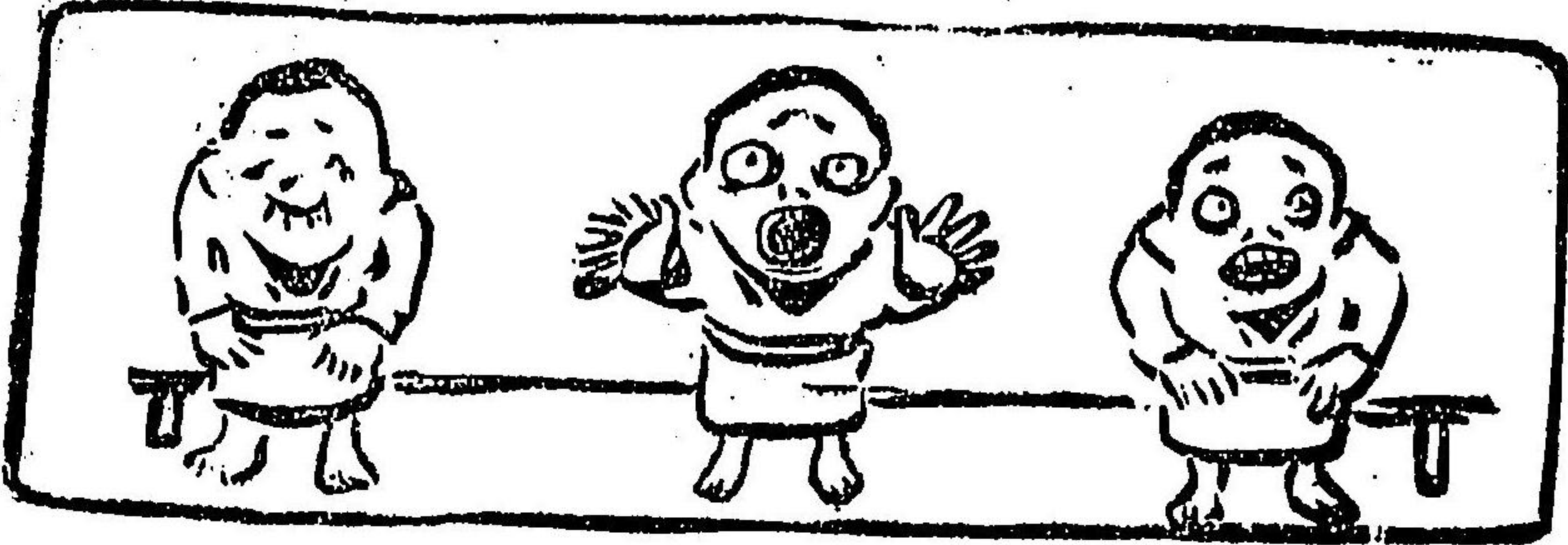
宗祇法師産婆の代理す

ある時宗祇法師の近隣に難産ありける時、宗祇その内に至りてとりあへず

摩訶般若はらみ女の奇特かな

一二もすんで産の紐とく

とつけければ、忽ち産の紐とけて男の子生れたり。



話 百 稽 帯

黒田侯の家來竹を接ぐ

ある時黒田侯の邸に三家諸大名等の酒宴ありし時、伊井侯誇り顔に、拙者の家來に接木の上手なるものありて、何の木といへどもつがれんといふことなしと語られけるを、黒田侯拙者の家來には竹をつぐものありと言はれければ、諸大名等打ち驚きて、接竹とは珍らし其の家來呼び出し給はれとあるに、黒田侯も稍當惑せられしが、負けぬ氣になりて御次へてかへし小姓某を諸大名列座の前に呼び出し、其の方竹を接ぐ事を申し上ぐべしと命ぜらる、これまで竹は勿論、木さへも接ぎしことなき某、大に迷ひしが、主人の難儀を察して、忽ち一工夫し、某是迄竹を接ぐことを相好み、既に數千本の竹を接ぎ申し候、と申しあげたれば、諸大名等殊の外感心して、我も接いで貰はん我も我もとありしかば、某はぬからぬ顔にて「然し數千本の竹を接ぎたれども、いまだ一本もつきたるは無之候」。



詩 稽 百 話

狂歌師の辭世

文政の頃、杉田某といふ狂歌師、妻子を残し先きだつとて

先きの世へ我れは道中双六の

さいしをあとによりすててゆく。

一休しの字を書く

一休寂山に登りしに、山法師等一休の能筆を知り、一の寶物となる大文字の揮毫を請ひければ、一休諾して大筆と紙の四程にても長さものを用意せしむ、懸て持ち來るを見れば、筆は七尺ばかり、紙の長さ寂山の金堂より坂本に達す、一休即ち大筆に充分を墨をよくませて紙につけ、一散に走りて不動尊まで來り、法師等の何の字かわからずと言ふを後に、墨をつぎて又一散に坂本まで走りて筆をやめ、大音聲に讀めるかと問へば、法師等荒膽をつぶして、これはこれとはばかり何の答へなきに、一休打ち



詩 稽 百 話

笑ひて「是れはいろはのうちのしの字なり、長く書きて讀めやすき字なり」。

蜀山人の禁酒

蜀山人好酒のくせに、何に成じてか一歳禁酒せしが、何時となく禁酒を破りしかば是非なしとて

我が禁酒破れ衣となりけり

さして費はふついで費はふ。

龜田鵬齋足にて紙を押ゆ

江東萬八樓にて書畫會ありし時、文墨の名士雲の如く集まりしが、寺門靜庵又其の中にあり、紙をのべて詩を書せんとすれども、風ありて紙靜かならず、傍らに鵬齋ありしを以て、一寸紙を押へんことを乞ふ、鵬齋快諾、直に足をなげだして紙の端を押ゆ、靜庵大に怒りて詰責すれば、僕に於ては足の尊きこと手にゆづらず」と。



滑稽百話

大雅堂の粗忽

池大雅堂ある時浪速にゆかんとして筆を忘れて出づ、妻玉瀾建仁寺の前にて追ひつきて之を授く、大雅堂押しただきて「これはいづれのち内儀か、よく拾ひ給はりし」と言ひ捨てて行くに、玉瀾呆れて又ものを言はずして歸る。

藤田東湖の四嫌ひ

水戸烈公或る年の八月十五日、宴を好文亭に開き、東湖を召して和歌を詠せよと命じ給ひければ、東湖和歌は大嫌ひなりと申す、さらば其の大嫌ひを題にして、よみては如何にとのことに辭みかねて

大嫌ひほつけ法主に薩摩芋

のらくら者に利口ぶる者



滑稽百話

柳北南橋の對句を書く

成島柳北或る時石井南橋と携へて某樓に飲ひ、樓主之を知つて揮毫を求めければ、南橋先づ筆をとりて

柳北遊北柳

と書きしかば、柳北又筆をかんで

南橋隱橋南

と書し、二人相顧みて呵々大笑す。

獨園鐵舟を打つ

山岡鐵舟かつて獨園に逢ひ所見を呈して曰く「心佛象生畢竟那頭にかある、看來れば諸法本來空、迷語なく凡聖なく煩惱も亦なし、天地根萬物一體、何の處に向つてか彼我得失の念を存せんや、四大和合無自性不可得のみ」と、獨園默然として言を發せ



話 百 種 落

一五二
ず、忽ち煙管をとつて鐵舟の頭をうつ、鐵舟憤然席を進めて其の無禮を責むれば、獨
園從容として曰く、「無といふものは能く怒るのだな」と、鐵舟無言苦笑して去る。

幫間の失敗

釜八といへる幫間、或る貴人に侍りしが、深更に至るも祝儀を出す有様なきに、必
ず忘れしなるべし、一つ心づけてやうんと謎をかけて曰く

釜八「旦那様とかけて秋の夕暮ととく其の心は、」

旦那「分らぬね、」

釜八「くれさうてくれぬ、」

ハハア成る程うまい、然らば

旦那「釜八とかけて秋の夕暮ととく其の心は、」

釜八「分りませぬ、」

旦那「くれん先さから星がある。」



話 百 種 落

澤庵和尚よたかの賛

品川東海寺の澤庵和尚、よたかの書に賛す

佛は法を賣り、祖師は佛を賣り、末世の僧は祖師を賣る、汝は五尺の軀を賣つて、
一切衆生の煩惱をすくふ、色即是空、空即是色、柳は緑花は紅

水の面によなよな月はやどれども

心もとめず影も残らず

漏りやせんなん

守屋仙庵は醫者なれども、狂歌を蜀山人に學び、酒を好みて花晨月夕は言ふも更な
り、身を終るまで一日も杯を手にはせざることなかりければ、辭世に

われ死なば酒屋のかめの下にいけよ

もしや零のもりやせんなん



滑稽百話

中島棕隠人に雅號を授く

中島棕隠は有名なる詩人なり、かつて酒のまん人の雅號を乞ひければ、砂鷄軒(さけいけん)と授け、餅食はぬ人には茂竹庵(もちくわん)又豆腐嫌(まけら)の人には東福庵(とうふくわん)と名づけたりと、又ある時雪月花の三字にて俗語をつくりて曰く月にはてらされ雪にはふられ、せめて言葉の花なりと。

松田永庵自ら留守を使ふ

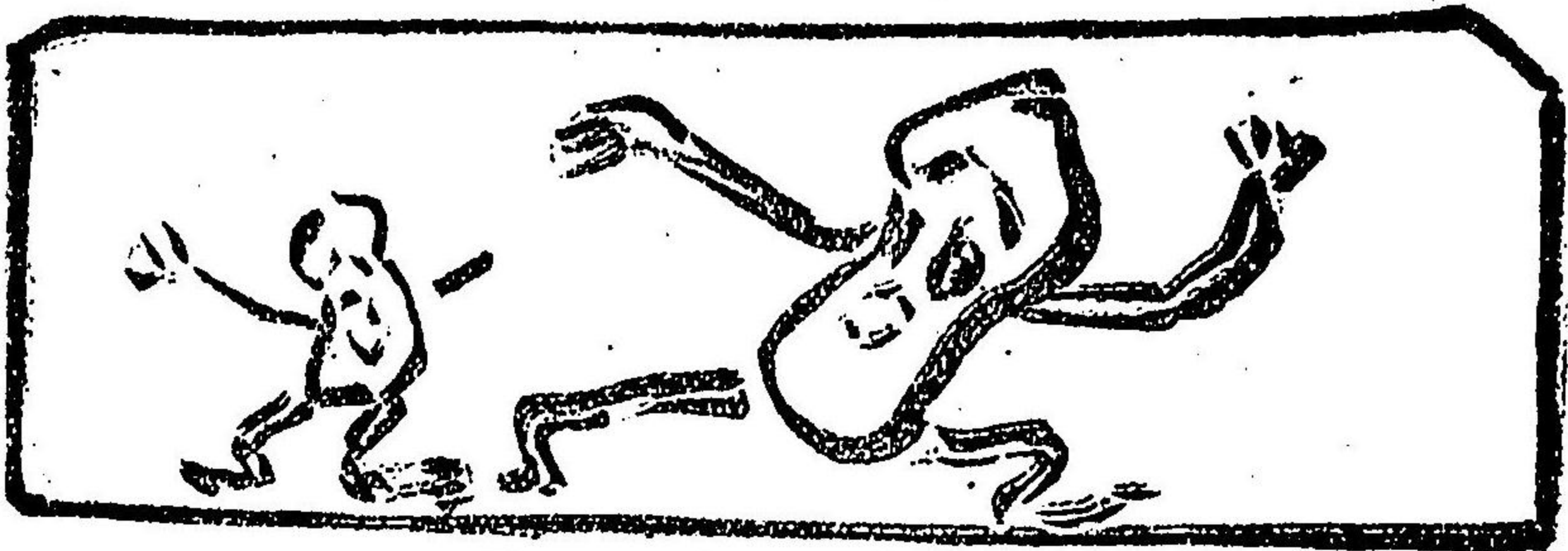
松田永庵世を避けて隠居し、戸を閉ぢて出でずして讀書す、人の訪ふあれば自ら留守を使ふ、或る人訪うて頻りに戸を叩く、永庵例によつて留守を使ふも客中々應ぜず、永庵即ち聲を勵まして曰く「自分から不在といふ、こんな儲なことが御座るか。」

白隠大摺鉢を所望す

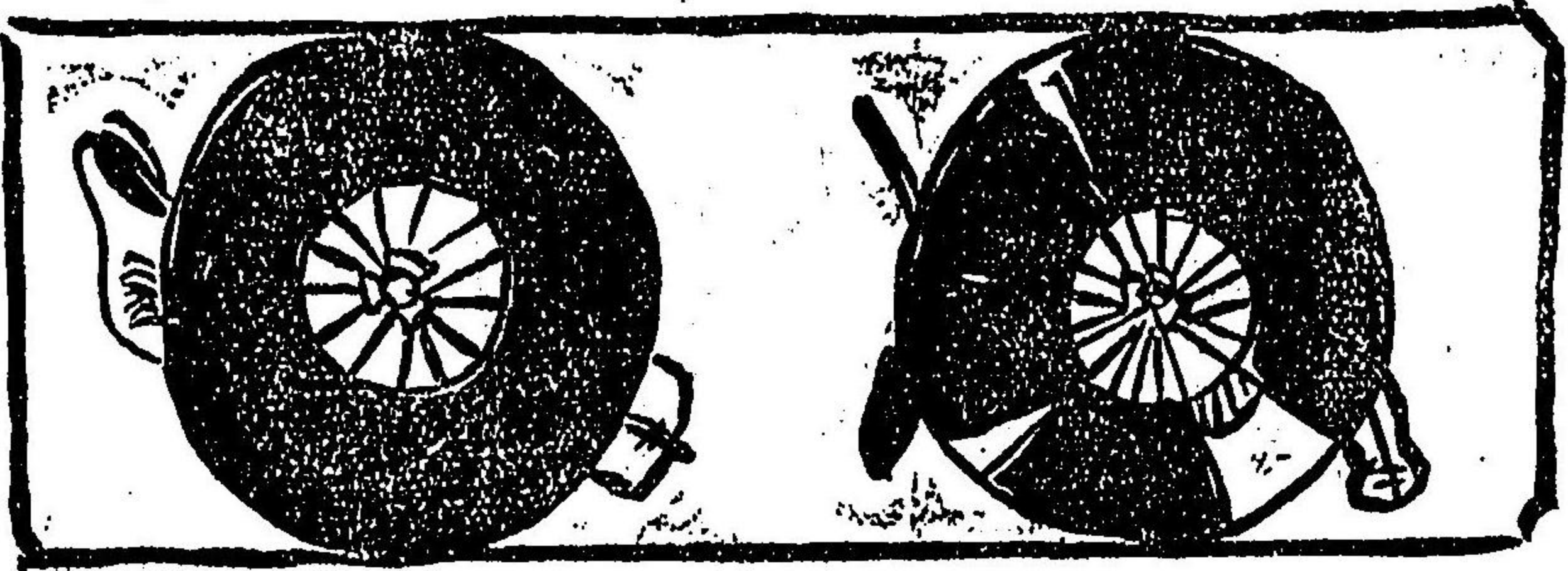
池田侯深く白隠に歸依し、屢來りて心要を問ひ、時としては曉に至ることあり、其の資曆中江戸に至るの途、白隠を訪ひし時、あだかも典座の僧の、厨庫の大摺鉢を破るものありしが、白隠時節到來と謂ひしまゝ、出でて侯を迎へ、談笑時を移す、侯去るにのぞみ、今日は微行とて見参の禮を缺けり、老師望むところあらば他日之を呈せんと言はれしかば、白隠答へて林下枯談といへども足らざるものなし、只即今厨庫の大摺鉢を破りたれば、請ふこれを贈り給へ」と言ひければ、侯今更ながら白隠の情談に感じ、歸りて後、備前燒の大摺鉢數個を作らしめ、驛馬をして之を送らしめ給ひぬ。

萬亭應賀歌川豐齋百姓に縛らる

釋迦八相倭文庫にて其の名高き萬亭應賀、之れも俳優繪にて有名なる歌川豐齋と共に、或る初冬修善寺より熱海へ行きしことありしが、途々馬鹿話をしながら、一里程來て路傍の水茶屋へ腰打ちかけ、江戸の子の氣風を見せる積りにて、茶代拾錢あさ

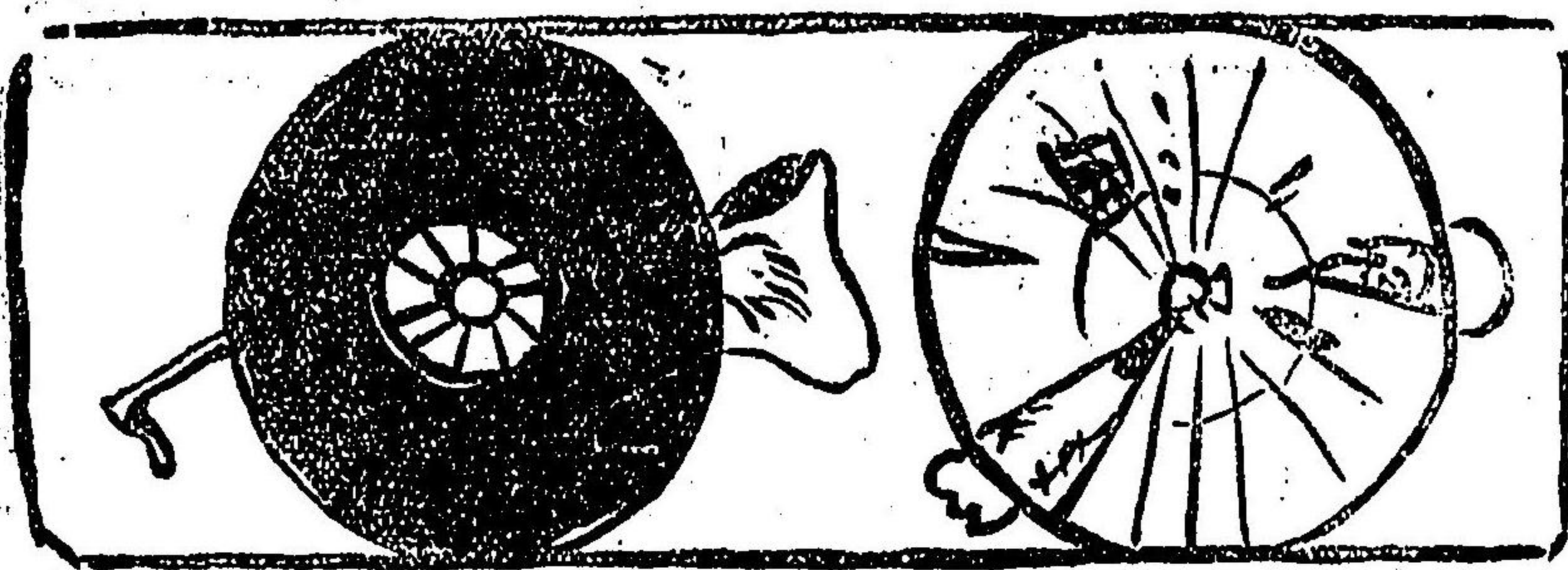


滑稽百話



滑 稽 百 話

しを、こんなに澤山戴いてはと世辭タラ〜大喜びの姿、背戸に技折れたる美しき柿一技を折りて與へたれば、二人も喜びて夫を擔ぎ、談笑しながら五六丁行く内、俄かに起りし竹螺の音ブー、ブー、ブー、二人は之れを聞いて「サテハ猪でも出たと見える、怪我でもしては詰らねへ」と、相戒めつつキヨロ〜眼にて進む所へ、手々に鋤鍬を持つてバラ〜と駆け来り四五人の土百姓「此奴等は好い間の振をしやがつて、柿を盗みくさつたナ、其の柿が何よりの證據、サア棒縛にするからさう思へ」と、突然左右より二人の手を捕へたれば、應賀と豊齋は吃驚仰天、「之はとんでもない此の柿は後の水茶屋で貰ふたもの」さう言へば今しがた、柿の枝を擔いだ二人連れの男が急ぎ足で「など、言譯しても百姓中々承知せず、「盗人たけ〜しいとは此奴等がこと、そんな手に乗る乃公達では無い」と、遂に荒縄にて縛りあげたれば、豊齋此處ぞと度胸を据へ「斯うしたら乃公達が逃げも隠れも出来ぬから、安心して後の水茶屋まで連れて行け、憚りながら粟一筋でも盗む様な乃公達ぢやア無へ、サア行け、サア連れて行け」と怒鳴りたてしかば、百姓等も事によつたら人違ひかも知れぬと疑惑を起し



滑 稽 百 話

て、一人去り二人去りて遂には縛られたるまゝ二人残りぬ、縛られてゐてはどうする事も出来ず、細附のまゝ十丁ばかり引かへして前の茶屋に行き、姿に繩を解いて貰ふたとは滑稽の極。

高橋泥舟仕官を辭す

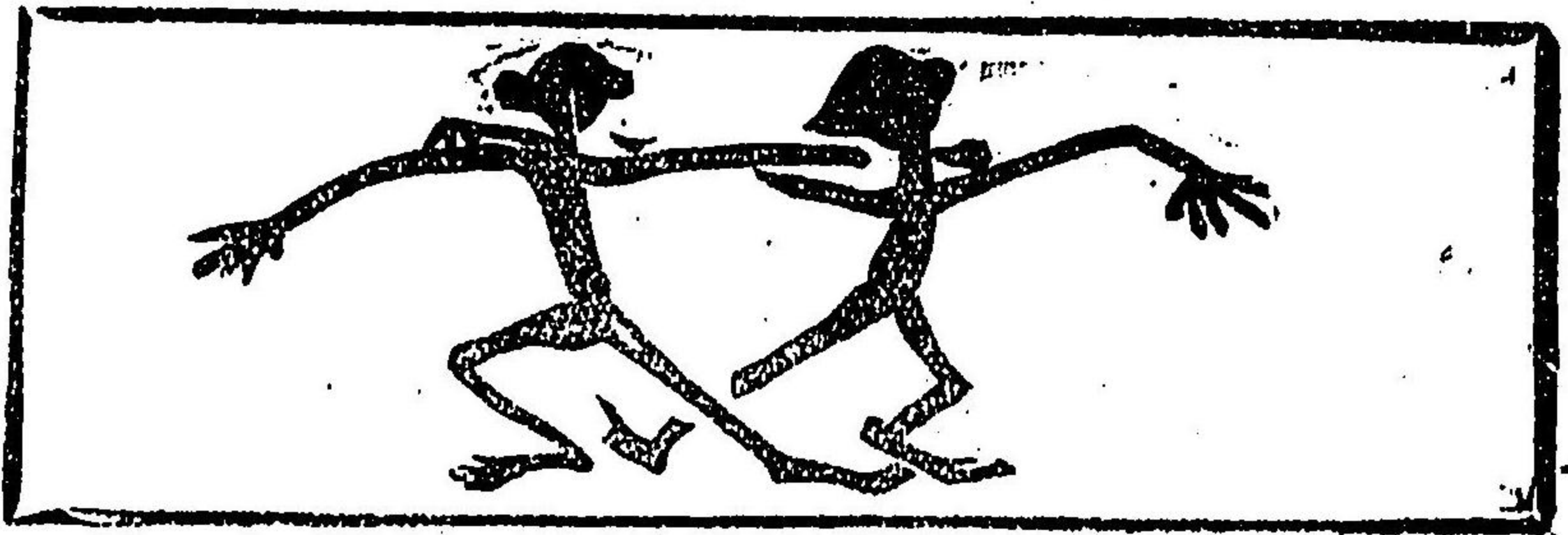
或る人高橋泥舟に仕官をすすめるに、何とも答へず筆をとりて

狸にもあらぬ此の身は泥の舟

乗りださぬのがち〜の山

北山春安の無慾

北山春安は大坂の良醫なり、學問浩博、卜筮、風水、地理の學より、禪理に至るまで知らざるることなし、性濶達にして言を出すに少も顧避せず、人或は直とし、又狂となす、春安其の間に安處して世の毀譽更に意に介せず、治療をなすや富貴の人にして



滑 稽 百 話

一五八
謝金少ければ責めて之を却く、然れども貧賤の者に逢へば藥を施して治療をなし、又
販はすに米錢を以てす、醫業大に行はるといへども家賃屋空し、債を責むる者に逢
へば即ち商聲に應じて曰く、近日病人貧窮にして一錢の得なしと、嘗つて尾州侯の病
を治して賞賚を得、即ち門に大書して曰く、吾れ新らに尾侯賞賚を得、債主速かに來
りて債を取れと。

渡邊華山子を戒む

渡邊華山死するの前日、盧生邯鄲夢の圖を作りて我が一生に喩之、其の子を戒めて
曰く、吾君の爲めに謀つて忠ならず、親のために謀つて孝ならず、東躰西顧百事盡く
違ふ、汝醫へ死すとも二君に仕ふる勿れ、慎みて祖母に仕へよ、汝の母は不幸の人な
り、宜しく孝を盡すべし、汝の父は罪人也、死すとも墓碑を建つることなかれと、自
ら不忠不孝渡邊登と書して死す。



滑 稽 百 話

畫描道人

畫描道人は天明寛政の頃の人なり、年六十餘髡髮にして徒足、衣服襤褸身昂然、骨
相奇偉、秃筆二枝を携へて市中に叫んで曰く、吾よく猫を畫くと、人命じて之を畫か
しむるに、運筆風動一揮にしてなる、着墨甚だ鹿にして形相酷だ似る、初め之を見る
に意を用ひざるもの如し、之れを壁にかけて熟視するに眼光炯々として毛堅く爪張
る、一富豪の鼠に困しむものあり、人道人の猫よく鼠を食せしむといふものあり、
主人畫を請うて室にかく、群鼠寂然として大風のあとのごとし、偶一鼠出ててその畫
を見、瑟縮して走る能はず、家人即ち打つて之を殺す。

一休館を食ひ盡して伴り泣く

曾つて一壇家の一休の師に館を贈るものあり、師獨り食ひ敢へて弟子に與へず、餘
は壺中にねめて架上にあき、且つ戒めて曰く、毒なれば汝等之を食は、立處に死せん

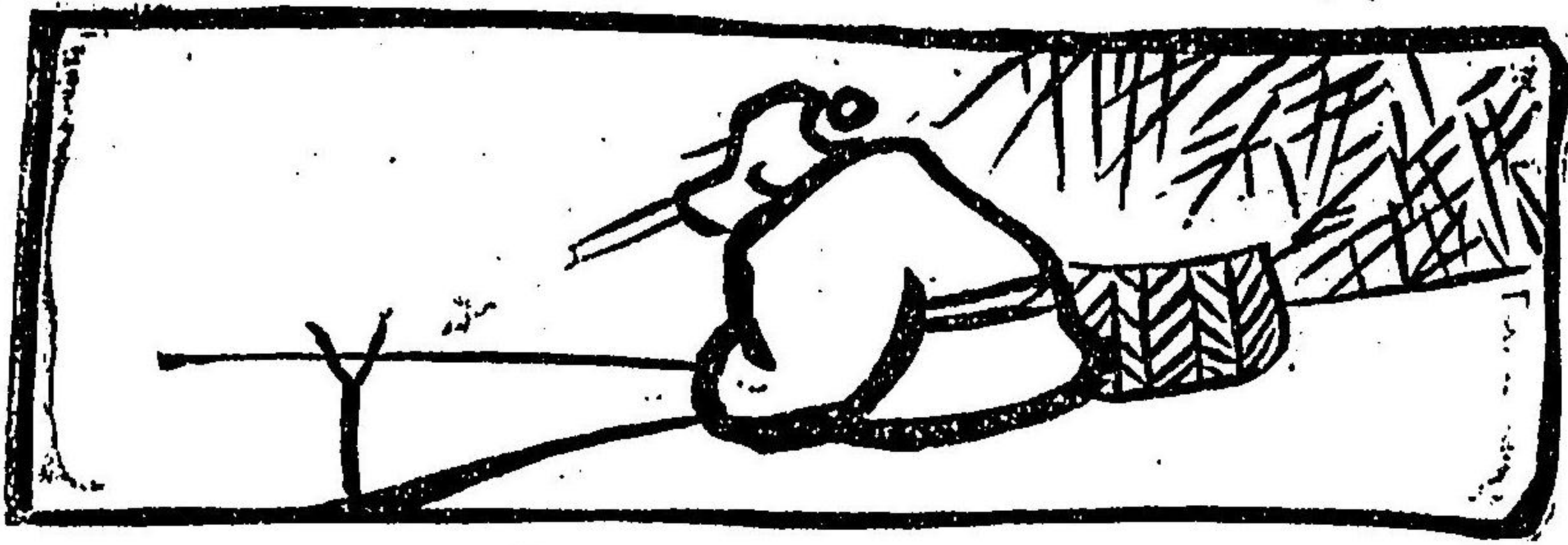


滑 稽 百 話

と、師一日外出す、一休即ち架上の壺を破碎し、盡く鉛を食ひ盡し、師の歸るを見て
伴り泣く、師怪んで其の故を問ふ、一休流涕して曰く、さきに酒掃の際、誤つて壺を
毀つ、師の怒りに觸れんを恐れて毒を食ひ死せんと決す、毒盡くるも死せず、故に泣
くのみと。

大下藤次郎點燈のお叱言を載く

北米の各旅亭の設備の完全完美なるを見て、流石は文明國は違つたものと、大に感
心仕りて倫敦へ入り大下藤次郎氏、倫敦の醜く、凡てが舊式にして且つ不自由なるに
腹をつぶしたるさへあるに、汚苦しき部屋に通されて氣持悪しく、衣服など改め居る
ところへ、晩食の報知來りしかば、兎も角も食堂へ入れば、此所も米國とはお月様
と提燈程の大違ひにて、何を食うても彼程に甘くなさに、そこへに食事仕舞つて
部屋にかへれば、卓子の上に手紙様のものあるに、何心なく取りあげて一讀すれば
「貴殿は食堂へおいての節、部屋の燈火を御消しなされず誠に困り入ります、これから



滑 稽 百 話

よく御氣を附け下さい、不規則は白色人種の最も好まざるところであります」と
なりしかば、大下氏獨語して曰く「エエ點燈のお叱言か、客臭い！ 矢張こは島國
根性が抜けぬと見えるわい。」

戸水博士の日露比較説

法學博士戸水寛人、露西亞漫遊の際、たま／＼長谷川四迷氏等と相會す、談西伯利
亞鐵道のこと及び、博士案を叩いて論じて曰く「大體日本人の仕事は何所までも
島國的で、片端からソク／＼やつて往く方だ、が、見給へ露西亞などのやり方はザア
ツトその大體を仕上げ、而して後に固めをつけてゆく、だからずん／＼結果を見るこ
とが出来ないやうであつて、その實意外に早くそのことが仕上がる、恰どいふと、露西
亞のは城の外廓から拵へていつた熊本城の流義で、日本のはこれを反對で、内廓から
仕上げていつた福岡城の流義だ、だから見給へ、徳川から注意をされて、外廓を粗末
にせにやならんやうなことがしば／＼出来るのぢや、僕は福岡流の迂を學ぶより、熊

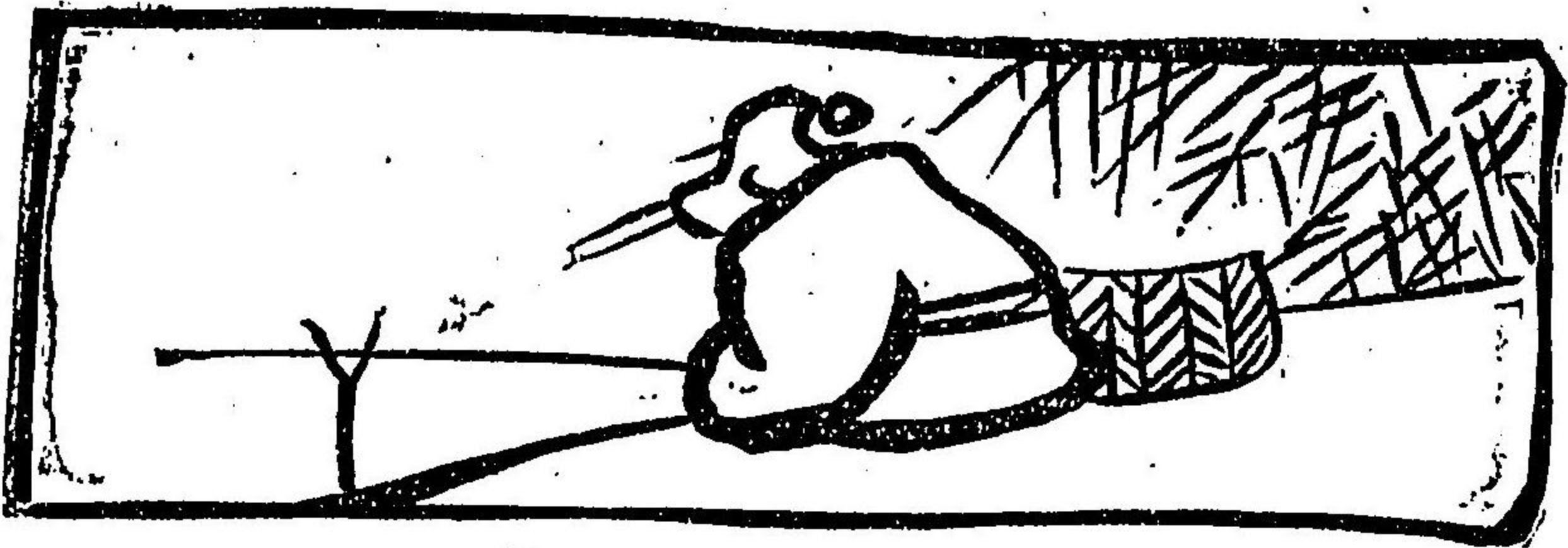


滑 稽 百 話

と、師一日外出す、一休即ち架上の壺を破碎し、盡く鉛を食ひ盡し、師の歸るを見て伴り泣く、師怪んで其の故を問ふ、一休流涕して曰く、さきに酒掃の際、誤つて壺を毀つ、師の怒りに觸れんを恐れて毒を食ひ死せんと決す、毒盡くるも死せず、故に泣くのみと。

大下藤次郎點燈のお叱言を載く

北米の各旅亭の設備の完全完美なるを見て、流石は文明國は違つたものと、大に感心仕りて倫敦へ入り大下藤次郎氏、倫敦の醜く、凡てが舊式にして且つ不自由なるに膽をつぶしたるさへあるに、汚苦しき部屋に通されて氣持悪しく、衣服など改め居るところへ、晩食の報知來りしかば、兎も角もと食堂へ入れば、此所も米國とはお月様と提燈程の大違ひにて、何を食うても彼程に甘くなさに、そこへに食事仕舞つて部屋にかへれば、卓子の上に手紙様のものあるに、何心なく取りあげて一讀すれば「貴殿は食堂へお入りの節、部屋の燈火を御消しなされず誠に困り入ります、これから



滑 稽 百 話

よく御氣を附け下さい、不規則は白色人種の最も好まざるところであります」となりしかば、大下氏獨語して曰く「エエ點燈のお叱言か、客臭い！ 矢張こは島國根性が抜けぬと見えるわい！」

戸水博士の日露比較説

法學博士戸水寛人、露西亞漫遊の際、たま／＼長谷川四迷氏等と相會す、談西伯利亞鐵道のこと及び、博士案を叩いて論じて曰く「大體日本人の仕事は何所までも島國的で、片端からソ／＼やつて往く方だ、が、見給へ露西亞などのやり方はザアツトその大體を仕上げ、而して後に固めをつけてゆく、だからずん／＼結果を見るこゝとが出来ないやうでゐて、その實意外に早くそのことが仕上がる、恰といふと、露西亞のは城の外廓から拵へていつた熊本城の流義で、日本のはこれを反對で、内廓から仕上げいつた福岡城の流義だ、だから見給へ、徳川から注意をされて、外廓を粗末にせにやならんやうなことがしば／＼出来るのぢや、僕は福岡流の迂を學ぶより、熊



滑 稽 百 話

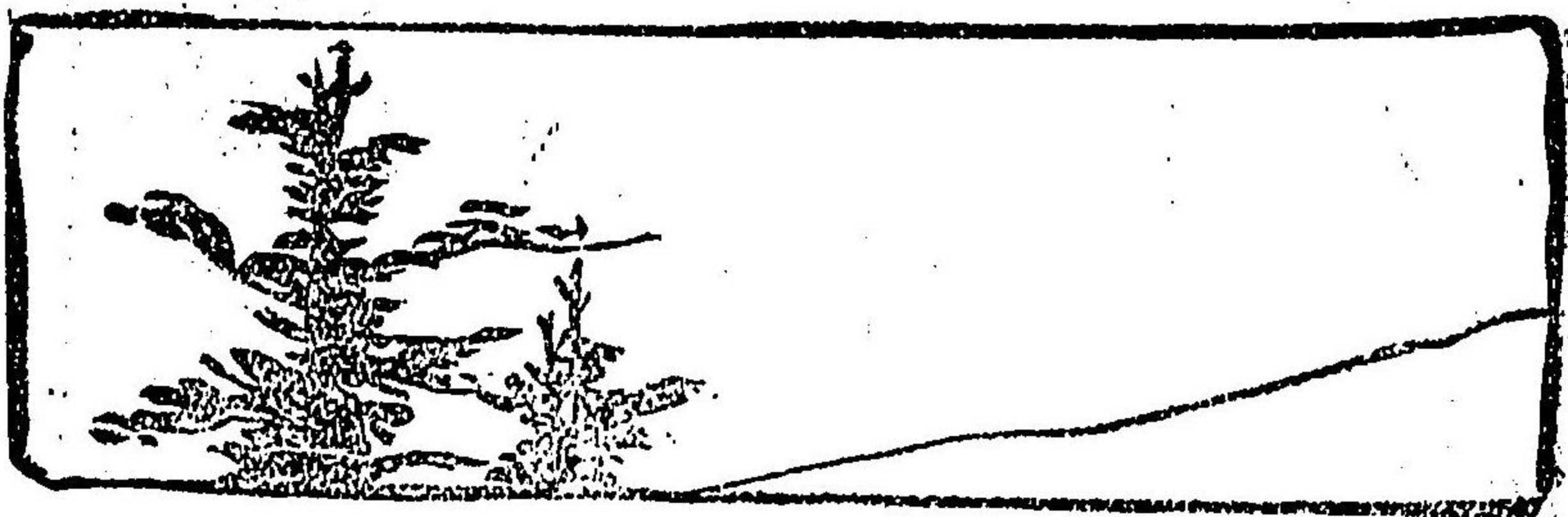
一六二
本流の敏を賞するね云々、人これを評して戸水式、熊本主義の日露比較説といふ。

山陽岸駒を怒らす

頼山陽岸駒が、書に於ては山陽、書に於ては岸駒など、自惚強さを快からず思ひ、一度彼れを困めて戒心せしめんと思ふ、かつて岸駒を訪ひ得意の妙技を揮つて一虎を席巻せんことを請ふ、岸駒心に思ふところあり、直ちに諾せしも、告ぐるに席巻は潤筆甚だ高きことを以つてす、山陽彼れが畜料を食るを見て、懲さんの志いよく厚きを加ふ、態と敬しく挨拶して揮毫せんことを乞ふ、岸駒やむなく席巻の猛虎を興ふ、山陽歸りて後、日頃最負する俳優某をして、演劇の際舞臺にて揮となさしむ、岸駒之を聞き、大に怒りて復讐なせんとせしも能はず。

前田慶次郎利家を欺きて冷水に入らしむ

前田慶次郎は前田利家の徒弟なり、天性傲慢にして世を輕し人を侮る、利家屢之を



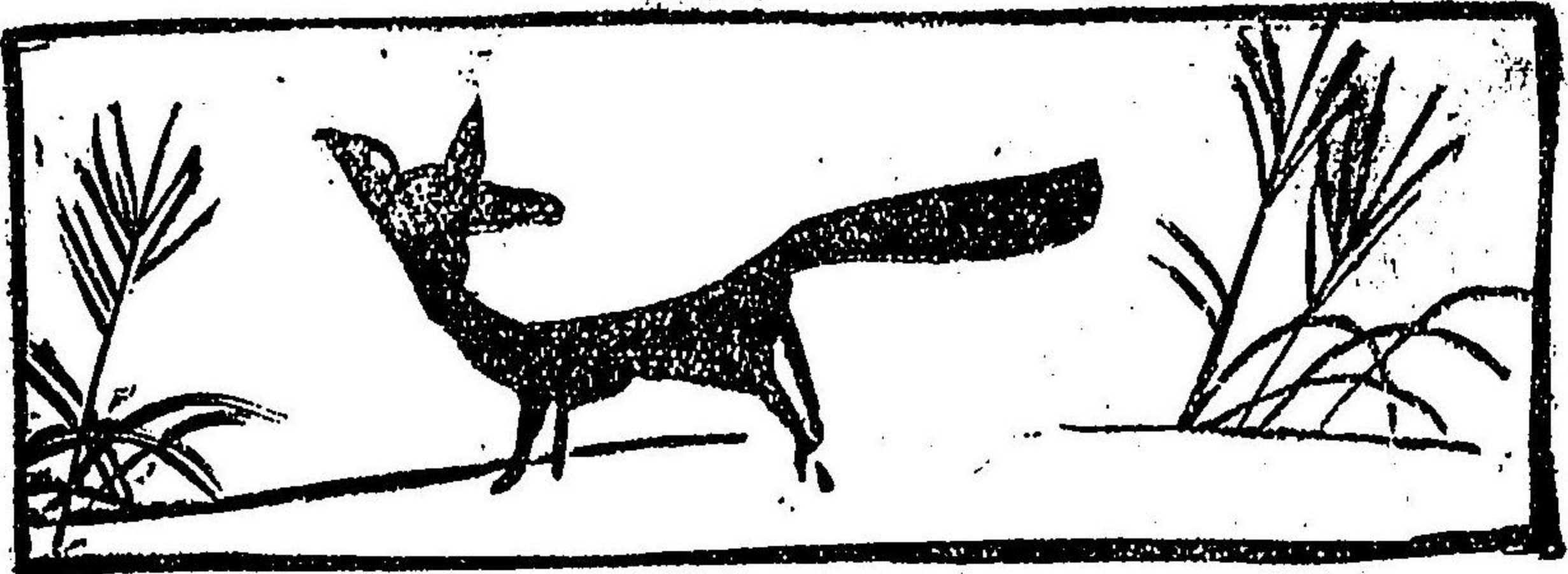
滑 稽 百 話

戒むれども聞かずして曰く、縦令萬戸侯に封せらるるとも吾心に協はずんば久しく留まらるべからずと、將に他國に走らんとす、然れども徒らに走るは興なしと、乃ち茶を供せんと利家を招く、茶事終りし後慶次郎利家に言つて曰く、本日寒氣甚しければ風呂を設けおきたり、請ふ一浴し給へと、自ら加減を試みいざ入り給へといふに、利家喜んで之れに入れば何ぞはからん氷の如き冷水ならんとは、慶次郎逃げてその行くところを知らず。

狩野山樂沙上に馬を畫く

狩野山樂は狩野派有名の畫家、幼にして畫を好みしが、かつて秀吉が城郭を新營する時、其の杖を持して其の後に従ひ、其の杖を持て沙上に馬を畫き、人の傍觀するを顧みず、秀吉之れを奇とし狩野永徳に就て畫を學ばしむ。

川北温山の剛直

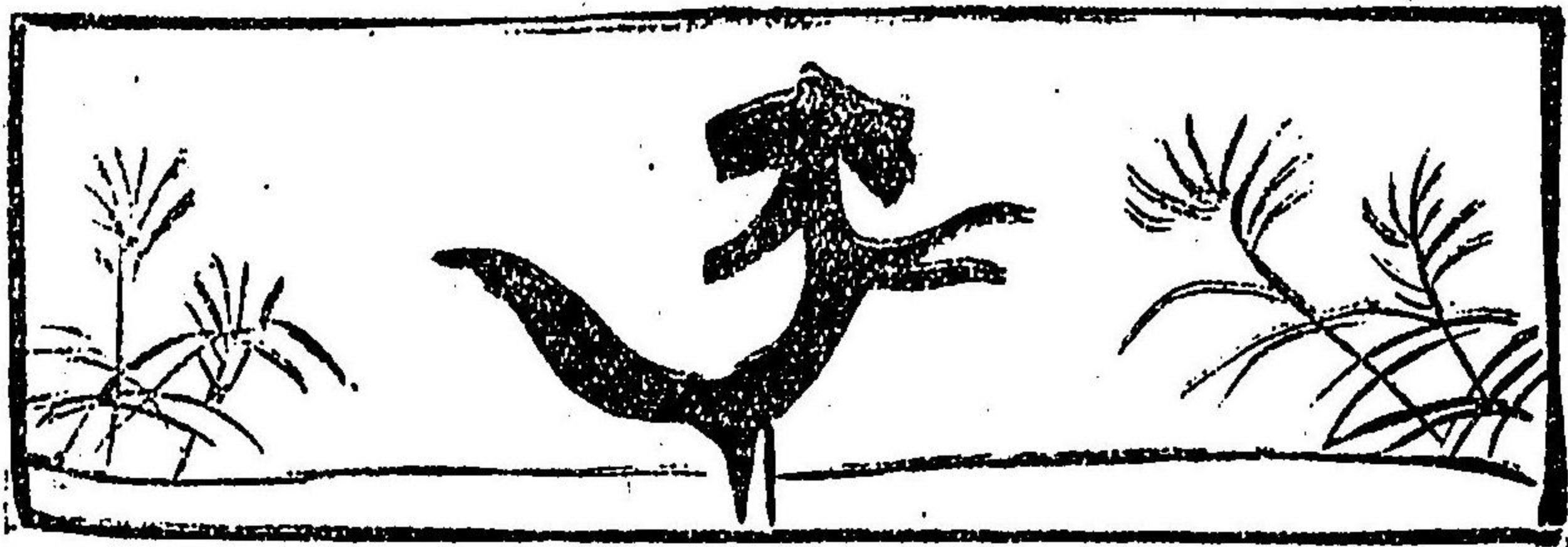


滑 稽 百 話

川北温山は島原の藩士、藩主に仕へて參政となる、かつて其の子馬に騎して上野黒門前を過ぎし時、馬驚いて門中に入る、門衛之を詰責してゆるさず、頓て一人あり私に間所に呼び一方金を出さしめて免したり、温山之を聞き大に其の非理を憤り、翌日自ら馬を馳せて上野門前に至り、故らに馬を躍らし門中に入る、門衛又大に憤り叱責す、行人も亦走せて之を觀る、温山優然として一方金を出して門衛に賂ふ、吏更に大に怒り其の罪を責む、温山大聲して昨日云々の事あり、何ぞ之を今日に拒むと放言す、門吏赧然として却つて温山に對し、内濟を申し入れたりと。

兆民爲替にて尻を拭く

兆民が小樽にありし時、東京の友人二三相會せし時、談兆民が窮乏の事に及びしかば、乃ちはかつて金若干を集め、書面に添へて之を送る、兆民之を見て有難しとも氣の毒とも思はず、直ちに便所にゆき、爲替券をとりいだして揉むこと數回、遂に尻を拭いて捨つ。



滑 稽 百 話

環巖かつて某樓にのむ、屈指の藝妓舞妓を招くこと十六七、歌雲弦雨湧くが如し、酒酣にして藝妓等弦を擁して環巖に隱藝を出さんことを迫る、環巖即ち將がヨシコノを教へてやらんとて

こぼれ松葉をうらやむやうな

愚痴を私に誰れがした

聲節絶妙、真に行雲を遏め、梁塵を舞はしむるの概あり、一座の藝妓等蕭然として一時撥をとこむ。

歌種草鞋を冠る

歌種は野州鹿沼の人にして遊藝を好み、糸竹をよくし、歌聲又妙なり、常に戲事を言ひ、をかかし様して人を笑はず、かつて人に招かれて行く途中、電光閃々雷聲轟々、



話 百 種 滑

雨沛然として至るに逢ひ、とある二王門にかけあがりて雨宿りせしが、暫くにして雷はやみしも雨はいまだやまず、されど歌種行かんと思ひ、着たる衣服を脱ぎて赤條々となり、帯にて衣服を結びて首に帯び、金剛の處に大なる草鞋あるを見つけてこれ幸ひと打ち冠り、走りて招かれたるうちに至りて一首を物しぬ

山寺の二王の草鞋笠にきて

あしもそらなる夕立の雨

一休筍を取り戻す

一休蟻川新左衛門と友としよく、家も相隣す或る年筍二本、堀を潜りて新左衛門の庭中に出づるあり、新左衛門、和尙も一と通ならぬ奇人なれば、尋常にして掘りたらば必ず、我が地内なる竹根より生ぜしものなれば、よろしく其の元にかへすべしなと掛合はれんことを思ひ刀を提げて庭に下り、一休のうちへきこえよがしに高聲あげて筍に向ひ、其の方は武士たるものの庭内に無断にて入込む無禮者奴、主人只今手討

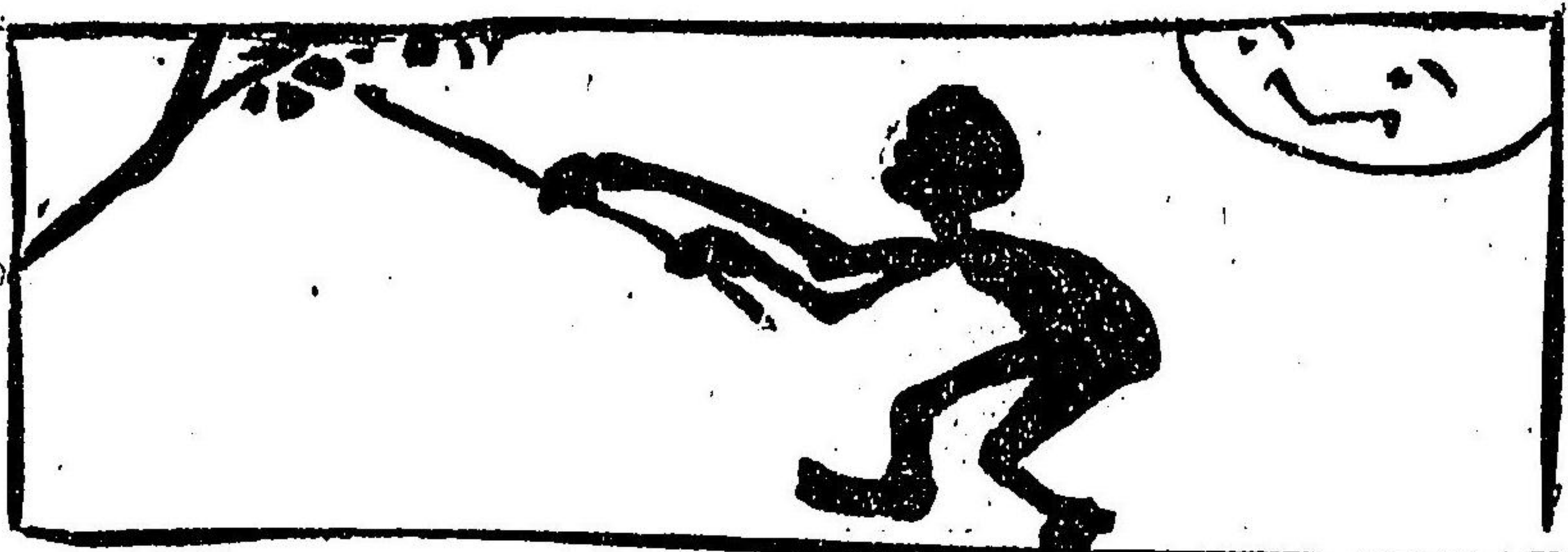


話 百 種 滑

に致すとて筍を切りとりたり、之を聞ける一休、適は新左衛門よく計れり、然れども我れ彼を驚かしくれんとて法衣を着し、珠數をつまぐり、案内を乞ふて新左衛門に面會し、今罪人御手討になりしよし、最と不憚に存じ候まま、役目に任せ死骸は此出家にお渡し下されたと申し込みければ、新左衛門口惜しながら、其の理に服し、筍を一休に渡し、二人相顧みて一笑す。

幽齋と曾呂利との合作

太閤秀吉伏見新殿へ引きうつりの日、火と言ふ言葉を用ふるを嚴禁し若し犯さば百石につき三兩の過料たるべしと言はれければ皆驚きて慎む、然るに曾呂利、曾呂利曾呂利と進みいて、某ある席にて木にて造りたる釜を見たりと物譚りす、秀吉何心なく、木造にては火にはかけられまじといふを、曾呂利かさず伏見十萬石の過料三千兩下さるべしと詰る、細川幽齋、恐れながら君よりいでし御法度なればそのまゝもなるまじけれど、曾呂利も計略にて君の御言葉の質をとるは恐多きことなり、されば今幽



滑稽百話

齋が歌の下の句をつけさせて、其出来よからば過料の代りに、御賞金を下さるべしとて

君の非を消してほかにはいはれまじ

とよみければ、會呂利とりあへず

御たもと金を會呂利頂戴

旅僧の言譯

かつて旅僧あり、若者等の集りて造りたる雪達磨に小便しかけて行き過ぎければ、若者等僧をとりまき、特に僧侶にあるまじき所行なりと咎む、旅僧落ちつきて「これは深き仔細のあつて候者々聞かんとならば、茶にても給はるべし」と言ふ、若者等あることもあらんとて茶を供して、さて其の仔細はと問へば、僧侶もむろに説き出して曰く「抑も其の仔細と申すは餘の儀にあらず、小便つかへてこらへされん譯に候」。

頭の風呂敷包み



滑稽百話

某大名通行の際、或る人一行を見んとて、二階の窓より首差し出したりしが、一行既に窓の下にありしかば、慌て、首を引き込まんとせしも、格子の隙間狭くして急に引き込むこと能はずして苦しみければ、傍にありし人、風呂敷にて頭を包み、漸く當座の難を免れしが、數日経て藩廳よりの達を見れば、「自今御通行の際二階より風呂敷を出すべからず」

幽齋、紹巴の上の句

秀吉ある時幽齋と紹巴とを召して上の句をよましむ

下句 立つもたれず居るも居られず

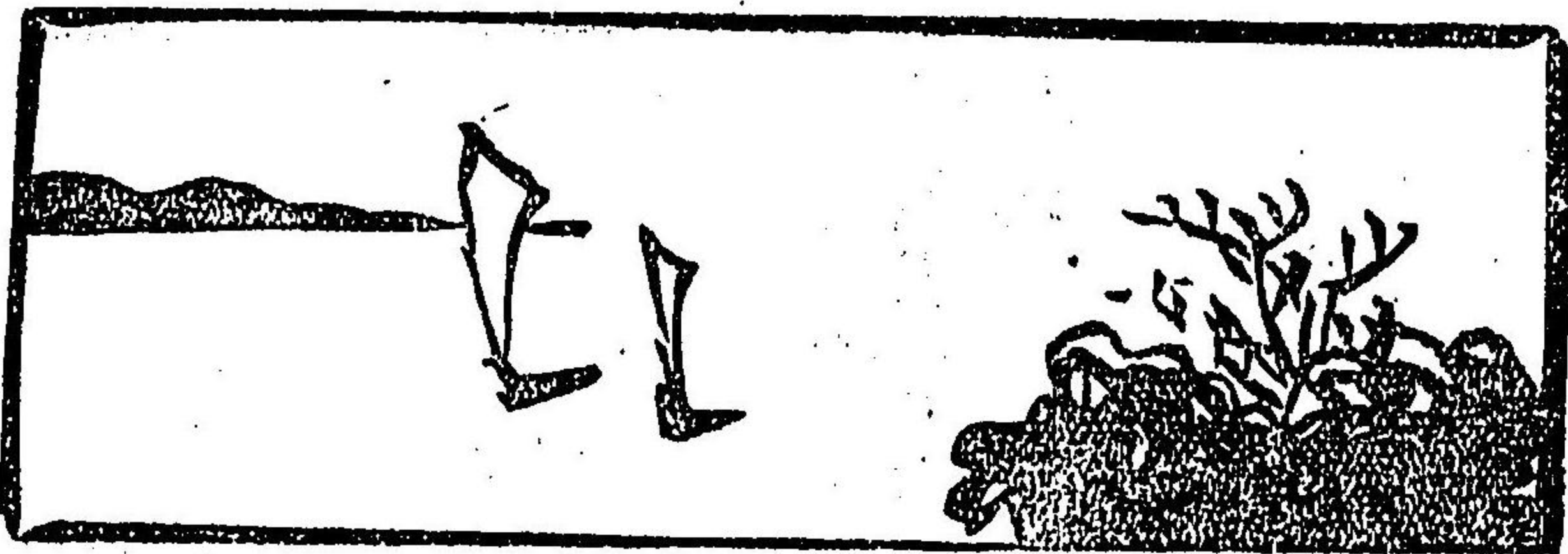
上句 足の裏爪の尖りに物出来て

全 羽ぬけ鳥弦鳴る弓に驚きて

下句 丸う四角に長う短う

上句 丸盆に豆腐を入れて行く殿

秀吉 幽齋 紹巴
紹巴 秀吉 幽齋



話 百 種 滑

全 筒井筒月つりあぐる箱釣瓶

一七〇

幽齋

越溪の帷子

越溪少時赤貧にして衣資に乏しく、常に只一枚のキピラの帷子を纏ふ、然るに法要にはキピラを着て出づべからず、故を以て裾及び襟口など法衣の外に見はるゝ所に糊にて白紙を貼附して行く、冬に至れば白紙を裏づけして寒さを凌ぐ。

小松帯刀のどど逸

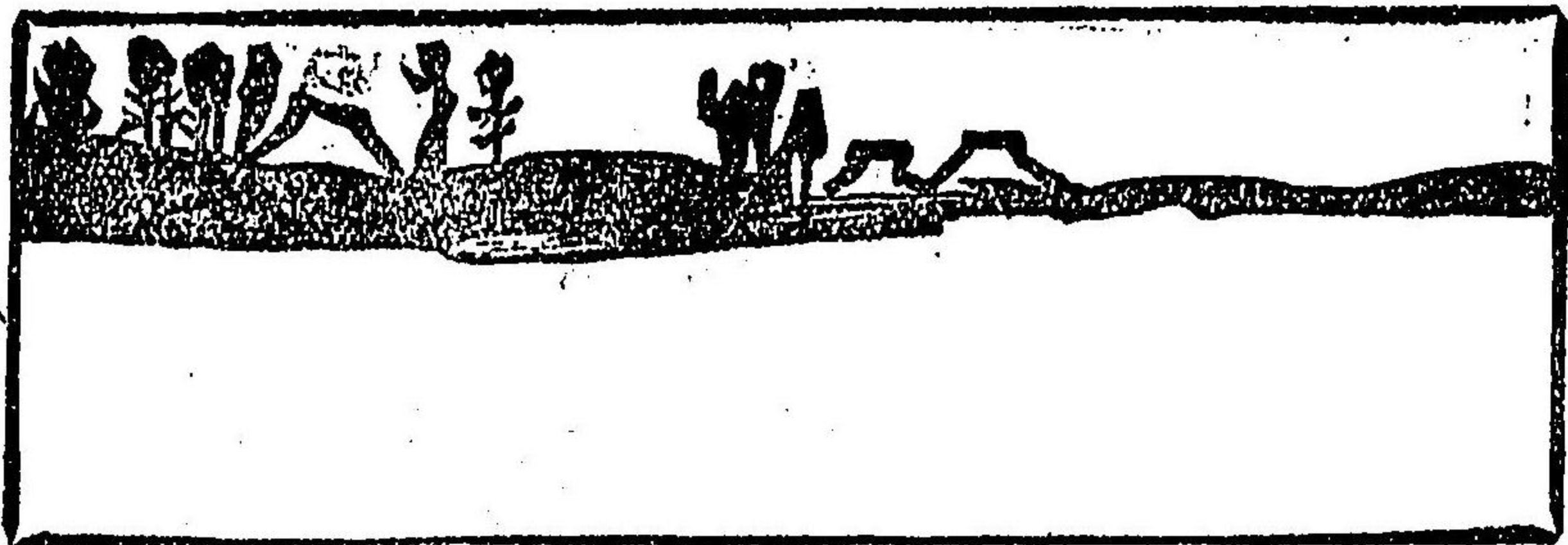
小松帯刀屢吉原に遊び、藝妓をして自作のどど逸を謡はしめて飲む、

季すりに凭れて化粧の水を

どこに捨てよか虫の聲

雪の肌

露のいのちのすまるところ



話 百 種 滑

虚も誠も賣る身の勤め

そこが買ひ手の上手下手

浦井の鯉

浦井某といふもの、鍼醫某といへるものと共に、園池三位卿の許にまゐりて歌など詠みて深く交はりしが、或る時浦井鯉を得て、鍼醫の許に贈りけるに、鍼醫は珍らしき鯉なりとて園池殿に呈しぬ、然るに園池殿も見事なる鯉なればとてまた浦井に贈り給ひぬ、浦井をかしきことに思ひて、後其の事を三位殿に語りければ三位殿

鍼にかかりし魚を園池に

はなせば元の浦井へぞゆく

細川藤孝の建札

細川藤孝鷹狩に出してしに百姓一書を竹に挿みて路傍にたつるあり、披き見れば

一七一



話 百 稽 滑

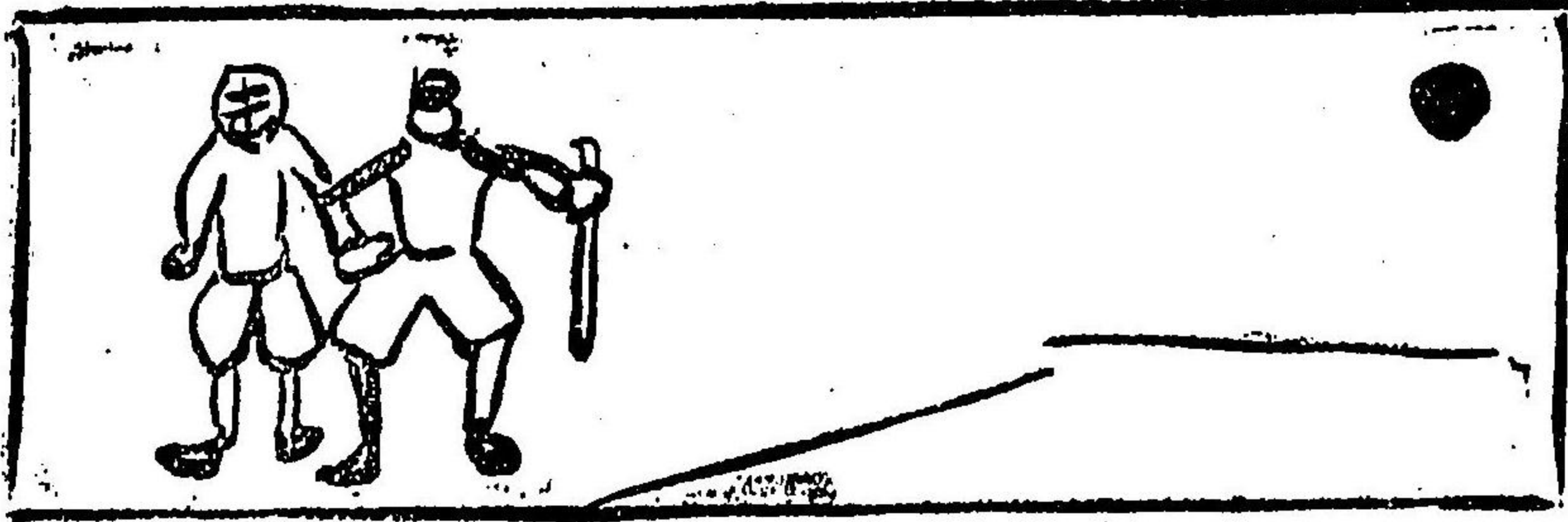
一迷惑仕るはにかくしき仕置にて、さんざんしわごんご道断、六月の早には七貧乏をかかけ、鉢をひらく風情、國かんにんなる様に十分になりとも仰せつけ下さるべし。

藤孝笑つて、閉雪に命じて左の如く書き建札せしむ

十分の世の中に、くせごとを申す百姓かな、八幡聞かじと思へども、七月より六てもなきは地下の習ひ、ごく門にかかるが、しばらく腹をいんと思へども、さん林にかくれぬれば、にくき仕方を引きかへて一國一命ゆるすものなり。

蜀山の剛直

太田蜀山人仕官せし折り、肝腎の役向は彼方のけしにして、狂詩狂歌にふけりしかば、重役之を誹責せしに、以來は何人の頼みといへども、決して狂詩狂歌をかかずとの誓書を認めて重役に差しいだせり、然るにそれより三日程経て、御前より蜀山にかせよとて、奥女中に帛紗を持せつかはされしかば、此度のみは許すにつき認めよと



話 百 稽 滑

いへども、蜀山中々に承知せざりしが、上の仰せなれば認めよと命じければ、蜀山さらばとて書きしを見れば、こはそも以何に「以後は何人の頼みといへども狂詩狂歌などは認め申さず候」と前日重役に認めて出したる誓書の文句をそのまゝ。

圓山應舉の珍落款

圓山應舉常に其の落款に、應舉の二字を書す、ある人揮毫を請ひたる後、先生の落款は短さに過ぎて物足らぬ様なり、いさ少し長き書方あるまじきやといふ、應舉快諾して落款したるは、驚くなかれ

日本銀冶宗匠來伊賀守藤原金道東隣應舉。

奕堂蛇の頭を食ふ

曹洞宗の尊宿風外和尚の、參州香積寺に住持たりし時、奕堂典座を務めしが、或る日法要ありて朝午時を調ふるに、事急激を要しければ奕堂羅蔔菜を洗ふに遠なく、荒